

平成18年度文部科学省・
筑波大学国際教育協力シンポジウム

開発途上国における 派遣現職教員の活躍

— 帰国隊員報告会 —

報告書

主 催：文部科学省、国立大学法人筑波大学
協 力：独立行政法人国際協力機構
平成19年1月7日(日) 10:00～17:00
国際協力機構国際協力総合研究所

平成19年2月

筑波大学教育開発国際協力研究センター(CRICED)
文部科学省拠点システム構築事業

平成 18 年度文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム

開発途上国における派遣現職教員の活躍

—帰国隊員報告会—

報告書

主 催：文部科学省、国立大学法人筑波大学

協 力：独立行政法人国際協力機構

平成 19 年 1 月 7 日（日）10：00～17：00

国際協力機構国際協力総合研修所

平成 19 年 2 月

筑波大学教育開発国際協力研究センター(CRICED)

文部科学省拠点システム構築事業

はじめに

文部科学省による青年海外協力隊への現職教員特別参加制度は、平成13年度に創設されました。派遣現職教員による任地における活躍と帰国後の派遣経験の活用方法の共有、活用可能性の拡大を目的に開催される本シンポジウムも、お陰さまで今年度3回目を迎えました。今年度は16年度派遣隊員からの報告を中心に進められました。

本報告書は、本シンポジウムの内容を、教育委員会など、現職教員を派遣する皆様に広くお知らせすることを目的に編纂されています。この報告書を通して、皆様にお知らせしたいことの第1は、派遣現職教員が任地において、教職経験のある派遣現職教員ならではのすばらしい活躍をしていることです。そして、お知らせしたいことの第2は、帰国した現職教員が、派遣経験があればこそなしえる優れた実践を行い、派遣経験を教室や社会で還元していることです。

シンポジウムでは、主催者である文部科学省大臣官房国際課渡辺一雄課長、共催者である独立行政法人国際協力機構松岡和久理事より、派遣の重要性と意義をお話いただきました。次に、16名の現職教員から帰国報告をかねて任地での活動の様子をお話いただき、3名の帰国現職教員から帰国後の活動についてお話をいただきました。最後に、今年度より開始された派遣現職教員をサポートする7課題と本事業の活動内容を紹介させていただきました。本報告書は、それらの概要を収めています。

全国からお集まりくださった206名の参加者にお礼申し上げますとともに、青年海外協力隊を通して派遣される現職教員支援の輪を、今後とも皆様と広げていきたいと思っております。

平成19年2月1日
筑波大学教育開発国際協力研究センター
センター長 中田 英雄
礪田 正美
佐藤真理子
吉井 洋二

目次

プログラム	1
開会挨拶		
筑波大学教育開発国際協力研究センター長 中田 英雄	3
青年海外協力隊派遣の重要性		
文部科学省大臣官房国際課長 渡辺 一雄	5
国際協力機構理事 松岡 和久	9
派遣現職教員の活躍		
分科会Ⅰ		
松田 真里 (16-1, フィジー, 青少年活動)	17
(宮崎県富島高等学校)		
土方 愛 (16-1, ジンバブエ, 養護)	31
(東京都立多摩養護学校)		
藤井 亜紀 (16-1, ベトナム, 養護)	35
(香川県立聾学校)		
藤岡 直子 (16-1, メキシコ, 養護)	43
(滋賀県立八日市養護学校)		
分科会Ⅱ		
櫻井 真 (16-1, フィリピン, 理数科教師)	55
(海田町立海田中学校)		
下田 あゆみ (16-1, ホンジュラス, 小学校教諭)	71
(渋谷区立臨川小学校)		
高橋 一郎 (16-1, 南アフリカ共和国, 理数科教師)	95
(埼玉県立川越女子高等学校)		
牛尾 重信 (16-1, インドネシア, 理数科教師)	109
(西宮市立山口小学校)		
分科会Ⅲ		
山中 美保 (16-1, タンザニア, 美術)	127
(新宿区立四谷第四小学校)		
小杉 智代 (16-1, カンボジア, 家政)	147
(八王子市立高尾山学園)		
伊藤 真梨子 (16-1, ベリーズ, 音楽)	157
(神奈川県立鎌倉養護学校)		

吉田 崇 (16-1, ニカラグア, 小学校教諭) (横浜市立飯田北小学校)	169
分科会Ⅳ	
加藤 園乃美 (16-1, ホンジュラス, 小学校教諭) (前橋市立新田小学校)	183
藤井 克浩 (16-1, セネガル, 小学校教諭) (川崎市立西梶ヶ谷小学校)	191
岡崎 和美 (16-1, グアテマラ, 小学校教諭) (金沢市立高尾台中学校)	209
中田 春奈 (16-1, ニジェール, 小学校教諭) (南あわじ市立北阿万小学校)	219
帰国後の活動と協同	
清水 大格 (15-1, ベトナム, 小学校教諭) (平塚市立松原小学校)	249
真子 和哉 (16-1, コロンビア, 環境教育) (佐渡市立佐和田中学校)	261
西尾 直美 (16-1, ドミニカ共和国, 小学校教諭) (守谷市立愛宕中学校)	281
派遣現職教員支援事業の紹介	
筑波大学教育開発国際協力研究センター 礪田 正美	289
閉会挨拶	
筑波大学教育開発国際協力研究センター 佐藤 真理子	293
資料	
1 「朝日新聞」記事 (平成18年11月9日付)	295
2 「読売新聞」記事 (平成18年11月9日付)	296
3 「神奈川新聞」記事 (平成18年11月9日付)	297
4 「日本教育新聞」記事 (平成19年1月22日付)	298
5 JOCV NEWS	299
6 速報つくば 2007年2号	300
7 「つくばジャーナル」記事 (平成19年1月10日付)	301
8 シンポジウム案内	302

平成18年度 文部科学省・筑波大学 国際教育協力シンポジウム
「開発途上国における派遣現職教員の活躍」－帰国隊員報告会－
プログラム

10:00 開会 司会 磯田正美
開会挨拶 筑波大学教育開発国際協力研究センター長 中田英雄

10:05 プログラム 1 青年海外協力隊派遣の重要性
文部科学省大臣官房国際課長 渡辺一雄
国際協力機構理事 松岡和久

10:30 プログラム 2 派遣現職教員の活躍

○分科会：発表各35分(質疑込み) 休憩5分

	分科会I (国際会議場) 司会 福嶋利浩	分科会II (大会議室) 司会 青山和裕	分科会III (201AB) 司会 鎌田亮一	分科会IV (202AB) 司会 茅野公徳
10:30-11:05	松田真里 教諭 宮崎県立富島高等学校 フィジー 青少年活動	櫻井真 教諭 海田町立海田中学校 フィリピン 理数科教師	山中美保 教諭 新宿区立四谷第四小学校 タンザニア 美術	加藤園乃美 教諭 前橋市立新田小学校 ホンジュラス 小学校教諭
11:10-11:45	土方愛 教諭 東京都立多摩養護学校 ジンバブエ 養護	下田あゆみ 教諭 渋谷区立臨川小学校 ホンジュラス 小学校教諭	小杉智代 教諭 八王子市立高尾山学園 カンボジア 家政	藤井克浩 教諭 川崎市立西梶ヶ谷小学校 セネガル 小学校教諭
11:45-13:40	昼 食			
13:40-14:15	藤井亜紀 教諭 香川県立豊学校 ベトナム 養護	高橋一郎 教諭 埼玉県立川越女子高等学校 南アフリカ共和国 理数科教師	伊藤真梨子 教諭 神奈川県立鎌倉養護学校 ベリーズ 音楽	岡崎和美 教諭 金沢市立高尾台中学校 グアテマラ 小学校教諭
14:20-14:55	藤岡直子 教諭 滋賀県立八日市養護学校 メキシコ 養護	牛尾重信 教諭 西宮市立山口中学校 インドネシア 理数科教師	吉田崇 教諭 横浜市立飯田北小学校 ニカラグア 小学校教諭	中田春奈 教諭 南あわじ市立北阿万小学校 ニジェール 小学校教諭

15:00 プログラム 3 帰国後の活動と共同 司会 吉井洋二

○全体会

15:00-15:35	インターネットライブ授業の報告 平塚市立松原小学校 清水大格 教諭 (ベトナム, 小学校教諭)
15:35-16:10	帰国後, 派遣経験を生かした教育活動事例報告 佐渡市立佐和田中学校 真子和哉 教諭 (コロンビア, 環境教育)
16:10-16:45	守谷市立愛宕中学校 西尾直美 教諭 (ドミニカ共和国, 小学校教諭)

16:45 プログラム 4 派遣現職教員支援事業の紹介
筑波大学教育開発国際協力研究センター 磯田正美

17:00 閉会
閉会挨拶 筑波大学教育開発国際協力研究センター 佐藤真理子

17:20-19:20 懇親会 (会費 1,000 円) 大会議室

開会挨拶

皆様、新年明けましておめでとうございます。

約2年間の派遣を終えて、現職に復帰された今、日本と任国の間のギャップを感じながら、そしてそのギャップを埋めようという努力の中で約1年が過ぎたのではないのでしょうか。派遣前、派遣中、派遣後に体験された様々な事が、改めてこみ上げてくるのではないのでしょうか。日本とは異なる環境の中で色々な体験をし、新しい発見をされたと思います。それが、これからの皆さん方の教職活動の中で生きてくることを期待しています。また私たちは、皆さん達が派遣されるに当たり、どういふサポートをしていったらよいかという点についてこれから考えていきます。今日はそのヒントや手がかりを頂く機会になるのではないかと思います。約2年間に亘る派遣を終えて無事に帰国されましたことを心からお喜び申し上げますとともに帰国後の教育活動に邁進されることを期待して私のご挨拶とさせていただきます。

筑波大学教育開発国際協力研究センター長
中田英雄





プログラム 1

青年海外協力隊派遣の重要性

文部科学省大臣官房国際課長 渡辺一雄

国際協力機構理事 松岡和久

青年海外協力隊派遣の重要性

渡辺 一雄

(文部科学省大臣官房国際課長)

おはようございます。文部科学省大臣官房国際課長、渡辺一雄と申します。本日は連休中にもかかわらず、お集まりいただきましてありがとうございます。

私ども国際課の方では、教育分野での国際協力及び貢献という分野におきまして、派遣をする職員等のアレンジメント、あるいはJICAとの連携により、常日頃、より効果的に本事業が実施できるよう努力をしている次第であります。

昨年は改正教育基本法の制定という非常に大きなテーマがございまして、前臨時国会において私ども国際課に対して国会からいくつかの質問がございました。そこから、日本の教育そのものが大きな曲がり角に来ているということは歴然としている、ということを実感しました。まず、今後の21世紀の日本の教育の基盤、あるいはフレームワークについて、国際的な視点をどのように捉えていくかということが大きな争点となった課題でございました。

ひとつは、子どもの人権に関する国際的な約束事がございます。それについて日本の教育制度、特に今回の基本法の改正にあたって、十分その点に留意しているかどうか、というのがその重要なポイントでございました。私ども翻って、こういった場において現職の先生方と話をする際にどうしても目前の子ども達の問題に目がいきがちでありますし、そういう話題が特殊というふうに思うのでありますけれども、やはり10年、20年、30年、今回の基本法は60年ぶりに改正されたということですが、教育の基本原則というものはさほど猫の目のように変わるものではないし、そうあってはならない、長丁場の仕事だ、ということで十分慎重な審理がなされたのであります。その議論の中で私どもが国会の質問に答える際に、国際貢献の場において日本の先生方が、先ほど筑波大学中田先生の方からお話がありましたけれども、様々なギャップを身近に感じつつ、これを日常の日本に帰ってからの教育現場においてそれをどう考え、あるいは生かしていくかという視点で、国際的な視点を持って新しい教育の基本を考える、というのが、私どもが国会に答弁する場合のひとつの大きな拠り所でもございました。

私自身も一昨年でありましたが、アフガニスタンという国の復興支援という形で1年間現地の教育省・教育大臣のアドバイザーということで、JICAから派遣をされました。治安上の問題でなかなか思うに任せないままではございましたけれども、そういった異国、さらに言えば国自体崩壊している中で、国を復興させていく際に教育の役割についての認識を日本の問題と照らし合わせながら考える機会がございました。日本の教

育はいじめ、自殺等の様々な問題を抱えているわけですが、長い歴史の中で築き上げられてきたその基盤や枠組みというものは、それなりの形を持って十分開発途上国といった国々、紛争国等に活かしようののだという認識を持ち、またある種の自信を持ったということです。

そういう意味におきまして、本日皆様方の報告を頂戴致しますが、この制度そのものが、皆様方にとってみればひとつの通過点であったと考えます。任地国での様々なサバイバルであり、そしてないないづくしの中で工夫を凝らして、実際に取り組みられた経験は、一般的には短い期間ではあると思いますが、帰国後の各先生方が日常の実践活動の中でそれを活かしていくことがもっとも大切ではないかと、私自身アフガニスタンでの経験とも重ね合わせて確信を持って申し上げたいと思います。

国全体としては、教育にはある種の閉塞感というものがありますけれども、開発途上国において先生方が教育の基盤、あるいは枠組みを作っていく過程を通し、今まで日本の得てきた様々な経験を体現する中で、わが国における努力の根本、基本を考える際に大いなるヒントになればこれに過ぎたる成果はない、と考える次第であります。文部科学省としましては、全国レベルでのこういった取組みに立ち会えたということで、よりいっそう密接な連携を持つことができ、その専門性をベースとした議論ができるという点において、皆様方との対話を出来るだけ持てるよう工夫したいというふうに考えております。

筑波大学は国際教育協力分野において、日本の中では屈指の実績を上げられておられる大学であります。そのほかにも様々なJICAベース、あるいはその他留学生に対していろんな経営等も含めまして、教育に関する行政部門で貢献をしている公立大学・私立大学も少しずつではありますが増えてきています。特に教員養成系大学における教育カリキュラムの問題、これがご案内の通り教員の免許の更新性というものが大きな問題になってはございますけれども、その際に教員の資質の向上という観点から教員養成、あるいは教員免許のカリキュラムの中にこういった国際貢献のいわば実践的な活動をどう評価し、カリキュラムの中に具体化していくかといった議論も、私ども国際課サイドからその結果を提案として省内の議論に反映させたいと思います。その際の一番のヒントとなるのが、皆様方が積み上げられ、同時に、帰国後にどのようにその経験が生かされていくか、というところからの示唆・ご提案に期待するところが大きいというところがございます。できるだけ、わが方からも職員が参加しておりますので、様々な視点からそういった具体的な示唆をいただければ、というふうに考えております。JICA、文部科学省、そして各教育現場、あるいは国の制定大学、あるいは国際開発研究課をもつ諸大学など、evenの連携が益々重要になろうと考えておきまして、私ども職員自身の専門性・資質、こういったものについても向上を図らねばならないという問題意識もちゃんと持っております。ぜひ遠慮なく様々なご提言、ご示唆、ご意見、ご要望を出していただきたいと思っております。

最後になりますけれども、私がアフガニスタンに派遣されておりましたときに感じた

事でありますけれども、教育分野における、復興支援に当たる第一線で活躍する人たちの専門性については、相当疑問視する部分がありました。要は、専門家がさほどいない、教育の現場を知らない、といったような問題がございました。大きくは国全体の教育の枠組みを作っていくという課題を背負っている中では、そういった細かな実践的な問題というのは、まだまだ先になってからの課題として、あるいは具体化の材料として浮かび上がってくるのかもしれませんが、もっと根本的な制度の問題でございますが、私自身文部科学省に長年勤めておりますけれども、国際貢献の現場における専門的な資質を持った、真の意味での援助専門家というものがもっとももっと出てこなければだめだな、という認識を持っております。そういう意味において、本事業は平成13年度から始まったわけですが、これが一粒の麦となって、様々な仲間、あるいは現地との交流を絶やさず、輪を広げていって頂きたいと思います。非常に期待しておりますので、実りある会合にさせていただきたいと思います。

以上、目指す方向は同じ方向を向いておりますので共に努力していきたいと思っております。よろしく申し上げます。以上ありがとうございました。



青年海外協力隊派遣の重要性

現職教員特別参加制度～これからの課題と展望～

松岡 和久

(国際協力機構理事)

みなさま、おはようございます。ただいまご紹介いただきました J I C A の松岡です。本日は本シンポジウムの共催者の代表として、ご挨拶申し上げます。

このシンポジウムも今回で3回目となりますが、私も毎回、現職で協力隊に参加された教員の方々の活気ある活動内容を伺える機会と楽しみにしております。私からは開発途上国に対する教育分野の協力や青年海外協力隊事業の視点からの現職教員特別参加制度の重要性と、今後の課題や展望についてお話させていただきたいと思いません。

まず、スライド②と③は世界の初等教育の現状を表したものです。

スライド④は、J I C A の基礎教育協力の歴史を簡単にまとめたものです。開発途上国に対する教育分野の協力については、1990年の「万人のための教育世界会議 (Education for All)」や2000年の「ミレニアム開発目標」(目標：2015年までに全ての人に教育を)を契機として、途上国における教育分野の協力ニーズは大きくなり、J I C A としても従来の高等教育を重視する協力から、基礎教育に重点を置いた方針に転換してきております。協力隊事業に関しては、それらの動きに先駆けて、1990年以前より教師隊員の派遣を実施しております。

⑤のスライドは、J I C A の教育分野の技術協力実績を地域別に表したものです。地域別で見ると、アジア地域が41%と大きく、次いでアフリカ地域が20%、中南米、中近東はいずれも20%弱となっています。このうち基礎教育分野のみの地域別シェアを見ると、アフリカ地域が31%と大きく、アジア地域の29%をしのいでいるのが特徴的です。

また、J I C A の教育協力実績をスキーム別の全額実績シェアで見ると、ボランティア事業が45%と一番大きなシェアで、次に、技術協力プロジェクト事業が33%となります。また、基礎教育分野のみのスキーム別シェアを見ると、金額実績の半分がボランティア事業である一方で、技術協力プロジェクトが16%、開発調査が10%、研修員受入が15%となっています。

⑦のグラフは、教育分野での協力隊員の派遣者数(理数科教師、小学校教諭)と現職教員特別参加制度での派遣者数を示したものです。教育分野での隊員の派遣者の多さ、そしてその中での現職教員の方々の活躍が見ただけだと思います。現職教員特別参加制度が制定される前にも、合計で659名の現職の先生が参加しています。制度制定後の数字はこちらのグラフの通りです。

このような流れの中で、教育分野のボランティア派遣要請も増加傾向にあり、J I

CAとしてもこれらに伝えていく必要がありますが、特に、現職の先生方の派遣に大きな期待が寄せられています。現職教員の方々の活動について、「日本で培った教員経験からくる引き出しの多さを感じる」というボランティア調整員のコメントが寄せられています。日本での

教員経験は開発途上国の教育現場でのニーズに応用できるものと思います。

また、元日にテレビ朝日で放送されました「30人31脚」に特別ゲストとしてバヌアツの子ども達が参加しましたが、その引率者が現在もバヌアツで活動する現職教員隊員の野辺克博さんでした（17年度1次隊/小学校教諭、茨城県教育委員会）。この録画DVDも本日会場で上映予定です。「心をつなぐ30人31脚」ということで非常に感動的なよい取り組みをしてくださっていると感じています。

その現職教員特別参加制度も5年目を向かえましたが、今後、取り組むべき課題も多々あると思っております。

目下の課題でありますのが、派遣者数の低迷。その理由として、各都道府県・政令指定都市で制定されている派遣枠がございます。文科省が実施されたアンケートでは、全体の約25%が派遣枠を制定しているとの結果が出ています。現職教員の派遣者数増のためには、できる限り派遣枠の緩和をお願いしたいところです。

また、不合格理由として一番多いものが「健康」です。毎募集期、全体の約30%が健康面の理由で不合格となっております。途上国での活動は、日本で想像する以上に厳しいものであり、JICAの健康診断基準も厳しくせざるを得ませんが、今後の受験者のみなさまにはぜひ健康にご留意され、途上国での活動につなげていただきたいところです。

また、課題の2点目として、JICAといたしましては、開発途上国の開発ニーズにより包括的に伝えていくため、プログラムアプローチを強化しておりますが、教育分野の協力におきましても、特に現職教員のボランティアならではの強みを生かし、活躍いただけるようなプログラム形成を行っていく必要があると考えております。

また、本制度では年間100名の現職教員の派遣を目指しており、折に触れ各教育委員会に現職教員特別参加制度へ、一人でも多くの教員の方の推薦のお願いをさせていただいておりますが、今後さらに、JICAと教育委員会の連携を強化させていただければと思います。

ここで、JICAと教育委員会の連携について事例をご紹介しますと、

(1) JICA駒ヶ根では、長野県教育委員会と連携し、メーリングリスト等での帰国隊員の情報交換の場を作りました。（「長野県教員ネットワークプロジェクト」）これにより県の課題である外国籍児童への教育問題や国際教育についての情報交換がより容易になり、また教職を志望する帰国隊員にとっては教員採用に関する情報交換が可能になったことなど、双方に利益のある取り組みとなっております。

(2) JICA沖縄では、昨年度、沖縄県教育委員会と連携覚書を結びました。沖縄県教育長からは、「双方にとってプラスになる連携。発展途上国の教育支援とともに、沖縄から国際的に活躍できる人材を育成したい」というお言葉もいただいております。（2005.4.1.琉球新報）

(3) JICA兵庫では、兵庫県教育委員会と連携し、教員10年次研修に、帰国隊員が現地での活動を報告する機会を設定していただいたり、最近では、兵庫県が作成する高校生向けの副読本に協力隊事業に関して4ページほど掲載していただいたりするなど、教育の場に協力隊事業が紹介されております。

今後、本制度による派遣を拡大することはもちろんですが、さらに「双方にとってプラスになる取り組み」を目指したいと思っております。

JICAでは、JICAネットと呼ばれるネット回線を用いたテレビ会議システムがあります。JICAネットを通じて、在外事務所や国内機関をつなげることが可能です。これを用いたひとつの事例として、JICA駒ヶ根とJICAスリランカ事務所を繋げて行った「国際理解教育セミナー」があります。スリランカの子供たちと日本の子ども達がテレビ会議システムを通じて、交信し、交流を深めたわけですが、このようなJICAのシステムを通じた今後の取り組みも今後の課題としたいと思っております。

文部科学省及び教育委員会のみなさまに協力をお願いしなければならない事項となりますが、現職教員以外にも教職を希望する帰国隊員が多く、是非すばらしい経験をした帰国隊員を日本の教育の現場で活かせるようなシステム作りを考えていかなければならないと感じております。

これに関連して、最近の動きをご紹介いたします。京都市では平成16年度採用から、長野県、富山県、愛媛県においては平成19年度の採用に向けて、帰国隊員を対象に含む教員採用特別制度が設けられました。同制度制定の理由として、意欲ある人材の確保、児童生徒への国際教育の充実、外国籍児童生徒への対応などを挙げていただいております。協力隊の活動経験は、教育の現場で必ず生きるということをご理解、評価いただいているものと認識しております。日本の教育現場でも、様々な問題が見られる昨今ですが、帰国隊員を採用いただいた教育委員会や学校などからは次のような声をいただいております。

(1) 「生徒達に向き合う姿勢が非常に粘り強い」

途上国では、日本のように思うとおりに物事が進まないことも多々ありますが、そのような経験が生きているのだと思っております。

(2) 「やる気の差は100倍」

京都市教育委員会が特別採用枠の制定をされた理由として、協力隊経験者のやる気は非常に大きく、それは教育現場において100倍の意味を持つものだとおっしゃったことから引用させていただきました。

(3) 「真実を伝えられる教師に」

本シンポジウムでも午後に講演される守谷市立愛宕中学校の西尾先生がおっしゃっていたことです。途上国の人々と生活を共にして心を通わせた経験をもって子ども達に語る時、その言葉は日本の子ども達にも強く響くことだと思います。西尾先生は、8月に行われたJICA公開シンポジウム「日本の教室と世界をつなぐ-これからの理数科教育協力-」にもパネラーとしてご出演いただきました。その様子は、NHK

土曜フォーラムでも放映されました。本日は、その録画をロビーで上映しておりますので、ぜひご覧いただければと思います。

また、シニア世代の J I C A ボランティア事業への参加も期待されるところです。教員経験を長く持つベテランの先生方も派遣できるよう制度の充実も含めて検討を行っております。

今後ともみなさまのご活躍をお祈りすると共に、一人でも多くの先生に協力隊の活動に参加していただけるよう、J I C A としても多方面への働きかけを含め、努力いたして参りたいと思います。

最後になりましたが、日頃より J I C A 事業に多大なるご支援・ご理解をいただいております文部科学省及び筑波大学教育開発国際協力センターのみなさまに厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。



jica 平成18年度
文部科学省・筑波大学国際協力シンポジウム
「開発途上国における派遣現職教員の活躍」
—帰国報告会—

～現職教員特別参加制度 これからの課題と展望～

独立行政法人国際協力機構
理事 松岡 和久 ①

jica 世界の初等教育の現状 1

初等教育純就学率(%)

不就学児童数(百万人)

近年、各地域で就学率の改善が見られるものの、開発途上国の(純)就学率の平均は85%。特にサブサハラアフリカでは、未だに65%。

世界の不就学児童総数は、77百万人。うち、約半数の38百万人がサブサハラアフリカにいる。 ②

jica 世界の初等教育の現状 2

●:最終学年までの生徒残存率 ◆:入学者の卒業率

中退や落第が多く、入学児童の2/3が卒業するに留まる。
→ 教育の質が不十分 ③

jica JICAの基礎教育協力

【協力メニューの拡大】

- 1990年以前 教師隊員派遣(JOCV) 1990 「万人のための教育(EFA)会議」
- 1990年頃～ 小学校施設建設(無償) 1992 JICA教育分野別研究会
- 1995年頃～ 理数科教育改善(技プロ)
- 1998年頃～ 教育分野の開発調査(開調) セクタープログラム支援 教育マネジメント支援
- 2000年頃～ ノンフォーマル教育支援 2000 「ミレニアム開発目標」 世界教育フォーラム
- (技プロ・草の根技協) 就学前教育支援(開調) 2004 JICAノンフォーマル教育課題別指針
- 教育行政改善 2005 JICA基礎教育課題別指針
- (技プロ・開発調査)

④

jica JICAの教育分野の技術協力実績 (地域別)

教育分野の協力実績 基礎教育分野の協力実績

⑤

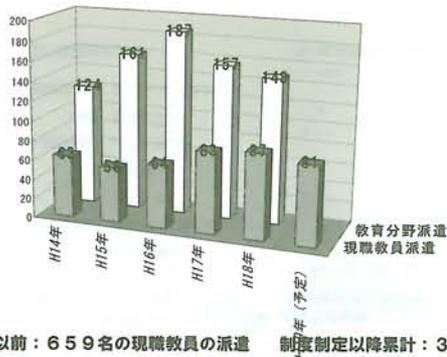
jica JICAの教育分野の技術協力実績 (スキーム別)

教育分野の協力実績 基礎教育分野の協力実績

⑥



現職教員派遣の実績



制度導入以前：659名の現職教員の派遣 制度制定以降累計：354名

⑦



現職教員の派遣について

- ・ 途上国の教育現場の高いニーズ
- ・ 『日本で培った教員経験からくる引き出しの多さ』（ボランティア調整員のコメント）



⑧



現職教員隊員の幅広い活躍

- ・ テレビ朝日「30人31脚」に出演。
野辺克博隊員とバヌアツの生徒たち



30人31脚公式HPより <http://www.tv-asahi.co.jp/3031/>

⑨



現職教員派遣についての課題

【派遣者数の低迷】

- ・ 各教育委員会の派遣枠
：約25%（15都道府県・政令市）
- ・ 不健康による不合格：約30%

⑩



現職教員派遣についての課題

【JICAのサポートの充実】

- ・ 教育分野プログラムへの協力隊の位置づけ
- ・ 現職教員のネットワーク作り
- ・ JICAと教育委員会との連携

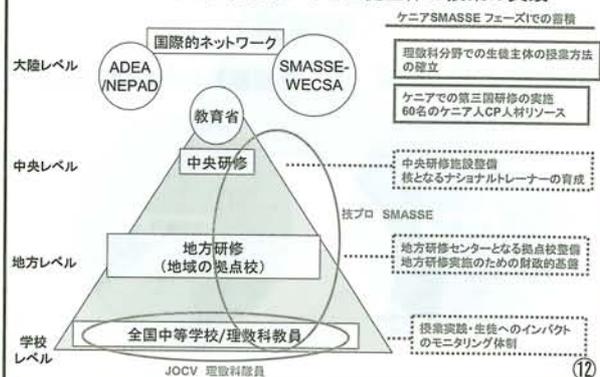
例) JICA駒ヶ根訓練所「長野県教員ネットワーク」
JICA沖縄・沖縄県教育委員会との覚書
JICA兵庫・副読本への寄稿

双方にとってプラスになる取り組み

⑪



教育の質の向上：教員が変わり授業が変わる カスケード方式教員研修による生徒主体の授業の実践



⑫



現職教員派遣についての課題

- ・ 帰国後、協力隊経験を教育現場へ活かすシステム作り

例) JICA駒ヶ根

「先生のための国際理解教育セミナー」
JICA-NETを使い、スリランカ事務所と接続。スリランカの子ども達と対面した。



*JICA-Net: ネット回線を用いたテレビ会議システム。
JICA本部、国内機関、在外事務所を結んでいる。⑬



協力隊経験者特別採用枠について

京都市 教育委員会	長野県 教育委員会	富山県 教育委員会	愛媛県 教育委員会
(平成17年) 国際貢献活動 経験者特別選 考	(平成19年) 国際理解教育 特別支援のた めの選考	(平成19年) 特別選考: 国 際貢献(活動 経験者)	(平成19年) 第1次選考試 験における加 点制度
「内なる国 際化」の促 進のため	外国籍児 童生徒へ の対応の ため	幅広く優 秀な人材 を確保す る政策の 一環	国際交流 推進に資 する経験 豊かな人 材を集め るため ⑭



- ・ ねばり強く生徒に向き合う姿勢
- ・ やる気の差は100倍
- ・ 「真実」を伝えられる教師に。

⑮



今後の展望

- ・ 現職教員特別参加制度
派遣者数の増加
- ・ シニア世代のボランティア事業
への参加促進
- ・ 帰国隊員特別採用枠の拡大

⑯



ご静聴ありがとうございました。



⑰

プログラム 2

派遣現職教員の活躍

分科会Ⅰ	分科会Ⅱ	分科会Ⅲ	分科会Ⅳ
松田真里 教諭 宮崎県立富島高等学校 フィジー 青少年活動	櫻井真 教諭 海田町立海田中学校 フィリピン 理数科教師	山中美保 教諭 新宿区立四谷第四小学校 タンザニア 美術	加藤園乃美 教諭 前橋市立新田小学校 ホンジュラス 小学校教諭
土方愛 教諭 東京都立多摩養護学校 ジンバブエ 養護	下田あゆみ 教諭 渋谷区立臨川小学校 ホンジュラス 小学校教諭	小杉智代 教諭 八王子市立高尾山学園 カンボジア 家政	藤井克浩 教諭 川崎市立西梶ヶ谷小学校 セネガル 小学校教諭
藤井亜紀 教諭 香川県立豊学校 ベトナム 養護	高橋一郎 教諭 埼玉県立川越女子高等学校 南アフリカ共和国 理数科教師	伊藤真梨子 教諭 神奈川県立鎌倉養護学校 ベリーズ 音楽	岡崎和美 教諭 金沢市立高尾台中学校 グアテマラ 小学校教諭
藤岡直子 教諭 滋賀県立八日市養護学校 メキシコ 養護	牛尾重信 教諭 西宮市立山口中学校 インドネシア 理数科教師	吉田崇 教諭 横浜市立飯田北小学校 ニカラグア 小学校教諭	中田春奈 教諭 南あわじ市立北阿万小学校 ニジェール 小学校教諭

松田 真里

(16-1, フィジー, 青少年活動, 宮崎県立富島高等学校)

1 配属先と要請要請内容

(1) フィジー盲学校 (Fiji School for the Blind) カトリック系NGOであるフィジー視覚障害者協会付属の学校で、フィジー唯一の視覚障害児専門教育施設。初等教育8年、中等教育5年、職業訓練コース、重複障害クラスあり。地方および他国生徒のための寄宿施設を備えている。フィジーは、南洋州の中ではさまざまな分野で中心となる国であり、教育水準も他の国より高いため、ソロモンやサモアからの生徒も受け入れている。

(2) 要請内容は、「職業訓練コースの充実を図る目的」で「具体的にはコンピュータと木工を指導」するということであったが、配属先の状況は受入希望調査表が記入された当時とは随分変わっていた。具体的な活動内容として要求されていた「木工指導」については時間割の中にも組み込まれておらず、これから指導していきたいという要望もなかった。また、職業訓練コースも2005年から一時閉鎖となった。

2 フィジーの教育制度とJOCVとしての役割

フィジーの教育制度は、8-4-1制をとっており、初等教育が8年間、中等教育が4年間、大学進学希望者はもう1年、フォーム7で勉強する。本校でのJOCVの役割は次の通りである。

(1) クラス4～クラス8の生徒にコンピュータの基礎を指導

(2) 職業訓練コースの生徒(中等教育に進まなかった生徒)に、コンピュータの指導を含む、自立を図るための訓練。

3 活動計画

現職教諭は、他の隊員よりも活動期間が短いため、その限られた時間を有効に使い充実させなければならない。そこで、2004年の3学期を目標設定のためのリサーチ期間、2005年を本格的活動期間、2006年の1学期を引き継ぎを含むまとめの期間と定めた。リサーチ期間は、配属先の様子を伺うというのではなく、初めから自分にできることを次から次への挑戦し、その中から取捨選択していくという方法をとった。

4 目標とテーマ

(1) 活動目標に関しては、まずは教師として最優先すべき「授業の充実」を第一に掲げ、「対生徒」から「対教師」へ、そして最終的には「受入国」へアプローチができれば良いと考えた。

(2) 1年8ヶ月の間、前向きな気持ちを持続させるために、自分自身の活動のテーマを定めた。そのテーマは「つなぐ」である。さまざまな活動が、未来へつながるように、子供たちの心に残るように、といった願いである。また、前任者が2000年に起きたクーデターが原因で、定着させることのできなかつた活動を引き継ぎたいという意味もあった。

5 具体的取り組み

(1) 2004年9月～12月

- ① クラス4～8・職業訓練クラスのコンピュータ指導
- ② 職業訓練クラスにて、調理・体育・アート&クラフト・園芸などの指導

(2) 2005年1月～2006年3月

- ① クラス4～8・職業訓練クラスのコンピュータ指導
- ② 教材・テスト問題の点字変換・テキスタイル作業

(3) 昼休み・放課後の活動・・・盲人用卓球・盲人用オセロ・リコーダの指導

(4) 交流活動・・・長期休みを利用した、家庭訪問

6 取り組みと成果

※上記取り組みについて、写真を使って説明。詳細については、隊員報告書に記載。

7 JICAへの提案

最終報告会の席で、今後の援助の見通しについてJICAへ次の内容を提案した。本来に必要な援助の見極めは、末端で活躍できるJOCVの重要な役割であると考えた。

(1) 人的協力・・・障害者雇用のサポートとしての隊員および特別クラスのサポートとしての隊員要請。

(2) 資金協力・・・国内・外の生徒への奨学資金制度。

(3) 物的協力・・・点字プリンタ（バージョン3）

8 フィジー教育省への提言

活動の締めくくりとして、配属先省庁である「フィジー教育省」に次の内容を提言した。

- (1) スタッフ不足の改善
- (2) 障害を持つスタッフへの人材補給
- (3) 教育省独自の点訳担当者の設置
- (4) 点字教科書の作成

9 自己評価

(1) 技術移転の観点から・・・評価 20点 (評価指数 50%)

職業訓練クラスが2005年度の初めに一時閉鎖になったこと、またコンピュータの指導ができるスタッフが既にいたことから、これとって新しい技術の移転ができたとは思わない。

(2) 役務提供型援助としての観点から・・・評価 90点 (評価指数 30%)

2005年度から、教材の点字変換やテキタイリングの仕事をするようになったが、この仕事量は半端な量ではなかった。人件費削減のため現地スタッフが解雇された為に、私が担当することになったのであるが、点字変換用のソフトおよびプリンタの使用方法を新しいスタッフに指導したり、実際に作業に携わり、役務提供としてかなり貢献できたと思う。

(3) 国際交流の観点から・・・評価 80点 (評価指数 20%)

(4) 現職教諭参加制度の目的の観点から・・・帰国後に期待

(5) 総合評価・・・53点

$20 \text{点} \times 50\% + 90 \text{点} \times 30\% + 80 \text{点} \times 20\% = 53 \text{点}$ (技術移転) (役務提供) (国際交流)

※任地で活躍できなかった、47点分を帰国後に教育現場で補いたい。

10 帰国後の活動－教育現場に還元－

(1) 帰国報告会の実施

① 全校生徒を対象に、1学期末テスト終了後に「青年海外協力隊帰国報告」と題して、講演会を行った。内容は、「なぜ途上国に対する援助が必要か」「JICAとは何か」「青年海外協力隊とは何か」「現職教諭参加制度の目的」「募集～派遣国の決定～派遣前訓練について」「フィジー国の概要」「異文化で生活することについて」「フィジー盲学校活動内容について」等である。

② テーマをしぼり、各学科(クラス)に出前授業を実施した。また、これからも実施予定である。2学期末テスト終了後の比較的ゆとりのある時期や、2年生の修学旅行中にできた空き時間を利用した。テーマと対象クラスは次のとおりである。

- ・フィジーの文化 被服編 (生活情報科 対象) 授業：家庭総合・家庭情報・被服
- ・フィジーの文化 食物編 (生活情報科 対象) 授業：食物
- ・フィジー盲学校での経験 (情報処理科 対象) 授業：情報処理
- ・フィジーの言葉と文化 (3年 対象) 授業：オーラルコミュニケーション1
- ・Human Rights in Fiji (国際経済科 1年 対象) 授業：英語実務
- ・フィジーの産業 (国際経済科 3年 対象) 授業：国際ビジネス

(2) 教科指導の中で・・・英語実務担当

商業科目の一つである「英語実務」は、商業の教員にとっては負担が大きく、なかなか担当を希望するものがない。帰国後、この科目に初めて挑戦してみることにし

た。初任に戻った気持ちで、英語科教員の指導を仰ぎ、日々試行錯誤しながら、何とか授業を成立させることができている。

(3) ボランティアへ活動の積極的参加

協力隊での経験を、学校現場だけではなく社会にも還元する必要があると考えている。特に、私は日本での盲学校の勤務経験がなかったため、逆にフィジー盲学校で学ぶことも多かった。その経験を何らかの形で社会に還元できないだろうかと考えていたところ、フィジー盲学校の元同僚から、日本点字図書館主催の「途上国の視覚障害者を対象とするICT講習会」が7月から8月にかけて実施されるという情報を得た。さっそく、主催者側とコンタクトを取り、参加させていただくことにした。講習会は、マレーシアと日本で行われ、マレーシアで2日間、日本で4日間の計6日間のという短い時間であったが、有意義な時間を過ごすことができたし、逆に学ぶことが多かった。マレーシアでは、友人の英語教師も巻き込み、ガイドとして活躍してもらった。

(4) 特殊教育に対する意識の向上

フィジー盲学校での経験を通して、特別支援を必要とする人々に対する、ICT教育の重要性を強く感じるようになった。帰国後、すぐに放送大学で特殊教育について学ぶことを決意し、入学した。現在特殊教育に関する3科目8単位を履修中である。

(5) クラス経営

4月から、1年生のクラスを受け持っている。派遣前と比べて、自分の内面的な変化がクラス経営に大きく影響している。自分の気持ちを、素直にストレートに生徒にぶつけることができるようになったことが、クラスを運営していく上で良い方向へと向かっていると思う。また、学級通信はフィジー語のスラング「SETTIKO」とタイトルで、「OK」という意味がある。1年が終わるときに、全員が「SETTIKO」であるといい、という願いが込められている。

11 感想

(1) 配属先は、あらゆる人間関係の対立があり決して活動しやすい環境であったとは言えない。スタッフのチームワークは最悪であり、日々トラブルの連続であった。しかし、その中で自分が本当に信用できるスタッフをみつけ、配属先での問題点や悩みを分かち合い、仕事を進めていくことで自分自信が成長できたと思う。そして、苦勞した分、得るものも大きかった。

(2) ガイドブックにある「癒しの楽園フィジー」はバカンスで滞在する人々が感じるもので、わたしたち協力隊員の日常には縁遠いものであった。表の顔が観光楽園であるとすれば、その裏側には根深い民族の問題を根底に、土地問題・環境問題・政治経済・産業面とさまざまな問題を抱え混沌としている顔がある。このような国で暮らし、異文化を体験する中で、常に「現職教諭参加制度」による派遣であることを意識して生活した。できるだけ、この国に対する興味を持続させ、あらゆるものを吸収しようと務めた。その結果、日本の生徒に伝えたいことが、日常の中で蓄積され、貴

重なる財産となった。

(3) 協力隊参加経験を、帰国後に学校現場で活かすことが「現職教諭参加制度」の大きな目的である。海外での、しかも途上国での生活経験は、想像していた以上に考えさせられることが多く、日々発見の連続だった。今回の経験で得たすべての事が、今後の教育現場で活かされると確信している。



JOCV帰国報告 - 国際教育協カシンポジウム



16-1 青少年活動 松田真里 (フィジー)

1. 配属先と要請内容

◆フィジー盲学校

カトリック系NGO 視覚障害者協会付属
フィジー唯一の視覚障害専門教育施設

◆要請内容

職業訓練コースの充実を図る目的
具体的にコンピュータと木工を指導

2. フィジーの教育制度と JOCVとしての役割

◆8-4-1制

初等教育(primary school)が8年間(6歳~13歳)、中等教育が4年間(14歳~17歳)、大学進学希望者はもう1年、フォーム7で勉強する。高等教育機関には大学(一つのみ)の他、いくつかの技術専門学校や職業専門学校がある。

→Class4~Class8の生徒にコンピュータの基礎

◆職業訓練コース(中等教育に進まなかった生徒)

→コンピュータを含む自立を図るための訓練

3. 活動計画



リサーチ期間 - 目標の設定

本格的活動

引き継ぎを含むまとめ期間

4. 目標とテーマ

- ◆目標
 - 1) 授業の充実
 - 2) 生徒へのアプローチ
 - 3) 教師へのアプローチ
 - 4) 受入国へのアプローチ

◆テーマ「つなぐ」

過去から未来へ、ここにあるものから
子供達の心に残る・・・

5. 具体的取り組み

◆2004年9月~12月

クラス4~8・職業訓練クラスのコンピュータ指導
職業訓練クラス担当(調理・体育・アート&クラフト・園芸)

◆2005年1月~2006年3月

クラス4~8・職業訓練クラスのコンピュータ指導
教材・テスト問題の点字変換・テキタイリング

◆その他

卓球・オセロ・リコーダの指導 交流活動

6. 取り組みと成果

- ◆ 職業訓練クラス担当
- ◆ コンピュータ指導
- ◆ 教材・テスト問題の点字変換・テキタイリング
- ◆ その他の活動
- ◆ 交流活動



写真を見ながらお聞きください

◎ 職業訓練クラス担当



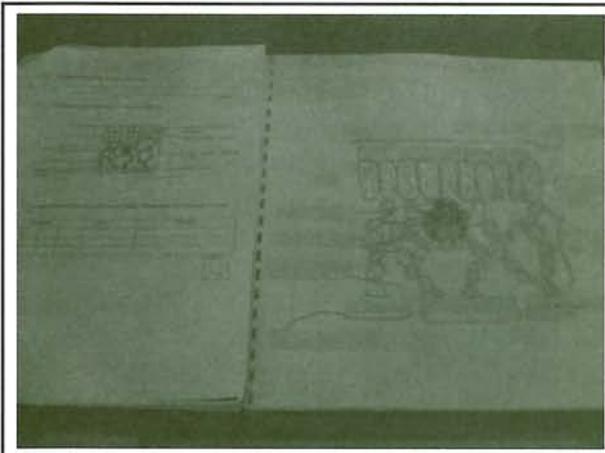
◎ コンピュータ指導



◎ コンピュータ指導



◎ 教材・テスト問題の点字変換・テキタイリング



◎ その他の活動・・・盲人用卓球



◎ その他の活動・・・盲人用オセロ



◎ その他の活動・・・リコーダ



◎ その他の活動・・・家庭訪問の旅



2004年12月

2006年12月



←2004年12月



2005年12月→



◎ 交流活動・・・フィジアン・ホストファミリーに
1年ぶりの再会



2004年8月

2005年12月

◎ 交流活動・・・フィジアンメケ合宿



◎ 交流活動・・・インディアン・ホストファミリー



◎ 交流活動・・・Labasaの友達



7. JICAへの提案 (今後の援助について)

- ◆ 人的協力
 - ・ 障害者雇用のサポートとして隊員要請
 - ・ 特別クラスのサポートとして隊員要請
- ◆ 資金協力
 - ・ 国内・外の生徒への奨学資金制度
- ◆ 物質的協力
 - ・ 点字プリンタ バージョン3

8. Comment for the Ministry of Education

- ◆ Want of staff
- ◆ Back disable staff up
- ◆ Own Braille system
- ◆ Provision of Braille textbooks

フィジーの教育省への提言

9. 自己評価

- ◆技術移転の観点から・・・20点
- ◆役務提供型としての観点から・・・90点
- ◆国際交流の観点から・・・80点
- ◆現職教諭参加制度の観点から・・・
帰国後に期待

10. 帰国後の活動 - 教育現場に還元

- ① 帰国報告会の実施
・・・ 全校生徒・学科毎
- ② 教科指導の中で ... 英語実務担当
- ③ ボランティアへの積極的参加
・・・ ICT講習会
- ④ 特殊教育に対する意識の向上
・・・放送大学入学
- ⑤ クラス経営 ... 学級通信を通して

① 帰国報告会の実施

- ◆全校生徒対象
- ◆テーマをしぼり、各学科(クラス)を訪問
 - ・フィジーの文化 服飾編(生活情報科)
 - ・フィジーの文化 食物編(生活情報科)
 - ・フィジー盲学校での経験(情報処理科)
 - ・フィジーの言葉と文化
 - ・Human rights in Fiji(国際経済科)



青年海外協力隊 帰国報告

16年度1次隊
青少年活動 松田真里

① 帰国報告会の実施

- ◆全校生徒対象
- ◆テーマをしぼり、各学科(クラス)を訪問
 - ・フィジーの文化 服飾編(生活情報科)
 - ・フィジーの文化 食物編(生活情報科)
 - ・フィジー盲学校での経験(情報処理科)
 - ・フィジーの言葉と文化
 - ・Human rights in Fiji(国際経済科)
 - ・フィジーの産業(国際経済科)

フィジーの文化 服飾編



対象:生活情報科 16-1 青少年活動 松田真里

フィジーの文化 食物編



対象:生活情報科

16-1 青少年活動 松田真里

フィジー盲学校での経験を通して



16年度1次隊
情報処理科 3年用 青少年活動 松田真里

フィジーのことばと文化



対象:生活情報科 16-1 青少年活動 松田真里

Human Rights in Fiji



対象:国際経済科 16-1 青少年活動 松田真里

フィジーの産業とそれを支えるもの 国際経済科 3年生 国際ビジネス



16年度1次隊
青少年活動 松田真里

10. 帰国後の活動 - 教育現場に還元

- ① 帰国報告会の実施
… 全校生徒・学科毎
- ② 教科指導の中で … 英語実務担当
- ③ ボランティアへの積極的参加
… ICT講習会
- ④ 特殊教育に対する意識の向上
… 放送大学入学
- ⑤ クラス経営 … 学級通信を通して

10. 帰国後の活動 - 教育現場に還元

- ① 帰国報告会の実施
… 全校生徒・学科毎
- ② 教科指導の中で … 英語実務担当
- ③ ボランティアへの積極的参加
… ICT講習会
- ④ 特殊教育に対する意識の向上
… 放送大学入学
- ⑤ クラス経営 … 学級通信を通して



10. 帰国後の活動 - 教育現場に還元

- ① 帰国報告会の実施
… 全校生徒・学科毎
- ② 教科指導の中で … 英語実務担当
- ③ ボランティアへの積極的参加
… ICT講習会
- ④ 特殊教育に対する意識の向上
… 放送大学入学
- ⑤ クラス経営 … 学級通信を通して

10. 帰国後の活動 - 教育現場に還元

- ① 帰国報告会の実施
… 全校生徒・学科毎
- ② 教科指導の中で … 英語実務担当
- ③ ボランティアへの積極的参加
… ICT講習会
- ④ 特殊教育に対する意識の向上
… 放送大学入学
- ⑤ クラス経営 … 学級通信を通して



11. 感想

- ◆ 働きにくい環境であったが、だからこそ得るものが大きかった。
- ◆ 常に「現職教諭参加制度」であることを意識して生活した。
- ◆ この経験で得たすべての事が、今後の教育現場で活かされると確信している。

ジンバブエ JOCV 隊員機関誌 『MAGAZIM 42号』より

～笑顔が生まれる場所～

土方 愛

(16-1, ジンバブエ, 養護, 東京都立多摩養護学校)

ここジンバブエに来て、“ヒジカタは脱力した”と、よく仲間内で言われる。特に、同期のゴクエ M 隊員に何度も言われると、その裏には皮肉が隠されているのか？などと、少々勘ぐってしまうが。何れにしても、ヘロヘッと（良い意味で）力が抜けていると、自分自身でも感じる。ヒジカタをそうさらしめたのは、他でもない、このジンバブエの人と大地とに限る。

赴任先の養護学校の子どもたち、スッタモンダあった大人たちをはじめ、この1年と9ヶ月の間に、実に様々な人々と出逢う機会を得た。勿論、多くの日本人ボランティアが同様であるように、ヒジカタもここに来て初めて“マイノリティーとしての自分”を経験したわけで、出逢いの全てが心地良いものとはばかりは言えなかった。アジアの女性と見れば、「結婚しよう」「日本へ連れて行け」と言い寄って来るニヤけた若い男たち、また物や現金をくすねるような汚いやり方に、頭に来て警察に行ったこともある（勿論、ジンバの警察は何もしないが・・・）。人を信用することの難しさを知っただけに、信頼できる人の存在自体が非常に貴重・希少であった。

そんな（好ましくない）状況のなかでも、子どもたちの言葉や行動には、ハッとさせられることが度々。常に、“この子たちは、いつから大人になってしまうのだろう？”とその成長を憎らしくも感じていた。今日は、ヒジカタの出逢った、愛すべき子どもたちを紹介したい。

配属先の教員はこの国の例にもれず、いろいろと問題を抱えている（そして悲しいことに、年々状況は悪化している）。授業中に教室にいない、授業をしない、子どもを前にパンを食べお茶を飲んでいる、そして体罰も度々起こっていた。また休憩中には、子どもに自分の持参したお菓子を売らせて、小遣い稼ぎをしている教員もいる。全盲の少年ノレストもまた、キャンディーやピンキー（ラムネ菓子）を持ってよくヒジカタの所へも売りに来た。「ハパナ・マリ（お金ない）」が私の口癖であり、結局一度も買ったことはなかったが、ある日彼に聞いてみた。「ノレストは何でミス・チフリ（担任）のお菓子を売っているの？彼女から、お菓子やお金が貰えるの？」そして、その予期せぬ答えは、「もっと勉強したいから、これ売ってミス・チフリにお金が入れば、バス代になって彼女がもっと学校に来られるでしょ」——こんな言葉を子どもに言わせて、この国の大

人はそれでいいのか?! ミス・チフリがこの言葉を聞いたら、彼女は果たして恥ずかしいと思えるのだろうか。いやきっと、したり顔で「センキュー、ノレスト」くらい言ってしまうんだろうなあ。

車イスの女の子ニャーシャは、大きな身体でいつもヒジカタをギュッとハグし（抱きしめ）てくれる。最後の日も、「日本に帰るの」と言うと、ハッとした表情で今までで一番大きなハグをしてくれた。彼女は障害故、話すこともスムーズではないが、思い出したように「日本のハズバンドは元気?」と時々聞いてきていた（ごめんねニャーシャ、彼とはお別れしたこと言ってなかったね）。最後に答えてもらったアンケートでも、『ヒジカタに一言』の欄に“男の子ひとりと、女の子ふたり!!”と、ヒジカタの家族設計まで心配してくれていたもの。この国に来て、家族への愛、家族のつながりの深さを実感した。現在の日本ではなかなか見られない家族の姿が、ここジンバブエにはある。そんな彼らの姿を目の当たりにして生まれて初めて、“家族がほしい、子どもがほしいな”と思ったヒジカタは、やはり矛盾した非常識な人間なのだろうな。

上記のような教員の状況で、校長や同僚ともぶつかること度々。なかでもデンドレとは、校長室で「聞きなさい」「あんたが、聞け!」と言い合いを繰り広げた張本人。「アイに子どもの前で辱められた」「授業中に自分のサザを作っている」…と、お互いの言い分はまったくかみ合わない。ことの成り行きは別として、最終的には彼女のヒジカタや子どもに対する態度は変化した。当初はヒジカタを見下すように笑うこともあったが（後になって分かったが、実はヒジカタよりずっと年下だった）、その後の授業には協力的であったし、“辱められた”と嫌がっていた（子どもの前で歌う）ことも、ぎこちなくも挑戦していた。考えてみれば、赴任初日にタウンのバス停まで一緒に帰ったのもデンドレだったなあ。そして活動最後の日、彼女がヒジカタに送ってくれた言葉——“We meet to part and we part to meet.（別れるために出逢い、出逢うために別れる）”使い古されているような言葉だが、こうやってジンバブエの人は、人と出逢い、そして（死も含め）人と別れていくのだなあ。

車イスの男の子レスリーは14歳だが、現在グレード3（小学校3年生）。当初は就学猶予（入学を遅らせること）なのかと思ったが、ある日彼の家まで一緒に帰ってその理由が分かった。レスリーはザンビアで生まれ育ったザンビア人、勿論ショナ語も理解しない。3年前に一家が交通事故に遭い、両親を亡くし彼自身も障害を負った。一人っ子だったレスリーは、その後伯母と二人で学校近くのフラットに住んでいる。その話を聞いたときに、何と言って良いものか分からず、“I’m sorry about it.（お気の毒に）”というと“it’s OK.”と笑って答えてくれた。彼の明るい“it’s OK.”には何度も救われた。そうだった、レスリーははじめ現地の人々の“オーケー”に、ヒジカタは受け入れられて来たのだった。

赴任後、すぐにヒジカタにくっついて回っていたのは、全盲の少女ヴィジニアであった。人懐っこい笑顔で、ヒジカタの膝にのって来たり、全身をペタペタと触り回したり（彼女はブラジャーに興味を持っていたな）。名前を聞くと「マギダギダ」とファミリーネームを答えるが、実は彼女には両親がいない。ジンバブエでは珍しくもないが、彼女もまた孤児の一人である。しかも親に置き去りにされ施設で育った。幸い孤児の“子どもの家”の養いの両親によって、学校に通うこともできる、孤児のなかでは稀な存在と言える。帰国前のある日、彼女の家を訪ねることが出来た。生後間もない双子から、近隣の学校に通う小学生まで、約60名の子どもたちが寝食を共にしていた。主に国外の教会からの寄付によって運営しているそうだが、スタッフは皆ジンバブエ人。子どもを捨てるのもジンバ人なら、その子たちを育てるのもまたジンバ人。木陰で、同じく全盲のアンジェリンとお昼のサザを食べる姿が、厳しい状況に生まれた子どもたちに訪れた平穩を物語っており、非常に印象的だった。

ジンバブエの状況は、外国人の私たちから見ても悪化していると感じる。そして今後とも回復の兆しは見えない。「どうしたら良いのだろうか？」と現地の人に聞くと、最終的には「祈るだけ」と学ある人もそう答える。平均寿命が三十代であろうと、インフレ率が1000パーセントであろうと、それでも人々は笑っている。そのことは良くも悪くも非常に印象的であった。

果たして、私たちは彼らと同じように笑えているのだろうか。ヒジカタは自分の心の闇も認めて、ここジンバブエの地で笑ってきたのだろうか。きっとその笑顔もヒジカタをへろへろと脱力させた理由の一つなのだろうな。そしてヒジカタもまた、ジンバブエの人々に笑顔をもたらせたのだろうか。

最後に――あなたは笑っていますか。そしてあなたの大切な人は、笑っていますか。

with love



ベトナムにおける聾学校の教育事情と活動について

藤井 亜紀

(16-1, ベトナム, 養護, 香川県立聾学校)

1 ベトナムについて

日本から飛行機で約 5 時間の距離にあるベトナムは社会主義国家。日本と同様、南北に長く、南部は一年中暑いが、中部・北部には四季があり、冬は毛布が必要なほど冷え込む。人口は増加傾向にあり、二人っ子政策が現在も続いている。通貨はベトナムドンで平均的国民の 1 ヶ月の収入は 100 ドルほど。大都市（特にホーチミン）は、資本主義的雰囲気は漂い、一見「この国は発展途上国なのだろうか」という印象を受けるが、農村部の人々の生活は貧しく、閉鎖的である。

2 ベトナムの特殊教育

日本の障害児学校の歴史と同様、盲・聾教育は早いですが、知的障害児教育に力が入られるようになったのはここ 10 年ほどである。現在も、特殊教育のカリキュラムは確立しておらず、それぞれの学校が独自のカリキュラムで学校を運営している。ちなみに、私が勤務していた学校では、ダウン症児には「家庭の中で生きていく基本的なしつけ」、発達遅滞児には、「スーパーなど外出可能な教育」、そして聴覚障害児には「社会で職業につける教育」という目標を基に指導されていた。

ベトナムの特殊学校の問題点としては、まず、学校が大都市にしかなく、相当数不足していることである。ベトナムでの障害児の就学率は 5 - 10 % 程度といわれている。大都市に親戚がいる場合には、親戚に子どもを預けて学校に通わせたり、教員が両親からお金をもらって預かったりするケースも珍しくない。また、現在のところベトナムでは、障害児学校の高等教育はなく、中等教育も大都市に限られる。

3 配属先の概要

トゥオンライ特殊学校は、知的障害児と聴覚障害児から成り、校舎も 2 校に分かれている。創立は 1994 年。知的障害児学校は定員オーバーの状態、基本的に重複の生徒は受け入れていない。教師については、大学で障害児についての専門教育を受けてきた先生が 1 名いる。しかしながら、多くの教員は障害児に対する十分な知識を持ち合わせていないのが現状である（クラスがダウン症児クラスと発達遅滞児に分けられ、ダウン症児が重度とみなされていたり、自閉症の知識があまりなかったりなど）。生徒の就学年数は 6 歳から 16 歳までの 8 年となっているが、入学してくる生徒の年齢はばらばら

であり、そのため、クラスは習熟度別に編成されている。生徒によっては卒業が20歳になることもあるが、それまでにやめていく生徒も多い。

4 配属先での活動

トゥオンライ特殊学校からの要請は「隊員はベトナム人教諭と共に授業を行い、主に図画工作、体育、音楽の授業を補佐する。一途中略—また日常業務を通じて児童とのよりよい効果的なコミュニケーションを図るための指導法を同僚と協力しながら実践することも期待されている」というものであった。本校は外国から金銭・物資の援助が多く、私が「人的援助」として来たということを理解してもらうために時間を要した。初代ということもあるので、とりあえずマンパワーとして頑張ることにした。美術を担当することから始め、徐々に作業学習、音楽と活動を広げていった。

【美術】

美術の授業は美術（絵画）と技術に分かれている。模写がほとんどを占め、教科書に描かれている絵を、同じく教科書に描かれている枠の中にクレヨンで模写し、出来ばえを生徒同士で競わせるというのが従来のスタイルであった。校長が、教科書を使わずに自由に行くことを快く認めてくれたので、生徒に自由に表現する楽しさをあじわわせるため、使用する道具や技法に幅をもたせて授業を行った。

【作業学習】

卒業後、就職する生徒がほとんどであるにもかかわらず、職業的訓練が行われていなかったため、年長の生徒（14-16歳）を対象にビーズ細工とカード作りの作業学習を始めた。始めた当初は、生徒の集中は途切れがちであったが、次第に集中し「商品」という意識を持って製作できるようになった。任期が半年を切ったころから、数名の先生が私の任期終了後も継続するため、自主的に作業に参加し、学んでくれるようになった。

【音楽】

「世界の笑顔のために」というプログラムで中古のピアノが12台本校に届けられた。生徒にとって、音楽は初めてであったが、手遊びやリズム遊びに大喜びで取り組んでいた。約6ヶ月という短期間で、美術を時々振り替えての音楽ではあったが、最後は「キラキラ星」をみんなで演奏することができた。

5. 活動の中で見えてきた問題点

【コミュニケーションを図る上での問題】

本校に赴任してまもなく、コミュニケーション手段として手話をしない理由について教頭にたずねたところ、「社会に出たときに、手話が通じる人はほとんどいない。発音と読唇を鍛えるため、手話を使うことを3年前にやめた」という答えが返ってきた。日本でも最近手話を併用している学校が増えてきたものの、音声重視されている学校も多い。しかし、ベトナム語の特徴（声の高低を表す声調が6つあり、口形から見分けることが非常に難しい）と、本校の生徒と教師の意思疎通が上手く図れていない現状を目の当たりにし、「手話の復活」を考えるようになった。同僚と話し合いをしたところ、ほぼ

全員が手話の必要性を感じていたものの、導入については消極的態度であった。同僚と手話について何度も話し合ったり、校長先生に生徒の聴力検査結果を説明しながら提案したりすることによって、毎朝、5語程度のベトナム手話を学ぶ取り組みが始まった。

【美術の道具不足の問題】

美術の授業を始めた際にまず困ったことは、学校の近所ですら普通に美術道具が売られている状況であるにもかかわらず、貧しい生徒が多いために美術道具を持ってくることができないという問題であった。学校としては「生徒に美術道具を持って来させる」という方針であったため、活動当初は自腹ではさみやのりといった基本道具を購入した。生徒の美術道具を確保するため、本校10周年創立記念で生徒のクリスマスカードを販売し、資金を稼ぐことを考えたが、そのときは許可をもらうことができなかった。ある日、ダナン市で絵画を販売している店主が本校を訪れ、「うちで販売してみよう」提案してくれた。そのことがきっかけで、校長の態度が急に軟化し、それ以降は校長が積極的に販路を探してくれるようになった。しかし、販売を始めた当初は、売上金が美術道具に還元することがなかなかできなかった。何度も話し合いを繰り返すことで、事務が売上金を管理し、とりあえず私の任期終了までは美術道具の購入に自由に使うことができた。

【生徒の見識の乏しさ】

ある日、生徒たちの「ベトナムにだけ聴覚障害者がいる」という発言を聞いて、ベトナムと日本の生徒に、同じ障害を持つ生徒が頑張っているということをお互いに知る機会を与えたいと考えた。作業学習での収益がかなり上がっていたこともあり、その収益で日本の学校とベトナムの学校の美術作品を交換し、またベトナムにあるものを利用して日本の文化を体験させたいと考え以下のような日本文化祭を計画した。

- ①日本の学校の生徒の様子をビデオで見せる
- ②香川の丸亀市の名産であるうちわを作り、生徒に自由に絵を描かせる
- ③みたらしだんごをつくる
- ④浴衣の着付けを見学する
- ⑤ドラえもん音頭を踊る

このイベントには、ベトナムで活動する多くの隊員、香川県協力隊を育てる会の援助、ベトナムの同僚や近所の人たちと多くの人に支えられて成功させることができた。また、日本の学校でも同時期に文化祭でベトナムの生徒の絵画が展示された。

【補聴器不足】

赴任当初、高い着用率であった補聴器が1年を過ぎて、数がかなり減っていることに気づいた。2002年にイギリスが寄付してくれた補聴器を学校が学習時間だけ貸し出して大事に使っていたものの、徐々に壊れ始めていたのである。絵画交流を通して、ベトナムと日本の学校とのつながりができていたこともあり、日本の学校に事情を伝え、使用しなくなった補聴器を集めてもらえないかとたずねた。たちまち、中学部の生徒会が中心となって呼びかけ、岡山・香川から40個の補聴器が集まった。届いた補聴器はすぐに

ベトナムの生徒の間で大事に使われ始めたが、日本の生徒にとっても補聴器の大切さを理解するよい機会になったように思う。

6 活動を終えて

異文化を頭で受け入れることは簡単だが、体で受け入れられるようになるために1年を要した。しかし、最終的にはベトナムのよさをたくさん発見して好きになり、活動を終えることができ本当によかったと思う。

ベトナムのよさとして一番にあげたいことは、「家族」のつながりである。ベトナムにはザーディン（家族）という言葉があるが、その言葉には遠い親戚までもが含まれる。人と人との関係が希薄になりつつある日本で、日本の生徒たちには家族を中心とした「人と人とのつながりの大切さ」というものを伝えていきたいと考えている。

そして、今から協力隊を志願し活動する人はどうか「あわてず、あてにせず、あきらめず」頑張ってもらいたい。

補足) 派遣期間中、日本の生徒に公開していた HP : <http://geo.ya.com/akifujii/>

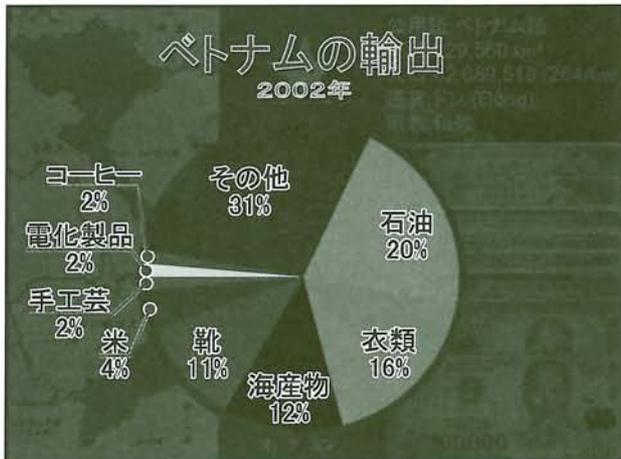


ベトナムにおける聾学校の教育事情と活動について
平成16年度1次隊 養護
藤井 亜紀(香川県立聾学校)

- ・ベトナム国について
- ・配属先の概要
- ・配属先での活動
- ・活動を終えて思うこと

公用語:ベトナム語
面積:329,560 km²
人口:82,689,518 (264/km²)
通貨:ドン (Đồng)
宗教:仏教

HO CHI MINH
ホチミン



- ### 配属先の概要
- ★ 勤務先: トゥオンライ特殊学校(知的障害・聴覚障害児学校)
 - ★ 設立: 1994年
 - ★ 生徒数: 聴覚障害児47名、発達遅滞児35名、ダウン症児33名、合計115名
 - ★ 教員数: 聴覚障害児担当5名、知的障害児担当9名、校長、教頭、事務等を含め、合計29名
 - ★ 就学年数: 8年制(6歳～16歳)
 - ★ 就学前教育: 聴覚障害児においては訪問教育あり
 - ★ 設備: 知的障害児が第1校舎、聴覚障害児が第2校舎にわかれており、1Km程度離れている。事務室、食堂、教室、中庭(運動場を兼ねる)がある。各教室で平均10名の生徒が学習している。全員通学であり、寄宿舎はない。
 - ★ 学費: 基本的に無料(午前)、午後の学習に参加すると50,000ドン追加
 - ★ 年間予算: 約1,900USD(受け入れ調査表より)

時間割(聾学校10-12歳のクラス)

時間	校時	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	
07:00-07:20		生徒登校					
07:00-07:45		運動・補聴器チェック					
07:50-08:25	1	朝礼	会話	読解	会話	語彙	
08:30-09:05	2	会話	算数	算数	美術	構文	
09:05-09:25		中休み					
09:25-10:00	3	算数	読み	読み	書き取り	工作	
10:05-10:40	4	算数	読み	読み	読み	生活	
		昼食・昼寝					
13:30-13:55		身支度・おやつ					
14:00-14:35	5	聞き取り	聞き取り	聞き取り	聞き取り	労働	
14:40-15:15	6	午前の会話復習	午前の会話復習	午前の会話復習	午前の会話復習	労働	
15:35-16:10	7	体育	算数復習	書き	復習	遊び	
16:10-16:30		帰りの会					

7:15 体操・手話練習

8:00 学習

9:30 遊び

11:00 学習

13:30 昼食・昼寝

14:00 学習

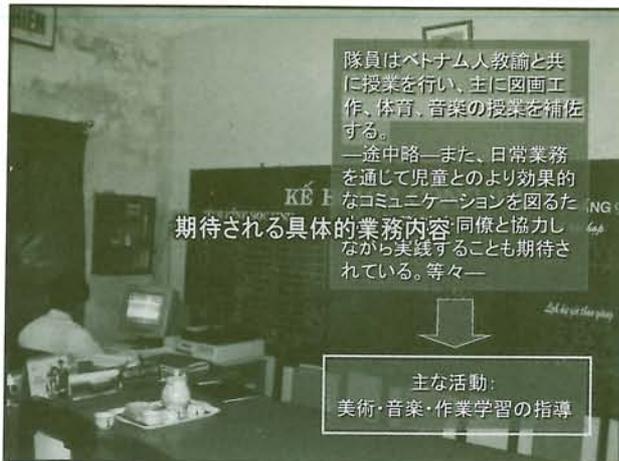
15:15 遊び

16:30 学習

18:30 下校

おやつ

日課表



隊員はベトナム人教諭と共に授業を行い、主に図画工作、体育、音楽の授業を補佐する。

一途中略—また、日常業務を通じて児童とのより効果的なコミュニケーションを図るため、同僚と協力しながら実践することも期待されている。等々—

期待される具体的な業務内容

主な活動:
美術・音楽・作業学習の指導



美術

問題点: 模倣は上手いが独創性に欠ける。一つのことじこじこ取り組むことが苦手。

原因: 模写中心の美術ノート 11冊(35分)完結。

対策: 教材の工夫さまざまな美術道具を体験させる。



作業学習

理由: ダナンには障害児学校が小学部までしかない。職業訓練が確立していない。基本的就労態度育成のため。

内容: カード、ビーズ細工。

効果: 集中力がついた。



理由: 聾学校に音楽という教科自体がない。

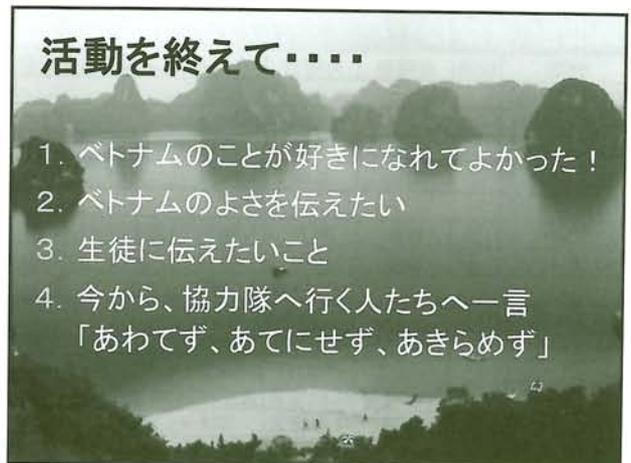
内容: 手遊び、リコーダー、ピアノカ。

音楽



活動を進める中で見えてきた問題点

- 意思疎通が上手く回っていない
ベトナム手話の導入
- 美術の道具が不足している
作業学習の死上で美術道具を導入
- 生徒の見識の乏しさ
日本文化祭りの開催
- 慢性的補聴器不足
日本の勤務校に不要な補聴器の寄付を呼びかける



活動を終えて……

1. ベトナムのことが好きになれてよかった!
2. ベトナムのよさを伝えたい
3. 生徒に伝えたいこと
4. 今から、協力隊へ行く人たちへ一言「あわてず、あてにせず、あきらめず」



メキシコ協力隊活動報告

藤岡 直子

(16-1, メキシコ、養護、滋賀県立八日市養護学校)

1 配属先概要

私が活動したのは、メキシコのイダルゴ州アティタラキア市の特殊教育センター（通称CAM）NO. 24です。この24. というのは、イダルゴ州の中で24番目にできた養護学校ということです。イダルゴ州の中には、多い時で10名を越える協力隊員が、各市の養護学校に配属されていました。メキシコの養護学校派遣の隊員は、決して都市部の国全体のモデルになるような学校に入ったわけではなく、イダルゴ州の田舎の小規模な学校配属でした。私を含め全員が初代隊員で、協力隊やJICAの知名度も全く無い中で、できることを手探りで始めていったのです。ゼロからのスタートでしたが、現職派遣の隊員が16-1の同期に数名いたことで、隊員の個々の専門性を生かして、共同で何かやれないかと当初から話し合い、任期後半のイダルゴ州の教育省を巻き込んだ『障害児教育研修会』プロジェクトにつながっていきました。

私の配属先の概要をご紹介します。首都メキシコシティからバスで2時間ほどのところにあるアティタラキア市にあり、児童・生徒数は約50名、乳幼児クラスが1クラス、学齢期のクラスが2クラス、教室も3つだけという、こじんまりした小さな学校です。教員配置は、校長、ソーシャルワーカー、心理士、コミュニケーション教諭、クラス担任3名です。日本にはない専門職の配置もあり、一見進んでいるように思われますが、その専門性には大きな疑問を持ちます。しかし、メキシコでは大学を出ているだけでも価値があるので、専門職の教員は特にプライドが高いように思います。

子どもたちの障害は、知的障害、聴覚障害、視覚障害、肢体不自由などで、その程度もさまざまです。メキシコでは、まだ聴覚障害・視覚障害の子どもたちへ専門的な指導を行えるところがほとんどなく、知的障害の子どもたちと同じクラスの中で学ぶしかない現状があります。特に聴覚障害の子どもたちに、適切なコミュニケーション指導が行えないことが、私の大きな悩みでした。各クラス担任は10名を越えるバラバラな発達段階と障害の子どもたちを見なくてはならないため、個々の子どもに応じた指導は何にもできていない状況でした。授業といえば、教科書のイラストを切ってノートに貼る、が中心で、教師が教科書を読むのを子どもは聞いているだけなど、活動らしい活動もないまま、日が終わってしまいます。チャイムもならず、時間割も授業の区切りもなく、何の勉強をしているのやら？生徒もわからないまま、教室にいるだけの状態です。また、教師は生活面での指導はほとんど行わず、子どもが排泄に失敗しても、親が迎えに来る

までそのままに放置するようなこともありました。学校の現状がそうなので、障害の重い子どもたちほど、学校に来られなくなってしまう。バスを乗り継いで、遠くからやってくる子どもも多い中、保護者があきらめてしまえば、自主退学となります。授業料はかかりませんが、毎日のように紙や絵の具が必要で、学校の諸経費が保護者には大きな負担であり、また、通うための交通費や、障害が重い子どもの場合は母親がつきそわねばならないなどの事情が、子どもの就学を困難にします。

2 学校における活動内容

そうした学校の現状を見る中、赴任当初から、私には「すぐにでも何か子どもたちのために始めたい！」思いで、着任 2 週間後には、体育の授業を持たせてもらうことから活動を開始しました。先生たちの授業を見ながら、子どもたちにとって意欲を持てる活動、自分で考えることのできる活動、体を動かす活動が足りないと考えたので、スペイン語が不十分な中でもやれる体育からとりかかすることにしました。始めた当初は、集団の活動をほとんど経験していない子どもたちは、集中できずバラバラに走って行ってしまったり、説明を聞けなかったり、また手伝ってくれるべき担任が、授業中に携帯メールに夢中、木陰に休みに行ってしまうなど、なかなか困難な状況でした。教材も道具も十分になく、授業内容には工夫が必要でした。廃材を利用して体育活動に使える道具を作ったり、手作り大型カルタなど、教材を工夫したりしながら、各クラス週二回ずつの体育をやっていく中で、「ナオの授業は楽しい！」と、まず、子どもたちが感じてくれるようになり、同僚たちが認めてくれるようになり、状況が改善されていきました。

体育の授業の成功を足がかりに、学校での活動を広げていき、音楽や図工などの科目、また日本の朝の会の活動を紹介しながら、子どもたちが使える教材作りなどへ活動を広げていきました。実際のところ、私の学校での活動時間は、・体育（3クラス週2時間）・図工および音楽（3クラス週1時間）・個別の指導〔毎日2時間〔肢体不自由児の個別指導2名〕・朝の活動の実施（毎日1時間）に加え、生徒が多すぎて指導困難なクラスにサポートが入ったりもしたので、私の学校でのもち時間は増え、休憩する暇もないほど、忙しいものになっていきました。増えすぎたもち時間を整理するため、「ナオの時間割表」作成し、同僚たちに配布しました。私の授業の時間を知らせて時間を区切る必要があったからですが、これが、学校全体に浸透し、先生たちもなんとなく時間割を意識して授業を予定してくれるようになっていったことは思わぬ効果でした。また、自分の授業のため、たくさんの教材を作成しましたが、その教材を授業の中で使って子どもと活動し、子どもが楽しんでやる姿を先生たちに見てもらえたことで、先生たちの私に対する意識も少しずつ変化していきました。「ナオは、アイデアをたくさん持っているみたいね」「ナオの授業を子どもたちが喜んでいるわ」など、私の活動に対して理解してくれることにつながりました。体育や音楽の授業をするとき、私はいつも担任に入ってくれるようお願いをしていたのですが、最初はただ教室にいてくれるだけだった

先生たちも、少しずつ、体育の活動を子どもと一緒に楽しんでくれたり、教材を使うところを見にきてくれたりと、私に対して好意的に協力してくれるようになりました。

3 イダルゴ州の隊員による、障害児教育研修会プロジェクト

最初にも触れましたが、イダルゴ州内の養護学校には、10名を超える隊員が配属され、そのうち2名は現職参加の養護学校の教員でした。メキシコの障害児教育の現状に対して、私たちの力を合わせて何かできないかと話し合い、それぞれの任地で培ってきた実践を持ち寄って、メキシコの先生たちへの「障害児教育研修会」やろうということになりました。隊員の職種は、体育や音楽、算数教育に詳しい隊員や、美術の隊員もいて、それぞれの活動を合わせると、大変内容豊かな実践がありました。それらを生かしたい、という思いと、個々の力では、まだ、協力隊員から何かを学んでいこうという意識の薄いメキシコの中では、同僚たちの授業に意見したりすること難しいので、研修会をすることで、もっと多くの知識を伝えられる機会になるのではないかと、という思いもありました。研修会の内容は、私たちにとっては不利なスペイン語になってしまうので、実技を中心にして、実際に授業で使える活動のアイデアを、たくさん得てもらえるようなものにしたいと考えました。研修会の内容は算数や美術、音楽、の教科のほか、私が担当したのは、体育実技や教材のアイデアの紹介でした。特に体育の実技では、今まで体育の授業を自身も受けたことが無い先生たちが、楽しみながら、布バルーンを使った活動や、大縄跳び、リレー、カルタ競争、などの体育活動に取り組んでくれ、「とっても楽しかった」「是非授業で使いたい！」と喜んでくれました。メキシコの先生たちが、自分の学校に帰って、子どもたちとの授業を楽しく、内容豊かなものにしてもらえたら、と私たちが心がけたことは、「知識を教える」、ではなく、「私たちが持っているものを知ってもらおう」スタンスで、自分たちの授業を紹介する中で、使えそうなところを持ち帰ってもらえたら・・・という姿勢を持つことでした。プライドの高い先生たちを相手に、まだ若い私たちが、「現状はひどい。授業を改善せねば！」と非難したところで、受け入れられません。実際のメキシコの中での生活を通して学んだことは、相手の側に立って考え、相手にとって受け入れられるやり方で、活動を進めていくことでした。

研修会は、アトトニルコ市、アティタラキア市、トゥランシンゴ市、ティサユカ市、プログレソ市、の各隊員の学校で行い、その地域の先生たちを30名～50名集めて行いました。各地で大変好評で、好意的な感想が寄せられました。また、研修会の中には、イダルゴ州教育省の関係者から依頼を受けて、イダルゴ州UPN大学で日本の障害児教育を紹介したものもありました。大学での講演に当たっては、現職教員2名が、自分たちの日本での勤務校の授業の様子ビデオや写真、教育課程の説明を中心に、日本の障害児教育の現状の紹介をやりました。日本の教育システム及び社会福祉システムの障害にまで及ぶものとなり、準備はなかなか大変だったのですが、スペイン語が及ばない部分は、ビデオや写真を多用し、実際に見てもらおうことで、学生さんたちの関心を高めることができました。「日本の障害児教育の到達レベルは素晴らしい」「もっと学びた

い」「自閉症児の教育方法をもっと見たい」など関心は高く、将来養護学校の教員となる学生さんたちに、日本のモデルを知ってもらえたことは、大きな意味のあることだったと私たちもやりがいを感じました。

こうした研修会を通して作成した隊員たちのスペイン語資料をそのままにしておくのはもったいない、と最終的には、冊子（カラー）にまとめ、イダルゴ州内のすべての養護学校に配布しました。具体的な授業の指導案をつけ、写真を多用してわかりやすくすることを心がけたので、同僚たちにプレゼントしたときはとても好評でした。今後、イダルゴの州内で使われることを願っています。

④ 活動を終えるにあたって

忙しく駆け抜けた、1年9ヶ月を過ぎ、帰国の時がきました。学校では、私のために盛大なお別れ会を開いてくれました。保護者が一人一品持ち寄って、テーブルの上にはたくさんのごちそうが並びました。子どもたちがナオのために、と出し物を準備してくれたのですが、それらはすべて「ナオが教えてくれたこと」シリーズだったのです。リトミックやピアノ、道具を使ったダンスなど、今まで私が授業でやってきたことを、先生たちが指導して見せてくれたのです。「ナオががんばって教えてくれこと、私たちが続けていくわよ」そういつてくれた同僚たち。うれしくて涙がこぼれました。長い間自分は、孤軍奮闘、子どものためにと頑張ってやってきたけれど、実はメキシコの同僚たちや子どもたち、その保護者と、多くの人々に理解され、受け入れられ、支えられていたのだと気づきました。メキシコでの経験を通して学んだことは数え切れないほど。大きく成長させてもらった協力隊での2年間でした。

ありがとうメキシコ！

報告の最後に、メキシコへの感謝の言葉で締めくくりたいと思います。

Gracias! Mexico!(グラシアス メヒコ!)



メキシコ協力隊活動報告

～～ 私の協力隊story ～～



滋賀県立八日市養護学校 藤岡直子
16-1 メキシコ隊 養護

任地イダルゴ州アティタラキア



メキシコシティからバスで2時間。のんびりした田舎町です。

任地アティタラキアの風景



アティタラキア市の風景



配属先イダルゴ州特殊教育センター (CAM.) No.24



▼ 生徒数 約50名
▼ クラス数
乳幼児クラス 1クラス
学齢期(7-18歳) 2クラス

▼ 教員配置
校長 ソーシャルワーカー1名
コミュニケーション教諭1名
心理士1名 クラス担任3名
(事務員・用務員各1名)
そして私。

メキシコにおける特殊教育センター (通称CAM) とは？

- ▼ 障害を持つ子どもたちのための養護学校
- ▼ 障害の種類・程度はさまざま(知的障害、肢体不自由、聴覚障害、視覚障害、など)
- ▼ イダルゴ州の中に約26校(小規模校多し)
- ▼ JOCVは、最も多いときで10人、州内に配属(そのうち現職教員は3名)全員1代目
→イダルゴ州でのJOCV知名度、ゼロ。

任地着任



2005年9月2日 任地アティタラキア市着任!

任地着任



市長さんまで出席の、盛大な歓迎セレモニーをしていただきました。



さあがんばるぞ! しかし見たものは・・・?



- ▶ 教室はごみだらけ。
- ▶ 時間割がない、授業の区切りもない。
- ▶ 「教科書のイラストを切ってノートに貼る」が学習?

さあがんばるぞ! しかし見たものは・・・?



- ・ 「何もわからないまま、座っているだけ」の子どもたち。
- ・ 排泄の失敗は、親が来るまでそのまま放置する先生たち・・・。
- ・ 障害の重度な子どもほど、すぐ学校に来られなくなってしまう。

さあがんばるぞ! しかし見たものは・・・?



- ▶ たくさんの聴覚障害の子どもがいるのに、コミュニケーションの指導ができない。
- ▶ 伝えられず、ストレスをためた子が、暴力事件を起こし、退学になる例も。

→子どもたちのために、なんとかしたい!

私にできることから

- ① 体を使う活動が必要だ
→ 集団でできる体育活動からはじめよう
→ 音楽や図工も。
- ② 楽しく意欲もてる授業の実践を
→ 子どもにあった教材を作ってみよう
- ③ 同僚へアドバイス・・・は難しい?
→ 自分の実績を作ってから

授業をはじめたものの・・・？



- ▶ 授業でスペイン語がうまくしゃべれず、苦勞の連続。
- ▶ 子どもたちも活動に集中できずバラバラにトイレに行ってしまう・・・授業崩壊？
- ▶ 同僚の先生も自分の用事で忙しいよう。サポートしてくれない・・・
- ▶ 道具も教材もない・・・



授業をはじめたものの・・・？



はじめは、幼児クラスでリトミックなどからやる。子どもは喜ぶが、大人に理解されず・・・

しかし、続けるなかで・・・



「体育大好き！楽しいよ！」
子どもたちが、楽しみにしてくれるようになる。



続けるなかで・・・



学校にあるものを使って、体育活動をいろいろ考案。

続けるなかで・・・



廃材の使い道もいろいろ。
ヒット作も生まれ、授業が盛り上がる。



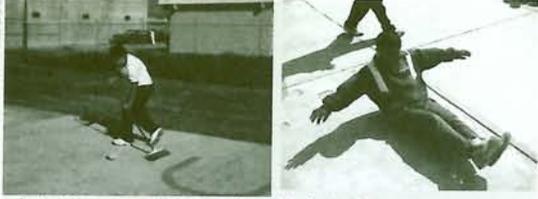
続けるなかで・・・



体育経験のない先生たちも、
少しずつ協力してくれるようになってきた！



続けるなかで・・・変わってきた？



全クラスで、週2回ずつ体育実施。そのため「ナオの時間割表」も配る。先生たちが「うちはいつなの？」と待ってくれるようになる。

続けるなかで・・・協力も！



教材作りに保護者が協力してくれ、バルーン完成！

試行錯誤の中で・・・成果は。

- ▼ 「今日は体育あるの？」
「ナオ先生の授業は楽しいよ！」
→子どもたちの授業への参加姿勢、格段に向上。同僚も保護者も応援してくれるように。
- ▼ 「ナオは私たちが知らないことができるわ」
→同僚の評価もますます？ちょっと地位向上。体育を足がかりに、学校での活動を広げられた

ピアノの取り組み



・日本からもらったお古のピアノが大活躍。子どもたちがクリスマスイベントで「きらきらぼし」を演奏し、拍手喝采を浴びる。

保護者も大喜び！校長は鼻高々。



図画工作



大人が手を取ってきれいに書いてしまうメキシコ。自由に描く楽しさを伝えるのは・・・なかなか難しい。

図画工作



教材作り



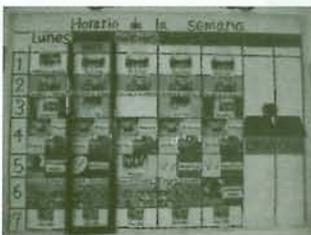
子どもたちが、楽しく使える教材づくりに、一人せつせと励む。



教材作り



教材作り



目新しい教材に、先生たちも関心を持ってくれた。



相手の仕事は 変えられるか？



・同僚の仕事に、アドバイスすることはやっぱり難しい。
→ならば、相手が受け入れられる方法で。教材を作って使ってくれたら万々歳！？

活動の成果は…？

- ✓ 「ナオの時間割」効果
→なんとなく全クラスが時間割を作るようになる。
- ✓ 「子どもたちが生き生きしてきたわ」
→楽しい授業ができることに気づいてくれる。
「楽しいものなら、ちょっと使ってみよう」
→教材貸し出し増える。自分で作ろうとする人も
- ✓ 職場での地位かなり向上！…意見を聞いてくれることも増える。

～ここまで来るのに1年半経過…ラストスパートは？～

イダルゴ州の隊員による 障害児教育研修会計画

- ✓ 今まで隊員が任地でやってきた活動を元に、イダルゴ州内で、障害児教育研修会をやるう！16-1の同期に先輩隊員たちも加わる。
- ✓ 隊員の専門は、算数教育、音楽、美術、体育と幅広く、実践内容も豊か。
- ✓ 内容は、理論より実践重視。実技を交えたもので、実際に活動を体験してもらおう！

実現に至るまで

- ・2004年12月（着任6ヶ月） 企画開始
- ・2005年3月 州教育省へ企画を持ちかける。
→OKをもらうが、その後担当者が教育省を辞任。
- ・2005年7月 調整員さんの助けを借りて再度交渉。
教育省の責任者が許可
→いよいよ実現へ！
- ・2005年9月 第1回開催にこぎつける
その後2月まで、7回実施

時間との戦い・・・のようなものでした。現職はつらい？

隊員による障害児教育研修会開始



♪ 2005年9月。隊員の任地の学校で、模擬授業を中心に音楽教育研修会を実施。

手ごたえあり。先生たちは興味を持ってくれた！

第2回 イダルゴ州UPN大学



♪ イダルゴ州の教員養成大学で、日本の障害児教育の実践を紹介する機会を得る。

♪ 将来、養護学校の教員になる学生さんたちに、日本の自立活動の様子や、自閉症児への指導方法などを、ビデオを見せながら紹介。

♪ 「日本の教育に学びたい」と学生さんたちが意欲を持ってくれる。

第3回 アティタラキア



♪ 私の任地では、作ってきた教材の紹介などをやる。
♪ 同僚が準備と発表をよく手伝ってくれ、心から感激。



体育を経験したことのない先生たちが、子どものように楽しんで、体育活動をしてくれました。



研修会、大成功！

各隊員の任地で開催



左は、現職教員による算数教育。算数指導法は関心を呼び、質問も多数。 右は、美術実技講習

最終回 州都パチューカ



▼ 2月終わり、すべての研修会が終了。最初は難色を示した州教育省からも感謝され、大好評のうちに終わる。

研修会大成功の裏には・・・



▼ 私のスペイン語原稿を手分けして添削してくれた同僚たちの手助けがあつてこそ。

▼ 一人ではできなかった。多くの人に理解され、助けられ、支えられていたのだと気がつきました。

ちなみに上↑は、学校の教員の制服なのです。

研修会大成功の裏には・・・



2年間、共に過ごしたメキシコ隊同期たち。みんなのおかげで、乗り越えられました。ありがとう。

任地を去る日



学校をあげてのお別れ会。子どもたちの出し物はすべて、「ナオが教えてくれた活動」でした。「ナオが教えてくれたこと、みんなで続けていくわ」といわれて涙…。

私を支えてくれたメキシコの人たちに感謝

任地を去る日



お母さん方が、一人一品ずつ、たくさんのごちそうを持ち寄ってくれた。

障害児を取り巻く社会



ホームスティ先のバオラちゃんのお誕生日を祝う会。大勢の親戚・近所の人々・友人たちが集まりました。

障害児を取り巻く社会



日本とメキシコ、どちらが優しい社会なのだろう？

メキシコの生徒たち、元気で。



最後に



Muchas Gracias! México!! また会う日まで!

ご静聴ありがとうございました!

フィリピン共和国へ MABUHAY!

桜井 真

(16-1, フィリピン, 理数科教師, 海田町立海田中学校)

はじめに

皆さんは今までにフィリピンの国旗・国歌をご存知ですか？私は協力隊としてフィリピンに赴任が決まるまで全く知りませんでした。なかなか諸外国の国旗・国歌まで興味を持つことはないと思います。任国で活動するにあたって、関係者との相互理解は不可欠です。相手に敬意を持って接しなければなりません。フィリピンにおいて国旗・国歌はシンボルとして尊重されています。フィリピンでは映画館の放送前にも国歌が流れますし、生活の中でフィリピンの国歌に接する機会は多く、知らないでは敬意を払ってないことになりかねません。フィリピンは植民地としての長い歴史をもち、国歌は「侵入者たちが踏みじめることはできない」と祖国の永遠の独立を願う国民の心情を表しているそうです。私は、この1年9ヶ月間の間におかげさまでフィリピン国歌が歌えるようになりました。

マブハイとは、フィリピン語で「ようこそ」を意味します。これから少しの間、皆さんに気持ちだけでもフィリピンへお越しいただければと思います。

1 フィリピン共和国

(1) フィリピンについて

正式名称はフィリピン共和国 (Republic of the Philippines) です。フィリピンには7000を超える島があります。総面積は約30万 km^2 で、北海道を除いた日本の面積とほぼ同じです。公用語は英語とフィリピン語(タガログ語)となっており、この他各地に80種類以上の言語があるとされています。国民の83%がカトリック、10%がその他のキリスト教、5%がイスラム教です。

(2) ネグロス島バコロド市について

私が赴任したネグロス島は、マニラから飛行機で1時間南下したところにある4番目に大きな島です。州都であるバコロド市の人口は約43万人。ネグロス島第一の都市です。

2 フィリピンの学校

(1) フィリピンの学校事情

フィリピンの義務教育は、小学校6年間、高校4年間です。小学校は6～12歳、高校は13～16歳の生徒が通っています。しかし、家庭の事情で登校できない子どももたくさんいるため、一旦学校に来られなくなっても、いつでも復学することができるようになっています。よって、小学1年生といっても様々な年齢の子どもたちが在籍しています。学年が上がるにつれ女子生徒の割合が大きくなっていきます。その背景には、男子生徒は学校を辞め労働力として働かなければならない家庭があり、退学率が高いということがあります。

(2) フィリピンの学校生活

7:30には登校し、毎朝全校集会（国旗掲揚・国歌斉唱）が行われます。7:50から午前の授業が始まり、11:30に昼休憩に入ります。昼休憩には子どもたちは自宅に帰ってご飯を食べます。13:00から午後の授業が始まり、16:00に下校するといったのが一日の流れです。放課後は、日本のような部活動はありませんので、自分たちで各自グループを作り、ダンスやバスケット・セパタクローなどを行っています。

(3) フィリピンの授業・クラス

授業は、フィリピン語・英語・数学・理科・社会・芸術（音楽・体育・美術が一緒になった授業）があります。1日に6つの授業があり、教科によって授業時間が決まっています。（例：数学60分、芸術80分など）クラスは、「1クラス50人未満」と政府が推奨していますが、実際には1クラス60～80人で行われているのが現状です。フィリピンでは、学力によってクラス分けがされています。教室は日本より少し狭い感じでしょうか。生徒は机つきのイスに一人ずつ座っています。教科書は学校に保管されていて、授業の時に貸し出されます。生徒達は各自ノートを持参します。

(4) フィリピンの学校設備

ネグロス島では、校舎は1階平屋建てがほとんどですが、右上の写真のような2階建ての校舎も少しずつ増えています。フィリピンの校舎は、フィリピン政府によって建てられたもの、JICAの援助により建築されたものもあります。最近では、中国の援助によって建築されているものもあります。校庭は、緑が多いのが印象的です。職員室はありません。各先生の教室が決められていて、その教室で仕事をされています。家庭科室や音楽室などの特別室はありません。ゲストルームがあり、そこで調理をしたり、食事を摂ったりしています。音楽の授業は一般の教室で行っています。ピアノなどはなく、歌を歌ったり、外でダンスをしたりします。大きな学校には、コンピューター室があります。コンピューターは、日本・中国からの援助品でした。トイレですが、各教室の角にあります。水洗ではなく、上から桶などを使用して水を流すタイプです。壊れていることもあり、衛生的にも問題があります。地域によっては、水自体もないところもあります。トイレ設営に関しては、対応が必要であると感じました。

3 フィリピンでの協力隊活動

他の派遣国では協力隊員が学校に配属され、生徒に直接授業などを行っているところが多いようです。ここフィリピンでは教師を対象にした技術移転の活動を行っていることが大きな特徴です。私にとっては技術交換の活動になりました。現職参加ですので、実質フィリピンでの活動は1年9ヶ月になります。1年9ヶ月の間で行った主な活動をあげてみました。

(1) SBTTP (教員研修会) への参加

① SBTTP (教員研修会) とは

地区ごとに行われる教員研修会のことです。各地区ごとに月1回開催されます。いくつかの学校の教員が集まり各教科に分かれて模擬授業、検討会を行います。かつてのフィリピンでは教師主導型の授業が多かったのですが、現在では生徒主体の授業形態に変えていこうと多くの先生方が努力を重ねています。「生徒達に考え、発見させるためにはどのように授業を仕組んでいけばいいのか」先生方はSBTTPの中でこれらの事について議論します。

中学校の数学教諭である私は、現地でも主に数学を担当していました。現地の先生方と共に模擬授業を参観し、授業後の Critiquing と呼ばれる検討会に参加しました。その検討会で、生徒が興味をもって数学の授業に取り組んでくれるような題材や教具開発のアイディア、班活動の活用方法、黒板の使い方や発問の仕方、ノートの活用の仕方などを紹介しました。

② SBTTP の成果と課題

成果としては、

1) 先生方が間違いや失敗を恐れなくなりました。もし間違いや失敗があったとしても、その後の検討会で学び、今後活かしていければよい、このように考える先生方が増えてきたように思います。これにより、教えにくい単元を模擬授業で取り上げることも増えてきました。

2) 生徒の間違いを否定しなくなってきました。以前は生徒が間違いをすると「なぜできないのか？」と怒ってしまう先生もたくさんいました。間違いから学ぶという姿勢が先生方に見えてきたように感じます。ただ、「なぜその間違いが起こったのか」「なぜ生徒はそのような間違いを起こすのか」について分析の甘い先生も多く、これからのSBTTPで先生方が学んでいくべきことのひとつであると思います。

3) ネグロスオキシデンタルでのSBTTPは4年目を迎え、マンネリ化してきている部分もあります。このマンネリを打破するために、取り上げる単元に変化が起きてきました。先生方が苦手としている学習内容にも目が向き始めたのは大変よい兆候であると思いました。

課題としては、

SBTTPをやめたいと感じている教員が多いのも事実です。「模擬授業にはお金が

かかる」という理由です。準備物（紙やマジックなど）の購入費が、現在先生方の負担となっていることが不満なようです。模擬授業を日々の授業に活かしていれば、決して無駄な資金ではないはずですし、費用をかけない模擬授業の研究をしていけばよいと思います。

③ 活動中での困難

1) 私が赴任して真っ先に提言したのが、「授業中のスナックの禁止」です。赴任した当時は、模擬授業中、参観している先生にスナックが配られ、授業中にもかかわらずスナックを食べ、雑談に花が咲くことも多かったのです。自分の提言の後に授業中のスナックは禁止となり、それにより授業に集中して参観している先生が増えてきたように感じました。しかし、SBTPの楽しみの一つを奪われた先生方からは当初かなり反感の声や態度がありました。一方では、そういった習慣に疑問を感じながらも提言できずにいた先生もいたようです。

2) SBTPでは、良い結果を求めるあまり（悪い結果を避けるあまり）、模擬授業には成績の良い生徒を選び、また生徒に理解しやすい簡単なトピックが取り上げられることがありました。授業後の検討会でも、「よい授業であった」とまとまってしまうことがありました。「実際には、この授業内容を完全に理解できない生徒もいるはず。普段の授業でも使えるようにするには、何を改善していけばいいのか」このような提言をしてきました。このような私の発言は、円満に模擬授業・検討会を終えようとする先生方にとっては水を差す発言であったようです。これらの手厳しい指摘を歓迎してくれた先生もいましたが、拒否感を示した先生もいました。

(2) 生徒対象のワークショップ

近郊の隊員の力も借りて生徒対象のワークショップを10校以上の学校で行うことが出来ました。このワークショップで、私が担当したのは数学と平和学習です。

① 数学

まず、数学の授業は、「数学の楽しさ」を伝えたい、という思いで行いました。ワークショップでは、「学んだことを活用する」ことを目的とする授業を行いました。

ワークショップに先生方にも参観して頂くことで、日本の授業のやり方、声かけの仕方、生徒への接し方を見てもらい、普段の授業を見直し活かしてもらうという目的も兼ねることができました。そして、このワークショップは私にとってフィリピンの生徒たちと触れ合うことができる大切な時間でした。小学校では「タングラム」や「Four Fours」、高校では同じく「タングラム」や「凹四角形の内角と外角の関係」などの学習をしました。簡単なゲームも交えて行い、生徒は楽しんでいたように思います。

② 平和学習

昨年戦後61年を迎えましたが、人々の記憶から薄れ風化していくことのないよう、広島出身者としてヒロシマでの悲劇を世界に伝えていかなければならないという思

いから平和学習を行いました。原爆資料館からお借りした佐々木禎子さん（被爆後遺症により白血病で亡くなった少女）を題材にしたアニメビデオやポスターを用いて原爆（核爆弾）の被害について知ってもらいました。これからの将来戦争のない平和な世界にしていくために、自分たちに何ができるのか、自分たちのすべきことは何かを共に考え、相互理解の重要性を述べました。短い時間の中で十分に理解してもらえたかといえば無理だとは思いますが、少しでも頭の片隅に残り、そしてまたいつか将来平和について考えてくれるきっかけにでもなればと思っています。

フィリピンの平和学習では「ミンダナオ島でのモロ民族解放戦線とフィリピン軍との紛争」などを学ぶそうです。平和学習を通じて、お互いに理解し合うことが大切であることを学習するそうです。フィリピンは、現在でもマニラや地方各地で度々テロによる爆発事件などが起き、平和について考えさせられる出来事が身近にあります。

小学校の歴史の授業では、第二次世界大戦で日本軍がフィリピンに侵略してきたことを学んでいます。日本軍がかつてフィリピン人に行った虐殺行為を歴史事実としてきちんと学ばれています。しかし、授業の最後に先生方はこう言われます。Now Japanese are BEST FRIEND for Filipinos. 日本と友好関係を築こうとしてくれていることにうれしく思いました。毎年多くの日本人がフィリピンを訪れて交流を深めてくれているという努力があるからと感じます。

今後子どもたちに自分達の将来の世界について考えて欲しいと、平和学習に使用した資料の一部を学校に寄贈してきました。

(3) Math Challenge への参加

年一回各地区の学校代表が集い、数学コンテストが行われます。そのコンテストの準備や審査に携わりました。代表となった生徒たちは学校の名誉をかけて競っていました。

(4) ポンテベトラ小学校・高校への定期訪問

S B T Pでは、準備が周到にされた授業しか見る事が出来ません。S B T Pで学んだことがどれだけ普通の授業に活かされているのか、普通の授業の問題点は何か、を知るために赴任1年後辺りからポンテベトラ小学校・高校に定期訪問を始めました。これにより、普通の授業とS B T Pの模擬授業との違いを見ることができ、生徒の実際の学力や授業での様子を知ることができました。S B T Pでは、先生方との話し合いが多く、なかなか生徒とゆっくりと話をすることがありません。この定期訪問では、ゆっくり生徒と話をすることができました。また、S B T Pでは参加者の先生方は私のことをスペシャリストとして見るため、微妙な距離を感じることもありましたが、しかし、定期訪問している学校の先生方は、私を同じ一教師として見てくれるため、本音で語り合うことができ、気軽に質問もしてくれました。日本とフィリピンの教育の違いについても語る時間が十分にあり、フィリピンの教育の問題点を更に深く知ることができました。

(5) JOCV NEWS の発行

同じオフィスに配属になった隊員(16年度2次隊)とともに、私たちの活動や活動の中での気づきを多くの人に知ってもらうためにニュースレターの作成を始めました。ニュースレターは月一度の発行で、私たちがSBTPで訪れた学校の紹介、SBTPの様子、その他の活動の紹介、SBTPに関する私たちの考察を記事としました。各学校に配布したところ、なかなか好評でした。このニュースレターは、カウンターパート、また配属先の責任者へ、私たちの活動を報告する大切なレポートとなっていました。

(6) フィリピン通信発行

派遣当時の日本での配属先である広島県江田島市立大柿中学校に、フィリピンの文化・生活習慣などを少しでも知って国際理解を図ってもらいたいと思い『フィリピン共和国へ MABUHAY!』というフィリピン通信を月1~2回程度発行していました。

また、自分の活動の報告や、通信をメールで送信することで生存報告も兼ねていました。忙しくて発行できない時もあり、最終的にはNO.16までの発行となりました。

(7) JICA-Net での国際交流

同じフィリピンの協力隊員の活動のお手伝いをしました。JICA-Net というオンラインによるテレビ会議装置を使った遠隔システムを使用し、平和について双方の生徒が話しあいました。

バタアン州は歴史の中で日本と深い関係があります。このバタアンではかつてバタアンの死の行進と呼ばれる、日本軍による残虐な行為が行われました。この場所は、フィリピン国民にとって WAR MEMORIAL PLACE として広く知られており、毎年4月9日は「バタアンの日」として国民の休日となっています。そういった歴史をもつバタアン州と広島の生徒をつなげたいという隊員の思いが形となりました。

(8) 日比の学校間でのカード交換

JICA中国を通して、「カード交換を希望している中学校があるのですが」という話が入ってきました。そこで、私が定期訪問していたポンテベトラ高校にお願いしました。

実際に手紙を持って教室に入ると、「早く見たい!」「早く返事が書きたい!」とすごく興奮していた様子でした。手紙を書いている最中も、「男の子か女の子か、どちら?」「日本の生徒はみんな仲がいいの?」など、いろいろと質問を受けました。日本のことをもっと知りたい、フィリピンのことを伝えたい、と一生懸命書いてくれました。

フィリピンの生徒の考えていることや流行しているもの、また教育事情についても、日本の生徒の皆さんに理解していただく良い機会になったのではないのでしょうか。また、英語の勉強にもなったのではないのでしょうか。このような国際交流は、双方の生徒にとって心に残る貴重な体験になったと思います。

世界各地に協力隊員は派遣されています。協力隊員の方々を活用してこのような計

画を実施することは双方にとって有益なものになることと思います。私自身も良い経験をさせていただきました。

4 協力隊に参加して

(1) 現地での苦悩や喜び

① 言語

私は昔から英語が苦手で、ましてや現地語のイロongo語も習得しなければならない。赴任当初は思ったことが表現できず、たいへん悔しい思いをしました。普段の生活の中ではできるだけイロongo語で挨拶するように努めていました。現地語で話しかけると、やはり相手との距離がグッと近くなる感じがします。異なる言語を持つ人々が、英語・イロongo語・日本語を通じて、お互いの文化や習慣について語ったり、笑いあったりすることができます。日本語だけでは知りえなかった世界がそこにはありました。

② 生活習慣・生活リズム

また、苦勞したこととしてフィリピン人の生活習慣・リズムです。口頭で約束したこと、約束した時間を重要視してもらえなく、計画が先延ばしにされたり、長時間待たされたことが多々あり、かなりストレスでした。

③ 治安

フィリピンは治安が悪いと思われがちですが、フィリピンで暮らしてみると、そこまでの治安の悪さは感じません。しかし、自分の注意力が落ちている時に被害に遭います。実際、街中を歩行中に携帯を盗まれたり、家に泥棒が入りました。

(2) 協力隊に参加して感じたこと

① 外国語習得の必要性

私も海外に出て英語の必要性を実感したのと同時に、日本人の英語力の現実を知りました。フィリピンでは、フィリピン人だけではなく、中国・韓国・マレーシア・インドネシア・アメリカなど各国の人々と英語を共通語として会話をします。経済大国・技術大国として各国に知られている“日本”ではありますが、日本や日本人を誤解している人々はかなりのものでした。英語が話せなければ、日本の文化や日本人の考えや慣習など伝えることもできず、相手に誤解を与えたままになってしまいます。ちょっとした誤解が大きなひずみになることも経験しました。

② 豊かさの本質について

フィリピンは経済的・物質的に豊かというわけではありませんし、情報量も多くありません。しかし、人々はその中でも日々模索し、様々な発見をし、生活しています。家族を大切に作る心、人との触れ合いを大切に作る心、物を大切に作る心、家族とゆったりと過ごす生活など、今の日本人が少し忘れかけていることを再認識させられました。

③ 国際協力の実際

今まで知らなかった JICA を含め他の団体の国際協力活動にも触れることができました。他の国の様々な国際援助の実際を知り、そういったニュースにも敏感に反応するようになりました。

④ 国際人としての日本人のあり方

これからの世界の安定のためにも日本が国際協力・国際交流に参加していくことは国際社会の一員として必要であることは確かです。もっと多くの日本人にも他人事ではなく、国際社会に興味・関心を持って注目していかなければならないと思います。

⑤ 日本の良さを再認識

異なる言語・文化・生活環境の中で生活したことで、日本語・日本の技術や文化など日本の良さを実感し、自分が日本人であることを再認識した気持ちです。

5 学校現場への還元

フィリピンでの協力隊活動や生活・経験し得たことを、今後は同僚・生徒・地域へと還元していきたいと考えています。

(1) 教員・生徒への還元

① 協力隊活動での経験の紹介

現地で珍しい食べ物に驚きました。トイレなど劣悪な衛生状態に多々苦しみました。風土病にも罹りました。様々な経験を重ねていくうちに、その生活にいかに対応するか知恵がついてきました。そんな異国での経験を話していきたいと思います。また、学校に行きたくても行けない子ども、家族を養っていくために働きに行く子ども、ノートが買えない子どもに会い胸を痛くする経験をしました。フィリピンの生徒の勉強に対する姿勢も伝えたいと思っています。もちろん、貧困という点だけでなく、フィリピンの優れた点や異なった視点によるものの見方を伝えていきたいと思っています。

② 現地情報の提供や紹介

同じアジアの国フィリピンですが、“犯罪が多い”など日本人から誤解されている部分も多いです。しかし、フィリピンは毎年多くの外国客が訪れる素敵なリゾート地を持つ国でもあります。また、フィリピンは歴史的にも日本と大変深いつながりのある国です。もっと多くの人々にフィリピンについて知ってもらい、友好的関係が築けていけたらという気持ちを持っています。

③ 異文化理解・国際協力の授業

④ フィリピンの学校の生徒達と手紙などを通して交流

私達が相手のことをよく知らないのと同じように、相手も日本のことをよく知らなかったり、誤解していることが多々あります。現実にそんな誤解が摩擦となって関係がこじれている国もあります。相互理解を図るには相手の生活・文化・宗教・抱えている問題などを知り、それを受け入れなければなりません。頭では簡単なようですが、

実際には難しいものです。だからこそ、時間をかけて伝えていきたい事柄だと感じています。また、異文化を知ることで、日本の文化にも触れ、再認識できる機会だと思っています。英語の苦手な私でしたが、相手のことを知りたいという気持ちから、英語で話す楽しさを覚えました。世界は本当に広く、未知数です。多くの出会い・経験をしていってほしいと願っています。

⑤ 教材教具の提供・紹介

教材教具が不足していたフィリピンで、そこにある物を使用して如何に物を作り出していくか、クリエイティブな部分を大切にすること、工夫することの大切さを伝えていければと思っています。

(2) 学校以外の教育活動において

協力隊活動を通じて国際協力への理解を深めることができました。今後は、JICAなどのイベントなどを通じて地域での国際協力への理解の向上にも貢献していければと考えています。

最後に

現職参加という制度のお蔭で私にも国際協力の世界を覗く機会がいただけました。協力隊に参加できたことに大変感謝しています。派遣前訓練を含め協力隊活動は、厳しい場面・状況に遭遇することも多々ありました。この経験が私のこれからの人生・教師生活において糧となることは間違いありません。多くの子ども達に世界に興味を持ってもらうこと、世界をもっと知ってもらうこと、そういったことも大切にできるような教師でありたいと思っています。





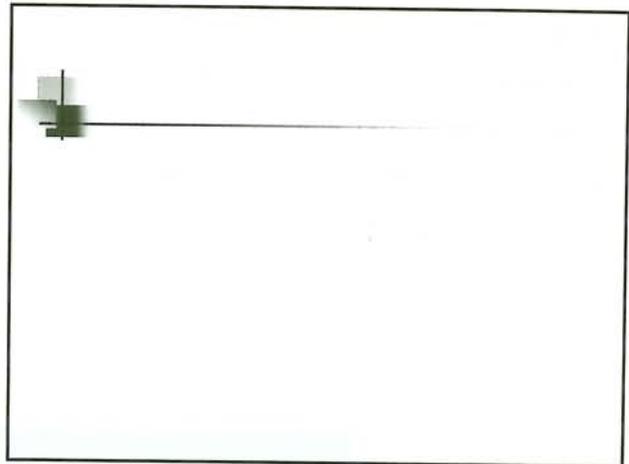
広島県海田町立海田中学校教諭
桜井 真

フィリピン共和国

- 正式名称はフィリピン共和国 (Republic of the Philippines)
- 7000を超える島がある
- 総面積は約30万km² (北海道を除いた日本の面積とほぼ同じ)
- 人口は約8,300万人
- 公用語は英語とフィリピン語(タガログ語) この他、各地に80種類以上の方言があるといわれている
- 気候は熱帯性気候
雨季(6月から10月)と乾季(11月から5月)
- 国民の83%がカトリック、その他のキリスト教10% イスラム教は5%
- 日本からフィリピンの首都マニラまで飛行機で約4時間
- フィリピンには日本との時差は1時間 (日本が正午なら、フィリピンは11時)

ネグロス島バコロド市 (Bacolod)

- 私が赴任したネグロス島は、マニラからさらに飛行機で1時間南下したところにある4番目に大きな島。
- 州都であるバコロド市の人口は約43万人。ネグロス島第1の都市。
- バコロド市ではイロンゴ語という言葉が使用されている。



フィリピンの学校生活は？

- 1日の流れ
 - 7:30 登校
全校集会 (国旗掲揚・国歌斉唱)
 - 7:50 午前の授業
 - 11:30 昼休憩
(子どもたちは自宅に帰ってご飯を食べる)
 - 13:00 午後の授業
 - 16:00 下校
(全校集会をすところもある)
- 放課後 部活動はない
その代わりに、自分たちでグループを作りダンスやバスケット・セバタクローなどをしている。

フィリピンの授業・クラスは？

- 授業
フィリピン語・英語
数学・理科・社会
芸術(音楽・体育・美術が一輪になった教科) など
- 1日に6つ授業がある
教科によって授業時間が決まっている
例: 数学60分、芸術80分など
- クラス
「1クラス50人未満」政府が推奨
現在は1クラス60~80人で行われている学校が多いのが現状である。
- フィリピンでは、学力によってクラス分けがされている。

教室は日本より少し狭い感じでしょうか。生徒は机付きのイスに一入ずつ座っている。教科書は学校に保管されていて、授業の時に貸出。生徒たちは各自ノートを持参する。

フィリピンの学校設備

- 校舎・校庭
- 職員室
- 家庭科室・音楽室
- コンピューター室
- トイレ



フィリピンでの活動概要

- SBTP(教員研修会)への参加
- 生徒対象のワークショップ開催
- Math Challengeへの参加
- ボンテベトラ小学校・高校への定期訪問
- JOCV NEWSの発行
- フィリピン通信「フィリピン共和国へMabuhay!」の発行
- JICA-Netでの国際交流
- カード交換の仲介

SBTP(教員研修会)

SBTPとは、フィリピンの小学校や高等学校の先生方が参加している研修会です。この研修会は、フィリピンの教育省によって1999年に始められた。

- SBTP(教員研修会)とは・・・
 - ・地区ごとに行われる教員研修会
 - ・各地区ごと 月に1度開催
 - ・各教科に分かれて模擬授業、検討会
- SBTPの特徴
 - ・すべての教員に研修参加の機会を与える
 - ・少人数のグループで行う
 - ・学校の授業を研修の場とする
 - ・特別な経費を必要としない
- SBTPの成果と課題
- 活動する中での困難



模擬授業の様子



検討会の様子

生徒対象のワークショップ(数学)

夏休みや授業の合間などの時間を使って、近郊の隊員と協力して生徒対象のワークショップを実施。

- ワークショップの目的
 - ・生徒に数学の楽しさを伝える
 - ・教員対象セミナーの代替
 - ・生徒と触れ合いたい!
- 実施内容
 - 「タングラム」や「Four Fours」
 - 「凹四角形の内角と外角の関係」
 - など



生徒対象のワークショップ(平和学習)

広島平和記念資料館からお借りしたビデオや原爆ポスターを使用して平和学習を行った。また、佐々木禎子さんの折り鶴への思いを伝え、生徒全員で折り鶴を折った。

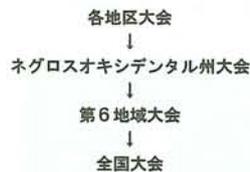
- 広島出身者としての役割
- ヒロシマ・原爆について
- フィリピンの平和学習
 - 「ミンダナオ島でのモロ民族解放戦線とフィリピン軍との紛争」
- 第二次世界大戦での日本軍の侵略



子どもたちが書いたメッセージから
 "Stop the war!" and "Never again"
 Peace of the world.

Math Challenge

各地区の学校代表が集い年1回数学コンテストが行われる。このコンテストの準備及び審査に携わった。



代表者は学校の名誉をかけて競う



その他のコンテスト

数学のコンテスト以外にも、下記のようなコンテストも実施されていました。



テーブルセッティングコンテスト



織ぎ木コンテスト

ポンテベトラ学校への定期訪問

SBTP以外にポンテベトラ学校へ定期訪問をし通常の授業の様子や学校生活を見学

■ 定期訪問の目的

- ・ 普段の授業とSBTPのデモレッシンとの違いを知る
- ・ 生徒とのふれあい
- ・ 先生方との関係構築



JOCV NEWS

JOCV NEWS
In Degree Occidental



同じオフィスに配属の協力隊員とSBTPで訪れた学校の紹介、SBTPの様子、その他の活動（ワークショップなど）の紹介、SBTPに関する私達の考察などを記事にして月1回発行

■ 目的

- ・ 活動の広報
- ・ 先生方との関係構築
- ・ フィリピンでの上司への活動報告



フィリピン通信 「フィリピン共和国へMabuhay!」

広島県江田島市立大柿中学校の生徒へフィリピンの文化・生活習慣、自分の私生活などを紹介

■ 発行の目的

- 生徒の国際理解へのきっかけ作り
- 活動報告(生存報告)

■ 発行数

1年8ヵ月の間で1号～16号まで発行



JICA-Net国際交流

広島県立安古市高校とバタアンナショナル高校(バタアン州)とのJICA-Netを使用した国際交流

■ JICA-Net



■ バタアン州と日本との関係



カード交換(国際交流)

広島市立五日市南中学校とポンテベトラ高校(ネグロスオキシデンタル州)のカード交換による国際交流の仲介

■ 英語によるコミュニケーション



■ 協力隊員を活用



協力隊に参加して

- 現地での苦悩や喜び
 - ・言語
 - ・生活習慣・生活リズム
 - ・治安
- 協力隊に参加して感じたこと
 - ・外国語習得の必要性
 - ・豊かさの本質について
 - ・国際協力の実際
 - ・国際人としての日本人のあり方
 - ・日本の良さを再認識

学校現場への還元

- 教員・生徒への還元
 - ・協力隊活動での経験の紹介
 - ・現地情報の提供や紹介
 - ・異文化理解・国際協力の授業
 - ・フィリピンの学校の生徒達と手紙などを通して交流
 - ・教材教具の提供・紹介
- 学校以外の教育活動において

フィリピンの食事



フィリピンの乗り物

トライシカット

短距離の移動に使用。私の通勤手段でした。



ジブニー

中距離の移動に使用。運賃7ペソ(約15円)



トライシクル

近～中距離の移動に使用。バイクの横にサイドカーがついたもの。

マスカラ祭

毎年10月1日～19日までの19日間開催されるネグロス島の祭りです。世界から多くの観光客がやってきます。



Thank you for listening!

Maraming Salamat po sa inyong lahat.
 Madamo gid nga salamat sa inyo tanan.
 Thank you very much.
 Arigatou gozaimasu.

Mabuhay! Philippines ようこそ フィリピン共和国へ

広島県海田町立海田中学校教諭
桜井 真

フィリピン共和国

- 正式名称はフィリピン共和国
(Republic of the Philippines)
- 7000を超える島がある
- 総面積は約30万km²
(北海道を除いた日本の面積とほぼ同じ)
- 人口は約8,300万人
- 公用語は英語とフィリピン語(タガログ語)
この他、各地に80種類以上の方言があるといわれている
- 気候は熱帯性気候
雨季(6月から10月)と乾季(11月から5月)
- 国民の83%がカトリック、その他のキリスト教10%
イスラム教は5%
- 日本からフィリピンの首都マニラまで飛行機で約4時間
- フィリピンには日本との時差は1時間
(日本が正午なら、フィリピンは11時)

フィリピンの学校事情

- フィリピンの義務教育
小学校6年間、高校4年間
小学校は6~12歳、高校は13~16歳の生徒が通っている。
しかし、家庭の事情で登校できない子どももたくさんいる。
一旦学校に来られなくなっても、いつでも復学することができるようになっている。
よって、小学1年生といっても様々な年齢の子どもたちが在籍している。
- 現状
識字率：92.2% (2000年調査)
1,000人(小学1年入学生)
→ 中退者312人(多くが小学1、2年生時で中退)
→ 通常修了者439人(その他249人が平均9.6年で小学校を卒業)
1,000人(高校1年入学生)
→ 中退者389人
→ 通常修了者248人(その他353人が平均6.7年で高校を卒業)

フィリピンの学校生活は？

- 1日の流れ
- 7:30 登校
全校集会(国旗掲揚・国歌斉唱)
- 7:50 午前の授業
- 11:30 昼休憩
(子どもたちは自宅に帰ってご飯を食べる)
- 13:00 午後の授業
- 16:00 下校
(全校集会をすところもある)
- 放課後 部活動はない
その代わりに、自分たちでグループを作り
ダンスやバスケット・セバクローなどを
している。



フィリピンの授業・クラスは？

- 授業
フィリピン語・英語
数学・理科・社会
芸術(音楽・体育・美術)が一緒になった教科
など
1日に6つ授業がある
教科によって授業時間が決まっている
例：数学60分、芸術80分など
- クラス
「1クラス50人未満」政府が推奨
現在は1クラス60~80人で行われている
学校が多いのが現状である。
フィリピンでは、学力によってクラス分け
がされている。



教室は日本より少し狭い感じでしょうか。
生徒は机付きのイスに一人ずつ座っている。
教科書は学校に保管されていて、授業の時に貸出。
生徒たちは各自ノートを持参する。

フィリピンの学校設備

- 校舎・校庭
- 職員室
- 家庭科室・音楽室
- コンピューター室
- トイレ



フィリピンでの活動概要

- SBTP(教員研修会)への参加
- 生徒対象のワークショップ開催
- Math Challengeへの参加
- ボンテベトラ小学校・高校への定期訪問
- JOCV NEWSの発行
- フィリピン通信「フィリピン共和国へMabuhay!」の発行
- JICA-Netでの国際交流
- カード交換の仲介

SBTP(教員研修会)

SBTPとは、フィリピンの小学校や高等学校の先生方が参加している研修会です。この研修会は、フィリピンの教育省によって1999年に始められた。

- SBTP(教員研修会)とは・・・
- ・ 地区ごとに行われる教員研修会
- ・ 各地区ごと 月に1度開催
- ・ 各教科に分かれて模擬授業、検討会
- SBTPの特徴
- ・ すべての教員に研修参加の機会を与える
- ・ 少人数のグループで行う
- ・ 学校の授業を研修の場とする
- ・ 特別な経費を必要としない
- SBTPの成果と課題
- 活動する中での困難

生徒対象のワークショップ(数学)

夏休みや授業の合間などの時間を使って、近郊の隊員と協力して生徒対象のワークショップを実施。

- ワークショップの目的
 - ・ 生徒に数学の楽しさを伝える
 - ・ 教員対象セミナーの代替
 - ・ 生徒と触れ合いたい!
- 実施内容
 - 「タングラム」や「Four Fours」
 - 「凹四角形の内角と外角の関係」
 - など



生徒対象のワークショップ(平和学習)

広島平和記念資料館からお借りしたビデオや原爆ポスターを使用して平和学習を行った。また、佐々木禎子さんの折り鶴への思いを伝え、生徒全員で折り鶴を折った。

- 広島出身者としての役割
- ヒロシマ・原爆について
- フィリピンの平和学習
 - 「ミンダナオ島でのモロ民族解放戦線とフィリピン軍との紛争」
- 第二次世界大戦での日本軍の侵略

子どもたちが書いたメッセージから
"Stop the war!" and "Never again"
Peace of the world.



ボンテベトラ学校への定期訪問

SBTP以外にボンテベトラ学校へ定期訪問をし通常の授業の様子や学校生活を見学

- 定期訪問の目的
 - ・ 普段の授業とSBTPのデモレッションとの違いを知る
 - ・ 生徒とのふれあい
 - ・ 先生方との関係構築



JOCV NEWS



同じオフィスに配属の協力隊員とSBTPで訪れた学校の紹介、SBTPの様子、その他の活動(ワークショップなど)の紹介、SBTPに関する私達の考察などを記事にして月1回発行

- 目的
 - ・ 活動の広報
 - ・ 先生方との関係構築
 - ・ フィリピンでの上司への活動報告



フィリピン通信 「フィリピン共和国へMabuhay!」

広島県江田島市立大柿中学校の生徒へフィリピンの文化・生活習慣、自分の私生活などを紹介

- 発行の目的
 - 生徒の国際理解へのきっかけ作り
 - 活動報告(生存報告)

- 発行数
 - 1年8ヵ月の間で1号~16号まで発行



JICA-Net国際交流

広島県立安古市高校とバタアンショナル高校(バタアン州)とのJICA-Netを使用した国際交流

- JICA-Net
- バタアン州と日本との関係

カード交換(国際交流)

広島市立五日市南中学校とボンテベトラ高校(ネグロスオキシデンタル州)のカード交換による国際交流の仲介

- 英語によるコミュニケーション
- 協力隊員を活用

協力隊に参加して

- 現地での苦悩や喜び
 - ・ 言語
 - ・ 生活習慣・生活リズム
 - ・ 治安
- 協力隊に参加して感じたこと
 - ・ 外国語習得の必要性
 - ・ 豊かさの本質について
 - ・ 国際協力の実際
 - ・ 国際人としての日本人のあり方
 - ・ 日本の良さを再認識

学校現場への還元

- 教員・生徒への還元
 - ・ 協力隊活動での経験の紹介
 - ・ 現地情報の提供や紹介
 - ・ 異文化理解・国際協力の授業
 - ・ フィリピンの学校の生徒達と手紙などを通して交流
 - ・ 教材教具の提供・紹介
- 学校以外の教育活動において

算数プロジェクト 活動報告

下田 あゆみ

(16-1, ホンジュラス, 小学校教諭, 渋谷区立臨川小学校)

はじめに

私は2004年7月から、2006年3月まで1年9ヶ月、中南米ホンジュラスで職種小学校教諭として働きました。要請内容は算数プロジェクトの一員としての仕事です。

ホンジュラスへの初等教育への本格的な協力は1989年から始まり、2002年までに58人の協力隊員が派遣されました。その成果を受けて、ホンジュラス政府が初等教育分野に対するさらなる支援を日本に求めたことから、JICAは2003年から2006年に教材開発された教材を用いた教員研修を軸とする「算数指導力向上計画(プロメタム)」を実施することになりました。自分はその中の2004年に派遣されました。

なぜ、ホンジュラスに特に算数への協力が必要されたかという背景には、つぎのようなことがあります。ホンジュラスでは6歳から12歳までが義務教育で、その就学率は87パーセントと比較的高いにもかかわらず、修了率は68.6パーセントになっています。留年制があり、毎年の及第試験に合格できなかった子どもはもう一度同じ学年で学習したとしても、落第を繰り返すので、正規の6年間で卒業できる子どもは3割程度です。特に算数の成績不振が深刻で、1998年は中南米11カ国中最下位でした。

プロジェクトでは、日本人の専門家が1～6年生「教師用指導書」と「児童用ワークブック」を作成しました。これをホンジュラス政府が国定教科書に指定し、全国に配布されることとなりました。またホンジュラス政府は国立教育大学において、「現職教員研修プログラム」が実施し、その中の講義の一環として、4年間、教科算数で、日本人の協力隊員が講師として「算数教育法」を指導することになった。つまり、算数プロジェクトにおいては、協力隊員は大学の講師という立場になります。

では、2004年から派遣された自分がどのような活動をする事となったかを、時間を追ってお話ししたいと思います。

1 ホームステイ先

4月からの3ヶ月間の長野県駒ヶ根での訓練を終え、7月13日に首都テグシガルパに到着しました。空の上から見ると、山が沢山あって、その斜面に小さな家がびっしり張り付いているなあといった感じです。

現地に着くとまず6週間の語学訓練があります。場所は首都



写真1 ホームステイ先の家族

テグシガルパから車で 30 分ほどのサンタルシアという山の上の村です。

ホンジュラスでは、水の苦勞が常にありました。水道はあるものの、3日に一度しか、水道管を通ってこないのので、大方の家はピラといわれる水槽にそのときに水をため、この水を炊事洗濯トイレまで、すべてのことにここから汲んで使うのが一般的です（写真2）。ここに洗濯板がついているので、そこでせっせと手洗い洗濯するのも日課のようなものです。

これが、私の部屋です（写真3）。コンクリートの壁にトタンの屋根があるだけなので、よく風が吹き抜けていました。また、屋根から、とかげやら、いろいろな虫が入ってきました。

が一番試練と思えたのは、この家族共用トイレを使うことです（写真4）。水がよく流れなくなります。その奥が、いわばお風呂になりますが、お湯は出ないので、ステイ先のママが毎朝お湯を鍋一杯分沸かしてくれたのを、バケツ一杯分にうすめて、それで、髪の毛から、何から全てを済ませねばならず、それに慣れた時は我ながら感心しました。

2 語学訓練～赴任

語学学校では、そのときの同期 21 人のみが通うスペイン語学校で、3人に一人の割合で地元の先生がつき、毎日スペイン語の授業を受けました。

語学訓練を終え、いったんテグシガルパにある隊員宿泊所にそれぞれ待機し、任地の住む家が決まった人からそれぞれの地方に赴任していきました。私も同期隊員と二人で任地に赴任したのは、ホンジュラスにきて1ヶ月半の時でした。

赴任先はダンリ市教育委員会。教育長さんと指導主事の人たちが迎えてくれました。ダンリの教育委員会は何年間も協力隊

員を受け入れているので、信頼関係ができていて、とても働きやすいところです。

これが、協力隊員三人の算数プロジェクトだけで使わせてもらっていた教育委員会の中の一室です（写真6）。これは、他の支部に比べてとても恵まれた環境でした。



写真2 ピラ



写真3 私の部屋



写真4 トイレ



写真5 サンタルシア
のメインロード



写真6 教育委員会の一室

3 算数プロジェクト

もう一度算数プロジェクトの組織について説明します(図1)。

日本側は算数プロジェクトの専門家と協力隊員で構成されています。専門家は同時にプロメタムのメンバーでもあり、その運営、実施にも関わります。そして、指導書、作業帳を製作、政府との交渉、隊員の活動調整などを行っています。

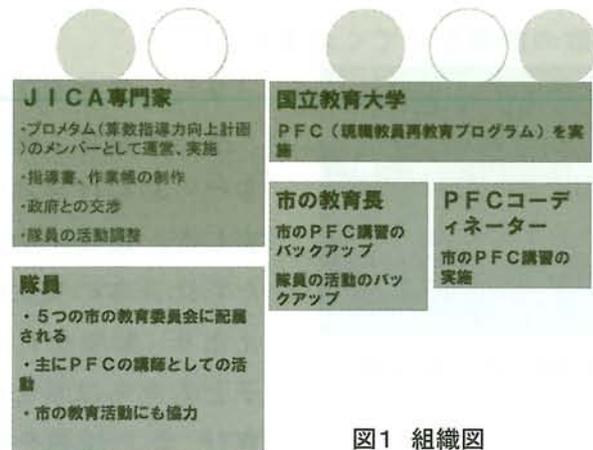


図1 組織図

ホンジュラスの国立教育大学はPFCを実施するおおもとです。5つのPFCの支部にはその市の教育長がまた、PFCの一員として、その支部の運営をバックアップし、各市のPFCのコーディネーターはその支部で行われている講習会の運営調整を行います。

ということで、協力隊員はプロメタムの一員でもありますが、所属はその市の教育委員会になり、同時に講師としてその市で行われるPFCの講義の算数を担当していたということになります。そして、私の実質的なカウンターパートはこの市の教育長さんで、とてもお世話になりました。

4 赴任始めの活動

(1) 授業観察

ここでは、すでに先輩達が1年生から2年生の指導書の内容の講習会を終えていて、1年前に来ている先輩がちょうど3年生の内容の最後を講習しているところでした。そこで、新人の私達はまずは、先輩の授業を参観し、講習生の学校へ一緒に授業観察に行き、実態を知るといった仕事をしました。初めて先輩の授業を参観した時には、スペイン語で何を言っているのかほとんど理解できず、自分にも授業ができるようになるのだろうかと感じました。講習生の先生達はとても無邪気で親しみやすく、その面では安心することができました。

35人の講習生が実際に働いている、学校へ授業観察にこの時期に行ったことは、様々な面でとてもためになりました。ホンジュラスの小学校の実態、ホンジュラスの生活、子どもたちの様子を詳しく知ることができました。

また、講習生の先生達は、授業観察も自分の成績に入ると思っていたので、私達がたずねていくと、とてもはりきって



写真7



写真8



写真9

算数の授業をしてくださいました。



写真 10 折り紙を持つ
子どもたち



写真 11 給食の時間

(2) 日本文化紹介

授業観察を1時間ぐらいした後は、授業のよかった点をなるべくおおげさに褒め、少しアドバイスをするようにしていました。最後に必ず30分ぐらいの時間をもらって、子どもたちに日本の文化紹介をしました(写真10)。おりがみを教えたり、簡単な日本の挨拶や四季の話などをしたりしました。子どもたちは目を輝かせてよく聞いてくれ、先生達もとても喜び、ただ授業を見にこられたという意識を持つことにならずに好意的に受け入れてもらえることにとても役に立ちました。だんだんこちらの方が楽しくて、営業に出かけていくような気持ちにもなりました。町で子どもに会った時に「今度はいつきてくれるの」などとたずねられるようにもなりました。



写真 12 給食

(3) 給食

ホンジュラスの小学校では、必ずおやつがあります。自分で持ってくる学校もありますが、政府から給食用のお金が支給されていて、写真のように(写真11)、子どもたちが休み時間に給食を食べる習慣のある学校が沢山あります。内容はだいたい、ご飯とインゲン豆とトルティーヤというとうもろこしのパンで、母親たちが交代で作って給仕にきます(写真12, 13)。



写真 13 母親たち

これは、山の学校の子ですが、なたで器用にこまを自分で作り、上手にまわして見せてくれました(写真14)。子どもたちはどこへ行っても好奇心一杯で、とてもげんきでたくましい様子でした。



写真 14 こま

(4) 遠くの学校へ

ダンリ市内の小学校へは、なんとかタクシーを使っていくことができますが、沢山の先生が遠い山や田舎から来ているので、その学校への授業観察へ、教育委員会の車で一日がかりで行くこともよくありました。

見渡す限り、平原だったり、山奥だったりしても、必ず村があつて、人々はインゲン豆畑やとうもろこし畑を耕し、こんなところに、と思うところでもけっこう子どもがたくさんいます。この山の下白い点が一番山奥の学校で、ほとんどニカラグアに近い山の中です。幼稚園生から6年生までいて、そこに一人の先生が村に泊まって教えています。



写真 15 学校の場所

5 ホンジュラスの授業の問題点

ではここで、ホンジュラスの授業の問題点についてお話したいと思います。

(1) 教員の学力不足

まず先生達の実態として驚かされるのが先生達自身の学力不足です。小数の割り算のあまりを出す時点でひっかかる人が多く、正確に理解しているといえるのは、小学校3年生程度の内容という先生も非常に多くいます。ですから、授業は計画的には行われず、その先生が得意な内容が気まぐれに教えられたりしています。5年生で分数を教えていたかと思えば、次の日は2年生で終わっているはずの九九をやり始めるといった感じです。

また、教えなければならないカリキュラムは日本よりかなり多いにも関わらず、年間の授業日数が圧倒的に足りていません。200日の予定のところ、実際は100日しかない状態です。その理由は先生達のストライキ、国民の休日便乗した休みが多いこと、ちょっとした行事で学校が休みになるなど様々です。また先生たちも、銀行へいくとか、自分の用事でしょっちゅう学校を休みます。特に山の学校では、町に出て行った先生がなかなか戻ってこないなどということがよくあるようでした。

(2) 指導が伝達方式

教え方の問題では、指導がほとんど伝達方式だということが問題点の一つです。教師主導型で、発問後子どもに考えさせる時間をほとんどとりません。

また、先生がとにかくよくしゃべり、説明時間がすごく長いというのも特徴で、延々なぜ、ひきざんが必要かを4年生に20分近く話している先生の授業をみたこともあります。こどもは、黙って聞いていますが、長い時間黙って聞いていることに慣れているので、その間何も考えず、ぼおっと暇つぶしをしている様子です。

また、先生は常に自分が言ったことを生徒に繰り返すことを要求するので、子どもはそれを大きな声でオウム返しに話しているものの、実質自分自身で問題を考えるということができなくなってしまいます。例えば、「こういうときに使うのは?」「ひきざん」「なにざん?」「ひきざん!」といった感じで子どもたちは習慣的に先生の要求する言葉を大きな声で繰り返します(ビデオ3, 4)。

JICAが指導書を作るまでは、スペインの援助で昔配られた教科書を各学校では使っていましたが、生徒自身は持っていず、学校に置いてある教科書を何年も使いまわしているところが多く、教科書自体が無い学校も沢山あります。子どもは教科書を家に持ち帰ることができないので、復習には、授業で写したノートを見るしかありませんが、きちんとした計画的な板書の先生はほとんどいないし、膨大な量をひたすらノートに写すことを要求する先生もいます。

(3) 教材・教具が使えない

教材費というものは無く、先生が自腹で紙類を子どもに配り、コピー代を払わなければならない、負担になるのが嫌で練習プリントや教材を用意しない先生も多くいます。

また、算数に半具体物などの教材を使う習慣がなかったため、その使用方法や目的

が理解されず、有効に使われていません。

(4) 複式学級

私をもっとも困難だと感じるのは、複式学級の多い実態です。日本と違って、子どもがた沢山いるのに複式学級というのは、たくさんの弊害があります。2学年、3学年一緒の複式学級が平均的ですが、田舎では、6学年を一人の先生が見ていることも珍しくありません。6学年が教室2つに別れて学習し、先生は教室を行ったり来たりして教えます。先生が一つの学年をメインに授業をしている間、他の学年は自習しています。自習している学年に先生が机間巡視をして歩くことはなくほっておかれた状態になります。例えば3学年の複式学級だった場合、午前か午後に分れて授業しているホンジュラスでは、5コマ授業があったとしても、先生が一つの学年に授業している時間は1、5コマ程度となってしまいます。

6 作業帳、指導書作成

このような様々な問題を克服するために、日本人の専門家が作業帳と指導書を作りました（写真 16, 17）。作業帳は、とてもカラフルで、子どもが親しみやすい絵や図が多くついています。子どもが、問題を解いたら、解答を直接書き込めるようになっています。これは、複式問題を含めた子どもの学習活動を保証するねらいからのものです。自習中の子どもが、自分自身で考えられるような問いかけも多く入っています。

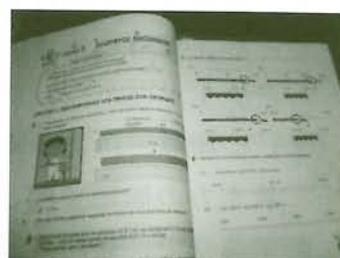


写真 16 作業帳

指導書には、答えを載せ、先生が誤りを教えることが減るようにしています。また子供の作業帳と指導内容が見開き1ページにのっていることにより、指導の留意点をわかりやすくし、読む先生が読むのが煩わしいと感じないようにと工夫しています。各単元の必要時数、指導計画もついで、授業が計画的に行われるようにということもねらっています。



写真 17 指導書

そのように作られた作業帳、指導書を使用して、プロメタムでは先生達が次のような授業ができるようになることを目指していました。

- (1) カリキュラムで指定されている内容をすべて教える。
- (2) 誤りは教えない。
- (3) 子どもに考えさせる指導を行う。
- (4) 複式の問題も含め、子どもの学習活動を保証する。

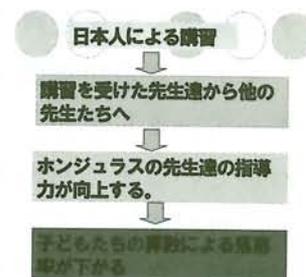


図 2

プロジェクトでは、協力隊の日本人がホンジュラスの先生にこれらを目指した算数指導法を講習することにより、講習を受けた先生達が自分の学校など別の先生達に指導法を広げ、その結果ホンジュラスの先生達の指導力が向上し最終的に、小学生の算数による落第率が下がるという目標をあげていました（図 2）。

7 4年生内容講習

赴任5ヶ月目、4年生内容の講習会を先輩、同期と3人で単元ごとに分担して授業を行いました。実感したのは先生達のわからなさ、分度器のつかいかた、小数、なぜ、1を10で割ったら0.1で0.1をさらに10で割ると0.01なのかをわかってもらうことがとても大変で、指導法よりまず先生達が学習内容を理解することが大変だということをつくづく実感しました。スペイン語がうまく話せないのも、わかりやすい図、どのように提示するかを工夫しました。講習時間は限られていて、やり直しや、補習ができないので、どのタイミングでどう提示するか、など講習前はかなり作戦をねりました。

先生達はわからないと、「わからない」と言い、更に説明し、更に誰かが「わからない」と言う人いると誰かしらが前に出てきて力説し始め、みんながそうだそうどうなづくやとと先に進むといった感じでしたが、先生達はとても素直で、わかりやすいと「なるほど、へえっ」と感心してくれるので教えていてとても楽しくもあり、先生たちに助けられながら頑張ることができたように思います。

8 5年生内容講習

3月に先輩隊員が任期を終えて帰国して、赴任8ヶ月目より、同期と二人だけで、5年生内容の講習会に入りました。

4年生の講習にくらべ5年生は内容が先生達の実態からしてかなり高度で、最小公倍数、最大公約数、素因数など、どう理解してもらうかとても苦労しました。さらに、講習時間が少なく、子どもには19時間の計画で教える内容の部分を6時間教えなければならないということが自分には非常に厳しく思えました。学習内容はしっかり理解してほしい、しかし子どもへの説明の仕方もわかってほしい、先生達が本当に理解するために練習問題を実際こなす時間も取りたい、しかし時間が無いというジレンマがいつもありました。そのために、後からみてもわかりやすい板書、具体物の有効的な提示のしかた、どう発問するかなどを工夫するようにしていました(写真18、19、20)。

また、ゲームと取り入れた、楽しい具体的な活動は短時間でも入れるようにしました(写真21、22)。その楽しさを体験することで、実際に子どもたちともやってみようという思いを持ってくれたらと、考えたからです。

授業観察にまた35人分、野を越え、山を越えいくと先生達の成長した様子が見られとてもうれしかったことを覚えています(写真23、24)。黒板を計画的に書く、練習問題を説く時



写真 18



写真 19



写真 20



写真 21



写真 22

間を確保する、子どもに考えさせようとしている発問がある、低学年の子へ具体物、半具体物、数字の順に提示していこうとしているなど、講習会でのことを、素直に取り入れてくれるところは、ホンジュラスの先生のととても素敵なところだと感じました。



写真 23

9 教科書全国配布

そんな中、政治や他の国の事情など様々なことから遅れてきた指導書と作業帳がやっと 2005 年 6 月、ホンジュラス全国に配布され始めました。ホンジュラスの軍隊がそれぞれの県や市に作業帳を運び、配布をしました。



写真 24

しかし、ダンリ市はほとんどの小学校児童数分配布されたものの、それぞれの地方で、足らない、まだ届かないなどの問題が続出しました。ホンジュラスの組織が機能していない点が響いてしまったということですが、全体の配布状況をきちんと把握できないというところは、ホンジュラスならではの問題だと思います。現在全国配布から一年たっていますが、未だに作業帳を受け取っていない学校があるということで、ここら辺は日本人には何ともできないところで、とても残念だと思います。

また、個人持ちにして、子どもが書き込むことができるというのが作業帳のコンセプトです。しかし政府が毎年、児童数分印刷配布するかどうかは信じられないという校長も多く、長年のホンジュラスの政治状況から見てそれもうなずけることで、実際子どもには配布せず、学校置きにしている学校が多くありました。

指導書、作業帳の全国配布が始まったことで、その使用方法を全ての先生達に知ってもらうための研修会が全国で開かれました。そこでは、日本人に教わった私達の講習生達多くの多くが指導役となって、堂々と、指導書や作業帳のことを説明するのを見ることができました。

10 6年生内容講習

赴任 1 年過ぎ頃、最後の 6 年生の内容の講習会が始まりました。6 年生の内容には、図形や立体が多く、ホンジュラスの先生達が苦手とする分野なので、具体物の提示に特に工夫をこらすようにしました。

また、講習生の先生達に頼んで、講習生のクラスの子どもたちに授業をさせてもらうことにも挑戦してみました。実際に授業をしてみると、生の子どもたちの実態がよくわかりととても貴重な体験になりました。やはり、クラスによっては、1 年生からの学習内容がまるでつみあがっていないということが実感され、先生達の大変さもよくわかりました。何より、ただこの作業帳を渡すだけでは学習ができるようになるのは無理で、先生がきちんとそれぞれの子どもの学習の到達度を把握して、工夫して子どもに提示しなければならぬということが実感として感じる事ができました。

11 自主研修会

11月で6年生の内容の講習を終え、講習は全て修了しました。先生達の実態から、補習をしたいと思いましたが、PFC全体のカリキュラムなど、様々な要因があり、それはできなかったのも、任期残り4ヶ月やるのが無くなってしまいました。そこで、算数の講習会をしますという宣伝をして、2月に自主研修会を開くということに挑戦しました。

大学の単位と関係ないので、来てくれる人がいるかどうかと思いましたが20人程が熱心に来てくれました。カリキュラムに縛られず、必要だと思うところをたっぷり時間をとって講習することができ、とても充実感をもつことができました。ホンジュラスの先生の真面目さや素直さがとてもうれしかった時間でもありました。

また、帰国前の2週間は、講習生の中の一人に頼んで、そのクラスに毎日通わせてもらい、子どもに算数を教えたり、学校の日を観察したりと、とてもよい体験をすることのことができました。

算数プロジェクトとしての私の活動は以上になります。

12 ホンジュラス生活

ではここで、ホンジュラスの生活について少しご紹介したいと思います。

(1) 部屋の様子

私がホームステイした家はママ、養女、ママの孫、お手伝いさんが基本的に一緒に住んでいましたが、ママが文房具屋を営んでおり、その他家族、親戚が常に出入りしている、にぎやかな家でした。

これが私の部屋で(写真25、26)、部屋にトイレとシャワーが自分用についていて、一見豪華な感じですが、水が出ないので、よくこの部屋のバケツにせっせと水をため、それを沸かして浴びてシャワー代わりにするという日々で、家の水を貯めている水槽の水がだんだん少なくなってくるといつも心配でした。水道事情で1週間水が来ないというときもあり、トイレを流す水、洗濯の水などが特に不足して、日々水の有難さを実感していました。また、停電も予告なしによくあるので、いつまでもあると思うな、水、電気といった日々でした。

(2) 食生活

普段はこの教育委員会の中にある小さな食堂で25レンピ150円くらいの定食をお昼は食べ、夕食は自宅で台所を借りて自炊していました(写真27、28)。



写真 25 私の部屋



写真 26 トイレ、シャワー



写真 27 食堂



写真 28 食堂の料理

ホンジュラス料理の定番はインゲン豆の塩煮、トルティーヤ、しょっぱいチーズ、アボガドで、ほぼ毎食これだけという家もあります。味付けがしょっぱく、脂っこいので、あまり健康に良くはありません。

私のように自炊しないで、ステイ先の家で作ってもらっていた隊員は、毎日、毎食ほぼこんな感じで（写真 29、30、31）、炭水化物ばかり、塩分、油過多になりがちで、新鮮な野菜に常にあこがれていました。一応、にんじん、ジャガイモ、ブロッコリー、たまねぎ、などの基本的な野菜は常に手に入りますが、ホンジュラスの人はあまり野菜が好きではありません。



写真 29



写真 30



写真 31



写真 32 エンチラーダ



写真 33 タコス



写真 34 野菜スープ

クリスマスには、このナカタマルというとうもろこしの粉と肉野菜をバナナの皮に包んで蒸したものを食べます（写真 35、36、37）。



写真 35



写真 36



写真 37

(3) よくあるストライキ

ホンジュラスでは様々なストライキがよくあり、いろいろなことが滞ります。



写真 38 教育委員会の敷地を封鎖する農民



写真 39 土管で道路封鎖する農民

(4) レンカ族、ガリフナ族

西部には、レンカ族という背の低い少数民族が住んでいます（写真 40）。

北部には、ガリフナ族という黒人の人たちがいて、とても陽気で元気です。北部で算数プロジェクトとして教えていた隊員には、授業の途中踊りだす先生もいたりなど、独特の苦労や楽しさがあったようです（写真 41、42）。



写真 40



写真 41



写真 42

(5) コーヒー農園

ホンジュラスの特産品はコーヒーで、沢山のコーヒー農園があります。大農場制のようなものがまだ残っていて、貧しい人が沢山働いています。コーヒーの収穫期に親が人手として子どもを山へ連れて行ってしまふので、学校へこられなくなってしまう子どもたくさんいます（写真 43、44、45）。



写真 43



写真 44



写真 45

(6) 他の隊員と

少し時間があつた 11 月、12 月には同じダンリ市に住む音楽隊員と美術隊員が行っている、ストリートチルドレンの子の学校へ毎日劇を教えに行つて、クリスマスにダンリの文化会館でのコンサートに子供たちを出して「おおきなかぶ」を変えて「おおきなにんじん」の劇をしました。いろいろな職種の隊員と力を合わせてやつた活動は何より楽しい体験でした。



写真 46



写真 47

青年海外協力隊に参加して

違う文化の中で生活したことで、言葉に表現できない沢山のことを学ぶことができました。

言語、文化が違う人たちに、いつも何かを伝えなければならない状況にあって、いろいろと学びました。まず自分で相手につたえるぞという強い意志をもっていなければ、相手には決して伝わらないということ、相手の状況、考え方をよく理解して、その上で工夫して伝えなければならないこと、算数でいえば、教材を自分自身がしっかりとらえていなければならないことになります。一方今まで自分自身で教材を全然とらえられていなかったということも認識することができました。

また、自分が伝えたいことが相手に伝わった時の喜びはとても大きなものです。特にホンジュラスの先生や子どもたちはわかったときの楽しさや喜びを素直に直接的にこちらに返してくれるので、とてもうれしい思いを沢山することができました。

異文化に暮らしても人は根本的には同じだということを、日常生活を通して感じることができました。先生達は自分とは違う状況でも、やはり子どもたちに一生懸命教えているのだということを感じることができました。そのことを感じることはできたのは、やはり自分が教師として働いていたゆえなので、これまで仕事をしていて良かったと思うこともできました。

ホンジュラスはラテン文化なので、陽気であり深く考え込んだりしないようなところがありますが、それはそれでとても心地よいものだと感じました。水が止まれば、水が無い。バスが止まれば、バスが来るまで待つしかない、しかしやっとバスが来たときはとてもうれしい等、日常のごく単純なことを生きる喜びにできるよさを体感したように思います。

また、子どもたちは年上や親から無条件に愛される存在であり、子どもはその親の言うことをよくきき、一生懸命手伝いをするなど、日本でも以前はごく普通だったことを、毎日見たり、感じたりすることができました。

言葉をうまく話せないという状況にあって、相手が理解しようとしてくれること、気を使ってくれること、受け入れてくれることの有難さは、やはり実際に体験しなければわからないものだと感じました。でも、そのとき感じた嬉しさなどは、これから、自分が日本の子どもたちに伝えていけるものではないだろうかと考えています。

また、ともに働いた隊員の仲間、ホンジュラスの家族、友人は私にとってかけがえのないものとなりました。



算数プロジェクト

- ・89年JICAが初等教育への本格的な協力を開始
- ・2002年までの13年間で58人の青年海外協力隊を派遣
- ・2003年から2006年に教材開発と開発された教材を用いた教員研修を軸とする「算数指導力向上計画(通称プロメタム)」を実施

ホンジュラスに算数へ協力が必要された背景。

- 6歳から12歳までが義務教育
- 就学率87パーセント
- 修了率68.5パーセント
- 留年制度により落第を繰り返す生徒
- 正規の6年間で卒業できる子どもは3割程度

算数の成績不振が深刻
1998年中南米11か国中最下位

プロジェクトで作成したもの

- ・教師用指導書
- ・児童用ワークブック



ホンジュラス政府がこれを国定教科書に指定



国立教育大学が実施する現職教員研修プログラムの算数教育法の講師として隊員が指導書内容についての講習を行う

PFCの講師

- 現職教員は現職教員研修プログラムであるPFCで学び全て単位をとると、短大大卒資格を取得することができる。
- 隊員はその中の算数教育法の講師として、現職教員に算数の指導法を講習。



現地語学訓練

サンタルシアにて6週間



初ホームステイ



毎日 手洗い洗濯



私の部屋



サンタルシアの町



語学学校



任地に赴任

9月7日 1ヶ月半目



職場の人たち

ダンリ市教育委員会

カウンターパートの
教育長
指導主事



仕事場



組織図

JICA専門家

- ・プロメタム(算数指導力向上計画)のメンバーとして運営、実施
- ・指導書、作業帳の制作
- ・政府との交渉
- ・隊員の活動調整

国立教育大学

PFC(現職教員再教育プログラム)を実施

隊員

- ・5つの市の教育委員会に配属される
- ・主にPFCの講師としての活動
- ・市の教育活動にも協力

市の教育長

市のPFC講習のバックアップ
隊員の活動のバックアップ

PFCコーディネーター

市のPFC講習の実施

仕事

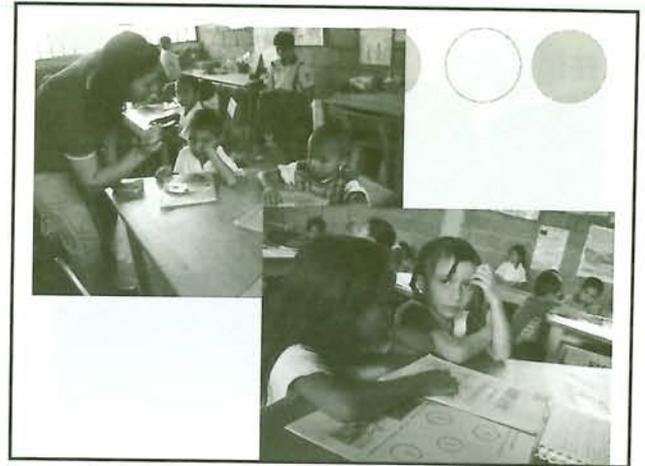
仕事のメンバー 3人

- 1年早い現職の先輩隊員
指導書の3年生の内容を講習中
- 同期隊員と自分
先輩の授業参観、講習生の授業観察



授業観察





授業観察への道



ホンジュラスの授業の問題点



教員の学力不足

授業が計画的に行われていない

- ・カリキュラムで決められた分野を網羅していない。
- ・年間計画や単元構成が行われていない
- ・授業時数が足りない

年間200日の予定だが、
実際は100日程度。

指導が伝達方式授業

- 教師主導型で、発問後、子どもに考えさせる時間を取らない。
- 教師の説明時間が長い
- 正確な知識の不足
- 教師の言葉をオウム返しに繰り返す形

教科書・ノート

- 教科書がない学校が多い
- 教科書は持ち帰れない
- 板書計画がない
- 膨大な量の黒板を子どもはひたすらうつす

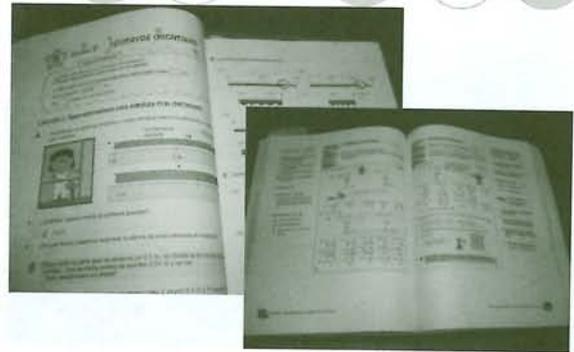
教材・教具が使えない

- 教材費がなく、紙類やコピー代は教師の負担
- 教材の使用方法や目的性性質が理解されていない
- 使用経験の不足

複式学級



作業帳、指導書



プロメタムが目指した授業

1. カリキュラムで指定されている内容をすべて教える。
2. 誤りは教えない。
3. 子どもに考えさせる指導を行う。
4. 複式の問題も含め、子どもの学習活動を保証する。

日本人による講習

講習を受けた先生達から他の先生たちへ

ホンジュラスの先生達の指導力が向上する。

子どもたちの算数による落第率が下がる

指導書4年生内容講習

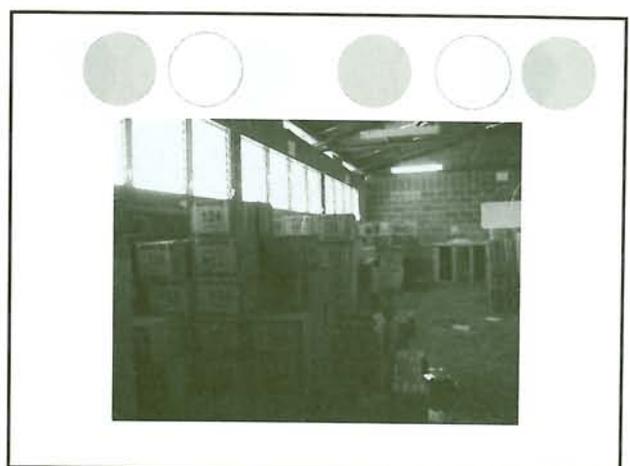


指導書5年生内容講習



楽しい活動の体験







教科書配布 各学校の図書館



個人持ち？学校保管？



講習生から他の先生達へ



6年生内容講習



出前授業



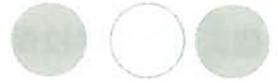


自主研修会



ホンジュラス
の生活

私の部屋



ホンジュラス食生活



トルティーヤ、フリホーレス、卵



エンチラーダ、タコス、野菜スープ



伝統料理 ナカタマル



よくあるストライキ 教育委員会封鎖



土管で道路封鎖する農夫たち



交通、悪路



レンカ族



ガリフナ族



コーヒー農園



他の隊員と一緒に



青年海外協力隊に参加して

- 異文化に生活したこと
- 言語、文化が違う人たちに伝えるという作業
- 共感できたこと
- シンプルに生きること
- ホンジュラスの人の優しさに支えられて



南アフリカ共和国帰国報告

高橋 一郎

(16-1, 南アフリカ共和国, 理数科教師, 埼玉県立川越女子高等学校)

1 南アフリカ共和国について

私が派遣された南アフリカ共和国はアフリカ大陸の最南端にある国である。国全体の経済状態はよく、サブサハラ諸国全体の GDP の約 4 割を捻出する。派遣された当時(2004年)は人種隔離政策(アパルトヘイト)からの開放 10 周年を迎える時期であり JOCV の同国派遣開始から 2 年を迎えようとする時期であった。

南アフリカには JOCV の派遣前から日本人による理数科教師再教育プロジェクトである MSS I プロジェクトが進んでいた。JOCV の活動は現地スタッフである CI (日本の教育指導主事に近い存在) と協力してワークショップ等による現地理数科教師の再教育と MSS I プロジェクトのサポートをその中心業務として期待されていた。

2 活動初期

現地語学訓練を経て、任地に派遣されたのは 2004 年 8 月であった。この時期は南アフリカの教育スケジュールでは 3 学期に当たる。10 月からは最終試験が始まるため、本格的な活動を行うことは難しい。そこで、CI の活動に随行し、現地の教育事情を把握することからはじめた。

南アフリカ共和国には公用語が 11 言語(英語、アフリカーンス、ズールー、コーサ、スワジ、ンデベレ、ソト、ツォンガ、ツワナ、ベンダ、レボワ)あるが、派遣以前には CI の業務は完全に英語で行われるという情報を得ていた。しかし、任地であるマレラネ Sub-Region が南アフリカでは珍しい単一言語地域であったことと、同僚の CI が地元の出身者であったことから CI は訪問先の学校ではスワジを使うことが多かった。また、現地教員は教室に部外者が訪問することを好まないため、学校に訪問するのはいいが、授業や生徒の実際を観察することはとても難しかった。

そうこうするうちに 3 学期が終わり、最終試験の時期を迎えた。4 学期のこの時期、CI の業務は各学校にテストを配ることに終始する。朝、地域の教育事務所に向かい、テストを受けとり、決められた学校に配達して 3 時間後に回答されたテストを回収して事務所に送り届ける。それだけである。

試験の間の時間に配属先に戻ろうにも片道 1 時間程度かかってしまうため戻ることができず、学校周辺でやることもなく時間をつぶす。完全に暇をもてあました状態である。要請に従って CI と協力しようとするとうとうこのような現状にぶち当たってしま

う。それでも何かできることを探ろうとしてはみたが、見つけることはできなかった。

C I たちは彼らの業務を精一杯こなしているが、彼らは実際に学校に通っている唯一の行政職員であるため、教育事務所から雑務を大量に言いつけられるため、本来の業務である教員の能力向上に対してまとめて取れる時間がないように感じられた。ここで彼らと同じ仕事を続けていては自分のためにも、彼らのためにも、現地の教員のためにもならないと感じた。そこで、C I と離れて活動する道を探すことにした。

3 MSS I プロジェクト

前述のとおり、南アフリカ共和国ではMSS I プロジェクトという日本主導のプロジェクトが走っていた。このプロジェクトは（日本の）大学教授によって作られた実験を含んだコンテンツをカスケード的にムプマランガ州全体に広めていこうというものである。私が赴任する前にGET（日本の中学校にあたる）で実施され、一定の成果を得ていた方式である。しかし、開始から5年が経過し、現地の教員やC I 達に慣れが生じているうえ、C I の大幅なメンバーチェンジがあったこともあり、うまく回っていない状態になっていた。具体的にはカスケードの上位にあるC I たちがコンテンツを十分に消化できていないことがひとつ。実際の教育現場では調達することができない機材を使うことになっているケースが多いことが二点目。そして、CLワークショップ以降の実施率が低いことが挙げられる。MSS I が作り出したクラスターというものは非常に魅力を感じるがMSS I 全体に対してはそのスケジュールの過密さもあり、可能性を感じることができなかった。1回目のMSS I ワークショップは参加して現状の理解に努めたため、難しさばかりが目立ってしまった。MSS I はプロジェクトとして最終段階にあったため、これまでの成果をまとめることと現地に引継ぎを行うことに主眼が移っていた。2度目のMSS I ではCLワークショップで自分のセッションをもらい、クラスターリーダーの前で実験の紹介を行った。これによってクラスターリーダーにある程度認めてもらうことはできたが、その後のクラスターワークショップに参加したくとも参加するための交通手段を確保することができなかった。半径が50km程ある私の任地をカバーしようと思ったときに交通手段が確保できないことは常に大きな障害として私の前に立ちふさがった。

4 交通手段

南アフリカ共和国は犯罪の多い国である。その犯罪率の高さから南アフリカに派遣された協力隊員は夕方の5時を過ぎて屋外を一人歩きすることはない。また、現地の人々の日常的な足であるコンビタクシー（乗り合いバス）も使用を控えるように伝えられていた。そのような中、点在する40校弱の担当校をカバーすることは困難を極めた。当初はC I と行動し、彼らの業務を補佐することが要請とされていたため、移動には彼らの車に同乗することとされていた。しかし、前述のように現職教員の資質の向上を考えたとき、われわれにできる最良のことは彼らがやりたくてもできない業務を行うことであ

る。必然的に行動は分かれることになる。そうすると学校に訪問する手段を失う。そこで違った形での移動手段の確保を模索した。そのひとつが次にあげるS I L P M Sという活動である。

5 S I L P M S

同じ地区（Ehlanzeni）に派遣された数学隊員の柳田幸紀隊員（16-2）と協力して開始した活動である。現場の学校にはわれわれのような授業改善の取り掛かりを与える存在が必要とされているにもかかわらず、そこまでたどりつくことができないという2名共通の悩みに光明を見出すための活動である。柳田隊員は地域事務所（Regional Office）内に住居を構えていたため、地域教育事務所の上層部と話をする機会が多かった。その中から、我々に移動手段を提供しつつ、他教科にもてこ入れを図るこのプランが立案された。なお、このプラン実現のきっかけとしてはM S S I教授陣の尽力も大きかった。

具体的には、地域内の成績不良校から2校を選び出し、週一回2時間の授業を4週間にわたって続けるというものである。指定教科は数学、物理化学、農学、生物である。その中で、私は物理化学の実験を含めた授業を担当した。Ehlanzeni地区のC Iを1名、S I L P M S専属とすることで我々の交通手段を確保してくれた。そのC Iの不在は他のC Iが担当地区を分け合うことでカバーされた。

計画の立案から実施までは困難を極めたが、最終的に2校のうち的一方で大幅な試験合格率の向上を招くことができた。しかし、残念ながらもう一方では合格率が低下することとなった。繰り返し、同じ教員と接することで彼らの授業に対する態度にわずかな変化を感じられたが、やはりこの活動においてもC Iの不規則な行動により突然の予定の変更を強いられることが多かった。また、きわめて狭い範囲に影響力がとどまってしまう、自分の担当範囲全体に対する活動にはなりえなかった。地域事務所の次年度の予定が不透明なこともあり、C Iに頼らずできる活動を模索するようになった。

6 自立

このように、どのような活動をしていても最終的に交通手段を確保することができず、活動の方向性を断念せざるを得ないことが繰り返された。そこで、何よりも交通手段を確保することを考えた。この時点で活動開始から1年が過ぎ、現地の事情を把握できるようになっていた。幸いにして私は担当地区の中心的な場所に住居を構えていた。住居からコンビタクシーが各方面に向かって走っている。ここまでの活動を通してコンビタクシーに乗ることそれ自体の危険性が低いことはわかっていたが、どのようにして各学校にコンビタクシーを乗り継いでいくのか、降車した後の安全性や行き方をどうするのかがわからなかった。しかし、ここまでの活動で任地での認知度もだいぶ増していたので電話によってアポイントを取り付け、降車後の道案内をしてもらった。結果的には担当とするほぼすべての学校に2時間程度あれば通うことができた。

ここまでの活動で現地の教員が最も困っていることが実験であることはわかっていたので先輩隊員が残した実験書に修正を加えた10種類の実験マニュアルを作成していた。その10種類の実験をすべての学校で実施することができるようにすることがそれ以降の活動の目標となった。具体的には

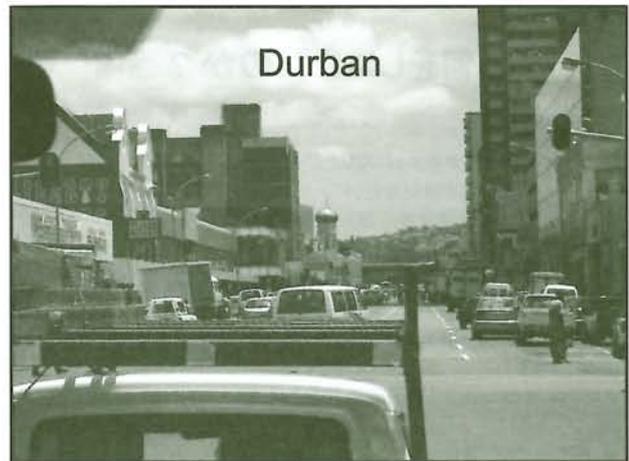
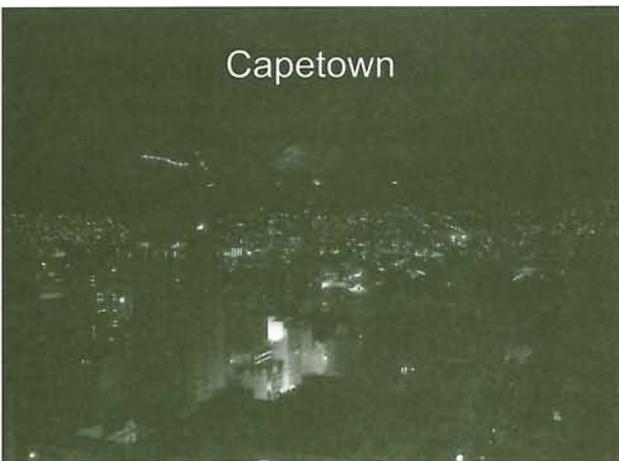
- (1) 各学校の実験室を調査し、10種の実験に必要な機材・薬剤の有無をチェックする。
- (2) それらの機材・薬剤を使用し、現地の道具のみで実験紹介のワークショップを行う。
- (3) 機材・薬剤には不均衡があるので交換をすることで少しずつでもすべての機材・薬剤がそろそろようになり始める。1校ですべてをそろえることはできなくても、近隣の学校で1セットがそろそろようにする。
- (4) 薬品は1校で使用していると使い切る前に劣化して使えなくなることが多いので周辺校で共同購入する仕組みを作り小分けにする。

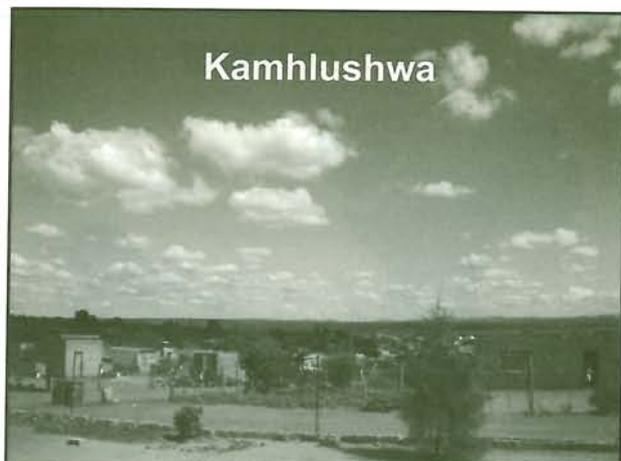
である。10月から12月の採集試験の最中に(1)は実施することができた。(2)は1月から3月にかけて担当する3つのクラスターでワークショップを行うことで6割程度は紹介することができたし、残りの実験についてもマニュアルを配布することができた。しかし、(3)と(4)に関してはアイデアの紹介とほんの一握りの実施例を残しただけで実施することができなかった。この(1)～(4)をすべて実施することができたならば、JOCVにとっても現地教員にとっても状況は質的に大きな変化を遂げたと思う。返す返すも時間が足りなかったことが残念である。

7 得たもの、遺せたもの

南アフリカにおける活動は困難を極めた。多くの時間を自分との問答に費やしたような感触を受ける。しかし、その結果として南アJOCV全体の懸念であった交通手段の確保に向けて大きな前進をしたこと、現地の教員にあきらめず行動し続けること、ものがなければ自分で作る精神を示すことができたことは胸をはれる結果だったと思う。そのような一定の満足を得ることができたことは支え続けてくれたカウンターパート、刺激を与えて続けてくれた同地区のJOCV達、常に歓迎してくれた現地の教員たちのおかげだと思う。人の出会いという大きな運に恵まれ2年間の活動を全うすることができたことは大きな喜びである。

また、彼らと出会い、自己問答を繰り返しながら一緒に困難を乗り越えることで言葉にすることは難しいが、自らの内面に質的な変化を感じることができる。この変化はこれからの人生において大きな役割を果たすことだろう。今後は南アで得た経験を生かし、自らの生活環境を越えて想像力を働かせることができる生徒を育てていきたいと思う。





Kamhlushwa

南アフリカ共和国

人口	4418万7637人 (2006年推計)	27位
GDP	2127億7730万ドル (2004年)	27位(サブサハラ全体の4割)
識字率	87.1%(2005年推計)	104位
乳児死亡率	乳児千人当たり 61(2006年推計)	48位
平均寿命	42.7(2006年推計)	181位

この国の問題

- 富裕層と貧困層の圧倒的な経済格差
- 都市部と農村部の格差
- 教育水準の格差
- 犯罪率の高さ
- HIV/AIDS問題
- 人種問題



格差があることが問題

豊かな国、南アフリカ

こんな国に協力する必要があるのか???

何をしにきたのか?

- 自分のため
 - 英語ができるようになりたい
 - 人間に幅を持たせたい
 - 生徒の学習意欲に燃えた瞳を見たい
 - 教育の根本を確かめたい
 - 言葉で伝わるもの、言葉以外で伝えるものを理解したい
- 人のため
 - 精一杯人のために働くことでたくさんのもを受け取りたい
 - そのためにこの国の教育をよくしたい

私が派遣された時期の現状

- MSSIPプロジェクト
- 派遣開始3年目
- JOCVは同僚(CI)には認知されている
- 任地(Malelane Sub-Region)には新規隊員として派遣
- 任地での知名度はゼロ

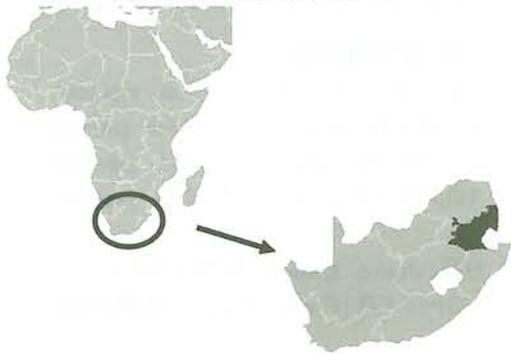
要請内容

- 現地のCIと協力する
 - 現地のCIと協力し、教員対象のワークショップ等を開催し、現地の教員の再教育に従事する
- MSSIPプロジェクトをサポートする
 - 日本の大学教授が作成したコンテンツを段階的に現地教員まで浸透させるプログラム

MSSIPプロジェクト

- 南アフリカ Mpumalanga州の教員を再訓練するプロジェクト
 - アパルトヘイト時代にアフリカ人には理数科教育は与えられなかった
 - 現在の教師は理数科の教育を満足に受けていない
 - Mpumalanga州は例年高校卒業試験の成績が最低だった

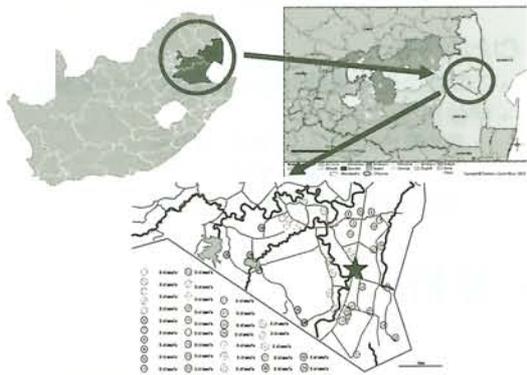
南アフリカ共和国



MSSIPプロジェクト 2

1. 日本で大学教授により実験を含んだ授業コンテンツが作成される
2. 全Mpumalanga州CIが集まりワークショップを開き、コンテンツを学ぶ(CIワークショップ)
3. 各CIは担当地域を数個に分けたクラスターでリーダー(CL)を対象にワークショップを開く(CLワークショップ)
1. CLは自分のクラスターで教員向けにワークショップを開く(クラスターワークショップ)

Malelane Sub-Region



Nkomazi Teacher's Centre(NTC)





自分ってどんな人？

- 長所
 - 教員経験
 - 気が長い、時がある
 - こだわりのない
- 短所
 - 言語(英語、SiSwate)
 - 技術力不足
 - 見た目
 - 引っ込みじあん



行動基準

- あせらず、ゆっくり、一歩ずつ
- 無理して自分の意見を通さない
- できることをする
- やりたいことはあとまわし
- 「チャイナ！」といわれたら「ジャパン！！」
- この国を好きになる、ように努力する

南ア教育カレンダー(2005)

- 1月:新学期開始
- 12/01~3/18 :1st period
- 4/4~6/24 :2nd period
- 7/19~9/22 :3rd period
- 10/3~12/2 :4th period
- 6月:June Exam(中間テスト)
- 10~11月:Final Exam(卒業試験)

行動計画

- 2004年8月~12月様子見、情報収集
- 2005年.....勝負時
- 2006年1月~3月.....残務処理、帰国準備、休息

活動詳細1

- CIとの行動
 - この国の教育現場で何が起きているか見聞する
 - 学校訪問についていく
 - 現地語で会話するCI、役立たずな私
 - モデレーションに参加する
 - 手伝うことはするが、責任がもてない

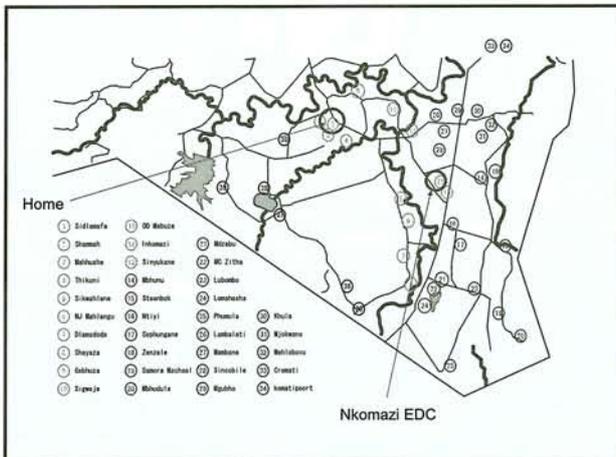
→ 挫折

活動詳細2

- MSSIへの参加
 - 観察
 - テキストのコピーに終わり、独自性がまったくない
 - 明らかな問題点を修正しない
 - 各段階で行うワークショップが明らかに劣化する
 - 教員まで内容が降りていかない
 - 現地で調達不可能な機材を用いる
 - 参加
 - CLワークショップにてFacilitatorとして1セッションを受け持つ
 - 存在感のアピールに成功
- 自身の存在意義、活動方向をみいだせた

活動詳細3

- 近隣校訪問
 - Sidlamafa, Mahushe, Shammah, Inkomazi
 - 自転車、徒歩でいける



活動詳細3

- 近隣校訪問
 - Sidlamafa, Mahushe, Shammah, Inkomazi
 - 自転車、徒歩でいける
 - 教員の反応よし
 - 環境よし(生徒数50~60人、実験器具等もあり)
 - 成績よし
 - 教員の授業問題なし
- 効果に疑問

活動詳細4

- クラスターワークショップ
 - Mankoクラスターで一回



活動詳細4

- クラスタワークショップ
 - Mankoクラスターで一回
 - 感触よし
 - 継続することで影響を与えられる可能性を感じた
 - 教員セッションはあまり消化されていない
 - 生徒対象のワークショップは行わず
 - 連絡がとりづらい
 - クラスタの予定とCI業務の予定が合わなかった
- 続けられず

活動詳細5

- SILPMS
 - 週1回、2校に訪問(Dlamadoda、Mehlobovu)
 - 各校4回
 - Regional Officeと協力
 - 2時間の実験授業
 - 移動手段をCIIに依存する
 - 実験を行うための基礎知識が生徒、教員に不足している
 - 2校の教員に小さな変化を確認(実験室の整理、積極的な補習の開催、仕事に対する前向きさ)
- 悪くはないが、影響が数人に限られてしまう



活動詳細6

- 道具・知識の整備
 - 実験室調査
 - 一定の成果を挙げた。
 - 1年はもたない
 - 教員と話を個人的にすることができた。
 - 顔と能力を売ることができた

実験室1



実験室2



活動詳細6

• 道具・知識の整備

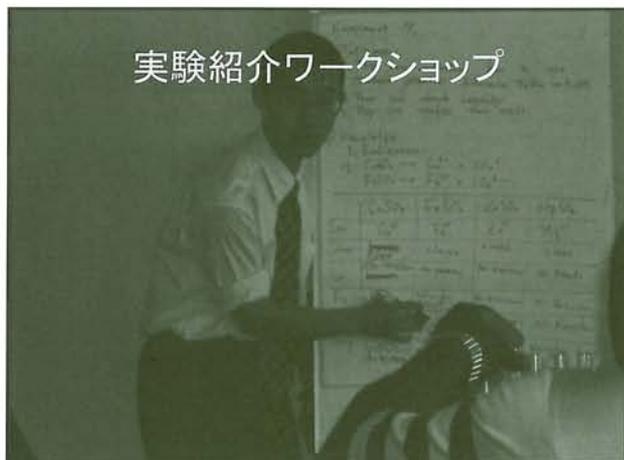
－実験室調査

- 一定の成果を挙げた。
- 1年はもたない
- 教員と話を個人的にすることができた。
- 顔と能力を売ることができた

－実験紹介ワークショップ

- やり方ではなく実験を用いて何を教えるか、予備実験の意義、生徒に必要な知識、などの準備面を意識してワークショップを行った、つもり。

実験紹介ワークショップ



実験紹介ワークショップ2



NTC実験室



NTC実験室(掃除後)



なにをしたかったんだろう？

- 言葉ではなくて行動で語るようになってほしかった
- お金がなければ知恵を使うようになってほしかった
- 「何を教えるか」から「どうやって伝えるか」に意識を変化させてほしかった
- お金、成功は自分の力で勝ち取るものだと思うことをわかって欲しかった

活動まとめ

- 相手を刺激しないようにするあまり行動が遅かった
- 失敗を恐れて露出が少なかった
- 補習・問題演習などをするときにむしろ現地教員との差を見せられた
- 何をするにも時間はかかる。予想の4倍程度。

なにを学んだのか

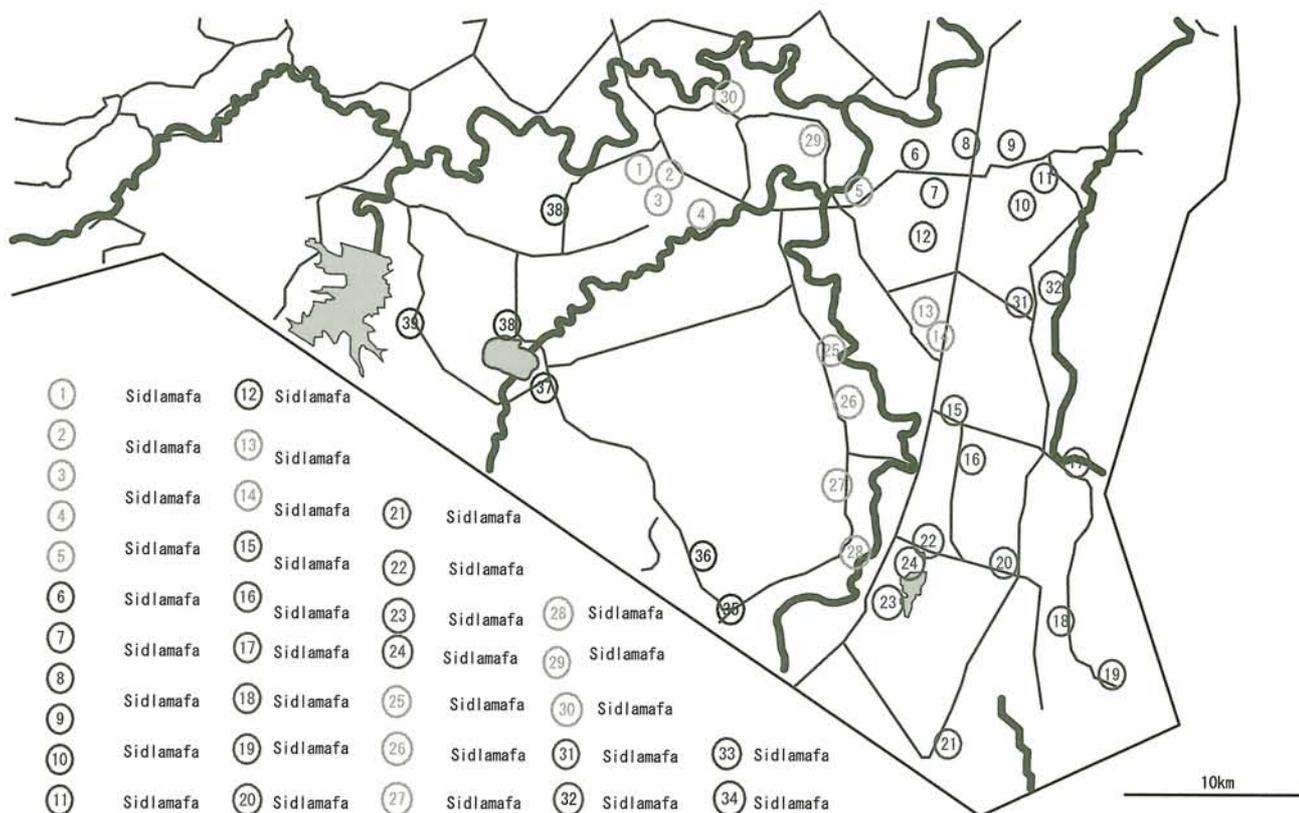
- 待っていても、愚痴を言っても始まらない
- とにかく存在を主張する
- 何かをしたいと思ったら相手が望むような状況を作っていないといけない
- 外見からはみえない「なにか」を身につけた



● 南アフリカ共和国 データシート

人口	4418 万 7637 人(2006 年推計)	2 7 位
GDP	2127 億 7730 万ドル(2004 年)	2 7 位 (サブサハラ全体の 4 割)
識字率	87.1%(2005 年推計)	1 0 4 位
乳児死亡率	乳児千人当たり 61(2006 年推計)	4 8 位
平均寿命	42.7(2006 年推計)	1 8 1 位

● Malelane Sub-Region



● MSS I プロジェクトの流れ

1. 日本で大学教授により実験を含んだ授業コンテンツが作成される
2. 全 Mpumalanga 州 C I が集まりワークショップを開き、コンテンツを学ぶ
(C I ワークショップ)
3. 各 C I は担当地域を数個に分けたクラスターでリーダー (CL) を対象にワークショップを開く
(CL ワークショップ)
4. CL は自分のクラスターで教員向けにワークショップを開く
(クラスターワークショップ)

隊員活動報告

牛尾 重信

(16-1, インドネシア, 理数科教師, 西宮市立山口中学校)

1 配属先の概要

国立アンダラン高校は、マカッサルから東へ65 kmほど内陸に入ったところにある。高地でもあり、気候は涼しく勉強に集中しやすい環境で、南スラウェシ州全域から選抜された生徒のみの超エリート校である。全寮制であり、生徒の活動や組織はすべて生徒によって自主的に運営されている。45分間授業で、多い日で9時間の授業がある。基本的に1教科で2時間続き、または3時間続きである。



校時は次の通り。

I	7 : 0 0	～	7 : 4 5
II	7 : 4 5	～	8 : 3 0
III	8 : 3 0	～	9 : 1 5
IV	9 : 1 5	～	1 0 : 0 0
V	1 0 : 1 5	～	1 1 : 0 0
VI	1 1 : 0 0	～	1 1 : 4 5
VII	1 1 : 4 5	～	1 2 : 3 0
VIII	1 3 : 1 5	～	1 4 : 0 0
IX	1 4 : 0 0	～	1 4 : 4 5

学校の規模は、1年生から3年生まで2クラスずつ。学校は教員16名、事務所3名、セキュリティー2名、学校園管理4名、食堂9名で運営されている。うち物理教員2名（後1名）、化学3名、生物2名である。化学と生物はそれぞれ夫婦であり、僻地の学校なので助け合いながら授業を進めている。

理科の1週間の授業数は1学年は物理4h、化学4h、生物4h。2年生は物理5h、化学5h、生物5h。3年生は物理6h、化学5h、生物6hとなっている。物理の実験室、化学と生物の共同の実験室が一つずつある。コンピューター室もあり、生徒が使えるコンピューターが現在16台ある。しかし、電話がないのでインターネットができない。優秀な生徒が多いだけに残念である。

実験については、以前シニアエキスパートが2人配属されており、意識は高いように思える。化学の男性教師は、日本へ10ヵ月間研修に行っていたこともあり、知識も豊富で効果的な実験をするよう心がけている。しかし、赴任当初、実験室は水が豊富でなく、また、ガスもなかった。物理実験室は、道具はある程度そろっているのだが、古いものや整備不十分なものが多く、修理が必要であった。

運動場はない。テニスコートなど計画されたようだが予算の関係で作られなかったようだ。スポーツできる場所といえ、バスケットコート一面分の広さのものがある。体育もそこで行われている。

学校の建築物の中で目を引くのは図書館である。2階建てで、学校の規模から考えると広さも充分である。この学校は来客が多く、周辺の地域から時々見学にやってくる。おそらく施設面でも充実している方なのだろう。

生徒の特別活動は、空手、ボーイスカウト、赤十字などいろいろあるが、すべて生徒により自主的に運営されている。優秀な生徒が多いせいだろうか。日本の学校ではこうはいかない。

全寮制のため、夜8時過ぎから9時30分までは自主学習の時間が設けられている。時々、各教科、この時間を利用してテストがある。

過去にアメリカ人が英語の指導のためにいたようだが、バリ島の爆弾騒ぎのため帰国した。

2 活動の概要

当初に活動計画として以下の5つの柱を立てた。

- (1) 興味・関心を高める効果的な実験の紹介
- (2) 理科室の環境整備
- (3) 教員、生徒との交流を深める
- (4) 近隣の小中学校への訪問
- (5) 現地の人々と交流を深める

(1) 興味・関心を高める効果的な実験の紹介

まず苦勞したことから。欲しいものがすぐに手に入らないという点において、随分とストレスを感じた。原因は、この学校の立地条件にある。周りに何も無い。ペテペテ（乗り合いバス）を乗り継いでマカッサルの中心部に行くには3時間はみておかなければならない。もちろん、特別な実験でない限り、薬品や道具はマカッサルへ行けば手に入るが、薬品類が売られている店にはペテペテを乗り継いで行かなければならないし、日本のホームセンターで簡単に手にはいるようなものも、いくつもの店を探し歩かねばならない。最初の頃は、一日では探すことができなくて、ホテルに泊まったり、カウンターパートのお宅にお世話になったりした。今思うと、材料を調達する

だけで涙ぐましい努力をしている。また、日本では中学の教師であったので、高校の授業内容や実験に関しては馴染みがない。授業参観と高校の内容の復習と同時に進める必要があった。

活動の大きな流れは次のようなものである。

- ①授業内容の把握
- ②高校の内容の復習
- ③効果的な実験の抽出
- ④実験マニュアルの作成
- ⑤予備実験
- ⑥授業で実践

④について補足しておく。実験の紹介として、実験マニュアルを作成することを思いついた。実験を紹介するといっても、口頭だけでは十分に伝えられないし、その効果のほども伝わりにくい。一つの実験が終了した後で別法を紹介しても、1学年2クラスの小さな学校では、次回は来年度となるので、どうしてもCPの興味関心のレベルは低くなる。授業後のただの雑談に終始してしまうことが多かった。そこで、コミュニケーションの一つの手段として、また、実験のイメージを具体的にわかってもらうために、日本から持参した実験書を参考にしながら、生徒の興味関心を引くものや習得するために効果的であるものを抜粋し、インドネシア語でマニュアルを作成した。少しずつ作成していったが結構な量になった。結局、私の活動の中でもっとも時間を費やしたものとなった。

次に教科ごとの活動の様子について述べる。

【化学】

現在、化学の教師は3人いる。スダルマン先生、マルディアナ先生、ネネン先生である。スダルマン先生とマルディアナ先生は夫婦である。



スダルマン先生



マルディアナ先生



ネネン先生

スダルマン先生は、初代のSVの研修員制度で日本に行って研修をうけ、基本的な実験技術はすでにマスターしていた。カリキュラムに応じて実験の計画も立てており、アドバイスの必要性もあまり感じなかったのが、当初から、こちらが勉強させてもらっているという姿勢で臨んだ。私の活動が2年目に入ったところで新しい化学教師が一人加わった。ネネン先生である。後半は、おもにこの教師とマルディアナ先生とともに、実験を考え実施することになった。ネネン先生も、大いに実験に興味を持っており、予備実験の際にも意見を出し合うことができ、中身のこい実験へと発展していった。後半はこの先生のおかげで活動が充実したといっても過言でない。次の写真はその一部である。こつこつと作成した化学の実験マニュアルは、55種類になった。



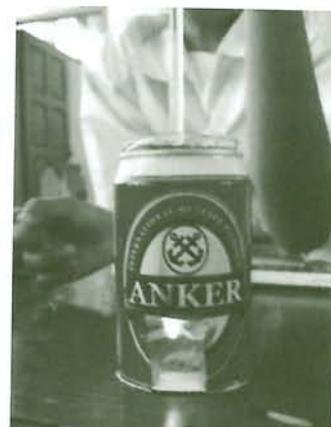
ポップコーン



スライム



炎色反応



豆の燃焼熱

【物理】

物理の教師は2人いた。ユーヌス先生とラフィウディン先生である。ユーヌス先生の方は、ベテランであるが欠勤が多く、昨年末、とうとう転勤となった。ラフィウディン先生は、若い教師で、実験を授業に多く取り入れたいと考えているが、いざ実験となると経験もなく自信がないように見受けられた。物理はこの若いCPとともに実験を考え実践していった。

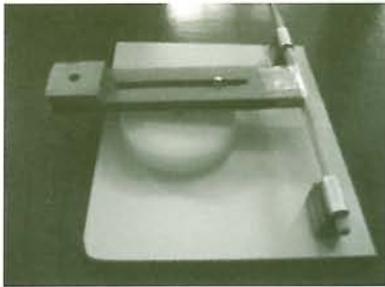
物理実験の場合は、道具を制作することが多く、作るための道具や材料を手に入れるのに苦労した。ビー玉を手に入れるのにも、マカッサルの店を何軒も回った。制作したものの中で、我ながら良くできたと思われるのは、単振動からサイン曲線をくための道具である。すでに日本の書籍で紹介されているが、いざインドネシアで制作するとなると苦労した。回転部分は、バドミントンのシャトルコックの筒のふたを利用し、土台の部分はベニア板が大きなものしか手に入らないので、文房具店に売っている



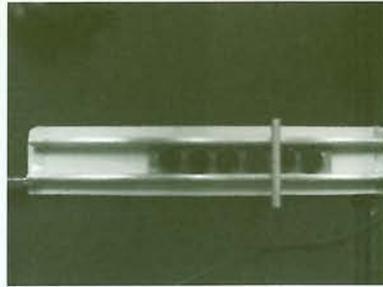
ラフィウディン先生

書類を留める道具の厚紙でできた板を切り、回転部分はアルミパイプを使用した。

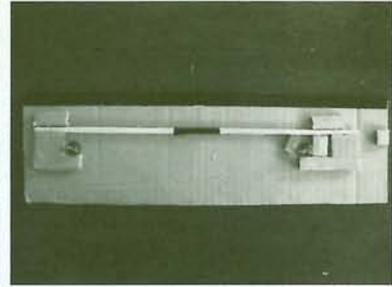
作成した物理の実験マニュアルは40種類になる。作成した教材の一部を次に紹介する。



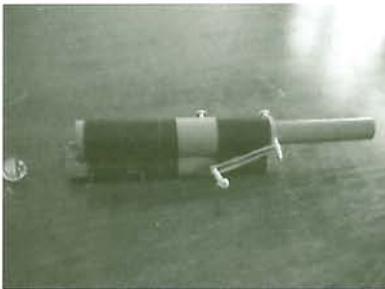
単振動とサイン曲線



リニアモーター



モンキーハンティング



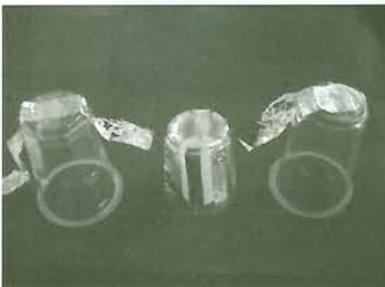
ビー玉発射装置



偏光板を使って



フランクリンモーター



静電気発生装置

【生物】

生物の教師は2人いる。アフマッド先生とアスニー先生である。2人は夫婦である。



アフマッド先生



アスニー先生

生物については、初代のSVによる実験手引き書もいくらかあり、私がアドバイスできそうな実験はそう多くなく、光合成に関する基本的な実験など、3つか4つ程度だった。実験マニュアルとしてまとめたものは作っていない。



【実験展示】

授業での実践以外に、実験展示をする機会があった。ここでは実験の展示会をよくやるのだ。大きなものは、5月にあった「教育の日」だった。また、学校に他の学校からの訪問や、この学校で競技会を開催するときにも実験の展示をやった。生徒たちに実験の原理や作り方などを説明するのも楽しかったが、来客者たちの実験を見た反応を見るのも楽しかった。ある学校の引率の先生は、展示した実験のマニュアルを全部くれと持ち帰ったくらいだ。



展示会などで紹介した実験は次の通り。

◇化学

空き缶を使つてのポップコーン作り

アルコール固形燃料（コロイド）

水で字が書け、水で字が消える（酸化還元反応、ヨウ素反応の応用）

不思議な青い水（酸化還元反応）

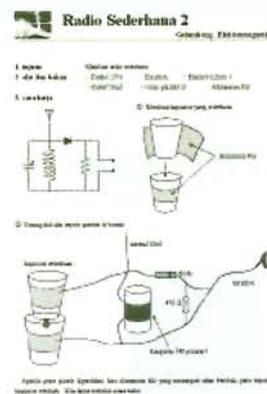
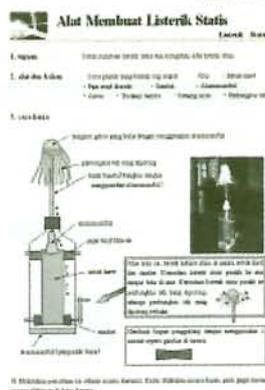
PRAKTEK FISIKA

Februari 2006

~ Menarik Dan Sederhana ~



DIMA NICHORI 02 TINOGHONGGONG



炭電池

果物電池

スライム（高分子、コロイド）

◇物理

不思議な缶

浮沈子

簡易カメラ

不思議なコップ（偏光板を利用、偏光板は日本から持参）

壁を突き破るペン（偏光板を利用、偏光板は日本から持参）

フランクリンモーター（静電気）

電気振り子（静電気）

蒸気圧と沸点の関係（エアーマジックを利用、日本から持参）

リニアモーター（フェライト磁石は日本から持参）

クリップモーター

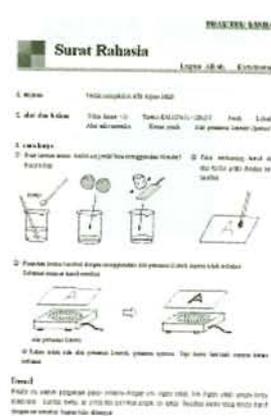
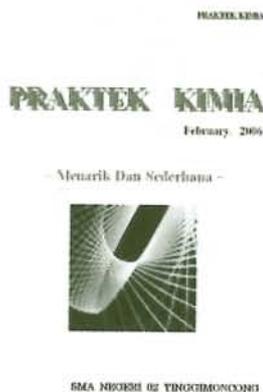
どこでもスピーカー（電磁誘導）

不思議な音（電磁誘導）

簡易ヘルツの実験

2年目にはいり、教師からも生徒からも頼りにされることが多くなった。教科書に実験は載っているが、そのまま実施するのではなく、もう一ひねり手を加えたいと考えてくれるようにもなったし、身近なもので工夫した実験ができないか相談することも多くなった。生徒からも、化学や物理の競技会の出し物や作品展に出品したいということで、作品展前には何人もの生徒が直接相談に来た。試みようとしたことは、手探りであったけれども達成できたのではないかと考えている。

【実験マニュアル】



(2) 理科室の環境整備

理科実験には、実習的な要素もあり、道具の扱い、保管の有り様、そして安全面にも気を配らねばならない。赴任してきた時は、器具類が分類はされているものの、乱雑に教室の後ろに置かれているだけであった。収納する場所がない。また、洗った後の乾燥させる場所もなかった。いざ実験となると、生徒たちがここあそこ探し回る始末だった。少額の隊員支援経費を利用することで何かいいものはないかと CP と相談した。

教材屋のスチール製のラックは 10 ジュタルピア。これでは手が届かない。通りがかりにアルミニウム屋を訪れた。この国ではアルミニウム製品が安く手に入る。しかも、文通りに加工もしてくれる。乾燥棚は食堂のものからヒントを得、使いやすくなるよう加工してもらった。収納戸棚も同様に背面や底板のベニアを分厚いものにしてもらい、ふつうならガラスが使われている部分も安全のためガラスをはずしてしまうか、ベニアに代えてもらった。水に強くなるよう、生徒にペンキを塗らせた。

実験の能率が上がるように、プラスチック製のトレイも購入した。これは、マカッサルに降りるたびに 2 つずつのペースで購入していった。

現在、これらのものが大いに利用され能率をあげていることはいうまでもない。



一番の難関が、水の確保であった。化学実験に水が大量に必要なのに、それが安定供給できない状況であったのだ。実験には、どうしても水が必要だったので水タンクの設置を考えた。現在、右の写真のような水タンクが設置され、水が自由に使えるようになっている。実はこれも隊員支援経費を利用しようとしたのだが、タワー部分が承認されず、支援経費を利用することができなかった。しかし、申請中に学校側が先走って建造してしまったので、学校に借金が残ることとなった。この件に関しては、校長はじめ関係職員に感謝したい。提案者は私だが、JICA から経費がおりないことを伝えても、「Tidak apa apa」と言ってくれたのだから。現在、生物実験室も増築され、このタンクから水が供給される。



(3) 教員、生徒との交流を深める。

【教員と】

外国人が PGRI に登録したのは私が初めてだという。2年に1度の教職員の大会が昨年（2005年）8月に行われた。私はティンギモンチョン町の代表でバドミントンに出場することになった。現在ゴワ県には16の町がある。この16の町で試合が行われるのだ。種目は、バドミントン、卓球、バレーボール、セパタクロである。この次は南スラウェシの大会、全国とつながる。ゴワ県の中で選抜されて、上へ進むのだ。幸運なことにゴワ県の代表にも選ばれたのだが、南スラウェシの大会ではバドミントンは行われなかった。資金不足がその大きな理由らしい。



PGRI の大会は開会式から結構盛大に行われた。ミニ国体のような雰囲気だった。各町ごとにジャージも揃えられ、行進もある。しかし、暑い中の長い開会式は、教師といえども全員が耐えられるはずもなく、最前列以外の人はずらけてしま

っていた。大会の予定は1週間である。日本では考えられない。アンダラン高校からは私一人なので、バドミントン関係者以外は知らない先生ばかりである。小学校から高校までの50人ばかりの集団で、スングミナサの家を3軒借りての合宿生活が1週間続いた。多くの先生方と親睦が図れたが、試合は予定通り進まないし、ほとんど知らない人ばかりだったので結構ストレスがたまった。

【生徒と】

1 2 月には POPSI (中高生のスポーツ大会) もあった。運営は PGRI の大会と似たもの。この大会でティンギモンチョン町のバドミントンの監督に任命されてしまった。ティンギモンチョン町には高校が 2 つあり、選手も選考しなければならない。1 週間かけて、午後マリノに生徒と通い、選考と練習を行った。この大会も 1 週間かけて行う。一つの家アンダラン高校の生徒 15 名と寝食を共にした。開催地は、スングミナサでなくビリビリダムの近くの村。水も寝る場所も十分でない家での生活。大変だったが生徒と親密になることもでき貴重な体験となった。



アンダラン高校の生徒は、自分たちでレクリエーションの計画を立てる。普通、車を数台チャーターしてのマリノまでのちょっとした遠足だ。車といえどもオープンカーである。田舎でしか走れない小型のトラックだ。学校の外へ出るのももちろん校長に許可をとる。引率者も必要なのだが、決まって教師は一人いるかいないか。どうなっているのか?と思うのだがこれがこの学校の現状である。日曜はほとんどの先生がマカッサルに帰るためいないのである。生徒たちは、「先生、先生」と言って私を大事にしてくれた。



(4) 近隣の小中学校への訪問

任期中、3 回近隣の小学校訪問が実現できた。化学の CP の息子が通っているのも、CP も心やすかったのに違いない。紹介した実験は次の通り。

スライム

レモン電池

浮沈子

空気砲

ポップコーン

ピンホールカメラ

あぶり出し

マグデブルグの半球

どれも好評で、子供たちは夢中になってくれた。教師冥利に尽きる 3 回の小学校訪問であった。マリノの中学校にも行きたかったが、中学校の理科教師と出会うチャンスもなく、交通の不便さもあり実現できなかった。



空気砲



ポップコーン



浮沈子

田舎の小学校には、何もない。子供たちの中には、筆記用具すらも十分にそろっていないものがある。私の勤務していた西宮市立山口中学校の生徒会に、文房具を援助しないかと呼びかけた。2006年の1月の中頃、生徒たちが供出してくれた鉛筆や筆箱などがインドネシアに届いた。



(5) 現地の人々と交流を深める。

主に趣味のバドミントンを通じて。赴任してからすぐにマリノのクラブに参加した。人々は歓迎してくれ、すぐにチームの一員として扱ってくれた。PGRIの試合に参加できたこともPOPSIの監督になったのもここが原点である。

また、そのレベルの高さを知らずにエントリーした南スラウェシカップもマリノの選手とペアーを組んだ。南スラウェシカップの前日のレセプションでは、知事から私の紹介もあり大変緊張した場面もあった。「本当は外国人は出場させないのだけれど、もう、マリノの人だから構わない。日本代表だ。」と紹介されたのである。



南スラウェシカップのレセプションで



マリノのバドミントンチームの仲間と

3 全期間の協力の効果

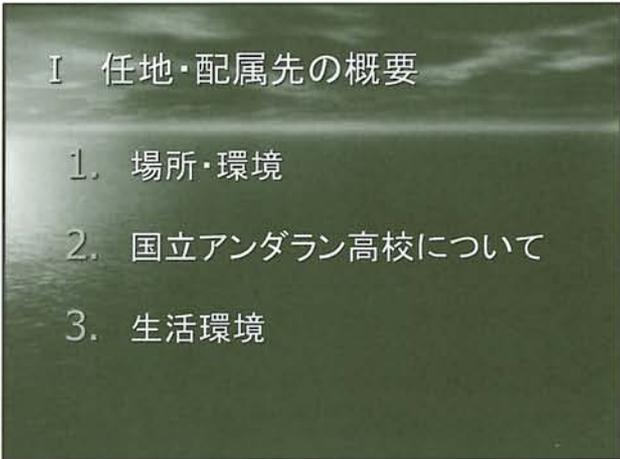
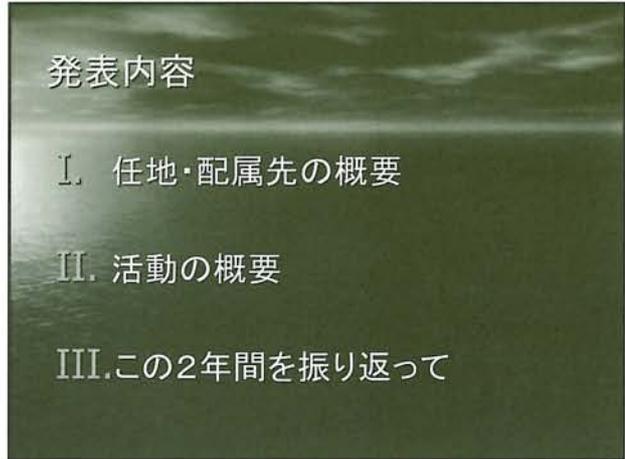
1年が過ぎるまでは、どれほどのことができたのかがよくわからないし、実は邪魔しに来ただけではないのかというのが率直な感想であった。感謝されたこともあるが、日本人として、ここにいることが価値あることなのだと考えたこともあった。

2年目にはいって、授業内容もある程度把握できたので、単元前に実験について相談することができるようになった。化学、物理両教科で、ある程度実験を紹介し、CPには実験のおもしろさも伝えることができたし、重要性も伝わったのではないかと考えている。しかし、私の去った後、これまで取り組んだ実験や作成した道具類はどうなるのか興味がある。なぜなら、先代SVによる実験道具もほこりをかぶっているものが多数あるからだ。先日、物理のCPが、物理の音の学習の実験にと赴任当初に持ってきた笛を今年も使ってくれていた。密かに喜んだが、すべてにそうあって欲しいと願う。

日本で簡単手に入るものでも、ここでは難しい。簡単な実験と考えて作った実験マニュアルや、マカッサルで道具を手に入れて作ったものが今後利用されていくかどうかはわからない。実際、作成した実験マニュアルでは、ここインドネシアでも、将来、安価に手に入るだろうと思われる道具を多数利用している。学校付近の人はアルミニウムホイールも知らないのだ。

しかし、私の活動を通して、教師陣に大いに刺激を与えたことは推測される。





3 生活環境 I 任地・配属先の概要

私が住んでいた家と食堂です。

学校の前の道。
スングミナサからマリノまで尾根沿いに九十九折りの道。移動には大変不便で、午後ベテも少なくなります。

II 活動の概要

化学 スタルマン先生 化学 マルティン先生 化学 ネン先生

物理 ライウテン先生 生物 アマド先生 生物 アスニー先生

II 活動の概要

活動の柱

1. 興味・関心を高めるのに効果的な実験の紹介
2. 理科室の環境整備
3. 教師・生徒と交流を深める
4. 近隣の小中学校を訪問する
5. 地域の人々との交流を深める

II 活動の概要

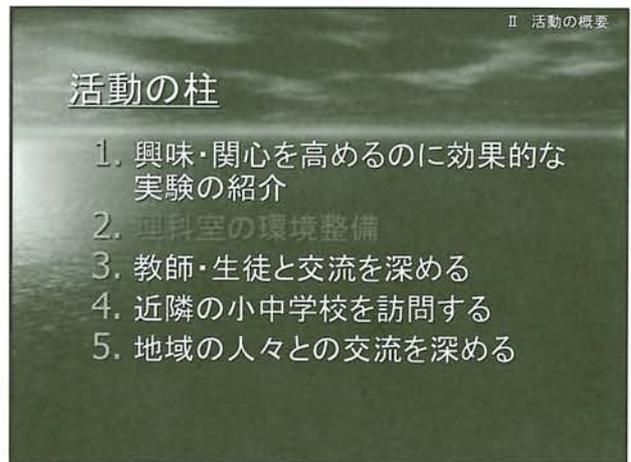
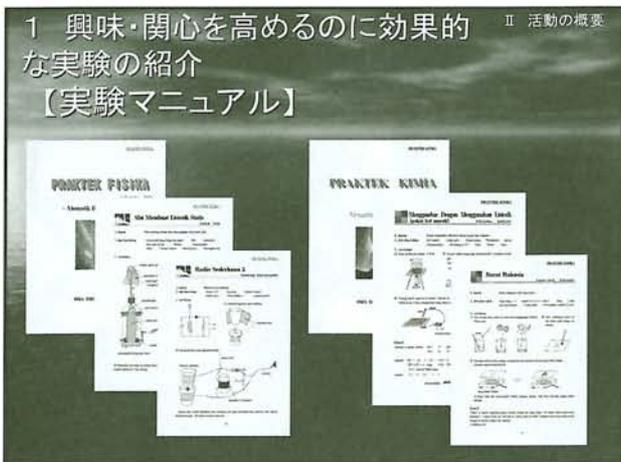
1 興味・関心を高めるのに効果的な実験の紹介

活動の流れ

- ① 授業内容の把握
- ② 効果的な実験の抽出
- ③ 実験マニュアルの作成
- ④ 予備実験
- ⑤ 授業で実践

1 興味・関心を高めるのに効果的な実験の紹介【化学】 II 活動の概要

1 興味・関心を高めるのに効果的な実験の紹介【物理】 II 活動の概要



活動の柱

1. 興味・関心を高めるのに効果的な実験の紹介
2. 理科室の環境整備
3. 教師・生徒と交流を深める
4. 近隣の小中学校を訪問する
5. 地域の人々との交流を深める

3 教師・生徒と交流を深める

- ① PGRI(教職員の組織)へ登録したこと
- ② POPSI(中高生スポーツ大会)で監督になったこと
- ③ レクリエーションなど積極的に参加したこと



活動の柱

1. 興味・関心を高めるのに効果的な実験の紹介
2. 理科室の環境整備
3. 教師・生徒と交流を深める
4. 近隣の小中学校を訪問する
5. 地域の人々との交流を深める

4 近隣の小中学校を訪問する



4 近隣の小中学校を訪問する



活動の柱

1. 興味・関心を高めるのに効果的な実験の紹介
2. 理科室の環境整備
3. 教師・生徒と交流を深める
4. 近隣の小中学校を訪問する
5. 地域の人々との交流を深める



南スラウェシカップで

南スラウェシカップの会場

結婚式の様子

マリノの友人と

マリノのチームのメンバーと

Ⅲ この2年間を振り返って よかったこと

- ・ インドネシアのKAPPIJAのエッセイコンテストで2位に入賞したこと
- ・ バドミントンで南スラウェシカップに出場したこと
- ・ 教職員大会でティンギモンチョン町の代表で出場したこと
- ・ バドミントンを満喫できたこと
- ・ のんびりできたこと
- ・ 南半球のきれいな星空を見れたこと
- ・ インドネシアを深く知れたこと
- ・ 紹介した実験で喜んでもらったこと
- ・ たくさんの知り合いができたこと
- ・ 本当、素直な生徒達と交流できたこと
- ・ 校長から牛尾ならもう2年いてくれてもいいよ・・・と



Terimakasih banyak !
2年間どうもありがとうございました

お別れ会です。

生徒からはふるさとの
合唱を、私は今日の日は
さよならを歌いました

タンザニアで学んだこと

山中 美保

(16-1, タンザニア, 美術, 新宿区立四谷第四小学校)

1 タンザニアの概要

(1) 一般事情

タンザニアの場所は、アフリカ大陸の東岸で、ケニアの下、赤道直下にあります。日本からは飛行機の乗り換えの時間で変わりますが、最短でも20時間ほどかかります。

赴任地ムワンザはタンザニアの北部、世界第2位の大きさのビクトリア湖に面しています(図1)。また、ムワンザはタンザニアでも、第2の人口を持ち、小高い丘の上までたくさん家があります(写真1)。

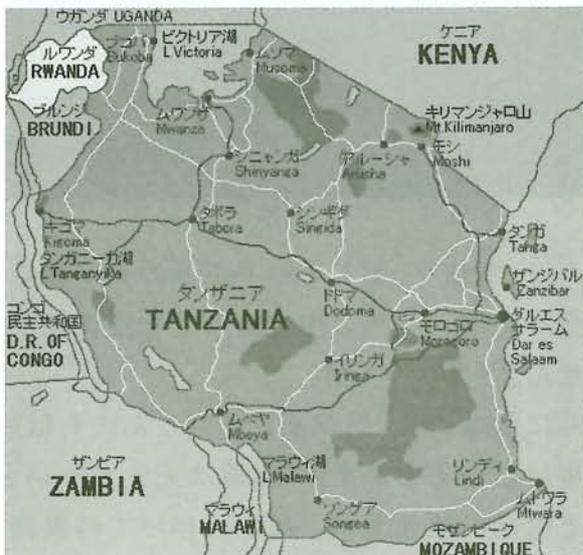


図1 タンザニア



写真1 ビクトリア湖と丘の上までの家

また、ビクトリア湖と巨大な奇岩がおりなす景色はとても美しい。「ビスマルク・ロック」と呼ばれるこの岩は今にも湖に落ちそうであるが、しっかりとバランスをとり、立ちつくしています。



写真2 ビスマルク・ロック

湖には、以前は「白スズキ」という名で、今は「ナイルパーチ」という名の巨大な肉食魚も豊富にとれ、日本にも輸出されています。魚産業が発達している反面、湖の生態系は崩れ、環境破壊にもなっています。そして、この湖を介してケニア、ウガンダとの交通の要所でもあります。



写真3 巨大な魚市場

ムワンザに多いスクマ族のダンスの様子であります(写真4)。世界的には、独特の伝統的な文化をもった「マサイ族」が有名ではありますが、この国には、他に約120程の民族があり、それぞれが違った言葉を使います。母方の民族の言葉、父方の民族の言葉、隣の村の言葉など4～5の言葉がわかる人も多くいます。



写真5 明るい子どもたち



写真6 食事の前後には手を洗う

日本からタンザニアへの協力隊の派遣は40年近くも前から行われています。また、日本の援助でできた幹線道路なども見られました。ちょうど、日本の援助で巨大な魚市場の建設中にムワンザにいたこともあり、ボランティアの小さな協力から大きな援助まで、間近に見ることもできました(写真3)。この国はスワヒリ語を母国語とし、中学以上の教育を受けた人は英語も理解できます。



写真4 スクマ族のダンス

人々は、明るく、おしゃべり好きの人が多く、道で会ったり、バスの中で会っても挨拶はかきません。「フジャンボ

(こんにちは)」、「シジャンボ(こんにちは)」「仕事は怎么样了?」「家族は元気ですか?」などと会話が続きます。家から歩いての勤務先の向かう途中の道で会った子どもが、見ず知らずの大人にも挨拶をしてくれます(写真5)。この国では、時間にルーズな人が多いと言われるが、挨拶をされていて遅刻をしそうになることもあるらしい。

文化として、村では、木の小枝を噛み、繊維をやわらかくして、歯ブラシとして今でもつかっている所もあります。食事は、手で食べる習慣もあるため、食事の前後には必ず手を洗っています(写真6)。このように衛生面に気を配っていたりします。

さて、食べ物についてであります。主食は「ウガリ」と云われるトウモロコシの粉をまとめて、まんじゅうのようにしたものでした。おかずは、トマト味が多く、豆、肉、魚などを煮込む、または、焼いたり、揚げただけであります。日本のようにたくさんのレパートリーはありませんでした。朝などはミルクと砂糖の入った紅茶にオートミール、パン、スナックなどを10時頃に仕事先で食べます（写真7）。



写真7 食べ物



写真8 いろいろな髪型



写真9 カンガ

女性の髪型をアフリカ最高峰の「キリマンジャロ」の山にたとえ、「キリマンジャロ」スタイルなどと呼ばれるものもあり、髪型にはいろいろなものがありました（写真8）。

「カンガ」<写真9>と呼ばれる布は非常に便利な布で、冠婚葬祭には欠かせない物であり、日常生活の中でも赤ちゃんをおぶったり、ふろしきのように使ったり、シャワーを浴びる時のバスタオル代わりなどと何十通りという使い方がありました。

また、自然が豊かで、海、山、そして動物を見るために、世界各地から多くの観光客も訪れています（写真10）。

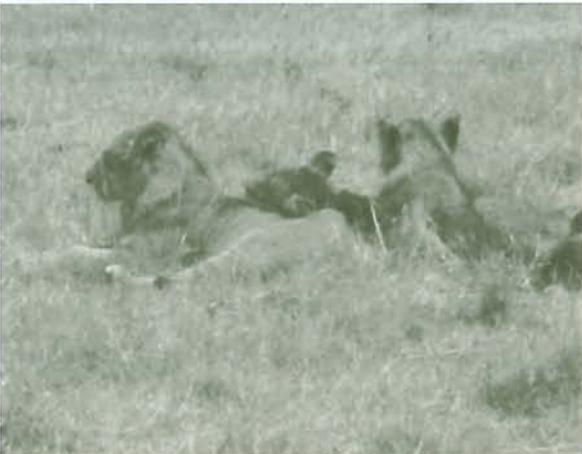


写真10 国立公園のライオン

(2) タンザニアの教育

学校は、小学校にあたる Primary 7年間。その上の Secondary は2タイプがあります。日本の中学校にあたる 0-Level 4年間。日本の高校にあたる A-Level 2年間。大学の University 4年間、ここまで、行ける人は全体の2%程度であります。Secondary 終了後、教員養成校などの College に2~3年、または、Diploma 2年間コースなどに進む人もいます。まずは、小学校のようすを紹介します。



写真11 村の小学校



写真12 図工の授業

村の小学校では、ひとつの机に4~5人ずつすわっています。机などはなく、床に直接すわって勉強していることさえあります(写真11)。

他に、少し恵まれた大学校の附属小学校の授業(写真12)、この日は、「Stadi za kaji」仕事の勉強と呼ばれる中の図工分野を教えていました。

私立の小学校で、すでに英語での授業をとりいれています。給食はワリ・ナ・マハラゲ(煮豆をごはんにかけたもの)ランチルームで全校生徒が行儀良く、ならんで食べています(写真13)。



写真13 私立小学校の給食



写真14 図工の授業

インド系の子どもたちが多くかよっている International School で在ります(写真14)。比較的設備もめぐまれていて、先生は、イギリスなど海外からきています。この日は、図工の授業です。自分の名前をデザイン化していました。

次は中学校を紹介します。大学校の附属中学校で、授業は全て、英語で行われています。小学校までスワヒリ語で勉強してきた1、2年生には、授業を理解するのに、ことばの壁があります。学習方法は、グループ学習が多く使われていました(写真15)。



写真15 グループ学習

インド系の私立中学の授業には、コンピューターが使われていたりします(写真16)。ムワンザではインド系の人々が、経済をにぎっているようでありました。



写真16 私立中学校

(3) 配属先

Butimba Teacher's Training College 教員養成大学校で60年以上の歴史をもちます。幼、小、中学校の教員をめざす、1200名近い学生が、全寮生活をしています。タンザニアで唯一、美術、音楽、体育、演劇などの技術教科の教員養成も行っています。ここで、青年海外協力隊として、美術全般の指導に携わりました(写真17)。



写真17 配属先の教員養成大学校

学科の Art Department は2年制の美術科であります。当初は0-Levelを卒業した学生でありましたが、政府の方針変更後は、A-Levelを卒業した学生へと移行しました。学生は現職の小、中学校の教員で、美術教師を目指しています。20~50歳近くと、幅広い年齢層でありました。しかし、ここを卒業しても美術の授業が実際に行われている学校は、タンザニア全土で数えるばかりしかないのが、大きな問題点であります。

ボランティア活動の内容としては、美術全般の指導。デザイン、デッサン、絵画、彫刻、陶芸、版画、写真、鑑賞、美術史等の理論、実技と教授法などでありました。

(4) その他

現地での暮らし。2LDKの家。電気は60年以上も前の設備のため、雨や風で、すぐに停電になります。我が家はジェラシックパーク、いろいろな生き物が現れる。ヤモリ、ヘビ、サソリ、オオトカゲ、ヒヒ。一例であります、椅子にかけておいた洋服をつかんだ瞬間、ヤモリ(写真18)が服の中にひそんでいて、びっくりして、とびあがったこともありました。



写真18 ヤモリ

2 活動内容

(1) 陶芸に関わる

日本での協力隊員になる前、現職参加制度での試験に合格しました。その約1月後、自分の専門分野（絵画）ではなく、陶芸か彫刻の要請へと変更となりました。彫刻は、大学でも多少勉強しましたが、陶芸に関しては子どもに教えるだけの知識でしかありませんでした。そこで、協力隊の訓練に入る前の約半年で、自己学習をすることになりました。やらねばならないことは、粘土を探す知識、素焼き程度のできる窯の作成、轆轤の技術などがありました。このため、短期間に、さまざまな知り合いをたずね、多くの方の支援を受けて、即席の基礎を学び、旅立つこととなりました。

しかし、赴任するや、日本で変更された要請内容でなくてもよく、科目は好きな分野を教えて良いと聞かされ、日本ではにわか勉強とは言いつつも、陶芸へかけた労力を無駄にはしたくありませんでしたので、絵画と陶芸の2束のわらじを履くことにしました。まずは、粘土探しから始めました（写真19）。



写真19 カオリンの山

(2) 陶芸環境の整備

野焼きは大昔から行われていて、タンザニアの伝統的な陶器の焼き方として今でも行われています。設備が不要なので、燃えるものさえあればできます。しかし、教員を養成する美術学科としては陶芸の設備関係は整っていませんでした。

まず、取りかかったものは、陶芸小屋と作品保管棚の作成でありました（写真20）。小屋を建てるために整地をし、鉄柱の柱をたてる1mほど穴を掘り、セメントで柱を固定し、屋根を棟上げし、ブリキの波板を屋根にはって完成させました。



写真20 陶芸小屋

この作業、学校の主事さんは熱心に働くので、毎日行えば10日もあれば終わるはずでありました。しかし、赴任3月後の12月から校長には話をし、経理にも伝えたが、いい返事はするものの一向にお金はもらえず、文字通り長い間、棚あげになってしまいました。

週に1～2回、経理に会いに行くが、今はお金がない、来週には渡すといいつつ、長期の出張に出かけてしまい何週間も帰ってこなかったりしました。しかたなく、出張から戻った校長に再度お願いをしてみると、経理から、やっと柱部分だけのお金ができました。



写真 21 木を切り薪にする

しかし、「残りのお金は柱が仕上がって
からでない」と渡せない」と全額はもらえ
ず、このような繰り返しで、やっとのこ
とで、小屋と棚を作り、素焼きの窯用レ
ンガの購入まで含めると約4ヶ月もかか
ってしまいました。そして、素焼き窯用
のレンガを購入し、窯を作り始めたのは
2年生が卒業する1月前になっていまし
た。その上、薪を切るには、たった1本
の斧と2本の「パンガ」と呼ばれる大き
なナイフしかなく、数人が切り、後の学
生で運ぶという能率の悪さで、準備する
のに約1週間がかかりました(写真21)。

(3) 窯作成と焼成

焼成1回目は、平日は他の科目の授業
もありますので、休みの日に行くことに
しましたが、焼成の分担はしたものの、
午前中は、教会に行って遅れて来るし、
参加しなかった生徒もいました。10時
間近く、薪のみを燃やしたにも関わらず、
焼き上がりの結果は、よく焼けていませ
んでした(写真22)。原因としては、窯
の高さが高く、作品に火がまわりきらず、
熱効率が悪いようでありました。



写真 22 焼成結果を見る学生

焼成2回目は、前回の窯の欠点を修理
し、今度は焼成するのに時間での分担
ではなく、焼成の仕方を知る上でも、初
めから終わりまで、できるかぎり全員
の生徒が参加するように呼びかけまし
た(写真23)。焼成時間も10時間以上にな
りました。火を止めたのは夜が明ける前
になっていました。焼き上がりの結果は
作品を置いた場所によって、良く焼けて
いるものもあれば、今ひとつのものもあ
りました。



写真 23 修正した窯

2004年の12月頃、JICA事務所に粘土の試験を相談していた折、SEAMICと
いう研究機関がタンザニアにあることを知り、隊員支援経費で支援してもらい、5月

に、同僚と共に、陶芸の理論と実技のワークショップを10日間行いました(写真24)。その後、ワークショップでの成果を他の学科の教員にも報告し、作品を同時に展示しました。また、生徒向けにも展覧会を実施しました。

それから、学校内にある木の量は限られているし、重労働であるので、オイルバーナーの導入を考えました。校長にも同意が得られ、今回は経理から早い時期にお金がもらえました。しかし、今度は頼んだ職人がもらった手付け金で、昼間から酒を飲み、仕事は進まない状態だった。その上、見積もりの時点では同意していたはずなのに、寸法違い、材質の違いなどで金額的に無理だと言われました。学校にも相談するが、この年は大統領選を控え、政府がお金を学校に出せなくなり、学校は電気代は払えず、電気は止められ、生徒達の食事の質も落とされ、そしてとどめは、食事をまかなえないので、試験を早め生徒を家に帰らせることとなった。

このような状態では、陶芸のお金などでてくる見込みもないし、ここまでやってきたことを中途半端で投げ出すわけにもいかないの、事務所にも困惑した状況を説明し、隊員支援経費で支援して頂くこととなりました。もちろん、担当の職人を変えてもらい、この年、水不足で停電で再三作業が滞りましたが、作成まで約半年かかってオイルバーナーが完成しました。

この頃は、同僚もワークショップに参加したことから、ワークショップで行った本焼きのできる窯の作成が目標になっていました。そして、オイルバーナーと同時期に作成することとなりました。それには、支援経費の申請に必要な見積もりが必要でありました。閉鎖したガラス工場に行き、見積もりをお願いしましたが、日本人であることで、足下を見てか、タンザニア価格の4倍もの値段をふっかけてきました。そして、その値段以外では売らないとまで、工場長は強気でありました。自宅まで、話言っても居留守を使われたり、奥様に会える日を聞くと、「忙しいので、朝7時に来てくれ」と言われたりもしました。

しかし、「レンガは、タンザニアの教育のために購入するものであって、あなたの子どもや孫たちのためになるものである」ことを同僚に伝えてもらい、やっと適正価格



写真24 ワークショップの様子



写真25 完成したオイルバーナー

で見積もりが取れました。そして、窯作りがはじまりました。窯作りでは、学校の主事さんがとても仕事がんばってくれました。また、窯のドーム部分のレンガの角度を削るのには、日本から持参した石の彫刻用の道具1本を使い、生徒と共に、自らコツコツと削りました、予定よりは日数がかかりましたが、なんとか完成しました。

そして、焼成としては3回目であるが、新しい窯での初焚きになりました、素焼き程度ということで結果は焼けていました。みんな大喜びでありました。

次の焼成4回目では、楽焼き程度 1000 度以下の低温で焼成をしました（写真 27）。日本で同様の窯の焼成をした時は、10 時間くらいで温度が 1200 度まで上がりましたが、ここタンザニアでは、ぜんぜん温度が上がっていませんでした。

また、新しい窯で再度、焼成することになりました。5回目は、時間をできるだけ長くかけたこともあり、結果は、釉薬が上手くとけていて、その上、薪の炎のあたり方で変化し、いろいろな色ができました（写真 28）。



写真 28 釉薬がとけた作品

薪がなくなれば、夜中に木を切り、学科に保存していた彫刻用の丸太までも燃やしました。そして、翌朝6時すぎ、また、停電になりました。みんな「やることはやった」という思いで、残りの薪をくべて、焼成を終わることとなりました。数日後、窯を開けました、やはり、高温焼成のハードルは高く、釉薬はとけず、目標温度には達成していませんでした。



写真 26 完成した窯



写真 27 焼成中

6回目の焼成は、全土的に雨が降らず、水力発電のため昼間は水不足の停電が続きました、そして、焼成は電気が来る夜間になりました。だれもが徹夜を覚悟し、私も日本に帰る直前でありましたので、これが最後だという意気込みで取り組みました。



写真 29 最後の焼成

既に、日本への帰国がぎりぎりになっていましたが、もう1度焼成し、締めくりたいと思いましたが、しかし、時期悪く教育実習期間になり、その評価に同僚が出張に行くこととなり、再度焼成することは不可能になりました。この時点では、日本へ帰る日がもう秒読み段階でありましたので、最後の仕事として、耐火レンガを使わなくてもよい現地のレンガのできる素焼き窯を製作しました（写真30）。



写真30 現地の材料でつくる



写真31 資料整理

また、粘土の調合試験結果、研究機関や陶器工場にお願いして得た粘土の試験結果、赴任中に集めた粘土、原材料などをこれからの研究のために資料整理し、学科に保管しました（写真31）。

(4) 活動のまとめ

活動を行って、今後の陶芸について残された問題点として、1つ目は、焼成の仕方の改善、薪を入れるタイミングの見極めが必要。10時間程度の焼成で、1200度くらい上がる窯をつくったつもりではありましたが、実際には17時間焼成したにも関わらず、温度はせいぜい1000度前後であったと思われます。日本のように温度計もないので、木をくべた時の温度が上がったのか下がったのかもわからないのも難しい点でありました。

2つ目は、窯の仕組みの改善、熱を蓄えるよう更に二重に煉瓦で覆うこと、煙突の長さや幅の調整、焚き口を大きくするなど考えられました。

3つ目は、現地で手に入るものを使った釉薬の調合試験が必要になります。

4つ目は、カオリンなどとの調合をした粘土の開発も必要になります。

最後に、生徒作品のレベルアップも考えなくてはなりません。しかし、美術科の時間数が政府の方針で減ってきていることから、今後どのように実技の時間を生み出すかが問われてくると思います。

(5) その他

タンザニアの美術としては、おみやげ物としても有名なディングアディング派の絵画、マコンデの彫刻。また、陶芸では、日常使われている鍋や水瓶をつくる伝統的な職人（写真32）。それに少数ではありますが、作家活動をしている陶芸家などもあります。その他、アフリカらしいカラフルな布なども日用品



写真32 陶芸の職人

という以上に美しい物が多く見られます。美術教育には直結

はしていませんが、素晴らしいものがたくさんあります。

3 協力隊活動で得たこと

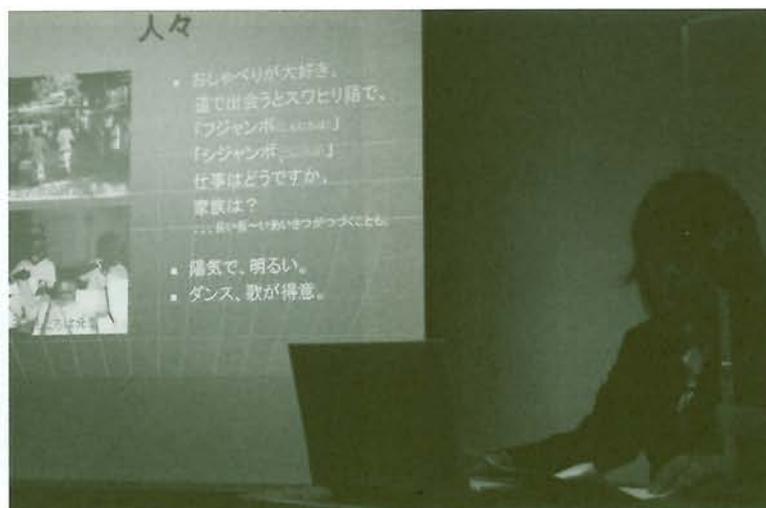
最終報告書、協力隊に参加して、要請内容が変更されたり、現地の方針が変わることも度々でありました。そのために、日本でも、タンザニアでも、色々な人々との出会いがありました。

日本にいるのとは、違う苦勞はありましたが、自分がしっかりとした目標をもっていれば、何事にも挑戦できる。筋書きのない創造的な時間でありました。結果をだすには、時間が短いことは残念でした。

しかし、「やはり、行って良かった。」多くの人にも経験してもらいたいと思います。そして、行くまでにお世話になった多くの方々、また、現地ではインターネットを介して、日本から窯づくりを支援して頂いたり、また、遠く離れたオランダからバーナー作りを支援して頂くなど、本当に多くの方々のおかげで活動ができました。感謝申し上げます。

最後に、映像で、友人の Bache さんの勉強方法を日本の子どもたちへ伝えたいと思います。バラバイグ族の女の子は、学校へは行けませんでした。そこで、彼女は毎日、牛の世話をしながら、アカシアの木のとげを鉛筆代わりに、その木の葉を紙代わりに、小学校に行っている男の子たちからアルファベットを習いました。そして、小学校の先生にアルファベットを覚えたので学校に行かせてほしいとお願いに行きました。先生に「制服は準備できますか？」と聞かれ、彼女は近所の人のお手伝いをして、制服を用意しました。小学校に入学したのは、すでに 12 歳でした。今は、小学校で教鞭をとっています。アカシアの木は自分にチャンスを与えてくれた木で、大好きな木であると話してくれました。

タンザニアでは、学校に行きたくても行けない子どもたちが、今でも多くいます。



タンザニアで学んだこと

新宿区立四谷第四小学校
教諭
山中美保

TANZANIA

- タンザニアはアフリカ大陸の東岸。
- 日本から、飛行機で20時間ほど(2日)



- 赴任地はタンザニアの北部、世界第2位の湖、ビクトリア湖に面したムワンザ。

タンザニア第2の人口のムワンザ

- 丘の上まで、民家があり、とにかく人が多い。
- ビクトリア湖と巨大な奇岩が、風光明媚な景色をつくっている。
- 湖では、ナイルパーチ、テラピアなどの魚も豊富にとれる。
- ケニア、ウガンダとの交通の要所。



ビスマルク・ロック

ムワンザ



ムワンザ市内中心部



ビクトリア湖



ビクトリア湖と漁船



駅前付近

ムワンザ2



広告の車



丘の上まで、民家が密集



日本の援助でできた巨大な魚市場



ビクトリア湖の夕焼け

ことばと民族



スクマ族のダンス

- 約120もの民族がいる。それぞれが、自分たちのことばを使っている。
- 公用語はスワヒリ語、中学校以上では、英語で授業のため、英語がわかる人もいる。
- 4～5つの言葉がわかる人もざらにいます。(スワヒリ語、英語、母方の言語、父方の言語、隣の村の言語など。)
- ちなみに、ムワンザはタンザニアの15%をしめる最大民族のスクマ族が多い。
- ケニア、タンザニアという「マサイ族」のイメージが強いが、彼らは服装などで目立つが、意外に少数派である。

少数民族の民族



バラバイク族のダンス



マサイ族のダンス



狩猟民族ハザンビ族



ダトーガ族

人々



教会の歌の練習風景



子どもたちは元気

- おしゃべりが大好き。
道で会おうとスワヒリ語で、
「フジャンボ (こんにちは)」「シジャンボ (おはよう)」。
仕事はどうですか、
家族は？
、、、長い長いあいさつがつづくことも。
- 陽気で、明るい。
- ダンス、歌が得意。

文化・生活

- はみがき
木の小枝を噛み繊維を
やわらかくして、歯ブラ
シとしてつかう。
- 食事は手で食べる習慣
が残っているため、
食事の前後は必ず手
を洗う。



食べ物1



お粥



- 主食
- ・ウガリ
(カウモロシの粉をおとめて、まがしろうのようにする。)
 - ・ゾドカ (食用バナナ)
 - ・ウリ (米)
 - ・ピラウ
(米、ジャガイモ、香辛料で炊く)
- おかず (煮るか、焼くか、揚げろ。)
- ・マハツ (魚)
 - ・ニョマ (牛肉、山羊の肉)
 - ・クク (鶏肉)
 - ・サマキ
(ビクトリア湖の淡水魚、ナイルバーチ、テラピア)
- スナック
- ・チャバ (ティ(小麦粉をねって平たくし、焼いた物))
 - ・サモサ
 - ・(ひき肉、野菜などを中にいれ、あげたもの)
 - ・アングージ (トーナツに似ている。)
 - ・キトゥンファ (米の粉からつくったもの)

食べ物2



サマキ・ナ・チブシー
(フィッシュアンドチップス)



ウトウンゴ (牛肉隠し煮込み)



デージー、ニョマ、ヒン、モガ
(バナナ、牛肉、ポテト、野菜)



食べ物3



キトゥンファ
(米粉のスナック)



サモサ
(ひき肉やポテトがはいっている。)



豚肉を焼いた



コンコロ (牛足煮)

おしゃれ



髪型

- 女性はあみこみ、つけ毛(色々なスタイルがある「キリマンジャロ」という名前もある。)
- 男性は短く切るか、剃る。たまに、アーティストたちは、あみこみしてる。



おしゃれ2



- 「カンガ」と呼ばれる大きな布、2枚で1セット。スワヒリ語のことわざが書かれている。女性の伝統的な衣装で、何十種類もの巻き方がある。冠婚葬祭には必需品。

名所



自然、野生の王国、国立公園は有名。

- シゴロンゴロ
- セレンゲッティ
- ルアハ
- セルー



- キリマンジャロ山 (5896m)

学校

- Primary (小学校) 7年間

Secondaryは2タイプ

- O-Level (中学校) 4年間
- A-Level (高校) 2年間

- University (大学) 4年間
ここまで、行ける人は全体の2%程度。

Secondary終了後
教員養成校などのCollege (2~3年間) やDiploma (2年間) コースなどに進む人もいる。



Primary (小学校) 1



- 村の小学校
ひとつの机に4~5人ずつすわる。机ではなく、床に直接すわって勉強していることもある。



- 大学の附属小学校
「Stadi za kaji」の授業
今日は、図工を教えます。

Primary (小学校) 2



- 私立の小学校
- ここは、小学校から、すでに英語での授業をとりいれている。
- 給食はワリ・ナ・マハラゲ(煮豆をごはんにかけたもの) ランチルームに全校生徒ならんで食べる。

Primary(小学校)3



- International School
インド系の子供たちが多くかよっている。設備もめがまれている。
先生は、イギリスなど海外からきている。
- 図工の授業です。
自分の名前をデザイン化しています。

Secondary O-Level(中学校)1



- 大学の附属中学校
授業は全て、英語で行われる。小学校までスワヒリ語で勉強してきた1、2年生には、授業を理解するのに、ことばの壁がある。
- グループ学習が多くつかわれている。

Secondary O-Level(中学校)2



- インド系の私立
Secondary(中学校)
 - コンピューターの授業。
- ムワンザではインド系の人々が、経済をにぎっている。

Butimba Teacher's Training College

- 教員養成大学校で60年以上の歴史をもつ。
- 幼、小、中学校の教員をめざす1200名近い学生が、全寮生活をしている。
- ここは、タンザニアで唯一、美術、音楽、体育、演劇などの技術教科の教員養成を行っている。



ここで、青年海外協力隊として、美術全般の指導に携わった。

ADepartment (美術科)

- 2年制で当初はO-Levelを卒業した学生であったが、政府の方針変更後は、A-Levelを卒業した学生へと移行した。
- 学生は現職の小、中学校の教員で、美術教師を目指している。年齢も20~50歳近くと、幅広い。
- しかし、ここを卒業しても美術の授業が実際に行われている学校は数えるばかりしかないのが、大きな問題点である。



ボランティア活動の内容

- 美術全般の指導
デザイン、デッサン、絵画、彫刻、陶芸、版画、写真、鑑賞、美術史等の理論、実技と教授法。



現地での暮らし



- 」2LDKの家。
- 」電気は60年以上も前の設備のため、雨、風で、すぐに停電になる。
- 」我が家はジェラシックパーク。いろいろな生き物が現れる。ヤモリ、カビ、サソリ、オトカゲ、ヒト。

日本での協力隊員になる前

- 現職教員参加制度での試験に合格した。
- その約1月後、自分の専門分野(絵画)ではなく、陶芸か彫刻の要請へと変更となった。
- 彫刻は、大学でも多少勉強したが、陶芸に関しては子どもに教えるだけの知識しかなかった。
- 自己学習することは、粘土を探す知識、素焼き程度のできる窯の作成、轆轤の技術などがあった。
- 短期間に、さまざまな知り合いをたずね、多くの方の支援を受けて、即席の基礎を学んだ。

そして、陶芸

- 赴任するや、科目は好きな分野を教えて良いのと、...しかし、日本でのにわか勉強とはいえ、陶芸へかけた労力を無駄にはしたくなかった、絵画と陶芸の2束のわらじを履くことにした。
- まずは、粘土探しから始めた。



野焼き

- 大昔から行われている。



陶芸小屋と作品保管棚の作成



小屋を建てるために整地する。



陶芸小屋の完成



学校の主事さんと学生たちで棟上げをする。



作品保管棚の作成

素焼き窯 I の作成と薪の準備



レンガを運ぶ



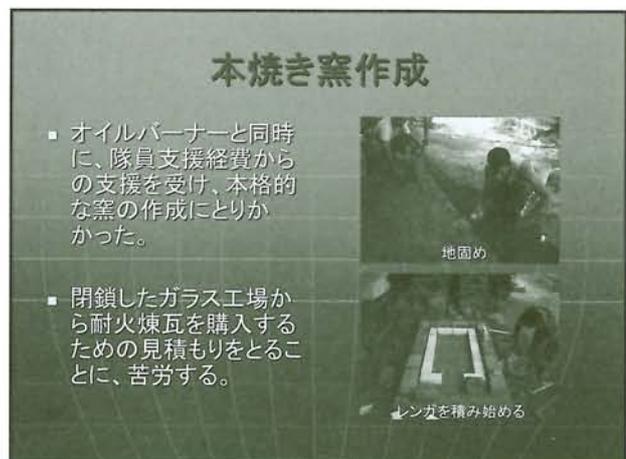
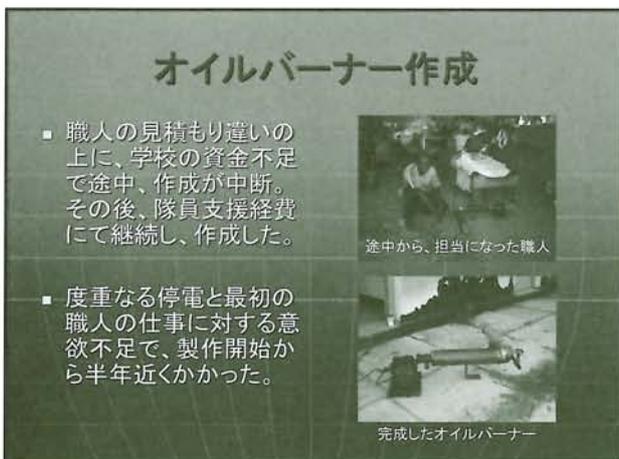
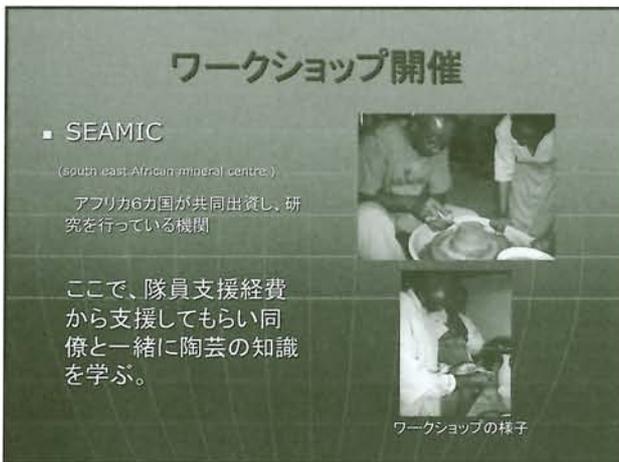
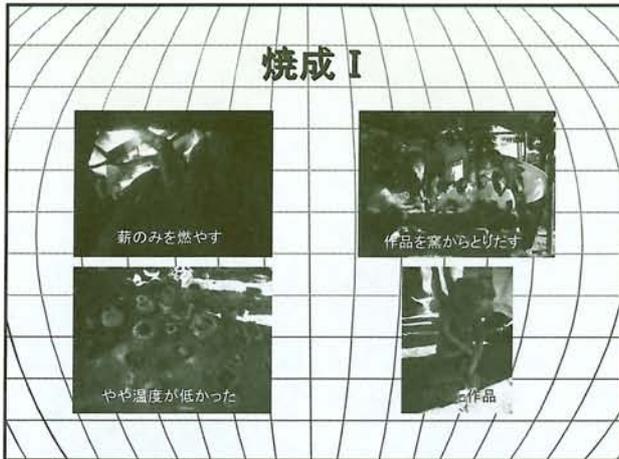
同僚の先生大木を切る

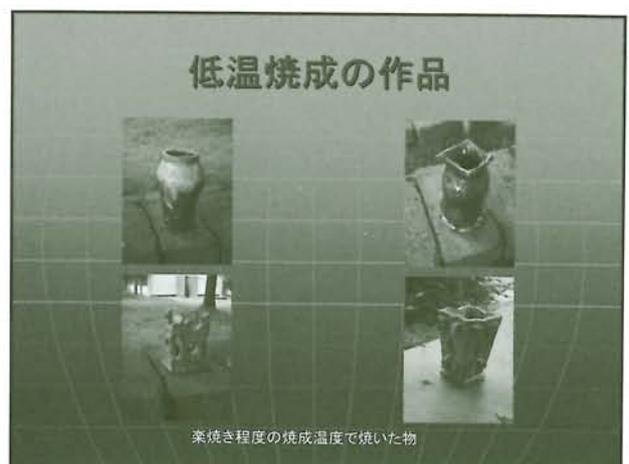
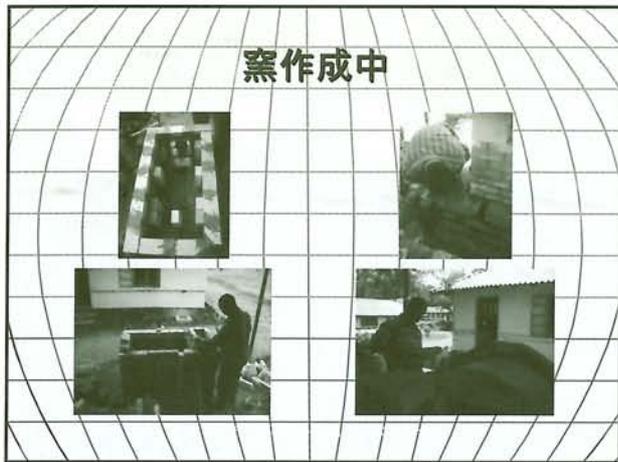


窯を建てる



みんなで木を引っ張り倒す





焼成VI



素焼窯Ⅲ作成



現地の材料で、一般の学校でつくることができるモデル窯作成

土、原材料、焼成サンプル



粘土の調合試験

SEAMICで粘土の調合試験

陶器工場での粘土の焼成試験結果

赴任中に集めた、原材料と粘土

陶芸について残された問題点

- 焼成の仕方の改善<薪を入れるタイミング>
10時間程度の焼成で、1200度くらい上がる窯を作ったつもりであったが、実際は7時間焼成したにも関わらず、温度はせいぜい1000度前後であったと思われる。
- 窯の仕組みの改善
熱を蓄えるよう更に煉瓦で覆うこと、煙突の長さや幅の調整、焚き口を大きくするなど。
- 現地で手に入るものを使った釉薬の調合
- カオリンなどとの調合をした粘土の開発
- 生徒作品のレベルアップ

タンザニアの美術



カティンガ派の絵画

マコンデの彫刻

伝統的な陶芸

展覧会をする陶芸作家の作品

授業の合間に行ったこと。

- 手に職をつけたい近所の婦人グループにバテック(ろうけつ染め)を教えた。
- 子どもたちに自宅で絵画を教えた。
- 生徒たちの版画展覧会の実施。



婦人グループと生徒たち



版画展覧会の作品を持つ生徒

最終報告書

- 要請内容が違っていたり、現地の方針が変わることもあった。おかげで、色々な人との出会いがあった。
- 日本にいるのとは、違う苦労はあったが、自分がしっかりとした目標をもっていれば、何事にも挑戦できる。筋書きのない創造的な時間であった。
- 結果をだすには、時間が短かった。
- しかし、やはり、行って良かった。多くの人にも経験してもらいたい。
- そして協力隊に参加するにあたり、支援して頂いた多くの方に感謝申し上げます。

日本の子どもたちへ

演劇学科の生徒で、友人のBACHEさん

タンザニアで学んだこと

ご静聴ありがとうございました。

16年度1次隊 山中美保

協力隊活動を通してカンボジアからいただいたもの

小杉 智代

(16-1, カンボジア, 家政, 八王子市立高尾山学園)

1 カンボジア紹介

カンボジアというと、世界遺産のアンコールワットや、地雷のイメージが強いと思うが、ここでは私が暮らして感じた印象を伝えたい。

(1) 言語について

クメール（カンボジア）語が日常的に使われている。英語も首都プノンペンや観光地のシェムリアップにおいては使えるが、活動先ではクメール語しか使わなかった。それは、私の赴任地のバタンバン中等教員養成学校の担当したクラスの生徒や同僚指導教官は英語を話せる数少なく私自身も苦手であったためと、英語で教えるための教材も充実していなかったためだ。また、市場や大家さんと話すなど日常もクメール語しか使えなかった。

(2) 医療事情

南部では「鳥インフルエンザ」、北部では「デング熱」が流行ることもあったが、私は大病をしなかった。しかし、食べ物に気を使っても下痢が止まらず6キロの体重減になった。半年経つと、何を食べても大丈夫になった。

(3) 生活事情

カンボジアでは自分で住居を探し安全点検を行った後に入居するため、探すのに苦労はするが住環境はとてもよい。衣服はクメールスカート（巻きスカート風のロングスカート）がカンボジアの女性の服装だ。現在は学校ではよく着るが他の場所では男女とも洋装を多く目にする。食事は米が主食で、それに一品のおかずが一般的。朝食ではクイティユ（米のめん）もよく食べる。日本にある食材も豊富で、物価は日本のおよそ10分の1くらい。

普段の交通手段は自転車かモトドップ（オートバイタクシー）、長距離移動はバスが主。首都プノンペン～バタンバン（赴任地）は5時間。交通規則を守らない人も多く、逆走もするので交差点での事故が多い。治安状況はよくなりつつあるが、夜には都市部は外国人を狙った犯罪が多い。地方は都市部に比べ少ないが、場所により異なる。

(4) 私の周囲のクメール（カンボジア）人々の暮らし

カンボジアでは農業をしている人たちが圧倒的に多い。赴任地のバタンバンは米どころとして有名で日本米にとっても似ておいしい。もち米を少し混ぜて炊けばおにぎ

りが作れるくらいの品質。雨季米と乾季米があり、場所によっては二期作をしているところもある。

クメール人は仏教徒が多く正月や盆に寺参りをするなど年中行事や冠婚葬祭を大事にしそのために仕事を休むのは当たり前である。中秋の名月の時期にはボートレースがあり、夜には灯籠流をし、先祖を供養する。クメール人が好んで話すことはお金の話。日本人が挨拶と天気の話をするのと同じくらい頻繁にお金の話題が行き来する。

小中学校の教員の給料は\$30ほどで極端に少なく副業をしないと生活が成り立たない。指導教官は基本給に授業時間数によって歩合制の月給となるので教員よりは良い。

一方、日雇い労働で1日働いて得られる現金収入は\$1。これでは1日の食事代もままならない。

2 活動について

(1) 配属機関

バタンバン中等教員育養成学校は2年制の教員養成学校。カンボジア国内には6ヶ所あり、学生は高校卒業以上で合格すると同時に就職扱いとなり、2年後には近隣の4州の中学校・高等学校の教員になる。学生は必ず2教科の免許を取得することになる。バタンバンの場合、家庭科は第2教科で国語が第1教科。履修科目は取得免許の教科に加え、英語や芸術・体育などの一般教科も含めて平日は7時間、土曜は4時間の計週39時間学習する。赴任当初は教育実習期間が第2学年の1月末～3月末の10週だったが、現在は教育実習のシステムが変わり第1学年でも実施されている。

(2) 要請内容

私は2代目で初代のときと要請内容は同様で、家庭科の指導教官として楽しい実習授業（ミシンを使った被服実習・調理実習）を学生に直接指導することであった。しかし、活動する中で同僚指導教官への技術移転や、他州での指導教官へ技術移転や環境整備、そして他州の学生たちへの直接授業の必要性を感じて加えた。

(3) 活動の4つの柱と設定理由

① T1授業の実施

前任者から受け継ぎ、実施していない内容を中心に行った。若い生徒は柔軟に私のやり方を受け入れていた。

② T2授業の補助

同僚指導教官の教えている内容を知り、実技ではより良い方法や新しい方法を教え、学生が教員になったときの授業実践で役立ててもらいたいと思った。

③ 教室・備品整備

前任者が苦勞して準備した備品が活用されるよう、修理や点検・整備のノウハウを残し、今後も活用するために必要だと感じた。

④ 他州での協力

1年経った夏季休業中に各校を見学し、他の学校の家庭科の指導教官も専門教科

ではなく生物や国語の指導教官が行っていることがわかったためだ。

(4) 活動内容の実際

① T1 授業の実施

各クラス週2時間ずつ実施した。1年ではミシンの基礎縫い・食物分野の知識分野を補いながら調理実習を行い、2年ではミシンを使った被服製作と調理実習と知識分野の復習を行った。また、カウンターパートの不在のときには休講になってしまったため、振り替えて積極的に授業を行った。カウンターパートが不得意な分野は教科書や指導書の内容を写すだけの授業になるので、実習以外の知識に関すること（例えば食品添加物の授業）も行った。カンボジアのカリキュラムを訳してみても、日本の指導要領と似ている部分がたくさんあることがわかり、現職としての経験がとても役に立った。

② T2 授業の実施

同僚指導教官が行う授業を学生・指導者の目線で見学し、実習授業では刺しゅう、編み物などで新たな種類やよりよいやり方を紹介した。また、学生がの教育実習では中学校に足を運び生徒に助言するとともに、中学校の先生方とも意見交換を行った。

③ 教室・備品の整備

使われていなかった壊れたミシンの修理を行い、生徒増に伴って足りなくなった教室を新たに新設した。また、棚に飾ってあった作品は指導教官のものがほとんどだったため、生徒の作品を飾るようにした。

④ 他州での協力

長期休業を利用して他州の中等教員養成学校を見学し、要望に合わせてミシンの修理や、講義・実習の単発授業を行った。

(5) 活動の成果と反省

① T1 授業の実施

200時間以上実施し学生に還元されたものは多かった。教育実習では学生も実習授業を行っていたため、少ない材料・施設でも実習は可能だと分かった。同僚指導教官が必要以上に隊員を便りにするようになったことが反省点として残る。T1 授業を行ったことは学生のためにはよかったが、同僚指導教官には見本を見せられたよい面と、隊員任せになって仕事が楽になってしまったという両面があったことが否めない。同僚指導教官の生活状況や性格を知り、兼ね合いを考えて進める必要があるだろう。

② T2 授業の補助

同僚指導教官は新しい技術に対して貪欲に吸収しようという姿勢があったため、私がすることにも熱心にメモを取ったりやってみたりしていた。ただし、給料の問題が大きいと思うが時間外に残って仕事をしようという姿勢はなかったので授業の中でのことに止まって発展しなかったのが残念である。しかし、私自身にとっては

役立つことが多かった。全ての授業を見ることで指導教官の指導法や内容、学生の取り組む様子もわかり T1 授業に生かすことができ、必要に応じて助言もできた。

③ 教室・備品整備

美しく教室を飾り、形を整えることは校長も推奨していたので成果があがった。ミシンの修理代を全額学校負担という形で行え、修理先も同僚指導教官が探して発注・交渉・立会いができたことには学校側の意識を高める意味でもよかった。しかし、形を整えようとする余り、訪問者が来るときだけ過剰に整備を行ったり、元々の備品の品質の悪さが問題であったりするため、根本的な解決にはいたらない。また、私が意外に感じたことは、「クメール人は思ったよりも物を大切にしない」ということだ。折に触れて捨てないことや再利用すること、活用することの大切さを説いたが今までに培った意識を変えるのは難しかった。

④ 他州での協力

カンボジアは援助大国である。今は多くの国による NGO の力を借りることは必要かもしれない。しかし、最終的にはクメール人同士で助け合うことが一番よいと感じ始めていた。そのため、同僚指導教官に別の州の家庭科指導教官を育ててもらおうと思って計画した。しかし、中等教員養成学校はそれぞれ独立しており中央で統括しているというシステムがなかったのと、お互いの領分を侵さないという考えがあること、また研修を行うことに際して呼ぶ側は交通費や日当を支払うのが普通であること、隊員が所属地を越えて活動することなどの問題点がたくさんあった。結果的には、所属長を説得し、隊員のみで州を越えて活動することには了解が得られ実施できた。しかし、現在でも私が教えたことを同僚が広める方が効率としてよいだけでなく、お互いの意識も高まるという思いが残っている。他州の校長・指導教官・学生には喜ばれたのでよい足がかりにはなっただと感じている。システム上の問題が解決されることを今後期待したい。

3 活動を振り返って

現在、強く感じていることは、現地の生活を知ること、人々を知ることには必ず活動に役立つということだ。良い思いをしたのも苦い経験をしたのも人間関係だった。協力隊活動は大切だが私も現地に暮らす一人の人間として日々様々なことを感じる中で活動できたことが大きかった。また、先に述べたように現在のクメール人は援助慣れしてしまっているように感じてならない。お金や物をもらえる外国の NGO もたくさんあるからだ。しかし、私は地道な人材としての技術協力に徹したことで見えたことも大きかった。クメール人のやり方の良さも見え謙虚な気持ちになり、改めてカンボジアの教育問題を客観的に見られた。

最後に、私を支えてくれた多くのクメール人や隊員仲間、そして日本の応援者たちへ感謝の気持ちを込めて「オークン・チラーン！（ありがとうございます）」と記したい。

帰国報告会

カンボジア・家政

16年度1次隊 家政 小杉 智代

1. カンボジア紹介



16年度1次隊 家政 小杉 智代

2. 配属先概要

- (1) 中等教員養成学校
 - ・カンボジア国内に6校
 - ・2年制で高校卒業以上で入学
 - ・卒業後は中学校・高校の教諭に
 - ・学生は2教科の免許を所得
- (2) バッタンバン校
 - ・環境整備に力を入れている
 - ・遅刻・欠席、服装に厳しい
 - ・指導教官は熱心でモデル校

16年度1次隊 家政 小杉 智代

バッタンバン中等教員養成学校



16年度1次隊 家政 小杉 智代

(3) 学生のカリキュラム

- ・月～金曜は1日7時間、土曜は半日で週39時間
- ・第1教科週約14時間、第2教科週約8時間の他、一般科目(英語・芸術・体育・奉仕作業)も実施

(4) 国語・家政クラス

- ・第1教科はクメール語
- ・現在1、2年とも2クラスで4クラス、週32時間
- ・女子学生が9割

16年度1次隊 家政 小杉 智代

国語・家庭科クラスの教室



16年度1次隊 家政 小杉 智代

3. 要請内容と活動方針

(1) 要請内容

家庭科の先生となる学生に、ミシンや調理を中心とした楽しい実習授業を展開する。



初代隊員：施設設備を整え、実習授業を実施。

(2) 2代目隊員としての活動方針

T1授業でカウンターパートの力量や指導内容を把握し、学生に不足している実習授業を行うとともに、カウンターパートのスキル・アップを目指す

16年度1次隊 家政 小杉 智代

4. 活動の柱と内容

(1) T1授業の実施

A. 被服実習
針刺し・エプロン・
パジャマ

B. 調理実習
金団・団子・ピラフ・
蒸しケーキ・肉じゃ
が・ハンバーグ



16年度1次隊 家政 小杉 智代

(2) T2授業での補助等

A. 被服分野

- ・刺繍の応用
- ・棒編みの模様編み



B. 食物分野

- ・合成洗剤
- ・食品添加物



16年度1次隊 家政 小杉 智代

(3) 教室整備・CP指導

- A. 施設設備の点検補充
・ミシンの総点検
・家庭科室の新設
・生徒の作品展示
- B. CP指導
・技術のレベルアップ
・CPがT1で調理実習
・教育実習の見学と指導



16年度1次隊 家政 小杉 智代

(4) 他州での指導

- A. 指導教官の指導
・ミシンの修理と使い方
・飾り切りと調理実習

B. 学生対象の単発授業

- ・下衣の作り方
- ・食品添加物について
- ・飾り切り(花と葉)
- ・調理実習(金団)



16年度1次隊 家政 小杉 智代

5. ブレークタイム ♪私の1週間♪

	月	火	水	木	金	土	日
7:00	K1	G2	G2 L1	G2 K1	F2	L1	おかい もの
9:00	L1	L1	おかい もの	F2	G2	K1	お料理 ・裁縫
11:00	お昼・ 日本語	お昼・ 日本語	お昼・ 日本語	お昼・ 日本語	お昼・ 日本語	お昼・ 日本語	食堂 開店?
14:00	クメール 語	F2	F2	クメール 語・孤児 院訪問	K1		
17:00	日本語 夕食	日本語 夕食	のんび り夕食	日本語 夕食	クメール 語・夕食	のんび り夕食	のんび り夕食

16年度1次隊 家政 小杉 智代

6. 成果と今後の課題

(1) 成果

- ・教室環境整備、備品・消耗品の整理を実施
- ・全てTTでの授業を継続し、T1授業を200時間以上実施
- ・隊員支援経費に頼らず、学校予算で実習授業等を実施
- ・教育実習をCPと共に見学し、学生や中学校教諭に助言



16年度1次隊 家政 小杉 智代

(2) 課題と今後に望まれる展開



- ・実習授業に適した授業スタイルに変え、スキルアップを図るのは難しかったが生徒に様々な経験をつませることは出来た。

- ・中等教員養成校は経営が州で独立しており、国が統括するシステムがなく、協力体制を作るのは難しかった。

16年度1次隊 家政 小杉 智代

私にとってJOCVの経験とは？

- ・様々な出会いの場
- 最後は人間関係！
- ・教え方は違っても生徒は変わらない
- 授業の中身で勝負！
- ・カンボジアのよいところが残ってほしい
- 日本・カンボジアのそれぞれのよさを実感



16年度1次隊 家政 小杉 智代

おわり

つたない報告を最後までご清聴ありがとうございました。
オークン・チラーン！

16年度1次隊 家政 小杉 智代



帰国報告会資料 (カンボジア・家政)

元16年度1次隊・カンボジア・家政
現職 東京都八王子市立高尾山学園中等部
教諭 小杉智代

1. カンボジア紹介

(1) 言語について

クメール(カンボジア)語が日常的に使われている。英語も観光地においては使えるが、活動先ではクメール語しか使わなかった。(英語を話せる生徒・先生もいるが、数少なく、カウンターパートが話せないのと、私も苦手だったため)市場や大家さんともクメール語しか使えなかった。寺ではクメール語と日本語を話せるお坊さんと日本語で話げできた。

(2) 医療事情

南部では「鳥インフルエンザ」、北部では「デング熱」が流行ることもあったが、私は大病はせず、下痢で6キロの体重減だった程度ですんだ。

(3) 生活事情

カンボジアでは自分で住居を探した後、安全点検を行うため、住環境はとてもよい。衣服はクメールスカート(図1)がカンボジアの女性の服装だが、学校ではよく着るが他の場所では男女とも洋装が多い。食事は米が主食で、それにおかず(図2)が一般的。日本にある食材も豊富で、物価は日本のおよそ10分の1くらい。

普段の交通手段は自転車かモト(オートバイタクシー)。長距離移動はバスが主。首都プノンペン~バットバン(赴任地)は5時間。交通規則を守らない人も多く、逆走もするので交差点での事故が多い。治安状況はよくなりつつあるが、夜には都市部は外国人を狙った犯罪が多い。地方は都市部に比べ少ないが、場所により異なる。

(4) クメール人の暮らし

カンボジア(クメール)人は農業をしている人たちが多い。仏教徒が多く、正月や盆に寺参りをするなど年中行事や冠婚葬祭を大事にしている。クメール人が好んで話すことはお金の話。日本人が挨拶と天気の話をするのと同じくらい頻繁にお金の話題が行き来する。



図1 クメールスカート・サンポット



図2 クメール料理・揚げ魚と野菜

2. 隊員の活動について

(1) 配属機関 バッターバン中等教員養成学校（2年制の中高の教員養成学校）

校長、第二校長、教務・事務主任、指導教官と職員で約70人。

(2) 要請内容

家庭科の指導教官として実習授業（ミシンを使った被服実習・調理実習）を中心に学生を指導するとともに、カウンターパートへの技術移転を行う。

(3) 活動の柱と内容

① T1 授業の実施

各クラス週2時間ずつ実施した。1年ではミシンの基礎縫い・食物分野の知識分野を補いながら調理実習を行い、2年ではミシンを使った被服製作と調理実習と知識分野の復習を行った。

② T2 授業の補助

カウンターパートが行う授業を学生・指導者の目線で見学し、実習授業では刺しゅう、編み物などでよりよい方法や新たな方法を紹介した。また、学生が行っている教育実習での授業を見学し生徒に助言するとともに、実習先の先生方とも意見交換を行った。

③ 教室・備品整備

使われていなかった壊れたミシンの修理を行い、生徒増に伴って足りなくなった教室を新たに新設した。また、棚に飾ってあった作品は指導教官のものがほとんどだったため、生徒の作品を飾るようにした。

④ 他州での協力

長期休業を利用して他州の中等教員養成学校を見学し、要望に合わせてミシンの修理や、講義・実習の単発授業を行った。

(4) 活動の成果と反省

① T1 授業の実施・・・200時間以上実施し生徒に還元されたものは多かった。教育実習では学生も実習授業を行っていた。

② T2 授業の補助・・・カウンターパートは新しい技術に対して貪欲に吸収しようという姿勢があったため、私がすることにも熱心だった。授業の中でのことに止まり発展しなかった。

③ 教室・備品整備・・・美しく教室を飾り、形を整えることは校長も推奨していたので成果があがった。形を整えようとする余り、訪問者が来るときだけ過剰に整備を行ったり、元々の備品の品質の悪さが問題であったりするため、根本的な解決にはいたらない。

④ 他州での協力・・・カウンターパートを育てるために行おうとしたが、システム上の問題があり、隊員のみで行うことになったのがとても残念だった。しかし、他州の校長・指導教官・学生には喜ばれたのでよい足がかりとなればと願っている。

ベリーズ隊員活動報告

伊藤 真梨子

(16-1, ベリーズ, 音楽, 神奈川県立鎌倉養護学校)

1 ベリーズについて

ベリーズは中米に属し、ユカタン半島の付け根に位置するカリブ海に面した国である。メキシコとグアテマラに接し、面積は日本の四国ほどである。1981年にイギリスから独立したが、現在もなおグアテマラはベリーズを認めておらず、グアテマラの地図にはベリーズは存在していない。人口は2004年の統計で27,3万人、首都はベルモパン、中米諸国では唯一、公用語を英語とする国である。しかし言語は多様で、英語のほかにもスペイン語、英語が訛ったクレオール語、マヤ語、ガリフナ語など様々な言語が話されている。また、それと同時に人種も多様で、メスティーソ、クレオール、マヤ、ガリフナ族などに加え、最近では台湾や中国からの移民も多くなっている。宗教はカトリックが大半を占めている。通貨はベリーズ・ドルで1米ドル=2ベリーズ・ドルの固定制。1999年に青年海外協力隊派遣取極、2000年から派遣が開始され、2006年7月現在、18名の隊員が活動している。主産業は、砂糖、バナナ、柑橘類などの農業であるが、最近では観光業などの比重も増加している。内陸にはマヤ遺跡も点在しており、先住のマヤ民族が昔ながらの生活を受け継いでいる。沿岸部ではカリブ海に浮かぶバリアリーフが世界遺産となっており、ダイビングスポットとしても人気が高い。

2 配属先での活動

(1) 配属先の概要

配属地はベリーズ最大の都市であるベリーズ・シティで、ハリケーンにより内陸部のベルモパンに遷都されるまで首都であった都市である。配属先はSt. Joseph. R. C. Schoolというローマ・カトリック系の学校で2006年1月現在、生徒数は約1100人(計33クラス)、教員数は39名と国内でも有数の大規模校である。学年は全8学年あり、幼稚部にあたるInfantが2学年と小学生にあたるStandardが6学年ある。Standard3までがクラス担任制で、Standard4からが教科担任制となっている。ボランティアは青年海外協力隊が自分を含め2名(美術と音楽)とアメリカのPeace Corp(平和部隊)が1名活動していた。

(2) 要請内容

要請内容は「現行の教育システムでは情操教育に重きがおかれておらず、体系的な指導が行われていないので、小学生へのデモンストレーションを通じて生徒が音楽に

親しみ、現地教員が音楽指導法を学ぶことを支援する。」というものであった。まずは音楽の授業で子どもたちへの直接指導を行い、音楽科授業が定着することを目標として活動した。

(3) 音楽科授業の実施

配属当初の授業時間数は8クラス/週しかなく、音楽科授業の定着には程遠いものであったため、校長と相談しながら徐々に授業時間数を増やしていった。また、授業時間についても子どもの年齢と集中力を考慮して、低学年については他の教科とは異なる時間割(30分という授業時間)で授業を行えるように時間割を改善していった。その結果、2年目は19クラス/週を受け持つことができるようになり、より効果的に授業を進められるようになった。(下図参照)

Music Time Table(2005~2006)

Time	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
9:00 ~ 9:30	Infant1-1	Infant1-2	Infant1-3		Infant1-4
10:15 ~ 10:45	Std1-1	Std1-2	Std1-3		Std1-4
11:00 ~ 11:30	Infant2-1	Infant2-2	Infant2-3		Infant2-4
13:05 ~ 13:50		Std5-4		Std2 (13:05 ~ 14:20)	Std5-1
13:50 ~ 14:30		Std5-3			
14:40 ~ 15:30		Std5-2		Std3 (14:30 ~ 15:30)	Std5-5

以下、実際に行った授業内容について4分野(歌唱指導・器楽指導・音楽鑑賞・音楽理論)に分けて述べることとする。

① 歌唱指導(手遊び歌、マザーグース、日本の童謡など)

歌唱指導については低学年を中心に、身体運動を伴った歌(手遊び歌)やマザーグース、日本の童謡などを扱った。歌うだけではどうしても集中力が持続できないので、体を動かしたり振りをつけたりして子どもたちが飽きてしまわないように工夫をした。日本の童謡は、日本語の歌詞を英訳して教えたが、「かえるの歌」(Frog Song)や「とんでったバナナ」(Banana Song)がその中でも子どもたちに大好評であったのは、生活に密着した親しみやすい内容であったからだと思う。他にも「うみ」(The Ocean)

や「アイアイ」(Monkey Song)、「ぞうさん」(Elephant Song)などを紹介したが、様々な童謡を英訳することで日本の童謡の持つ素晴らしさ(題材の多様性、歌詞の美しさなど)を改めて実感することができたのは、私自身にとって大きな収穫であった。

② 器楽指導(リコーダー、ピアニカ、打楽器)

配属当初、学校には楽器類などは一切なくピアノもなかったため、教頭先生から指導用のキーボードを借りて歌唱指導を主に行っていたが、リコーダーが比較的安価で手に入ることがわかり、中学年を中心にリコーダーの指導を始めた。リコーダーを持ってこなかったり、持ってきてもふざけて吹こうとしなかったりする子どもも多く、歌唱指導のような一斉指導を行うのがなかなか難しかったが、根気よく教えることで吹けるようになる子どもが増えてきた。その後、日本からの寄付によりピアニカや打楽器類をいただき、器楽指導の幅も広がったと思う。器楽指導は、ある程度その楽器が習得できるようになるまでに指導者、子どもたち双方に持続力と集中力が必要である。しかし、子どもたちは楽器への憧れはあるのだが集中力や忍耐力が養われておらず、すぐに飽きてしまうのでそれが最後まで悩みの種であった。子どもたちの多くは楽器を使うのが大好きで、クラス全員で一度に使うのに十分な楽器はあったのだが、大きな音が他のクラスに迷惑になるという環境上の問題と、子どもたちのコントロールができなくなるという指導上の問題から、当初私が目指していたクラス全員で合奏するということは残念ながらできなかった。クラス担任の協力と理解が得られ、子どもたちが楽器の扱いに慣れてくれば(丁寧に扱えるようになれば)可能ではないかと思うので、後任の方に期待している。

③ 音楽鑑賞(クラシック音楽、歌詞の聴き取り)

様々な音楽を聴く経験を持つという目的で、普段あまり聴く機会のないクラシック音楽を鑑賞した。ルロイ・アンダーソンの「踊る子猫」やチャイコフスキーの「くるみ割り人形」といった親しみやすい曲を選び、音楽を聴きながらストーリーを考えさせたりした。また、鑑賞とは少し離れるが、歌詞を穴埋めにしておいて聴きながら書き取る、ということも行った。曲の流れに乗りながら単語を聴き取ることが苦手な子どもも多く、スペルミスをする子が意外と多かったのに驚かされた。

④ 音楽理論(音名、音符の種類など)

音楽理論については、どの程度教えるべきか悩んだ時期もあったが、理論よりもまず歌ったり演奏したりという実体験から音楽を楽しんでもらうことが大切だと思い、あまり理論に深入りすることのないよう、音名(ドレミ…)や音符の種類については紹介程度に扱った。また、実際の楽器を見せることはできなかったが、楽器カードを使って様々な楽器の名前を覚えたりCDでその音を聴いたりした。

(4) 授業外での取り組み

① Festival of Arts への参加(2005, 5)

毎年5月から6月にかけて行われる芸術祭に参加した。音楽の発表の他にも演劇やダンスなどのステージ発表と美術作品の展示があり、ベリーズ・シティ地区の十

数校の学校が参加して2週間ほど行われるものである。子どもたちから応募を募り、オーディションをして合奏と歌唱の2団体で参加した。放課後の練習になかなか集まらなかったり、途中で練習を止めてしまう子もいたりしたが、無事発表を終えることができよかったと思う。

② 卒業式での演奏(2005, 6)

卒業式では、芸術祭に参加したメンバーから、さらに選抜した子どもたちによるリコーダー演奏を企画した。子どもたちや教員だけでなく、保護者や地域の人々に私の活動をアピールする良い機会になった。

③ 夏季休業中(7月～8月)の活動

2ヶ月間の夏休み中には、現地の音楽講師による Music Work Shop(研修会)に参加したり、他の音楽隊員と協力して Music Text Book を作成したりした。Work Shop は現地教員に対する指導方法を学ぶという点で大変参考になった。Music Text Book は他2名の音楽隊員と相談し、子どものための教科書というだけではなく、教員が見ても参考になるような指導書としても対応できるようなものを作る、という目的で作成した。同じ音楽隊員と協力したことで、内容的にも充実した Text Book を作ることできたと自負している。ページ数が多いため、それぞれの配属先に1部ずつ配布したが、配属先での Music Work Shop ではその中から抜粋して、資料づくりに役立てることができた。

④ 世界の笑顔プログラム(2006, 9)

活動1年目は、楽器類の不足が問題点の一つにあり、楽器指導を充実させることは難しかったが、2年目に入り「世界の笑顔プログラム」の寄付により、ピアノやリコーダー、打楽器類などが大量に手に入ったことで、器楽指導を効果的に進めることができた。また、後述する Music Club を開いたり、教員への楽器指導をしたりすることができたと思う。

⑤ Music Club(Wed.&Fri. 2006, 9～)

普段の授業の中では、個々の子どもに対して時間をとって楽器を教えるのは困難であるが、Music Club では一人ひとりに時間をとって指導をすることができ、楽器習得の成果が一番上がったのは Music Club に参加してくれた子どもたちであると思う。そのため、後述する教員向けの Music Lesson では、教員への指導の協力を子どもたちをお願いしたときもあった。子どもの方が新しいものを早く吸収する力もあり、それだけ楽器を習得することも早いと実感した。

⑥ Music Work Shop の開催

配属先の教員に対して研修会を2回行った。授業方法を身につけてもらうというよりも、私が行っている活動を分かってもらうという目的で、音楽理論やテストでの評価方法、授業内容を模擬授業形式で紹介したりした。

また、活動終了直前の時期には、隊員が活動している地方都市の小中学校からの要望により、他の音楽隊員と共に Music Work Shop を開催した。模擬授業、歌唱指導

の方法などを中心に紹介したが、どのような目的を持って私たちが音楽の指導をしているか、という思いを伝えることができたし、また一方で私自身の活動を改めて見つめ返す良い機会になったと思う。

⑦ Music Lesson for Teachers

前述した Music Work Shop のなかで教員に対する楽器指導をして欲しいという要望があり、それをきっかけにして教員向けの Music Lesson (ギター、キーボード、リコーダー) を始めることになった。音楽に興味を持っている教員が思っていたよりも多いことに驚かされたが、音楽科指導に対する意欲の高い教員のおかげで、私自身もずいぶん勇気づけられた。

⑧ Christmas Program

毎年クリスマスの時期に行われる学芸会で、Music Club の子どもたちの演奏を企画した。また、よさこいソーランを隊員と踊り、日本文化紹介をした。

(5) 問題点と課題

ハード面として音楽という授業の性質上、教室の環境が問題となっていたのだが、教室訪問型から移動教室型(子どもたちに音楽室に来てもらう)に移行することで周囲への配慮にそれほど神経質になることなく、授業が進められるようになった。

ソフト面では、一斉授業の難しさというものが常に自分の悩みとしてあり、一斉授業はベリーズでは無理なのか、自分の英語力、指導力不足が原因ではないかと思い悩んだ時期もあった。日本の学校では一斉授業が当たり前のように行われているが、ベリーズではあまり馴染まないのではないかと、私自身の考え方を変えなければいけないのではないかと感じ、自分のやり方を押し通すだけではだめで、もう少し長い目で、違う視点で考えてみようと思ったとき、授業を聞かない3分の2の子どもたちのためにできる課題を考えようとか、集中力を持続できるような授業の工夫をしようなど、前向きな考え方ができるようになったと思う。

ベリーズという国民性も関係するのかもしれないが、授業以外でも普段の子供たちの様子を見てみると、一つのことに集中できなかつたり、落ち着きがなかつたり同じことを何度も注意されていることが多く、この集中力と聴く力は子供たちにとって必要不可欠なものだと感じている。またこの2つの力は相互に関係するもので、集中力のある子は人の話も聞くことができ理解力も早いですが、逆に聴く力が育っていない子は集中力も散漫であるといえると思う。この2つの力を育てるために、器楽の習得を通じて忍耐力や集中力を育てたり、友達のパフォーマンスや教員の説明を聴いたり、様々な音楽に耳を傾ける態度を育てることが大切であると感じている。

(6) 音楽の授業の目的

1年と9ヶ月の活動を行ってきた中で、ベリーズにおける音楽教育の目的とはどのようなものか考えてみたので以下、記述する。

① Play (遊ぶ、演奏する) から Perform へ

器楽指導では楽器を扱ううちに遊びに走ってしまったり、ふざけたりしてしまう

子ども少なくなかった。Play と Perform 同じ「演奏する」という意味合いを持つ単語ではあるが、楽器を学ぶということは、Play(遊ぶ)ではなく Perform(自分の演奏を相手に聴かせる、という姿勢)するという意識を持たせることが大事であると感じている。

② 相手の Performance を聴く態度を育てること

Perform するという姿勢が大事であると同時に、相手の演奏に耳を傾けるという姿勢も重要であると思う。子どもたちの多くは前に立って歌ったり演奏したりすることが大好きであるが、それを聴く態度が育ってないように感じる。教室の環境面の問題もあるが、なるべく静かな空間で音楽の授業を行える状況が作ればよい。

③ 器楽指導を通して忍耐力、集中力を養うこと

ベリーズの国民性や文化、気候等による影響も大きいかもしれないが、多くのベリジアンはひとつのことを根気強く行う忍耐力とそれに必要な集中力があまり備わってないように感じる。器楽指導においては、習得のためにある程度の継続力や忍耐力、集中力が必要となってくるので、音楽の授業の中でそれらの力を養うことのできる効果は大きいと感じている。

④ 努力することの大切さを知ること

前項に関係するが、ある物事を習得するためには、毎日の積み重ねが大事であるということを知ってもらいたいと思う。子供たちも教員も、楽器を弾けるようになりたいという気持ちはとても強く持っているのだが、上手にできなかつたり難しいと感じたりしたときに途中であきらめてしまうことが多いので、この大切さを是非分かってほしい。そして努力してうまくいったときには、さらに音楽の面白さを実感できるということを知ってほしいと考えている。

⑤ 友達と協力して一つのを創り上げたときの感動や達成感を味わうこと

学校における音楽教育の醍醐味は合唱や合奏の活動を通してクラスや仲間と一体感を感じることだと思うので、Festival of arts やクリスマスプログラムなどの行事を通して様々な感動体験をして欲しいと思う。

(7) 活動を振り返って

私の全活動を振り返ってみると、子供たちの笑顔や現地の先生方の協力なしではありえなかったと実感している。本当に子供たち、先生たちに救われた1年と9ヶ月であった。時には、活動が思い通り進まないことでイライラしたりすることもあったが、現地から学ぶ姿勢や謙虚さ、そして忍耐力と同時に自分をアピールしていく厚かましさも必要だということを知ることができた。また、失敗を繰り返しながらも新たな気持ちで音楽の指導について試行錯誤できることはとても幸せであった。

また、私がベリーズという国について一番素晴らしいと感じていることなのだが、様々な文化、民族の人々が対立することもなく干渉しすぎることもなく、暮らしているという点がある。学校のクラスの中にもクレオール、メスティーソ、ガリフナ、タイワニーズ、チャイニーズと様々な民族があふれているが、それぞれ得意な分野(歌

や楽器)は違うし、好きな音楽も様々なのだが、その中に多様性の素晴らしさを感じると同時に、「みんなちがってみんないい」という言葉がびったりくるような気がしてくる。音楽にとって多様性や個性は大事な要素であるし、それがまとまったときと音楽のパワーはとても大きいと思う。ベリーズで活動期間を全うすることができて本当に良かった。

(8) 最後に…最近思うこと

活動を終えて帰国してから考えるようになったことを以下述べたいと思う。

帰国直後、めまぐるしい情報の変化や情報量の多さについていけない自分に愕然とした。しかしそれと同時に、情報に振りまわされず、情報を取捨選択できる自分の意思を持つことが大切なのではないかと最近考えるようになった。また、日々生活していて当たり前と思っていることについて当たり前と思わずに考えてみたり、疑ってみたりすることも大事であると思うようになった。2年弱、日本を離れていただけだが、このような考えを持つことができるようになったことは私にとって大きな収穫であると思う。

最後に、国際理解ということについて。最近、国際社会に目を向け、他国のことを理解することが大切だとよく言われているが、それ以前の問題として、自分の国について知り、自慢できることや熱く語れることを持つことが必要ではないかと思う。実際、私が任地で活動していた様々な場面で、もっと日本のことについて現地の言葉で話せるようにしておくべきだったと思うことがよくあった。まずは自分の国についてよく理解を深めた上で他国に目を向けることが大事であり、それが国際理解の第一歩につながるのではないかと思う。国際理解とは、異なる文化や生活、環境を持つものどうしが理解しようという姿勢を持ち、共感しあえたときに生じる心のやりとりではないだろうか。





隊員活動報告

平成16年度1次隊 ベリーズ
音楽 伊藤真梨子
(派遣期間7.2004~3.2006)

ベリーズについて



- 中米、ユカタン半島の付け根に位置するカリブ海に面した国。旧英領ホンジュラス、1981年に独立。
- 人口:27,3万人(2004)
- 首都:ベルモパン
- 言語:英語(公用語)、スペイン語、クレオール語、マヤ語、ガリフナ語



ベリーズについて2



- 人種:混血(メスティーソ)49%、クレオール黒人系25%、マヤ族11%、ガリフナ(黒人とカリブ族の混血)6% 他
- 宗教:カトリック70%、英国国教会11%、プロテスタント11%
- 通貨:ベリーズ・ドル(1米ドル=2ベリーズ・ドル)
- 1999年青年海外協力隊派遣取極、2000年派遣開始
- 世界第2位のバリアリーフが世界遺産となっている



マヤ遺跡



カリブ海に浮かぶ島々



rice & beans

配属先の概要



- 配属地:ベリーズ・シティ(ベリーズ最大の都市)
- 配属先:St.Joseph R.C. school
- 生徒数:約1100名(計33クラス)
Infant I・II~Standard I—Lower
Standard II~IV—Middle
Standard V & VI—Upper
- 教員数:39名(校長1名、教頭3名含む)
- ボランティア:3名(JOCV:2名、Peace Corp:1名)
(2006,1現在)

要請内容



- 現行の教育システムでは情操教育に重きがおかれておらず、体系的な指導が行われていないので、小学生へのデモンストレーションを通じて生徒が音楽に親しみ、現地教員が音楽指導法を学ぶことを支援する。

音楽科授業の実施

Music Time Table(2005~2006)

Time	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
9:00 ~ 9:30	Infant1 ₁	Infant1 ₁	Infant1 ₁		Infant1 ₁
10:15 ~ 10:45	Std1 ₁	Std1 ₁	Std1 ₁		Std1 ₁
11:00 ~ 11:30	Infant2 ₁	Infant2 ₁	Infant2 ₁		Infant2 ₁
13:05 ~ 13:50		Std5 ₁		Std2 (13:05 ~ 14:20)	Std5 ₁
13:50 ~ 14:30		Std5 ₁			
14:40 ~ 15:30		Std5 ₁		Std3 (14:30 ~ 15:30)	Std5 ₁

歌唱指導(手遊び歌、マザーグース、日本の童謡など)



Standard1の授業風景

Frog song

Frogs like singing every night.
It is really too much noise.
Ribbit, ribbit, ribbit, ribbit
Ribbit, ribbit, ribbit, ribbit, ribbit, ribbit, ribbit.

Banana Song

There is a banana, yellow one.
Here is an island in the blue sky.
Two kids are fighting for the banana.
The banana goes flying to run away from them.
"Where is the banana, my pretty one?"
Bananan, Bnanan, Ba-na-na!!

器楽指導(リコーダー、ピアノカ、打楽器)



Standard5



Standard1

音楽鑑賞(クラシック音楽、歌詞の聴き取り)



Standard2

一番人数の多いクラス

Let it Be
(The Beatles)
When I _____ myself in times of trouble
Mother Mary _____ to me
Speaking _____ of wisdom, Let it Be
And in my _____ of darkness
She is _____ right in front of me
_____ words of wisdom, Let it Be
*Let it Be, Let it Be, Let it Be, Let it Be
_____ words of wisdom, Let it Be

歌詞の聴き取り

音楽理論(音名、音符の種類)



Standard2 音名当て



Standard3 楽器の名前

Festival of Artsへの参加(2005.5)



Standard3・4からの選抜児童による演奏

卒業式での演奏(2005.6)



併設されているSt. Joseph Churchにて

夏季休業中(7月~8月)の活動

- Music Work Shop(研修会)への参加
- Music Text Bookの作成



Music Work Shopの様子

世界の笑顔プログラム(2006.9)

- 日本からの楽器類、教科書類の寄付



Music Club (Wed. & Fri.2006.9~)



キーボードの順番待ち

ガリフナドラム

Music Work Shopの開催

- Music Theory(How to read music)
- Evaluation(評価方法の提案)
- Idea for Music Lesson(授業内容の紹介)



配属校の先生たち



地方都市コロザルでのWork Shop

Music Lesson for Teachers

- Guitar(Monday)
- Keyboard(Tuesday)
- Recorder(Thursday) 週1回ずつ



リコーダーの練習風景



日ごりの練習の成果を発表

Christmas Program



音楽クラブの子どもたち



よさこいソーランで日本文化紹介

問題点と課題

ハード面

- 教室の環境→教室訪問型から移動教室型へ
- 楽器類の不足→世界の笑顔プログラム

ソフト面

- 一斉授業の難しさ
- 集中力を保たせるための授業の工夫
- 器楽指導における継続的な指導の必要性
- 教員の理解と協力体制

音楽の授業の目的

- Play(遊ぶ、演奏する)からPerformへ
- 相手のPerformanceを聴く態度を育てること
- 器楽指導を通して集中力、忍耐力を養うこと
- 努力することの大切さを知ること
- 友達と協力して一つのものを創りあげた時の達成感や感動を味わうこと

活動を振り返って

- 現地から学ぶ姿勢や謙虚さ
- 忍耐力と厚かましさを少々
- 試行錯誤できる幸せ
- 子供たち、先生たちに支えられた2年間
- みんな違っていて素晴らしい

最後に・・・

- 情報に流されない自分の意思をもつこと。
- 当たり前だと思っていることを疑ってみる。
- 自分の国について自慢できることや熱く語れることを持つことの大切さ。→国際理解の第一歩
- 英語力と国際理解は比例しない。
- 国際理解=相互理解、共感すること

ニカラグア算数教育活動報告

吉田 崇

(16-1, ニカラグア, 小学校教諭, 横浜市立飯田北小学校教諭)

1 ニカラグア国の概要について

(1) ニカラグア国の位置等

中米にあり、北側はホンジュラス、南側はコスタリカ、東側にカリブ海、西側に太平洋にはさまれた熱帯性気候の国である。中米では最大の面積を誇る。首都はマナグア。

(2) 人口及び宗教, 言語

人口は 563 万人 (2004 年) である (外務省ホームページより)。宗教はキリスト教カトリックである。言語はスペイン語が主であるが、カリブ側一部地域に置いて少数民族であるミスキート族がミスキート語を話す。

(3) ニカラグアの経済状況

正式通貨はコルドバ・オロであるが一般的にはペソを用いることが多い。1 人当たりの GDP 867 ドル (2005 年) である。主要な産業は農牧業 (コーヒー, 牛肉, さとうきび, とうもろこし等) である (外務省ホームページより)。

経済的にはハイチ国に次ぐ最貧国である。また、貧富の差がとても大きい。

(4) ニカラグアの主要な歴史的状況及び最近までの状況

1936 年より 1979 年までソモサ大統領による独裁政権が続くが、1979 年 7 月のサンディニスタ革命によりサンディニスタ政権が樹立。政権は急速に左傾化するものの、アメリカのレーガン、キューバのカストロの影響による内戦が 10 年ほど行われる。その後、1990 年に国連などによる国際監視の下に大統領選挙がなされ、親米保守派のチャモロ政権樹立。この政権によりニカラグアは平和構築、民主化、経済自由化などの大変革を遂げる。1 時期は経済成長率が中米第 1 位になったほどである。しかしながら、その後の大型地震、ハリケーンなどによりニカラグアはある意味崩壊してしまい、未だに国内は不安定、混乱状態にある。ニカラグア人は言う、「この国は貧乏なのではない、貧乏になってしまった国だ」と。昨年 11 月に大統領選挙が行われ自由党のボラーニョス政権からサンディニスタ党のオルテガ氏の政権に移る。就任式は 2007 年 1 月。サンディニスタ (共産) 党が勝利したらアメリカは援助等を退くと表明しているが、その後のニカラグアがどうなっていくかはまだわからない (一部外務省ホームページ参考)。

2 ニカラグアでの隊員活動について

(1) 要請概要から

配属先において、授業計画の立案、教材教具の作成、授業実践を全学年担当教員とともに行う。また、県教育事務所算数指導主事と連携し、県・市教育研修において研究授業を同僚とともに行う。隊員の勤務時間は1日8時間。校内で時間勤務し、特に低学年を中心に算数の授業を担当とともに受け持つ。残り3時間を県教育委員会指導主事との会議または自宅研修に当てる。隊員としての立場は技術助言者。

(2) 配属先について

配属先はジョンFケネディ小学校である。日本政府が数年前に建てた学校で、日本以外にも様々な国や機関から援助を受けているニカラグアの中でも恵まれた学校といつてよい。冷房付のパソコン室があり、その中にパソコンが20台ほど設置されていて、一部はインターネット接続もされている。

午前中は校舎が小学校として利用され、午後からは日本で言う中学校と高校、夜間学校となっている。生徒数は小学校だけで420名ほどで全部合わせると1000人を超えるどちらかといえば規模の大きい学校である。

ジョンFケネディという校名の由来は、アメリカ大統領ジョンFケネディ時代にその援助で創立したのが由来となっているようだ。少しではあるがケネディー族との交流もある。

学校の印象は私にとってとてもよい。様々な援助から成り立っている学校だからなのか、協力隊員として派遣された私をととても歓迎してくれた。校長が数学教員ということもあり、算数教育への理解も深い。一般的に協力隊員はよく物資をその配属先からねだられることを耳にするが、それはなく他の先生方も教授法などの技術面の協力を望む姿が多く見受けられた。

(3) 実際の活動について

① 2004年8月から2005年1月までの活動概要

派遣当初はまず、ニカラグアの生活や学校のスタイル、ニカラグアの教育のスタイル等に慣れるために3ヶ月間をめどに見学みの活動を行った。そこで派遣当初に学校から指定されたカウンターパートではなく、これからの活動によりふさわしいカウンターパートの選出も自ら行った。活動期間が1年9ヶ月と短いため、学校の教員の中でも算数教育や授業により熱心な教員をカウンターパートとして選んだ。そのカウンターパートとは2005年1月にホンジュラスで行われたJICA主催の広域研修に参加した。その研修では、筑波大附属小学校から細水先生が講師となり研修したが、この先のニカラグアでの活動のためになるだけでなく、日本に帰ってからの自分のためにもなる研修であった。

また、その3ヶ月間で、レオン市に同じ要請内容で派遣された3人と共に行うセミナーを開催するためにレオン市の教育委員会とも連絡を取り、その計画立案も行った。まずニカラグアの算数の授業の問題点や課題を見つけることから始めた。そ

して、2005年1月末にレオン市の小学校の低学年担当の先生方を対象にセミナーを行った。

② 2005年2月から2005年12月まで

1月にセミナーを行い、これからという時の2月にニカラグアの先生方による賃上げストライキが1ヶ月ほど行われてしまった。(背景にはニカラグアでの教員達の地位の低さ、賃金の低さがある。教員1人当たりの給料は70ドル程度、中産階級で300ドルが平均と言われているのでとても低いことがわかる。)これは痛手であった。セミナーそのものを系統立てて計画を練ったものであったし、何よりも参加者達の意識の低下が心配された。そのセミナーは月1回のペースで7月まで行った。対象者は約100人、3つの会場に分けて3日間ずつ行った。

一方、配属先の学校の方では、カウンターパートを低学年の担任になるように学校にお願いした。そして、2年生の授業を中心に低学年の算数の授業での活動を行った。私がマンパワーとなり、つまりT1となり授業を進めていく方法もあるが、帰国後のことを考え、つながっていけるようにあくまでもT2として授業のサポート役、先生方への助言、子どもたちへの個別支援に徹した活動を行った。その活動と平行して適宜学校の先生方へのセミナーもカウンターパートと協力して行った。

また、セミナーを行ったメンバー達と算数問題集テキストづくりも同時並行で行った。これは子どもたちに配るのではなく、セミナー参加者を対象に系統だった算数の授業を展開していけるように、また、ニカラグアの算数の指導要領になるべく即して、日本のやり方も加えたものを作った。系統内容は後述のセミナー計画に詳しい即している。

③ 2006年1月から帰国までの活動概要

算数問題集テキストができあがったのでその使い方などについてのセミナーも行い、テキストとセミナーがなるべくリンクしていけるようにした。約300冊作ったが、費用はJICAの隊員活動支援経費と自助努力促進のためにほんの一部をレオン市教育委員会にしてもらった。

配属先での活動も続ける一方、個人的に他の地域での算数活動も広げた。首都マナグアのスラム街で活動する隊員からの要請があり、ストリートチルドレン達への基礎教育支援としての算数力をつけるための活動を行った。配属先の校長の許可をもらい一週間に2、3日程度、環境、経済面などあらゆる方向から見ても生活困難、学習困難な児童たち(ストリートチルドレン)に対して、学校へ行っても学習について行けるように、途中で学校をやめたりしないように、想いを込めながら青空教室ではあったが授業を行った。

④ レオン市で行ったセミナーについて

○ セミナーを行うまでの経緯

- ・ 要請には、「県教育事務所算数指導主事と連携し、県・市教育研修において研究授業を同僚とともに行う。」とあるが、レオン市教育省からは特に何の連絡

もなし。

- 11月になってから隊員の側から呼びかけたことによって、セミナー計画の話になる。
- 隊員が自分の配属先学校での授業見学などをベースに算数教育における問題点を出し、それを元にセミナーの内容について話し合った。
- 教育省からは、セミナーに関する仕事を行う、指導主事を一人配置してもらった。
- 隊員内で、セミナー計画案をつくった上で、CP及び担当指導主事で、セミナーの計画を行った。
- 内容的に、年度始めの1月から7月まで、月1回ずつ行うこととし、内容は、小学1年生の計算分野の基礎に絞った。

○ セミナーの概要

- 目的…わかりやすく楽しい授業づくりを通して、基礎計算力の向上をめざす。
- 対象…レオン市内公立小学校1，2年生担当者
- 運営方法…レオン市教育省(MECD)との連携による運営

○ セミナー計画(表1)

1月	9までの数、数の合成・分解
2月	たし算(繰り上がりなし)
3月	ひき算(繰り下がりなし)
4月	19までの数、3つの数の計算
5月	たし算(繰り上がり)
6月	ひき算(繰り下がり)
7月	99までの数

○ 具体的な研修内容

- 単元導入時の授業の進め方とそのポイントについて
- 系統立てられた練習問題について
- 楽しい学習ゲームについて
- ディスカッション(第5回以降)
- 十進法に基づく計算法の紹介
- 「数の合成・分解」の導入
- 低コストで抑える教材作り
- 参加者の声を反映した研修会づくり

○ セミナーの成果

- 参加者の授業に対する意識の変化

- ・ カウンターパートの意識向上
- ・ 配属された学校の教職員の意識の向上
- ・ 研修会の機会設定
- ・ 配属校以外の先生方とのふれあい
- ・ チームとして活動内容・研修内容の広がり
- ・ 研修会を運営する上でのカウンターパートがない。(続いていかない。)
- ・ 研修会参加者のアフターケアなどができない。
- ・ 先生方の理解・定着度への疑問と限界
- ・ 1, 2年担任以外の配属校先生方の不参加
- ・ 運営上の問題

⑤ 活動上の成果及び反省点

- ・ CPとの授業計画をするための打ち合わせ時間がなかなかとれない(カウンターパートが副業を行っているため)
- ・ 他の学年の授業への参加
- ・ 授業数の確保(ストライキがあったり無計画な学校運営のせいだったり)
- ・ 物資不足(日本と比べてしまうと・・・)
- ・ 子どもの学力定着(1年9ヶ月ではなかなか成果は見えません)
- ・ もっと教材作成に力を入れるべきだった(時間があるようではなかった)
- ・ 小学校教員として世界の様々な教育状況について学ぶことができた
- ・ T1として授業をあまりしなかったけれども、もっとやってもよかったのではないか(他の隊員活動報告をふまえて)
- ・ 子どもがかわいいのは世界中同じですね
- ・ 自分がその学校に行ったことにより、その学校の先生達の授業に対する意識向上があがったのではないか

⑥ 配属先の学校への助言, 提言

- ・ 子どもたち中心の授業をするために、時間、教材、言葉、気持ちが大切です
- ・ 「教えること」は「待つこと」です
- ・ 授業は子どもたちが間違えるためにあります
- ・ 算数研究グループを作ることをすすめ
- ・ 算数問題集テキストを十分に活用してください

⑦ 後任隊員へのメッセージ

- ・ 算数の授業への協力活動を続けてください
- ・ 算数研究グループの組織化を試みてください
- ・ 先生方対象に算数の基礎教育セミナーを開いてください

(4) JICA及び文部科学省への助言, 提言

① 長期的なビジョンをもつての隊員活動の要請

私たち現職参加の隊員達は任期延長ができないうえに一般隊員に加えて活動期間

も短く設定されています。他の分野もそうかもしれませんが特に教育分野については1, 2年間でなかなか成果の見えるものではありません。私たちが作りあげたものを礎にして間を空けることなく積み上げていかなければ、私たちの行った活動はメッキの様にはがれ落ちてしまうことでしょうか。せめて5年ないし10年のビジョンをもって要請に当たって欲しいです。後任隊員を自分が活動している間に来ようようにしてもらえるのがベストです。(2007年1月現在後任が決まったという報告はなし。決まったら私に伝えてくれるようJICAニカラグア事務所調整員には伝えてあります。)近い国ならば、私が長期休みごとに行ってボランティアをすることも可能ですが、ニカラグアはそういう風にして行くにはコスト的にも時間的にも厳しい距離にある国です。プロフェッショナルである現職教員を隊員として要請するに当たって以上のようなことをふまえていただければ、大きな費用をかけて派遣される私たちの活動が少しでも無駄にならず実になっていくと思います。

② 帰国隊員へのサポート

私が帰国してから、1週間で現場復帰でした。自治体にもよりますが、横浜市では職場異動が原則となっています。日本とは環境面などあらゆるところが全く違う国から帰って来て1週間での現場復帰はかなり厳しいものがありました。現在(2006年5月末から)、疲労性によるうつ病になってしまい、自分の意志とは反対に職場で働けなくなっています。(2007年1月に復帰予定)教育委員会指定の精神科医とも面接しましたが、私の様な例が多く見受けられるとのことでした。せっかく派遣されておきながら私の様な状態になったのでは、国にとっても、自治体にとっても学校にとっても大きな損失になると考えます。例を挙げるとイラク派遣された自衛隊は派遣後に3ヶ月の休暇があると聞きます。自衛隊とはまた違った性質のものであるとは思いますが、開発途上国と言う過酷な環境の中で活動し、帰国する私たちのことをもう少し考えて頂ければ、現職派遣制度が更にお互いの国にとって質の高いものになりえるのではないのでしょうか。よりよい方向への改善を求めます。

③ 現職参加の隊員を帰国後どう活かしていくか

(i) 教え子達とのつながり

私は6年生を卒業させてからの派遣でした。帰国後その子どもたちは中学3年生になっていて、中学校の総合学習の中で国際協力の分野のテーマを取り上げた子どもたちと良い情報交換ができました。その子たちが高校、大学と進学、成長するにつれて私を良い材料として利用してもらえればと思っています。

(ii) 帰国後の職場異動とその後

自治体にもよりますが、私の所属している横浜市では派遣後は職場異動が原則となっています。帰国後、学校現場にすぐに活かせることを考えると異動しない方が、派遣中のつながりから考えてもよいのではないかと思います。もちろん、人それぞれ、学校それぞれのやり方が違いますので一概に言えませんが、異動しないほうがうまくリンクできるのではないかと思います。また、貴重な経験をさ

せて頂いた私たちにとって、その経験をどう日本の子どもたちに、学校に活かしていくかを自分自身はもちろん、JICA及び文部科学省、教育委員会と考えて行ければと思っています。





ニカラグアの概要

- ・人口563万人(2005年)
- ・カトリック教国
- ・中米最大の面積だがハイチに次ぐ中米最貧国
(教員の地位も賃金もとても低いです。)
- ・言葉は主にスペイン語

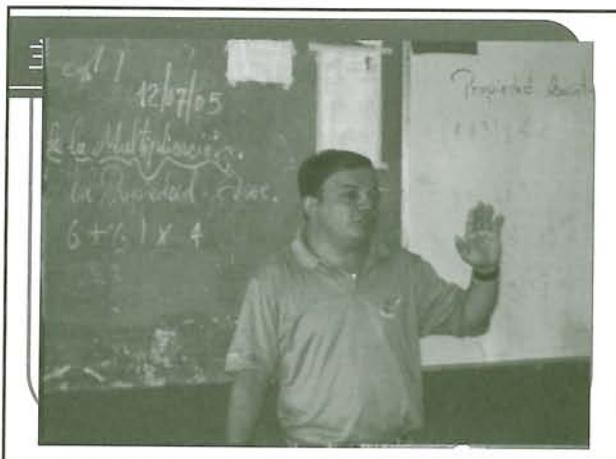


要請概要から

- 配属先において、**授業計画の立案、教材教具の作成、授業実践**を全学年担当教員とともに行う。また、**県教育事務所算数指導主事と連携し、県・市教育研修において研究授業**を同僚とともに行う。隊員の勤務時間は1日8時間。校内で時間勤務し、**特に低学年を中心に算数の授業**を担当とともに受け持つ。残り3時間を県教育委員会指導主事との会議または自宅研修に当てる。

ジョンFケネディ小学校について

- 午前: 小学校 (Primaria)
- 午後: 中学高校 (Secundaria)
- 夜: 夜間学校 (Secundaria)
- 生徒数: 小学校 423名
- クラス数: 12クラス (各学年2クラス)
- 教職員数: 14名
- 校名の由来
- 学校の印象



活動について

- 担当教科及び学年
2年生の算数(CPのクラス)中心
1年生の算数(1クラスのみ)少々
- 活動内容
授業の補助的立場(T2)として授業に参加
CPに授業についての助言
子どもたちの個別指導

クラスにおける年齢構成(2004年の資料から)

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
6歳	37	0	0	0	0	0	37
7歳	21	22	0	0	0	0	43
8歳	8	13	9	1	0	0	31
9歳	2	16	18	24	0	0	60
10歳	2	10	8	8	6	7	41
11歳	1	7	7	13	27	9	64
12歳	1	1	1	8	10	17	38
13歳	0	2	3	5	12	9	31
14歳	0	1	0	2	2	5	10
15歳以上	0	0	0	0	6	4	10
合計	72	72	46	61	63	51	365

活動について

- 主な問題点と課題
 - ・CPとの授業計画打ち合わせ時間
 - ・他の学年の授業への参加
 - ・授業数の確保
 - ・物資不足(まだいい方なのかも・・・)
 - ・子どもの学力定着
 - ・より一層の授業の工夫(クラスはカオス!?)

2004年8月から2006年2月までの活動

- ・2004年8月から12月まで
 - ・ニカラグアの教育を知るための授業観察
 - ・レオン市におけるセミナーのための計画立案
- ・2005年1月から12月まで
 - ・ホンジュラスの首都テグシガルパにおけるJICA主催の算数広域研修会への参加(カウンターパートと共に)
 - ・レオン市において隊員達と算数教育セミナーを開催(1月から7月まで)
 - ・1, 2年の算数授業への技術協力及び情報提供
 - ・ジョンFケネディ小学校における算数セミナーの開催
 - ・レオン市の隊員及びカウンターパート、教育省と協力しての算数問題集テキストの作成

2004年8月から2006年2月までの活動

- ・2006年1, 2月
 - ・レオン市の協力隊員とそのカウンターパート達などと協力しての算数問題集テキストの作成
 - ・算数問題集テキストの使用についてレオン市内小学校教員を対象にしたセミナーの開催
 - ・1, 2年の算数授業への技術協力及び情報提供
 - ・算数問題集テキストの使い方について配属先学校の先生方を対象にしたセミナー開催
-
- ・週に2, 3日程度、首都マナグアのルイスアルフォンソ公園において学習困難児童(環境的, 経済的)に対して算数の青空授業(映像があります)

研修会を行うまでの経緯

- 要請には、「県教育事務所算数指導主事と連携し、県・市教育研修において研究授業を同僚とともに行う。」とあるが、レオン市教育省からは特に何の連絡もなし。
- 11月になってから隊員の側から呼びかけたことによって、セミナー計画の話になる。
- 隊員が自分の配属先学校での授業見学などをベースに算数教育における問題点を出し、それを元にセミナーの内容について話し合った。
- 教育省からは、セミナーに関する仕事を行う、指導主事を一人配置してもらった。
- 隊員内で、セミナー計画案をつかった上で、CP及び担当指導主事で、セミナーの計画を行った。
- 内容的に、年度始めの1月から7月まで、月1回ずつ行うこととし、内容は、小学1年生の計算分野の基礎に絞った。

研修会の概要

- 目的
わかりやすく楽しい授業づくりを通して、基礎計算力の向上をめざす。
- 対象
レオン市内公立小学校1,2年生担当者
- 運営方法
レオン市教育省(MECD)との連携による運営

研修会の概要

● 計画

1月	9までの数, 数の合成・分解
2月	たし算(繰り上がりなし)
3月	ひき算(繰り下がりなし)
4月	19までの数, 3つの数の計算
5月	たし算(繰り上がり)
6月	ひき算(繰り下がり)
7月	99までの数

研修会の概要

ントについて

2. 系統立てられた練習問題について
3. 楽しい学習ゲームについて
4. ディスカッション(第5回以降)

研修会の概要

- 十進法に基づく計算法の紹介
「数の合成・分解」の導入
- 低コストで抑える教材作り
- 参加者の声を反映した研修会づくり

活動の成果

- よかった点
 - ・ 参加者の授業に対する意識の変化
 - ・ カウンターパートの意識向上
 - ・ 配属された学校の教職員の意識の向上
 - ・ 研修会の機会設定
 - ・ 配属校以外の先生方とのふれあい
 - ・ チームとして活動内容・研修内容の広がり

活動の成果

- 問題点
 - ・ 研修会を運営する上でのカウンターパートがない。(続いていかない。)
 - ・ 研修会参加者のアフターケアなどができない。
 - ・ 先生方の理解・定着度への疑問と限界
 - ・ 1, 2年担任以外の配属校先生方の不参加
 - ・ 運営上の問題

活動の反省点

- ・ もっと教材作成に力を入れるべきだった
- ・ 小学校教員として世界の様々な教育状況について学ぶことができた
- ・ T1として授業をあまりしなかったけれども、もっとやってもよかったのではないか
- ・ 子どもがかわいいのは世界中同じですね

配属先の学校への助言, 提言

- ・ 子どもたち中心の授業をするために, 時間, 教材, 言葉, 気持ちが大切です
- ・ 「教えること」は「待つこと」です
- ・ 授業は子どもたちが間違えるためにあります
- ・ 算数研究グループを作ることをすすめ
- ・ 算数問題集テキストを十分に活用してください

後任隊員へのメッセージ

- 算数の授業への協力活動を続けてください
- 算数研究グループの組織化を試みてください
- 先生方対象に算数の基礎教育セミナーを開いてください

この経験をどう活かしていくか

- 教え子達(現中学生)との情報交換
- 小学校現場の中で...模索中

JICA及び文科省への助言

- 長期的なビジョンをもつての隊員活動の要請
- 帰国隊員へのサポート(現職, 一般)
- 現職参加の隊員を帰国後どう活かしていくか

Muchas graçias



配布資料

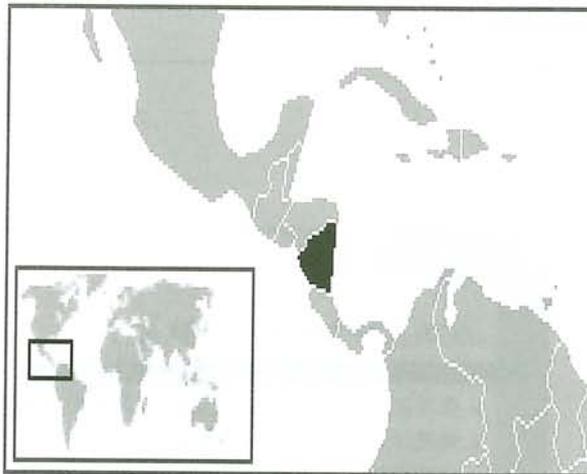
ニカラグア算数活動報告

16年度1次隊 小学校教諭

吉田 崇

(現在横浜市立飯田北小学校勤務)

1. ニカラグア国の概要



2. ニカラグアでの隊員活動について

(1) 要請内容から

(2) 配属先について

(3) 実際の活動について

① 2004年8月から2005年1月までの活動概要

・ニカラグアに慣れることとニカラグアの教育実態を目の当たりにして

② 2005年2月から2005年12月まで

・先生方対象のセミナーの開催

・ニカラグアの教員達による1ヶ月にわたる賃上げストライキ

③ 2006年1月から帰国までの活動概要

- ・算数問題集テキストづくり
- ・広がる活動→時間がもっと欲しい！

④ レオン市で行ったセミナーについて

- セミナーを行うまでの経緯

- セミナーの概要

- セミナー計画（表1）

1月	9までの数, 数の合成・分解
2月	たし算（繰り上がりなし）
3月	ひき算（繰り下がりなし）
4月	19までの数, 3つの数の計算
5月	たし算（繰り上がり）
6月	ひき算（繰り下がり）
7月	99までの数

- 具体的な研修内容

- セミナーの成果

⑤ 活動上の成果及び反省点

⑥ 配属先の学校への助言，提言

⑦ 後任隊員へのメッセージ

(2) JICA及び文部科学省への助言，提言

① 長期的なビジョンをもつての隊員活動の要請

② 帰国隊員へのサポート

・今年の私を例にして

③ 帰国後の隊員をどう活かしていくか

(1) 教え子達とのつながり

(2) 帰国後の職場異動とその後

ご静聴ありがとうございました

ホンジュラスにおける

基礎教育総合強化モデルプロジェクト (PROEPA) での活動

加藤 園乃美

(16-1, ホンジュラス, 小学校教諭, 前橋市立新田小学校)

1 任国の概要

ホンジュラスは中米のカリブ海に面した国で、国土は日本の約3分の1である。1828年にスペインから独立し、以後独立国家としての道を歩む。他の開発途上国同様に、都市部と農村部の貧富の差が激しく「マラス」と呼ばれる集団による殺人、窃盗などが大きな問題になっている。政府の公約として、教育の充実は常に掲げられているが、留年制度や教員の指導力不足、給料問題、子供が労働力として必要などのさまざまな理由から、目に見えての改善は難しい現状である。人々はとても穏やかで明るい。底抜けの明るさというよりは少し恥ずかしがりやなところもあり、隊員同士では「日本人に少し似てるね」と言われていた。



写真1 首都テグシガルパ

2 ホンジュラスにおける基礎教育総合強化プロジェクト (PROEPA)

(1) プロジェクトの概要

ホンジュラスの教育分野にはプロジェクトが2つある。1つは算数教育をターゲットにした、「算数指導力向上プロジェクト (PROMETAM)」、もう1つが算数も含め子供、家庭、地域に総合的なアプローチをすることによって基礎教育のレベル向上をめざす「基礎教育総合強化モデルプロジェクト (PROEPA)」である。2つとも「義務教育における留年率、退学率の低下」を目標としている。私は PROEPA の隊員として活動した。

目標 小学校における留年率、退学率を下げる

第1フェーズ(2001~2005)	第2フェーズ(2006~)	第3フェーズ
実地調査とそれに基づく活動の展開、教材の開発、第2フェーズへ持っていく活動の精選とマニュアルづくり	エルパライス県全域展開、第3フェーズに向けさらに精選するためのモニタリングと修正 この時点で終了もある	国認可のマニュアル、教材として全国展開

私が赴任した 2004 年はまだこの流れが決まっていない時期で、プロジェクトメンバーと JICA 事務所と会議を繰り返し一応の流れを決めた。それにより、ちょうど私の任期は第 1 フェーズから第 2 フェーズに移行する時期になり、それまでの隊員の仕事とはかなり違うことをやることになった。

(2) 隊員の職種と任地

- ・プロジェクトコーディネーター→隊員と事務所との調整。プロジェクト全体像の把握、企画等
- ・小学校教諭→小学校での学力向上、教員の指導力向上のためのアプローチ
- ・幼稚園教諭→就学前教育の質の向上、教員の育成
- ・保健師→学校保健指導、家庭での保健衛生教育
- ・村落開発員→保護者の意識改革、地域教育環境向上

プロジェクト総勢約 14 名
オロポリ、グイノペ支部に分かれる

任地は首都からバスで約 2 時間半のグイノペという地域で、小学校教諭は 2～3 人である。

3 活動

活動場所であるグイノペのプロジェクト対象校は 5 つ (交通手段、人数の関係上) である。

(1) 2005 年 8 月までの活動

① ホンジュラスの小学校教育の現状把握

- ・小学校訪問・授業観察・年間指導計画の把握
- ・アンケート・聞き取り調査
- ・教科書内容の把握
- ・主要教科以外の実施状況把握

② 教員の指導力向上

- ・月 1 回の教員研修の実施 (CAD を利用)
- ・公開授業の実施 (単、複式学級共に年 1 回ずつ)
- ・学級経営マニュアルの月刊発行
- ・教育大会 (年 1 回) の開催

③ 学力向上

- ・朝自習 (基礎計算力向上) マニュアルと教材の開発、モニタリング
- ・現地教員による標準テストの作成、児童への一斉実施
- ・休日を利用したの補習活動
- ・学校放課後の補習の啓発
- ・地域人材の発掘
- ・学習遅延児に対する算数の補助教材マニュアルの作成



写真 2 小学校訪問



写真 3 公開授業



写真 4 学級経営マニュアル



写真 5 朝自習



写真 6 標準テストの作成

通常の1日の流れ

7:30 授業開始・朝自習など活動のモニタリング
8:00~12:30 授業観察、補助、音楽の授業
14:00~19:00 事務所で企画、会議、教材開発、
マニュアル作りなど
19:00 ホームステイ先に帰宅

小学校教諭3人でこの仕事をやっていたわけだが、「ここは日本？」と思うほど忙しかった。幸いにしてグイノペの先生達は私達に協力的な人が多く、だから活動の成果も出やすかったのだと思う。カウンターパートの元グイノペ教育長のソイラは非常に頭の良い女性で、公私ともに一番身近なパートナーであった。

(2) 2005年8月から2006年3月までの活動

① 第2フェーズに持っていく活動の選抜

4年間のプロジェクト活動のなかでグイノペ、オロポリ共にそれぞれの職種が行った活動の中で汎用性・有効性・持続性に優れたものを選抜した。結果、12の活動のなかで5つの活動が選ばれ第2フェーズにむけての本格的なマニュアル作りが始まった。

② マニュアル作り

5つの活動の中で、私はグイノペの小学校教諭隊員が行っていた活動である「学級経営マニュアル」と基礎計算の能力向上のための「朝自習マニュアル」の作成に関わった。半年後にはそれらが大量生産されてエルパライソ県全域に配布され、たくさんの教師や子供たちが使うものであるため、教材の見直し、実施方法の効率化も含め本当に時間との戦いであった。マニュアル作りのために短期隊員としてグラフィックデザイナーの方も来られ、「出版物を作る」という今までに経験したことのない仕事をさせてもらった。

○主な仕事

- ・データのまとめ
- ・簡潔にわかりやすく、正しいスペイン語に
- ・入稿 ・乱丁チェック ・配送計画
- ・研修用マニュアルの作成

③ マニュアル普及のための研修

マニュアル完成後の2005年の2月から、5つの活動をマニュアルに沿って実施



写真7 マニュアル



写真8 朝自習のページ(1部分)

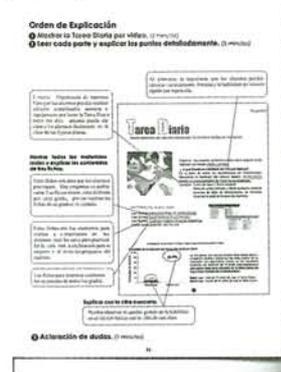


写真9 研修用マニュアル

するための研修を行った。まず、県、市の教育長、指導主事に対して2日にわたる研修を行い、彼らがそれぞれの地区で教員に同じ研修をする方法を想定した。その教育長以下研修実施者のために「研修マニュアル」、いわゆる赤本を作成し、具体的な活動のイメージをもちながら研修するためのビデオも使った。まず、プロジェクトのカウンターパートである2人の先生に見本研修をしてもらい、指導主事たちが小グループに分かれて実際に自分たちができるかどうかお互いに模擬研修を行った。その後、彼らが各地区で研修を行う際にはプロジェクトメンバーが手分けをして見に行き、全国展開したときにこのトップダウンの研修システムが可能かどうかをモニタリングした。その際、マニュアルや教材の配布の指示やチェック同時並行して行った。



写真10 教育長向け研修会



写真11 教育長、指導主事達

3 活動を振り返って

(1) 全体として

・人間関係の大切さ

まじめさやルーズさなど国民性はかなり違う部分があるのは当たり前だが、いろいろなことを要求することだけでなくまずは遊びや、文化交流を通して人間関係を作ることが大切であることを実感した。よい人間関係ができれば、こちらが本気でやろうとしていることに必ず答えてくれる人がある。

・言葉の大切さ

「言葉をしゃべれるかどうか」によって、「どのくらい自分たちの言語を本気で学ぼうとしているか」を見られていたような気がする。ホームステイの家族がとても厳しく、でもわかりやすく言語を教えてくれたことが生活、活動のすべてに大変役立った。

・トップに立つ人の責任の重さ

国全体としての体制を変えないと解決しないことがたくさんあった。「やる気があってよい先生はたくさんいるが彼らに給料が支払われないことでモチベーションが下がる」、「〇〇長と呼ばれる人が、その経験、人柄、能力によって公平に決められるのではなく政党やコネで決まっている」など、「なぜ？」と思う理不尽なことが非常に多かった。結局、教育水準を上げないと国としてのその部分も改善されずにいつまでも同じことがくり返されるだろう。その人のやる気や能力が正当に評価される社会構造の大切さを痛感した。



写真12 一般教員向け研修会

- ・自分の国を知ること

他国と自国との比較によって長所も短所も見えてくる。他国の文化や歴史を知っても、自国のことを知らなければ本当に理解はできない。

(2) 活動

- ・プロジェクト隊員として充実した活動を

個人隊員とプロジェクト隊員は仕事の内容も、求められているものも環境もちがう。特に私がいた2年間は「目に見える成果が出る活動をする」ことが要求され、何をやるにも期限があった。「ゆったりした時の流れの中で自分の活動が比較的自由にできること」にあこがれたこともあったが、グイノペの人たちと関わる中で先輩隊員達がどれだけ苦労してこの人間関係を作ってくれたかを実感し、その環境の中で仕事ができる自分をとても幸せに思った。そして自分も「後輩隊員達にできるだけ良いものを残していこう」という気持ちでがんばることができた。時間を有効活用して授業を行ったり、余暇を楽しむことも自分の気持ちの持ち方一つだと思う。

- ・継続すること

毎朝のモニタリング、活動に否定的な先生の教室に「これやってみて下さい」と毎日通うことなどあの時はつらかったけれどあきらめなくてよかったと思うことがたくさんある。

- ・仕事もいいけど生活を楽しむ

生活を楽しむ気持ちがあるからその国が好きになって、仕事もやっていけると思う。「こうすべき」というものを少しゆるめて、相手と同じテンポでいられたら楽しいかな。



ホンジュラスにおける 基礎教育総合強化プロジェクト



ホンジュラスとは

- ・国名 ホンジュラス共和国 
- ・人口 約610万人
- ・面積 11万2492km²(日本の約3分の1)
- ・位置 中米 日本との時差は15時間
- ・主要言語 スペイン語
- ・教育 小学校6年は義務

配属先

エルパライス県教育委員会
グイノベ市に拠点を置く「基礎教育総合強化モデルプロジェクト」メンバーとして派遣



プロジェクトの目標と段階

目標 小学校における留年率、退学率を下げる

第1フェーズ(2001~2005)

実地調査とそれに基づく活動の展開、教材の開発、
第2フェーズへ持っていく活動の精選と
マニュアルづくり

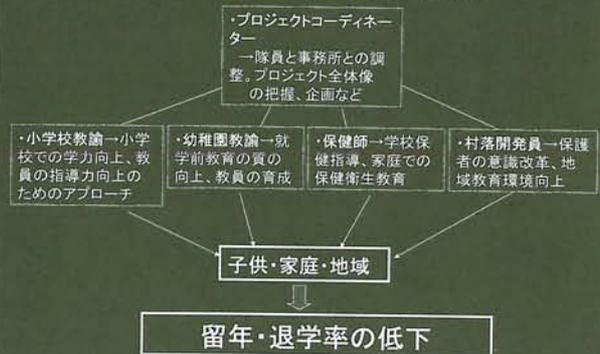
第2フェーズ(2006~)

エルパライス県全域展開
活動をさらに精選するためのモニタリングと修正
この時点でのプロジェクト終了もある

第3フェーズ

国認可のマニュアル、教材として全国展開

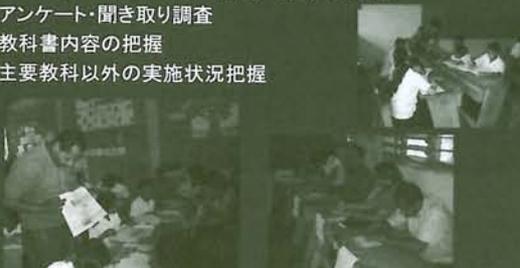
プロジェクト隊員と役割



活動

1. ホンジュラスの小学校教育の現状把握

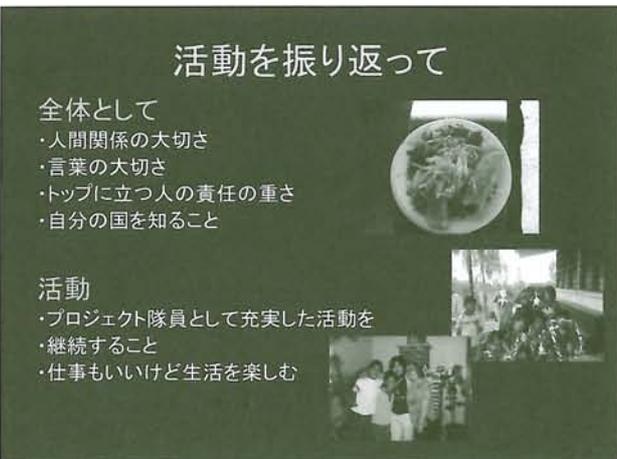
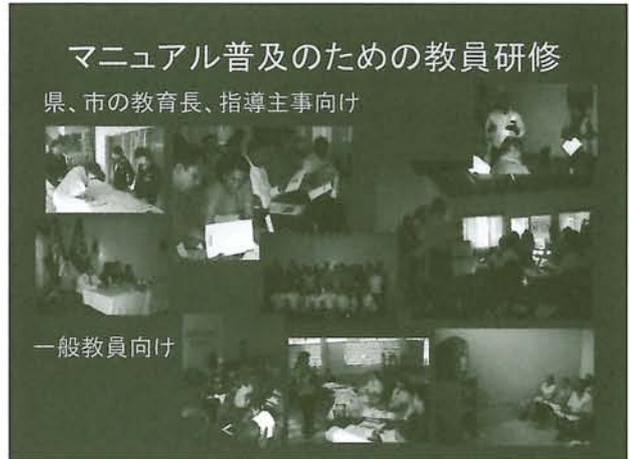
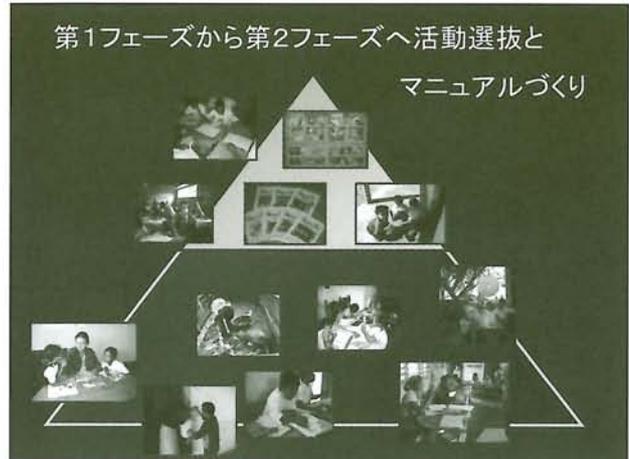
- ・小学校訪問・授業観察・年間指導計画の把握
- ・アンケート・聞き取り調査
- ・教科書内容の把握
- ・主要教科以外の実施状況把握



2. 教員の指導力向上

- ・月1回の教員研修の実施(CADを利用)
- ・公開授業の実施(単式、複式学級共に年1回ずつ)
- ・学級経営マニュアルの月刊発行
- ・教育大会(年1回)の開催





セネガルでの情操教育活動

藤井 克浩

(16-1, セネガル, 小学校教諭, 川崎市立西梶ヶ谷小学校)

1 はじめに

私が赴任したセネガルは、西アフリカの最西端、西アフリカの玄関口と言われている国です。ダカルラリーのゴールであるダカルは、セネガルの首都になります。

私の任地、カオラックは首都ダカルから南東へ190km。車で3時間から4時間ほどのところにある、セネガルではダカル、ティエスにつぐ大きな町です。

私の派遣要請内容は、「小学校の情操教育分野(図工、体育、音楽、演劇など)充実への支援を目的として視学官、教員らと協議しつつ数校のモデル校において、教員・生徒に指導を行う。同地に適した指導法の確立、セミナーや報告会を通しての情操教育の普及が求められる。」ということで、現地の先生たちに対して、体育や図工、音楽の授業についてのアドバイスやアイデアの提供、子どもたちへの授業、その他、E F I (教員養成学校)でのセミナーなどを行ってきました。

私の配属は、「I D E N Kaolack Commune」カオラック市教育委員会でした。私は、このカオラックの2代目の小学校隊員にあたります。このカオラック市教育委員会に所属して、市内にある3つの小学校の巡回指導を行いました。巡回指導を行った3校の小学校うち、イブライマ・デュフとニムザットは前任隊員から引き継いだ学校です。アブジャロが新しく巡回校に加わりました。この3校の巡回については、私の赴任前から決まっていました。

2 セネガルの情操教育の様子

まず、セネガルの情操教育の様子について、私が見聞きしてきた限りでお話させてもらいたいと思います。あくまでも、私が見聞きした範囲内の話ですので、実際とは異なることがあるかも知れません。

(1) 図工

まず、図工については、工作の授業はほとんど行われることなく、デッサンが中心でした。工作に使う材料や道具が揃わないということが理由のひとつだと思います。このデッサンの授業は、何か実物を見て描いたり、想像して描いたりするのではなく、先生が黒板に描いたものをそのまま写すというものでした。例えば、先生が黒板にバケツを描けばそのバケツをそのまま描く、魚を描けばその魚をそのまま描く、自分の工夫といったものは認められず、先生が描いたものを、そのとおりに写せることが良

いという評価した。

(2) 音楽

音楽は、歌唱指導だけです。楽器がないので演奏や伴奏はありません。先生たちのほとんどが、楽譜を読んだり、描いたりが出来ず、ドレミファソラシドすら知らない人が大勢いました。

授業は、先生がその日に歌う歌詞を黒板に書いて、一度歌って聴かせます。そのあと、言葉の説明や歌詞の内容を説明します。それから、いくつか区切って、先生が歌って、その後子どもたちが続くということを繰り返して歌を覚えます。

楽器が無く伴奏が出来ないので仕方がないのですが、同じ歌でも、歌う先生によって若干違っているのが面白いなと思いました。

(3) 体育

体育は、内容がほぼ決まっています、だいたいサッカーかリレーでした。それも、サッカーだとゴールの代わりに大きな石をふたつずつおいてラインも引かず、ただ試合をしているだけだし、リレーもふたつのグループが競争するときに、なぜかAのチームとBのチームは走る距離があきらかに違うというような、良い言い方をするとおおらかなこともしていました(ハンデだったのでしょうか?)。

でも、授業の流し方はある程度はっきりと決まっていました。まず、全員がそろって行進をし、ランニング、準備体操、そしてその日の活動、最後に先生からの話があって、手洗い・うがいをして教室へ戻ります。この最後の手洗い、うがいをして戻るといのはちょっと意外でした。最初はびっくりして、日本でもきちんとさせなきゃなど少し反省をしました。

それから、セネガルの正式な体育のやり方としてPCMEという方法があります。これは、少し複雑な方法です。まず、赤、緑、黄(セネガルの国旗の色です)、3色のチームに分かれます。それから、複数の活動の場をつくります。例えばA、B、Cという場を作れば、Aの場は幅跳び、Bの場はリレー、Cの場は旗取り、というように決めて、それぞれの場に赤、青、黄と小グループが別れて競争をします。それぞれの場で対戦をして、ある程度の時間がたったら次の場へ移動するという方法です。でも、この方法は、教育委員会の視学官が見に来るといような特別なときにしかやっていませんでした。というのも、複雑なので、子どもたちが自分の行く場所を覚えるためだけに、何回も繰り返し練習が必要です。視学官が来るらしいとわかると、ふだんほとんど体育をやらないセネガルの先生たちが、何ヶ月も前から毎日このPCMEを子どもたちに練習させていました。

3 情操教育をすすめていくための問題点

次に巡回をすすめていくうちに感じた問題点についてお話しをします。

(1) 道具の不足

先生たちの知識や技術が不足しているのは当然なのですが(だから、私たち協力

隊員が派遣されているわけですから)、とにかく道具がありませんでした。音楽をするのにピアノはもちろん、オルガンがありません。それどころか、ドレミを奏でる楽器など、何もありません。体育も、跳び箱や鉄棒、ハードル、マット、何一つありません。ボール一つすらありません。ボールを使うときには、先生が自分で持ってきたり、子どもたちが使っているボールを借りたりしていました。図工も、工作をするためのハサミやカッター、絵を描くための画用紙、絵の具、色鉛筆、クレヨン・・・子どもたちはほとんど持っていませんでした。

でも実際、文房具などはセネガルで手に入らないものかということ、そうでもなくて、町の市場へ行けば、セネガル人の生活水準からでも、それほど無理なく手に入れることが出来るものでした。ただ、そういうものを子どもの学用品として揃えるという感覚がないように思われました。

(2) 現地教員の関心の低さ

私が巡回していた学校では、本当に一部の先生をのぞけば、体育も、音楽も、図工もほとんどやっていませんでした。たぶん、どの学校も同じようなものだと思います。私が校長に「ぜんぜん体育も音楽も図工もやってるようには見えないけれど・・・」と話をする、「いややってるよ、お前が来てないときにやってるんだ」と言われました。確かに私の巡回は週に1日、2日ですから、いないときにやっているのかも知りません。でも、私が行っている日に、私が入るクラス以外は外に出て体育をしてないし、歌声もほとんど聞こえてこないということはやってないってことじゃないかなあと思いました。

(3) 授業時間の不足

情操教育の授業がほとんど行われない原因の一つとして、授業日数がとにかく少ないということがあると思います。本当にお休みが多いことに驚きました。雨季の3ヶ月のバカンス期間は仕方がないのですが、イスラムの宗教的なお祭りのための祭日、先生のストライキ、先生の冠婚葬祭のお休み、それに先生が給料を受け取りに行くためのお休みまであります。

セネガルにもきちんと学習指導要領のようなものがあるので、それを長期休暇のあいだに調べてみたら、とりあえず私の計算では、すべての教科の合計時数は週31時間程度になっていました。しかし、実際に行われているセネガルの授業時間数は週28時間程度です。さらに学校によっては、子ども的人数に対する、教室の数や教員の不足の問題で、2フレックスと呼ばれる午前、午後に分かれる2部制がとられていました。この2部制のクラスだと実に週20時間しか授業時数がありませんでした。セネガルでは学年末に進級試験があり、その試験に合格しないと進級できません。進級試験では、算数やフランス語といった科目の配点が高く、体育や図工、音楽といった科目には、ほとんど配点がありませんでした。そのいった理由から、情操教育の時間は削られ、

算数やフランス語の授業が優先されて行われていたのだと思います。

4 問題点への取り組み

(1) 道具の不足について

活動当初、私はこの巡回校での活動がカオラック全体に広がることの出来るモデルにならないとダメなんじゃないかということ強く意識していました。そのため、必要な道具や材料をすべて私が揃えることに抵抗がありました。隊員が道具や材料を持っていくから必要なものが揃い、だから出来るという活動では他の学校に活動を広げていくことは出来ません。必要な道具や材料を巡回校に揃えて貰うことも、私の活動の一部だと考えていました。

セネガルでは、少し大きな町の市場に行けば、文房具は簡単に購入することが出来ました。セネガルの人たちの暮らしぶりから、文房具はそれほど高価なものではありません。しかし、子どもたち全員に必要な文房具を買ってもらうのはさすがにまだ難しいと思い、校長にお願いして、学校で子どもたち全員が共同で使う道具を購入して貰うことにしました。学校は、年度の初めに学校の維持費として子どもたち一人ひとりから 1000fcfa を受け取っていました。その維持費から、何とか 5000fcfa だけ出して貰えることになりました。どうして 5000fcfa だったかということ、たまたま最初にお願した学校の全校児童がだいたい 500 人で、一人あたり 10fcfa ということで決まりました。この 5000fcfa がセネガルでどれくらいの価値になるかということ、セネガルの人たちが普段食べているフランスパンが 1 本 100fcfa、セネガルのコーラが 1 本 200fcfa です。その 5000fcfa で、はさみを 5 本、小さな色鉛筆 5 本セットを 8 セット、ゴムボールを 2 個、縄跳びをするための縄を 25m、購入することが出来ました。

今思えば、赴任当初で、少し強引なお願の仕方だったなと思います。購入まで時間もかかりました。10 月にお願いして、結局買って貰えたのが、2 月半ばから 3 月になってからでした。それでも、ちょっとした道具があるだけで活動が広がることをセネガルの先生たちに知ってもらいたかったことと、私がいなくても、また活動を終えていなくなっても、セネガルの先生たちが自由に使える道具を学校に残したいという思いがありました。ただ、これで道具が十分揃ったのかということ、1 クラスに子どもは 60 人から多いクラスでは 100 人近く、たった 5 本のはさみではやはり全然足りませんでした。結局は、私の方でそれなりの数を用意して持っていかなければなりませんでした。

(2) 授業時間の不足、現地教員の関心の低さについて

授業時間の不足については、セネガルの授業日数の問題だけでなく、赴任当初は私自身がいろいろな研修で任地にいられず、活動を進めることが出来なかったということもあります。

赴任後のバカンスが明けて 10 月、巡回校での活動を始めるとすぐに自転車貸与のた

めの講習会があり上京しなければなりませんでした。戻ってくるとまた赴任後3ヶ月オリエンテーションや、語学研修、技術補完研修会で3週間も任地を離れました。カオラックに戻ってきたのが11月の終わり、さあ活動を始めようと思うと12月の半ばになり、年末年始のお休みに入ってしまった。

研修の合間も、任地に戻れば巡回をしていましたが、学校に行ってみると、今日はストライキだから授業はしない、今日は給料日だからパートナーの先生が来ていない、今日は病気で先生がお休み……。3校の巡回で、一つの学校を訪れるのは週にせいぜい1日、2日。その日に授業が出来ないと次の授業は一週間後です。しかも次の週に必ず授業に入れるとは限りません。また違う理由で授業に入れないこともありました。

限られた授業時間で、せっかくクラスに入っても、担任の先生は私に授業を任せて教室の隅でノートを添削していたり、木陰でお茶を飲んでいたり、家に帰ってしまう先生もいました。

巡回を開始して6ヶ月くらいの間はこんな状態が続いていて、この先の活動期間を考えてはどんな成果を残せるのだろうか、不安やいらいらを募らせていました。

そんななかで2号報告書に、次のようなことを書きました。

(小学校教諭の派遣について)

現在、6名の小学校教員が各地で、単独で情操教育の普及に努めている。正直、この派遣形態に疑問を感じる。私の場合、3校の勤務である。前任の隊員からの引継ぎが2校、新規校が1校である。一応それぞれの学校にモデルクラスがあるのだが、そのクラスだけでは学校全体で情操教育への共通理解が得られないと思い、モデルクラスを軸にしながらも、なるべく全学年、クラスへ入るよう時間割を組んでいる。ただ、週に1日、2日では、全てのクラスに、全ての教科で入るには、かなり長いローテーションが必要である。また、本来、授業は1時間限りの単発のものではなく、少なくとも何時間かの連続した流れが必要である。こうした単発の授業の繰り返しでは、教師や子どもたちの関心を引くきっかけにはなっても、実際の教師の技術向上に繋がるのか疑問はある。多少なり、教師の関心を高め、技術向上へのきっかけになるだけでも収穫なのだとと言えるかもしれない。しかし、本当にそれだけの成果で良いのだろうか。カオラック市内だけで小学校は約40校。いまの派遣形態で、3代目、4代目と派遣を続けて、カオラックの情操教育をどれだけ向上させることが可能なのだろうか。本当に成果を求めるならば他に方法があるのではないか。

例えばE F I（教員養成学校）への隊員の派遣である。E F Iで半年間の教員養成を終えた新規教員はセネガル各地で勤務に着く。もし隊員がE F Iで情操教育の手法を広めれば、それを学んだ新規教員はセネガルの各地へ散らばり、新しい情操教育の手法を実践していく。そのなかで、そういった新しい手法は現職の先生たちにも広がっていくはずである。数年間のうちにかかなり大きな成果が上がるのではないだろうか。

E F I という専門機関であるため、教授にある程度の語学力を必要するという心配があるかもしれない。しかし、私が見る限り、教養や関心のある人ほど、つたない言葉でも熱心に理解しようと努力してくれている。フランス語が理解出来ない子どもたちへの授業をよりも、やり易い面があるかもしれないとさえ思う。

もうひとつの方法が一都市への集中派遣、または複数派遣である。やはり一都市に一人の派遣では、その都市の情操教育どころか派遣校の情操教育力の向上すら容易ではない。複数派遣を行うことで行える活動も広がる。また任地での注目度もあがるだろう。地域の先生たちを集めた研修なども行いやすくなる。現在のようにセネガル全土に隊員を広げて行くのではなく、まず一地区に集中して隊員を派遣してセネガルで行える情操教育のモデルプランをつくり、その後、全域に広げていくのはどうだろうか。

事務所へE F I（教員養成学校）への隊員派遣、協力隊員の同任地へのグループ派遣を提案しました。この時点では、あくまでもこの将来への希望であって、もちろん今すぐにとということではありませんでしたが。

ところで、現地の教員がみんな情操教育への関心が低かったかと言えば、決してそういうわけではありません。私のカウンターパートであったムッシュ・ジャロやムッシュ・バのように、私がいなくても自分ひとりできちんと情操教育の授業を行っている先生もいました。彼らは、個人的に私の家まで鍵盤ハーモニカを習いに来たり、簡単な日本語にも興味を持って私から教わったりしていました。そういう先生たちがいたこともきちんと伝えておきたいと思います。

5 E F I（教員養成学校）セミナー

2号報告書で、事務所に提案していたE F Iへの隊員派遣が、かたちを変えて実現することになりました。たまたま調整員がE F Iへ出張したときに、E F Iへの隊員派遣について校長に話をすると、隊員の派遣というかたちではなく、短期のセミナーというかたちではどうかという提案を頂いてきました。少し日程に問題がありましたが、私はぜひやりたいと思いました。そのお話を頂いたのが5月初めか半ばだったと思います。セミナーを行うなら日程は6月の半ばしかないということでした。準備期間が一月もありません。加えて、このころ私は大使館に協力を頂いて、モデル校のひとつで日本映画祭や絵画コンクールなどの準備もしていました。日程的な厳しさを感じましたが、やはりこの機会は大切にしたいと思い、同期の小学校隊員3人で相談をしてやることに決めました。任地が離れているのでメールなどで連絡を取り合いながら準備をすすめていましたが、3人が実際に集まる事が出来たのは、隊員総会のために首都に上がってきていた数日とセミナーの前日だけでした。

(1) 第1回E F I（教員養成学校）セミナー

セミナーは、6月15日、16日の2日間で行いました。当初は3日間の予定でしたが、E F Iの都合で2日間に変更になりました。希望者を対象にしたセミナーだったので、どれくらいの受講生が集まるのかと心配をしましたが、500名ほどいる学生の半数近くが応募してくれたそうです。そのなかからE F Iに抽選をしてもらい40名強の学生を対象に行いました。

〈第1回セミナープログラム〉

	一日目	二日目
	オリエンテーション ・講座開講に当たって	
1限	体育 ・体ほぐし ・縄跳び（ダブルダッチ）	体育 ・体ほぐし ・ボール運動（ドッチボール）
2限	図工 ・紙工作 ・折り紙	図工 ・デッサン （芋版画・混色指導） ・折り紙
3限	音楽 ・遊び歌 ・ボディパーカッション （楽譜指導）	音楽 ・遊び歌 ・ボディパーカッション （リサイクル楽器紹介）
		オリエンテーション ・講座閉講にあたって ・質疑応答

このセミナーは、学生にも、参観に来ていたE F Iの先生たちにも、とても好評で終えることができ、ぜひ継続してやってもらいたいという話を頂きました。そして、このE F Iでのセミナーは、私の活動にとって大きな転機になりました。

(2) 活動の柱を分割

1年間活動を続けたころ、なかなか成果が上がらず、情操教育の普及につなげるために、活動をどのようにしていけば良いのだろうと本当に悩んでいました。巡回校を減らすことも考えましたが、それぞれの校長から続けて欲しいと頼まれて出来ませんでした。授業の進め方をいろいろ試してみました。私が現地の先生に授業のアイデアを提供して、実際の授業は現地の先生にやってもらう方法。授業は私がすすめて現地の先生に補助をしてもらう方法。いろいろと試しましたが、打ち合わせの時間が取れない、授業中に抜け出してしまう先生もいる。授業で使う道具や材料なども、結局ほとんど私が用意しなければならないなど、これという方法を決めかねていました。そして、このままでは、私が帰国したあとに、現地に残るものがほとんどないだろうなという不安を感じていました。

でも、活動の場にE F Iが加わったことでその悩みや不安をすっきりとさせることが出来ました。巡回校での活動は、将来を担う子どもたちへの情操教育をすすめる場であると考え、先生たちへの指導や助言はあまり意識しないようにする。セネガルでの情操教育技術の移転や普及の場はE F Iの学生を対象に考える。このように考える

ことで、それまで巡回校に道具や材料を持ち込むことに抵抗を感じたり、現地の先生たちが授業中に抜け出したり、お休みしたりすることにストレスを感じていたことも、

「子どもたちへの私の授業だから」と割り切れるようになりました。

(3) 第2回、第3回 E F I (教員養成学校) セミナー

1月、年が明けてEFIが始まるとすぐに2回目のEFIセミナー、続いて2月にも3回目のEFIセミナーを行いました。この頃には、私の帰国の準備も始まっていました。そして希望していた同任地への複数隊員派遣も私の後任から始まることになり、すでに17年度2次隊で後任の一人が着任していました。

さて、EFIのセミナーですが、1回目と同様に、それぞれ2日間ずつの日程で行いました。ただし、今回の講師は小学校教諭隊員だけでなく、幼稚園教諭、青少年活動、家政、空手、村落など、他の分野の隊員にも大勢参加をしてもらい、セミナーの内容を充実させることが出来ました。

〈第2回、第3回セミナープログラム〉

	一日目	二日目
	オリエンテーション ・講座開講に当たって	
1限	体育 ・体ほぐし ・縄跳び(短縄)	体育 ・体ほぐし ・ドロケイ ・リレー
2限	音楽 ・遊び歌 ・ボディパーカッション (楽譜指導)	音楽 ・遊び歌 ・ボディパーカッション ・リコーダー練習
3限	図工 ・ゴミ箱づくり ・折り紙	図工 ・紙人形づくり
		オリエンテーション ・講座閉講にあたって ・質疑応答

6 最後に

青年海外協力隊に参加することは、私の長年の夢でした。駒ヶ根での訓練を含めて、この2年間は、私にとってかけがえの無い財産になりました。この協力隊で私がセネガルの人たちに残してきたものよりも、私がセネガルで得たものの方がずっと大きいと思います。ただ、それほど大きな成果は残せなかったかもしれませんが、後任の隊員や後輩の隊員たちが、かたちを変えながらも、私の活動を引き継いでくれている話を聞くと、

私の活動が生き続けていて、きちんと意味のある活動であったのかなと感じています。

赴任当初の私は、セネガルの人たちの仕事ぶりや考え方を受け入れられず、「あなたたちのために私がこれだけやっているのに、どうしてあなたたちは努力しないんだ」そんな傲慢さで、彼らに接していました。言葉できちんと思いが伝えられないもどかしさを、感情でぶつけていました。思い返すと本当に恥ずかしくなります。そんな私と1年9ヶ月、一緒に活動してくれたセネガルの人たちのおおらかさ、以前はいい加減さとして映らなかったものが、今ではとても懐かしく、恋しくなっています。

彼らと過ごした1年9ヶ月で、はるか遠くに感じていたアフリカ大陸が、本当に近くに思えるようになりました。また、ぜひ彼らに会いに戻りたいと思います。

(質問から)

・前任者とのつながりは意識されましたか

最初はやはり継続を意識して、つながりを持たせたいと思っていました。そういった気持ちもあって巡回校を引き継いだのですが、実際に巡回を始めてみると前任者がどういう活動をやっていたのかということが、あまりよく見えない。あとを引き継ぎたいと思っても出来ないこともありました。私の場合、前任者が日本からピアノとリコーダーを1クラスの児童分ほど送って貰っていました。ぜひ授業で子どもたちに触れさせてあげたいと思いましたが、1人ではセネガルの子どもたち何十人の楽器指導はやっぱり無理でした。結局、あまり前任者の活動は意識しないで、を流れのなかで自分が出来ることを見つけて活動するようになりました。

・病気などで子どもたちが休んだり、亡くなったりという保健衛生上の子どもたちの様子はどうでしたか。

3校を巡回し、いろいろなクラスに入っていたので、どの子が欠席しているというようなことは、まったくわかりませんでした。セネガルにもマラリアは多くて、隊員も罹ります。蚊帳の普及活動やポリオのキャンペーンなどもやっていました。セネガルの人たちは、貧しいものには手を差し伸べるというイスラムの教えは大切にしていましたし、食べ物は比較的恵まれた環境だったので、お腹が膨れて栄養失調というような子どもは、あまりみかけませんでした。正直、申し訳ありませんが、具体的なことはよくわかりません。

・現地の先生から学んだことはありますか。

先生として何かを彼らから学んだかということ、いまちょっと「これだ」と思い浮かぶものは出てきませんが、彼らの人柄から得たものはたくさんありました。

セネガルの先生は、鞭を使うなど上から下へという指導の仕方、子どもたちへのかかわり方という面では・・・と思いましたが、私のような言葉の話せない異国人とも向き合って、かかわりあって、受け入れてくれる姿勢は、なかなか日本では無いものかも知れません。もし、日本の教育現場に、異質な人が入ってきたときに、同じように受け入れられているのだろうかと思いました。

セネガルでの活動を振り返って



青年海外協力隊 16年度1次隊 セネガル共和国 小学校教諭
川崎市立西梶ヶ谷小学校教諭
藤井 克浩

セネガル共和国



派遣要請の内容

小学校の情操教育の充実に
工、体育、音楽の充実への要を目的として
視学官、教員らと協議しつ
つ数校のモデル校におい
て、教員・生徒に指導を行
う。同地に適した指導法の
確立、セミナーや報告会を
通しての
が求められる。



配属先の概要

- ・ 配属先
IDEN Kaolack Commune
(カオラック市教育委員会)
- ・ 巡回校
Ibrahima Diouf(イブライマ デュフ校)
Nimzatte(ニムザット校)
Abou Diallo(アブジャロ校)



新種校

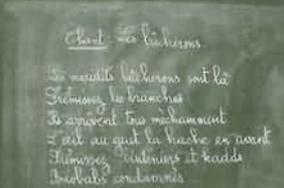
セネガルでの情操教育の様子

- ・ 国語分野
 - 工作・・・ほとんど為されていない(輪飾りなど)
 - デッサン・・・黒板に描かれた絵の模写



音楽分野

- 歌唱中心
 - ・・・黒板に書かれた歌を、教師の後に続いて歌う。



1804 11 25

・ **体育分野**
 内容は、ほぼ決まったもの
 サッカー、リレー、旗取り、幅跳び、など

複雑な授業の形態
 少人数の授業の中で、複数のグループに
 同時に複数の活動を、ローテーション



情報教育をすすめるための問題点

- ・ 道具の不足(校庭の未整理)
 - 基本的なものがない。(活動が限定される)
- ・ 授業時間の不足
 - 実際的に時間が足りない(休みが多い)
- ・ 現地教員の関心の低さ
 - 教員が授業をやらない(優先順位が低い)

問題点への取り組み

- ・ 道具の不足
 - はさみ 5本
 - 5色色鉛筆 8セット
 - ゴムボール 2個
 - 縄 25m
 - フランスパン1本=100fafa
 - コーラ1本=200fafa
- ・ 学校ごとに5000fafaを出資して貰い、子どもたち全員で使う道具を購入
- ・ 根本的な解決にはなっていない。

クラス80人

- ・ 授業時間の不足
- ・ 現地教員の関心の低さ

事務所への要望
 ・EFI(教員養成学校)への隊員派遣
 ・協力隊員のグループ派遣

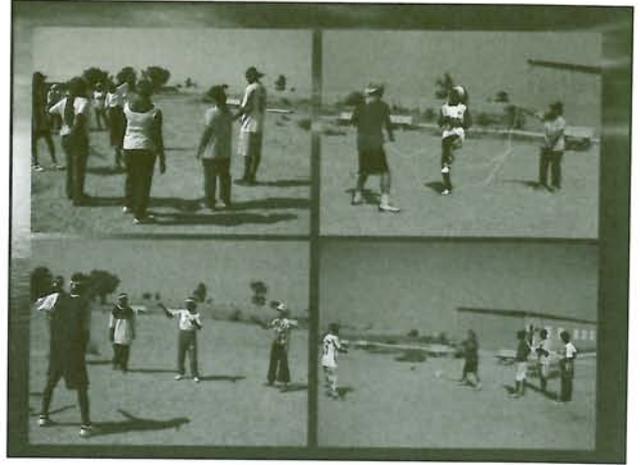
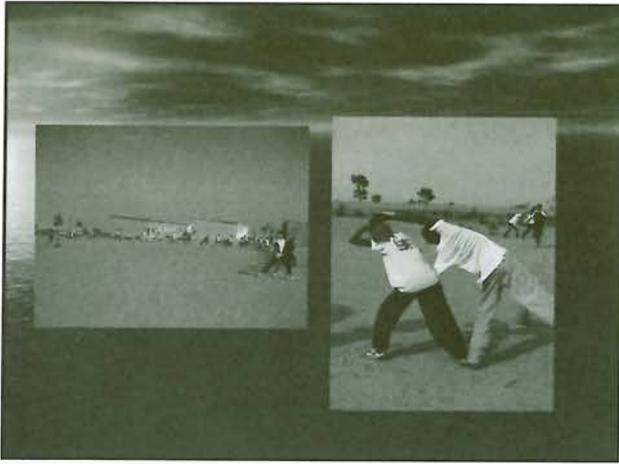
- ・ EFI(教員養成学校)でのセミナー開催

EFI(教員養成学校)セミナー

日程・・・2日間('05年6月15日～16日)

受講者数・・・およそ40名

講師・・・16-1 小学校教諭隊員 3名
 (藤井克浩、三好千恵、山崎陽子)





セミナーの内容

	一日目	二日目
	オリエンテーション ・講座開講にあたって	
1限	体育 ・体ほぐし ・縄跳び(ダブルダッチ)	体育 ・体ほぐし ・ボール運動(ドッチボール)
2限	図工 ・船工作 ・折り紙	図工 ・デッサン (卒展画・景色指導) ・折り紙
3限		オリエンテーション ・講座閉講にあたって ・質疑応答



- ・セミナーの成功
- ↓
- ・セミナーの継続へ
- ↓
- ・活動の見直し

- 活動の柱を分割
- ・巡回校での活動
 - 将来を担う子どもたちへの情操教育の場
 - 現場の教員への情操教育への関心を高める場
 - セネガルで行うことの可能な情操教育を模索する場
 - ・EFIセミナー
 - 情操教育技術の移転・普及の場

第2回、第3回 EFIセミナーの開催

- ・ 日程 各2日間
 - － 第2回セミナー（'06年1月21日、22日）
 - － 第3回セミナー（'06年2月11日、18日）
- ・ 参加学生 各40名程度
- ・ 講師 小学校教諭隊員
その他 有志隊員多数





セミナーの内容

	一日目	二日目
	オリエンテーション ・講座開講にあたって	
1限	体育 ・体ほぐし ・縄跳び(短縄)	体育 ・体ほぐし ・ドロケイ ・リレー
2限		オリエンテーション ・リコーダー練習
3限	図工 ・ゴミ箱づくり ・折り紙	図工 ・紙人形づくり オリエンテーション ・講座閉講にあたって ・質疑応答

巡回校で行っていた授業

- ・ 体育
 - かけっこ
 - リレー
 - サッカー
 - 幅跳び
 - 高跳び
 - 玉入れ
 - 鬼ごっこ
 - しっぽ取り
 - など

活動の選択技を増やすこと
ルールやラインを意識して活動すること

- ・ 図工
 - 折り紙・紙工作
 - デッサン
 - ゴミ箱づくり
 - など

なるべく道具や材料を必要としないもの
楽しく遊べるもの

- ・ 音楽
 - リズム遊び
 - ドレミ音階
 - 簡単な楽譜指導
 - など

身体を使って楽しむこと
ドレミの音感をつかむこと

日本文化紹介 & 日本映画祭

会場 About Diallo(アブジャロ校)

日程 '05年 5月31日

午前・・・日本文化紹介
 午後・・・日本映画祭

協力 在セネガル日本大使館



.....ありがとうございました。



配布資料

帰国隊員報告会レジュメ

セネガルでの活動を振り返って

藤井 克浩

(16-1 セネガル共和国 小学校教諭 川崎市立西梶ヶ谷小学校)

1. はじめに

2, 活動上の問題点と、その改善に向けて

3, EFI(教員養成学校)でのセミナー

4, 巡回校での活動

5, 日本文化紹介、日本映画祭

6. 最後に

活動報告—グアテマラ—

岡崎 和美

(16-1, グアテマラ, 小学校教諭, 金沢市立高尾台中学校)

中米グアテマラ。コーヒー豆と鮮やかな民族衣装が有名なこの国で、約2年間活動した。

国の概要について

面積は日本の約3分の1、人口は約10分の1。中南米の他の国々に比べ、先住民族の割合が高い。公用語はスペイン語だが、地方に住む先住民族の間では現地語が主に話されている。

日本のコーヒー豆売り場ではたいていグアテマラという銘柄は見かけるし、缶コーヒーでもグアテマラ産を強調したものがあるけれど、グアテマラ国内で庶民が飲むのは、薄くて甘い麦茶のようなインスタントだ。豆は輸出されてしまう。現地で本物のコーヒーを飲むときは、観光地へ行った。

先住民族の民族衣装は村ごとに模様があり、その色彩はグアテマランレインボーといわれ旅行者にも人気である。私が活動したソロラという町は、男性の派手な衣装が特徴的であった。市場の日は、民族衣装を着た人たちで広場が埋めつくされ、壮観である。

マヤの人たちによると、人間はとうもろこしから生まれたとのこと。したがってこの国でもとうもろこしが非常に重要な食物で、主食はとうもろこしの粉を薄く焼いたトルティーヤというパンである。これを片手に、味付けされたお米や肉類等のおかずを食べる。ホームステイ先がレストランだったこともあり、食生活は充実していたと思う。果物や野菜が豊富でおいしく、日本と比べてどちらを豊かというのかと考えることもしばしばであった。

インフラ整備の程度や日用品の質等、日本とは確かに違うが、派遣前にかかなりの覚悟をしていたため、予想以上に発展している感があり、生活面は概ね良好であった。



写真1 グアテマラ ソロラのお祭り

活動について

中米各国で展開されている算数学力向上プロジェクト、その中のグアテマラ算数プロジェクトの一員として派遣された。グアテマラでは小学校の留年率が高く、国語（スペイン語）と算数とその大きな原因である。それらのうち日本は特に算数教育への協力をしている。

活動内容は、小学校算数教科書（^{グアテマテイカ}GUATEMATICA）と指導書の作成、GUATEMATICA を使った授業の観察、教員対象の講習会、学力テスト等。ちなみに GUATEMATICA は「グアテマラ」と算数のスペイン語「マテマティカ」から作られた名前である。

グアテマラ国内の4県の教育事務所に1名ずつ隊員が配属され、そこでそれぞれ現地人のカウンターパート（同僚）1名と共に活動していく。各県4校のプロジェクト校が選ばれ、そこで GUATEMATICA を使った授業が行われる。基本的に午前中は学校を訪問して授業観察や講習会の開催、午後は教育事務所で教材の準備等をする。学校の休暇中（10月後半～12月）に教科書・指導書の作成となる。

シニア隊員を中心とした数名の小さなプロジェクトであった。シニア隊員は非常に忙しい中、何かと隊員達との交流の機会を設けてくれ、終始アットホームな雰囲気であった。プロジェクト内で共有できるものも多く、非常に心強かった。

授業観察は、子供たちと触れあうことのできる楽しい時間であった。すでに先代の隊員が活動していたので、子供たちは慣れており、物怖じせずに話しかけてくる。どの国でも、子供はかわいいなあ、と思う。また、実際に GUATEMATICA が使われている現場を見ることができるのも良かった。



写真3 授業風景①

小学校低学年の授業では、ペットボトルやガラス瓶のジュースのふた等を半具体物として授業に使っていたのだが、児童によってはとうもろこしの粒を使っており、それがいかにもこの国らしく思われた。半具体物を使わない授業になっても頭の中だけで計算するのは難しいらしく、こっそり手に棒を書いて数えたりする姿が見られるのが微笑ましかった（学力向上の点から見ると困ったことではあるが）。

休み時間は校庭でバスケットボールかサッカー。カメラを持っていると、写真を撮ると近寄ってくる子がいたり、恥ずかしがって隠れる子がいたり。おやつの日でもあり、先生も近くのお店からお菓子を買ってきて食べている。もちろん私もだ。

講習会は、先生たちに授業の仕方を教えるためのものであった。時には授業の仕方というよりも授業そのものになってしまうこともあったが、皆いつもまじめに参加してく



写真2 GUATEMATICA

れていたと思う。ここでは、説明だけでなく何か作業を取り入れると効果的であること、教材や道具の大切さ等を改めて感じた。

教科書・指導書は、日本や先にプロジェクト展開されているホンジュラスのものを参考に、グアテマラならではの思考や言葉、絵などを織り込んだものである。作成に関して私はあまり活躍していないが、自分たちが作った問題や絵が実際に本になると、やはり感慨深いものがある。これらは現在グアテマラ全国の小学校に配布されることになった。



写真4 授業風景②

隊員活動でとまどったこと

まずは言語である。上達せず、ずっと悩みの種であった。また、子供たちもスペイン語ができないということ。そのため、スペイン語で行われる授業がわからない。教育を受けるため、生きていくために、彼らにとってスペイン語は必須なのだ。日常生活では現地語が主で、両親ともにスペイン語が出来ないという家庭も少なくないことから、解決には時間のかかることを感じた。

次に学校や授業のシステム。先生のストや会議、学校行事等で授業時数が確保されない。ということは、一年分の教科書が終わらないまま次の学年になってしまうということだ。もちろん、新年度に、前年度し残した部分から授業を始めるわけではない。新しい教科書の1ページ目から始まる。

これには、先生だけでなく国全体の教育に対する意識が影響しているのかもしれない。さらに広げていくと、国の歴史や政治にまで関係していく。どのような教育が良いかといわれると難しいが、子供たちが、それぞれ適切な教育を受けられることを願う。

隊員活動を通して感じたのは、他の国の人々に対しても、日本の生徒に対しても、こちらの活動や考え（授業）を受け入れてもらうには「興味・関心を持ってもらうこと」が大切であるということだ。「こうするとお金が儲かる」でもいいし、「このことについて知るのが純粹に面白い」でもいい。「物質的に」でも、「精神的に」でも、「これは自分にとって得なことだ」と彼らが思うこと。彼らが自分から欲するよう



写真5 休み時間

にすること。ただ、この2年間の活動中は、活動自体が受け入れてもらうに値するものであるか、彼らとの価値観の違いの中で迷うこともあった。

いろいろなことがあったが、すべてひっくるめて、良い2年間であった。教師という仕事について、また違った見方で考えることもできたように思う。今後、周囲への還元や派遣国とのつながりについては、地道に長く続けていければと思っている。



国際教育協カシンポジウム 帰国隊員報告会

16年度1次隊 グアテマラ 小学校教諭
岡崎 和美
(石川県金沢市立高尾台中学校)



*外務省HPより



*外務省HPより

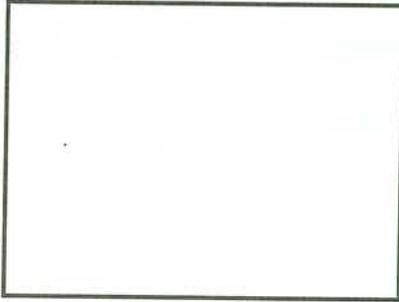
グアテマラ共和国

- 面積 : 108,889km² (日本の約3分の1)
- 人口 : 1,263万人 (日本の約10分の1)
- 首都 : グアテマラシティ
- 言語 : スペイン語
- 宗教 : カトリック
- 人種 : 先住民52%、混血45%、
欧州系2%、その他1%
- 主要産業 : コーヒー、パナナ、砂糖

グアテマラのコーヒー豆を使った 缶コーヒー



グアテマラの民族衣装



町のトルティーヤ屋さん



ある日の昼食



ホストファミリー



算数学力向上プロジェクト

・所属

▶ソロラ県教育事務所

・活動内容

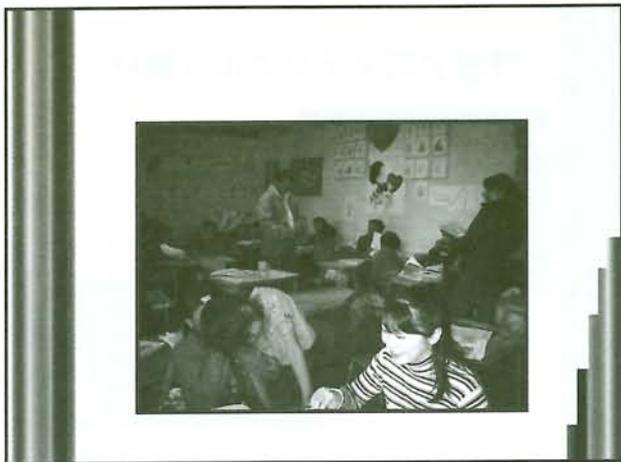
▶午前...パイロット4校で授業観察、学力テスト、
教員対象の講習会

▶午後...教育事務所で教材・書類作成、
テスト採点・入力等

▶学校休暇中（10月後半～12月末）...

教科書（GUATEMATICA）と指導書作成





半具体物を使った授業

A collage of four black and white photographs showing students engaged in a hands-on learning activity. The photos show students looking at materials, holding up papers, and interacting with each other.

こっそり計算…

バスケットボールが人気

おやつ時間

学カテスト①

学カテスト②

教員対象の講習会



講習会用マテリアル（教材）



とまどったこと

言語

学校や授業の
システム

教員の
学力・意識

感じたこと

価値観の違い

同じ教員としての
気持ち



最後!

¡Nos vemos!

配布資料

平成 18 年度 文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム
「開発途上国における派遣現職教員の活躍」帰国隊員報告会
分科会 派遣現職教員による任地での活動報告

平成 19 年 1 月 7 日
平成 16 年度 1 次隊 グアテマラ 小学校教諭
金沢市立高尾台中学校 岡崎 和美

1. はじめに

2. グアテマラについて
 - (1) 概要

 - (2) 生活

3. 活動について
 - (1) 算数学力向上プロジェクト
 - ・ソロラ県教育事務所に所属
 - ・活動内容
 - 教科書 (GUATEMATICA) と指導書の作成
 - 教員対象の講習会
 - 授業観察
 - 学力テスト

 - (2) とまどったこと
 - ・言語
 - ・授業日数
 - ・教員の学力、意識

 - (3) 感じたこと
 - ・価値観の違い
 - ・同じ教員としての気持ち

4. 最後に

ニジェール共和国の教育現場における活動

～ 人々の生活 現場の実態を知って 自らの活動を知る ～

中田 春奈

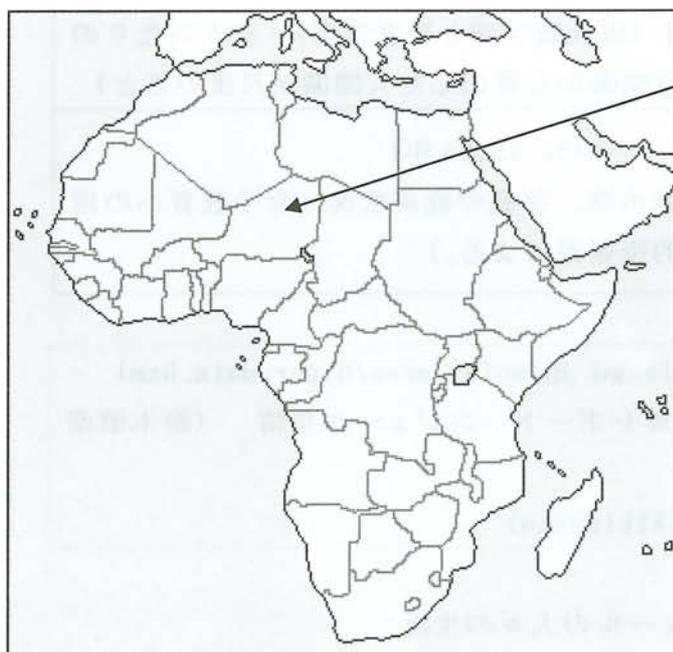
(16-1, ニジェール, 小学校教諭, 南あわじ市立北阿万小学校教諭)

1 ニジェール共和国の概要

(1) 国の位置・国土・気候

ニジェールは、西アフリカに位置する内陸の国である。

国土の3分の2を砂漠（サハラ）が占め、北部は乾燥した地域で、南部は6月～10月が雨季で多湿となるサヘル地域が広がる。乾季の1月ごろは大気が非常に乾燥し、砂嵐が見られる日も多い。4月～5月は気温が非常に高くなり、最も暑い時には50～60度にまで上がる。



ニジェール共和国



写真1 サハラ砂漠

図1 アフリカ大陸地図／

外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/niger/data.html>

「アフリカ」より

(2) 国の概要

面積	126.7 万 k m ² (日本 / 37.7 万 k m ²)
人口	1026 万人 (日本 / 1 億 2733 万人)
人口密度	8 人 / k m ²
首都	ニアメ (42 万人)
政体	共和制 (元首: タンジャ・ママドゥ大統領)
時差	- 8 時間
通貨	C F A フラン (※アフリカ 14 カ国で使われる通貨単位)
言語	フランス語 (公用語) ・ハウサ語・トゥアレグ語 など
民族	ハウサ族 56% ・ジェルマ族 22% 他、トゥアレグ族・フラニ族・プール族 など
宗教	75% 以上がイスラム教 他 キリシト教・伝統宗教 など
平均寿命	男子 46.9 歳 / 女子 50.1 歳
15 歳以上人口の成人非識字率	85.7% (男子 78.2% / 女子 92.9%) (1997 年)
人間開発指標	全世界 162 カ国中、161 番目。(2001 年) (※人間開発指標 / H D I : U N D P (国連開発計画) が、平均寿命・教育 (成人識字率と総就学率) ・一人当たりの G D P の 3 つの側面から算出した人間開発尺度のこと)
初等教育の就学率	34% (2000 年) (※世界でも最低水準。家庭の経済状況、女子教育への理解不足、伝統的価値観による。)

< 参考資料 >

- ・ 外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/niger/data.html>
- ・ J I A Bulletin 2004 年 10 月号 海外レポート ニジェール事情 (鈴木敏彦著 / 2004. 10)
- ・ フリー百科事典 ウィキペディア (Wikipedia)

(3) 人々の生活 ～ 私が感じたニジェールの人々の生活

ニジェール共和国は、世界でも最も貧しい国の中のひとつである。U N D P 国連開発計画 (2001 年) の人間開発指標では、162 カ国中 161 番目に貧しい国とされている。

(日本は 11 位。) 平均寿命・識字率・就学率、その他、物質的な豊かさで比較すると、日本とは対極にある国と言える。そんな国であるから、一般的生活レベルの人々は決して裕福な暮らしをしているとは言えない。

- ・ 物の量や種類は、日本とは比べ物にならないほど少ない。

- ・生計を立てるための仕事が少ない。
- ・自給自足するにしても、乾燥した砂の大地。農作物を育てるには過酷な環境。
- ・家族は大家族。(女性は、平均8人の子どもを出産。 イスラム教は一夫多妻制。)

このように、経済的にも生活環境的にも、決して恵まれているとは言えないニジェールの人々であったが、彼等から悲壮感や絶望感を感じることはほとんどなかった。(私個人の感じ方である。) 反対に、多くの家族や親戚とともに支え合いながら生活している彼らから、人間らしい心のあたたかさや、心の底から湧き出るような明るさを分けてもらったように感じている。

仕事がなくとも焦ることなく、昼間から道端でおしゃべりやお茶を楽しんだり、何をする訳でもなくただボーっとしたりしている人々はたくさんいる。話を聞くと「親戚の中に一人でも収入を得る人がいれば何とかなる」とのこと。物やお金は十分に無くても、自分のおかれた条件や環境の中でのんびり構え、大家族や親戚どうしで助け合いながら生活しているニジェールの人達から、私は人間としてのたくましさや力強さを感じた。



写真2 ニジェールの子ども達

2 活動の要請内容と現場の実態

(1) 配属先 および 活動の要請内容

「受入希望調査票」記載の「配属先」・「活動の要請内容」等は以下の通りである。

① 配属省庁

基礎教育識字省 / Ministère de l'Éducation de Base et de l'Alphabétisation
(※日本の「文部科学省」にあたるか?)

② 勤務先

マラディ初等教育監督局 IEB / Inspection d'Enseignement de Base 1 de la communauté urbaine de Maradi (※「教育委員会」にあたるか?)

マラディ県内の幼稚園・小学校・視聴覚障害者学校・孤児院を管轄し、同学校の運営管理、教諭の指導等を行っている。予算状況は非常に厳しい。

③ 要請理由

ニジェール共和国では85年より教育の質の向上を目的として生産実習活動を導入しているが、予算・人員・施設が不足する中、小学校ではフランス語、算数、地理等 最低限の教科だけを教え、生産実習活動についてはあまり実施されていないのが現状である。したがって、この分野を活性化する人材が望まれている。

④ 期待される業務内容・求められる技術の範囲

マラディ市内の小学校を巡回し、小学生を対象に図工、音楽、体育、家政等の生

産実習教育の授業を実施する。すべての分野において、設備や道具が不足している現状の中、創意工夫と柔軟性が必要とされる。また、共に授業を担当することにより、現地教諭に対しても同分野教育の指導法について、助言、指導することが期待される。

(※生産実習活動=A P P (Activités Pratiques Productives)「総合学習」に近い
いか?)

(※体育=E P S (Éducation Physique))

(2) 隊員の配属先での位置づけ

要請内容にあるように、活動形態は「学校巡回型」である。したがって、「一校指定型」の勤務時間貼り付け状態とは異なり、授業時間限定の「ゲストティーチャー」的な立場である。

そのため、授業実施までに、いかに授業案や教材を準備し、学級担任に理解を得られるように説明、依頼するかで、現地教員との共同作業として成り立つかが決まってくる。

(3) 教育現場の実態

① 学校の設備・教材・教具等について

市内の学校によって差異はあるが、基本的には砂地の校庭、教室以外に特別な教育設備はない。教室内に、黒板と4～5人がけの長椅子、それに合わせた長机が設置されているだけのところが多い。学級によっては、植物の茎を編んだもので壁や屋根を作っていたり、机や椅子がないために砂地の上に座って学習しているところもある。教科書については、4～5人の児童に1冊の割合で使用している状況である。

指導案や教材もほとんど皆無に等しいので、教材・指導案・カリキュラムづくりの段階から取り組む必要があった。(児童の各家庭の経済状態は厳しいので、教材購入のための集金も必要最低限度しか行っていない。)

② 現地教員の技術レベル

学校現場の教員の指導技術のレベルは、著しく差があるように感じられた。生活の糧を得るための仕事と割り切って働く教員(大部分)と、自らの意欲と熱意に基づいて教職に携わる教員(ごく少数)に分かれていたためである。

③ 教職員のストライキ ～ 大幅に遅れた新年度のスタート

ニジェールの教育現場は、7月～9月の3ヶ月間の長期休業を経て、10月から新年度が始まる。「新年度は、準備の遅滞や教員のストライキのため、すぐには授業が



写真3 教室の様子



写真4 教室の様子

開始されないかも・・・」との話は聞いていたが、まさか3ヶ月も遅れるとは予想もしなかった。授業が始まったのは、なんと翌年1月からであった。3ヶ月間も学校で授業が行われなかったのである。

長期間に渡って授業が行われなかった大きな理由は、教職員のストライキが続行されたためである。政府に教職員組合側の要求を通すため、3ヶ月もの間抵抗したとのこと。2004年は、大統領選挙など大規模な選挙が行われたため、政府の関心はすべて選挙活動に注がれた。そのため、政府が教職員組合との交渉になかなか立ち会ってくれなかったこともストライキが長引いた原因のひとつであったようだ。

長期ストライキが終わってからも、教職員組合の会合のため、あるいは、労働条件改善を祈る“イスラムのお祈り”のために授業が行われぬ日が増え続けた。

CM2（6年生）になっても、「自分の考えをノートに書く」ことはもちろんのこと、「自分の名前を書く」というごく基本的なことさえできない児童が多くいる。そのような現状の中で、教員自身が児童の学習機会を奪ってしまうという現実。けれども、教員側の立場からすると、給与は支給されているものの決して裕福だとは言えない生活で、何とか労働条件や生活の状態を良くしたいと願っている。悪い労働条件の中、教師としての熱意と理想だけではやってはいけない現実があった。

教育活動を充実させていくこと以前に、社会全体の問題が大きいことを確認する出来事であった。この現実をしっかりと見つめないことには、いくら教育の理想を掲げて現場に入ったとしても活動が空回りしてしまう。ニジェールの教育現場、さらには、ニジェールの人々が抱える社会の問題を知った上で活動を考える必要があることを強く感じた。

④ APP・EPSの実施状況

APP (Activités Pratiques Productives／生産実習活動) は、1985年に新教育プログラムの一環として導入され、それから20年経過しているにも関わらず、実際にはほとんど行われていないというのが実際の姿であった。ニジェールの国立教育研究所 (INDRAP) は、APP実施の問題点として、以下の4点を指摘している。

1. APPの活動道具や教材購入の経費が確保できない。
2. 教員に対するAPPの研修不足により、教員にノウハウがない。
3. 保護者・教員ともに、APPの重要性に対する理解が不足している。
4. 成績表にAPPの項目がないため評価につながらず、教員側の教えるモチベーションが低い。

EPS (Éducation Physique／体育) についても同様、運動が十分にできる場所、教材や教具、教員に対する研修会等の不足から、ほとんど実施されていない状態であった。

上記の問題点に加え、私個人として以下のことを感じる。

日本の学校現場でも言えることであるが、すでに現場で働く教師が、まったく新

しい教科や活動について研修し、それらの知識や技術を身につけることは、非常に労力を要することである。

ニジェールでAPPが導入されたように、日本では2002年に「総合的な学習」が導入され、完全実施にいたるまでに1～2年間の移行・試行期間が設けられた。学校現場は日々の授業のみならず、職員会議や研修、放課後のクラブ、教材研究、その他の事務処理等々で非常に多忙である。それら日常の仕事に加え、「総合学習」…「国際理解」(英会話)・「福祉教育」(ボランティア学習)・「環境教育」(エネルギー教育)・「情報教育」・「地域や学校の特色を活かした学習」等、新しい分野を開拓していかなければならなかったのである。

私が考える範囲で、新しい教科や活動が導入された場合に現場の教師がすべきことは、おおまかに以下の4点と考える。

1. 新しく導入する分野の「知識」や「情報」を得る。
2. 「カリキュラム」・「授業案」・「教材」等を仮に作成する。
3. 教える為に必要な「教育技術」を身につけ、実際に行い、その方法や内容を改善する。
4. 実施後の反省に基づき、カリキュラムを再度検討し改善する。

普段の仕事だけでも大変であるのに、これらのことを並行して行わなければならないとなると、教員にかかる負担は非常に大きいものとなる。総合学習が導入された時、ほとんどの教員達が「これから先、これらのことを消化していけるのだろうか？」と不安に思ったに違いない。

このような状況の中で、教員は大きく3つのタイプに分かれるように感じる。「これから教職現場で必ず必要であるから積極的に学びたい」、「できる範囲で学びたい」、「できる教員に任せたい」の3つのタイプである。

ニジェールの学校現場も日々の仕事は忙しく、仕事と家庭生活との両立を求められる主婦の教員が多い点では、日本の現場と類似するところがある。そんな中、「できる範囲で学びたい」「できる教員に任せたい」という教員が多数いるという現実は分かり得るところである。

3 現場での活動のポイント

(1) 活動のポイント

ニジェールにおける学校現場の実態をふまえた上で、活動のポイントを以下のように設定した。

- ① 少ない予算・設備・教材をもとに、APP・EPSを実施・普及する方法を考える
- ② (APPにおいて)ニジェールの子ども達にとって、生活の基礎・基本となる学習内容を厳選する
- ③ 理想と熱意を持って教職に就く現地教員を見つけ、ともに活動を展開する

(2) 活動のポイント設定の理由

① 少ない予算・設備・教材をもとに、APP・EPSを実施・普及する方法を考える

ニジェールの学校現場は、マラディのような大都市の学校でも、教育設備や教材・教具が不足している状態である。また、教育現場で活用されるべき予算も、実際には現場で生かされていないことが多い。このような状況の中、実施の容易さや活動継続の可能性を考えるならば、出来るだけ少ない予算や教材で実施可能なテーマを選択する必要があった。

② (APPにおいて)ニジェールの子ども達にとって、生活の基礎・基本となる学習内容を厳選する。

教員のストライキ等で、フランス語や算数等の基礎・基本の教科の学習時間が大幅に減っている状態であった。それら基礎・基本の時間を削ってAPPを実施するのであれば、その内容も厳選していく必要がある。ただ単に、「楽しい体験の時間」というのではなく、生活をより良くするための知識や技術(生活の基礎・基本)を学ぶ時間にしたいと考えた。

このような考えのもと、まず取り組みたいと考えたテーマが「衛生教育」・「環境教育」・「食教育」等である。これらは、ニジェールで暮らすほとんどの人達に共通する「健康により良く生活するために必要な学習」であると言える。

③ 理想と熱意を持って教職に就く現地教員を見つけ、ともに活動を展開する

生計をたてるための仕事と割り切って働く教師が多い中、ニジェールの子どもの教育に理想と熱意を持って働く教師を見つけることは難しいように感じる。けれども、少数ではあってもそのような人材は確かにいる。理想と熱意を持つ現地教員を見つけ、ともに活動を進めることができるかどうかによって、任国での活動が軌道に乗るか、あるいは、任国を去った後も活動を継続してもらえるかが決まってくる。

実際のAPPの授業を例にすると、子ども達の教育に関心のない教員とともに授業を行った時は、児童の反応も非常に鈍く、伝えたいことも思うように伝わらない。反対に、熱意ある教員が伝えたい内容を理解した上で授業を行った時は、児童の目の輝き方が変わってくる。学習にも深まりが出てくる。同じ30分の授業であっても、教員の資質やモチベーションによって児童が得るものは大きく変わってくることを実感している。

また、モチベーションの高い現地教員に、研修の機会を提供することも大切であると感じている。JICAのプロジェクト主催のAPPの研修会に、APPに関心の深い教員2名に参加してもらったことがあった。私の配属先はマラディ初等教育監督局で、本来ならば、カウンターパートである初等教育監督局長(日本で言うならば、「指導主事」にあたるか。)に参加を依頼するのが筋である。けれども、行政

機関と学校現場では業務内容が大きく異なるので、監督局の職員が研修会に参加しても、持ち帰った内容を行政の現場で生かせる可能性は低い。よほどニジェールの教育に熱意を持って仕事に取り組んでいるか、APPに興味・関心がある人でなければ、研修内容を学校現場まで伝達することは難しいように思う。幸いにも、APPの研修会に参加した教員達は非常にモチベーションが高く、研修した内容を同勤務校の教員達に報告する機会を自主的に持ったとの報告を受けている。

ひとつ注意すべき点は、現場の教員に研修会等の参加を依頼する際は、配属先である行政機関に必ず承諾を得てから話を進めるということである。この順序を間違えると、今後の活動に支障をきたす可能性がある。実際にこの順序を間違えて、活動がしにくい状態になった先輩隊員がいることも事実である。



写真5 配属先の同僚

4 具体的な活動とその効果

任期中の活動を分類すると、大きく3つとなる。

(1) APPに関する活動

任期中におけるAPPに関する活動の概要は、以下の通りである。

- ① マラディ市内の教育現場の把握と授業実施校の選択
- ② 活動テーマの選択と授業案・教材等の作成
- ③ 授業の実施と授業案の改善（現地教員とともに実施）
- ④ 授業案・教材（配布用）の準備と印刷
- ⑤ APPに関するラジオ番組の企画と実施
- ⑥ 教員養成学校におけるAPPの活動紹介と教材・資料の提供
- ⑦ 教員の研修会（CAPE D）におけるAPPの活動紹介と教材・資料の提供
- ⑧ “Échange Culturel Jeunes MARADI - JAPON à Maradi 2006”（ニジェール国内の「青少年活動」隊員や現地教員とともに開催した任地での祭典）におけるAPPの学習発表

以下に、各活動の詳細とその教育効果および、改善すべき点を記述する。

- ① マラディ市内の教育現場の把握と授業実施校の選択
 - ・ 現場の把握と授業実施校の選択

活動の形態が「学校巡回型」であるため、まずは活動を行う学校の選択から始めなければならなかった。マラディ市内には35校の公立小学校と、9校の私立学校がある。その1校1校を巡回し、学校の授業、教員、児童の様子を観察し、ニジェールの教育現場の実態を把握することから始めたいと考えていた。しかし、前述のストライキが3ヶ月間続いたため、公立小学校の巡回を思うように進めることができないという結果となった。けれども、現場の実態を把握しないことには活動の計画も立てられず、今後の見通しもつかない。したがって、まずは、授業を年度初め（10

月) から開始している私立学校を訪問し、施設環境を見たり、授業を参観したりすることから始めることとなった。それとともに、教育現場に精通した公立小学校の現地教員から現場の実態や問題点等を聞くことで全体を把握しようとした。

私立の学校によって、教員の労働条件や設備環境等は格差があるようである。ミッション系の学校は設備環境も比較的調っているが、私立でも個人経営の学校は、砂地の校庭、教室以外は特になしと言った感じである。

A P Pの実施状況については、私立、公立にかかわらずほとんど取り組まれている状態であったが、私立は公立よりも比較的設備や環境等が調っている学校が多いので、出来るならば条件の悪い公立で授業を実施したいと考えていた。しかし、公立校教員のストライキのため、赴任当初のA P P実施校は必然的に私立校からとなった。A P Pの実施状況については私立も公立もゼロに近い状態であったので、その点では私立からの選択も良しとするべきか。

ストライキが明けて最初に活動を依頼した小学校は、マラディ市に古くからある大規模校 (École Centre)。この学校での活動を依頼した大きな理由は、「教育に対して熱意があり、A P Pに興味・関心を持つ教員がいた」ということである。教育に対して熱意のある教員がいることほど、活動を軌道に乗せていく上で心強いものはない。2004年度は、ストライキによる授業時間激減のため、フランス語・算数等の基礎・基本の教科の授業時間確保が先決でA P Pの実施は困難ではないかと推測した。けれども、実際には、A P Pの授業実施を学校長や担任に依頼すると、卒業試験を控えるCM2 (日本で言う6年生) においても、実施の承諾を得ることができた。このようなことから、現場教員は全くA P Pに関心が無い訳ではなく、学習の機会や条件を整えば実施したいと考えている感触を受けた。A P P実施の重要性や有用性を現地教員や各家庭、地域の人々に理解してもらえたならば、普及の可能性は確かにあるように感じる。

・ 時間割の調整

2004年度勤務していた École Centre は、各クラスの時間割がほぼ同じであった。ほとんどのクラスは、(実際に実施しているかどうかは別にして) 午前、午後の最後の時間を APP にあてていた。朝からずっと教師の話聞き、黒板の内容を写し取る形態の学習を続けているので、最後の時間帯は集中力が限界に近づくころである。したがって、A P Pのような活動をもつてくることで気分転換を図るという意図も



写真6 ミッション系の市立小学校



写真7 : 砂地の校庭

あるのか。

可能であれば、各学年でAPPの時間をずらしてもらい、できるだけ多くの学級に授業を実施することが望ましかったが、授業実施の依頼をしたのが年度の途中であったため調整がうまくいかなかった。したがって、初年度は1日に1クラス（1週間でCM2・5クラスのみ）の授業実施となった。

École Centreでの授業がない時間は、他の学校を訪問することとなった。しかし、学校間の移動は砂地の道を自転車で行くというもの（ニジェールの強烈な太陽の下、自力で移動するのは大変）。移動に時間と体力を要するため、午前、あるいは午後の半日の間に2校以上巡回することは厳しかった。

これらの反省から、翌年度は活動校に年度始めから時間割の調整を依頼し、午前・午後ともに、1校で2～3クラスの授業が実施できるよう調整した。

② 活動テーマの選択と授業案・教材等の作成

APPは、ニジェール従来の理論中心の教育とは異なった、生産的、実践的な学習である。

APPのねらいは、以下の3点にまとめることができる。

1. 児童の実態や興味・関心にもとづいた教育活動を行い、児童の情操を養う。
2. 生活に生かすことのできる実践的な学習を行い、今後より良く生きていくための資質や能力を身につけさせる。
3. 地域住民のニーズを反映し、地域に開かれた魅力的な学校を作る。

上記のAPPのねらいをもとに出されたのが、以下の活動領域および実践である。

1. 特色ある手工業の習得（裁縫・編み物・かご製品等）
2. 農業飼育を融合させた活動、及び養蚕業（肥料作り等）
3. 社会文化的な活動、及びスポーツ活動（伝統的な踊り・歌・踊り・劇）
4. 科学技術的な分野の手ほどき（リサイクル）

活動領域が広いため、具体的な活動となれば、いくらでも活動を広げていくことが出来る。

けれども、前述の通り私自身の活動期間があまりにも短いこと、そして、予算・設備・教材等の不足を考えるとテーマを絞っていく必要があった。よって、まず取りかかりとして「人が生きていく上で、一番基本的で大切なこと」、「人がより良く生きていくために学ぶべきこと」を柱にしてテーマ見つけたいと考えた。ニジェール共和国は、経済的、環境的に決して豊かな国であるとは言えない。その中で暮らす人達にとって、「より良い暮らしを安定させていくための基礎・基本」は大切であると考えた。結果、私が選定したテーマは以下の通りである。（※作成資料 省略）

1. 少ない教材・材料で実施可能なテーマ

・音楽活動 ・折り紙

2. 生活の基礎・基本となるテーマ

・衛生教育 ・環境教育 ・食（栄養）教育 ・裁縫

「2.」の条件で選択されたテーマは、「1.」の条件も兼ね備えている。隊員が作成した資料・教材だけで授業を実施し、その後もくり返し活用することが可能であるからだ。

「裁縫」については、現地教員から要望があったため授業案を作成した。しかし、裁縫の実習活動は、毎時間、児童が布・針・糸などの教材を自分で用意しなければならぬ。毎時間それらを準備できない児童が数名いて、何もできずに見ているだけの時間になることもあった。何かを作ったり生産するような活動を行う場合は、材料の調達方法や活動を支える資金のやり繰りを考えなくてはならない。

本来A P Pの活動テーマは、児童や現地教員、保護者や地域の人々とともに、児童の興味・関心や地域の特色を生かすことを考慮して見つけ出すことが理想であるとする。それら多くの人達にA P P実施の有用性を十分理解してもらい、ともにテーマを決定することにより、活動を有意義に進め、継続させることができると考えるからだ。子ども達の教育を支える人達の理解を得たならば、活動のための資金や材料等も、ある程度バックアップしてもらうことが可能であろうし、児童が活動の中で学んだことを家庭へ地域へと還元していくことも可能である。有益な点は多く、最終的に目指すべきところはそこであるように思う。しかし、地域の体制作りをし、地域の人達を巻き込んだ活動を提案し、材料や教材を揃え、実際に活動を実施するという全過程を試みるには多くの時間と労力が必要である。一隊員の力と活動期間だけで達成することは非常に困難である。したがって、本当の意味でニジェールの教育現場に根ざした活動を作り上げていくなれば、J I C Aのプロジェクトのようなチームを組んで、目指すべき方向性と活動の段階を計画的に定めて取り組む必要があるか。

③ 授業の実施と授業案の改善

・ 授業の依頼・実施について

基本的に授業は、隊員がいなくなった後の継続を考えて、現地教員とともに実施したいことを伝えた。（職員会議やイスラムのお祈りの間、隊員一人で行うことはあったが。）また、2年目からは、授業の内容について現地教員に理解してもらうために、前もって授業案を渡すようにした。あらかじめ授業内容や伝えておきたい事柄を書面にしておくことで、自身の不十分な語学力を補って必要事項を確認することができるからだ。現場では教員との打ち合わせの時間を持つことが難しいので、この書面をもとに伝える方法はある程度有効であったように思う。けれども、授業案を直前に現地教員に渡し、内容をよく理解してもらえないまま実施して、学習に深まりが出ないこともよくあった。教員に内容をよく理解してもらった上で実施した

時とそうでない時の児童の食いつき方と学習の深まり方は大きく違ってくる。したがって、より良い授業にするためには、少しの時間であっても現地教員と内容やねらいについて話し合う時間を持つことが大切であると感じる。授業内容のほか、「訪問日時と授業実施クラス」、「引継ぎの意味を含め、原則的に現地教員とともに授業を実施したいこと」、「授業実施後は、その資料と教材を残すこと」等、自分が伝えたいと思う大切な事柄は全て文書とともに依頼するようにした。(依頼事項があやふやになった場合に、もう一度そこに戻って確認することができるという点でも文書による依頼は有効か。)

・ 授業案の改善について

授業案は児童の実態やその反応を想定して仮に作成するが、もとの授業案でうまくいくことはほとんどない。授業実施後に改善すべき点が数多く見えてくるものである。したがって、授業を実施するたびに現地教員の意見も参考にしながら、授業案の修正・改善を行っていった。

2年目からは、授業内容や方法をよりニジュールの児童の実態に合ったものにしようと、授業実施前・後の児童の意識に関する調査を実施しようと考えた。しかし、アンケートをもとに調査を試みたが、現地教員自身がアンケートの形式になっていない人が多く、正確に調査することができなかった。もっとよい調査方法を検討していく必要がある。(※アンケート省略)

・ カリキュラムの作成について

衛生教育・環境教育についてのカリキュラムを作成したいと考えていたが、最終的にそろった学習内容が少なかったため、作成できずに終わってしまった。(私の任期中は、作成した授業案を学年やクラスの性格によって多少変えて行った。)

今後、ある程度学習内容が蓄積されたならば、縦(学年)につながるカリキュラムを作成することが望ましいと考える。個人で作成するのは時間的にも内容的にも難しいので、他任地の小学校教諭と連携して作り上げるのも有効な方法ではないか。

④ 授業案・教材(配布用)の準備と印刷

6月下旬から9月下旬までの約3ヶ月間の長期休業を利用して、これまでの授業案・教材をまとめ大量生産(印刷)する作業を行った。(隊員支援経費による)これらは、学校の教員や教員養成学校の生徒に提供するためのものであった。作成した資料は、以下の通りである。

<作成資料の詳細> (※作成資料の詳細 省略)

● APP sur l'Hygiène / 衛生教育

・ Leçons d'Hygiène / 衛生教育指導案(第1時～第8時)

・ Azizu et Naziru (Conte) / 「手洗い」の大切さに気づくための物語

(※旧隊員の資料を一部修正し作成)

・ Microbes ~ Kwayoyin Cuta (Explication, Images) / 「ばい菌」についての知

識を得るための教材

- Lavage des Mains (Explication, Images) / 「手洗い」の必要性とその方法について学習する教材
(※ドッソ学校保健グループ作成の資料を参考に一部修正して作成)
- Coupe des Ongles (Explication, Images) / 「爪切り」の必要性とその方法について学習する教材
- Lavage des Habits (Explication, Images) / 「衣服の洗濯」の必要性とその方法について学習する教材
- Pensée par les Images (Explication, Images) / 衛生的な生活の大切さに気づくための教材
- Lavez-vous les mains ! (Chant) / 「手洗い」を呼びかける歌
(※11-2 斉藤由紀子隊員 作成の歌を一部修正)
- Moyen de Lavage des Mains (Chant) / 「手洗い」の方法を身につけるための歌
- Changer mes Habits (Dessin) / 衛生教育の内容に結びつけた簡単な図工教材
- Tamponner~Emlevez-vous les Microbes! (Peinture et Traveux) / (同上)
- Tournoyer l' image~Lavez-vous les Mains! (Peinture et Traveux) / (同上)

● APP sur la Musique / 音楽

- ♪ Enchanté / 自己紹介の歌
- ♪ Au revoir / 終わりの歌
- ♪ Chantons le Chant / 授業はじめの歌
- ♪ Wakar Iché / 低学年向けの歌 (ハサ語) (※旧隊員作成の歌に「ダンス」を追加)
- ♪ mes Amis de 10 personnes ! / ♪ ma Famille de 10 personnes ! / 低学年向けの数の歌
- ♪ Bisashen Ibrahim / 低学年向けの歌 (ハサ語) (※旧隊員作成の歌に「歌の説明」を追加)
- ♪ Multiplication / 掛け算の歌 (かけ算1~9の段までを覚えるための歌)
- ♪ Lavez - vous les Mains ! / ♪ Ku wanke hannuwan ku / 手洗い啓発の歌 (衛生教育) (※11-2 斉藤由紀子隊員 作成の歌を一部修正)
- ♪ Lavez - vous les Mains ! / ♪ Ku wanke hannuwan ku / ダンス振付の説明
- ♪ Moyen de Lavage des Mains / 手洗いの方法を覚える歌 (衛生教育)
- ♪ ma Ville Propre ! / 衛生的な生活環境作りを呼びかける歌 (環境教育)

- ・ ♪ Traverser la Route / 交通安全の歌
 - ・ ♪ Tu connais APP? / APP 啓発のための歌
 - ・ ♪ Chanson d' APP / APP 5つの領域の各活動を紹介する歌
 - ・ ♪ 3 Groupes d' Aliments / 3色食品群の歌 (食・栄養教育)
 - ・ ♪ 1' Exercice ~ Jeux avec un petit Piano / ピアニカの練習方法の説明
- ★上記の曲と歌を収録したカセット
- APP sur le Pliage / 折り紙
- ・ Explication sur le Pliage / 折り紙の紹介とその効用
 - ・ Activités de Pliage / 折り紙の折り方

⑤ APPに関するラジオ番組の企画と実施

ニジェールの人達の生活の中でラジオは無くしてはならないものである。高価なテレビを持たない家庭の人々はラジオから多くの情報を得ている。(もちろん、テレビがある家庭の人達も。) 家の中や道端で休んでいる時も、仕事をしている時も、町を歩いている時でさえも、ラジオを片手に聞いている姿が見られる。このような人々のラジオとともにある生活を見て、それをうまく活用して APP についての情報を発信したり、啓発活動を行ったりすることは大変有効な方法であると考えた。

番組は同僚の教員とともに企画し、2005年11月から2006年2月までの毎週日曜日の1時間、マラディ市のローカルなラジオ局 (Radio Anfani) と契約して行った (隊員支援経費による)。

構成員は、私、同僚の教員、ラジオ局の職員、そしてマラディ市内の子ども達である。放送全期間の計画、毎回の番組構成は私が行ったが、その他は役割を分担して番組を組み立てた。

おおまかな役割は、以下の通りである。

- ・ 司会 → ラジオ局の職員
- ・ APPの提供や啓発 → 現地教員
- ・ APPの歌の紹介 → 隊員
- ・ 歌・詩・お話等の発表 → 子ども達



写真8:ラジオ番組の様子

この番組は、子どもと大人 (教員・児童の保護者・地域住民) の両方を対象として内容を設定した。内容は、APPの提供や啓発だけでは内容が硬くなりすぎて視聴者が減ると考えたので、その間あいに「APPの歌の紹介」や、「子ども達の歌・詩・お話の発表」等を組み入れた。

大人を対象にした放送は比較的多いが、子どもを対象にした放送はあまりない。しかも、地域の子供達が出演しているということで、視聴者は予想以上に興味を示してくれたようだ。

番組の強力な助人は、同僚の現地教員であった。その教員は、JICAのプロジ

エクト “École pour tous” 主催の研修会にも参加しており、APPについて大変興味・関心を持ってきている。その同僚が積極的に番組の運営に協力してくれたのである。子ども達の出演については、保護者の了承が必要である。したがって、その同僚があらかじめ10名ほどの子どもの保護者にあたってくれ、子ども出演者を集めることができた。(※ラジオ番組の計画・放送の詳細資料省略)

ラジオ番組を企画する上で改善点をあげるならば、以下の2点である。

1. ハウサ語の放送を企画する。

私の企画した番組は、主にフランス語で行った。フランス語による放送となると、教員など十分な教養がある人達には内容が理解できても、子どもや多くの大人達には難しい内容となる。したがって、全ての人達に分かりやすい番組にするにはハウサ語で行った方が良いと考える。

2. 視聴者からの質問を受け付けるコーナーを設ける。

発信者側から一方的に情報等を提供するだけではなく、視聴者側の質問や意見を聞くことも大切である。それにより、人々はどれだけAPPに関心があり、何に疑問を抱いているかなどが分かってくるからだ。また、発信する側と受け取る側の相互のやり取りがなされたならば、視聴者はさらに興味・関心を持って聴くことができるように思う。

その企画を実行する場合、APPのことをよく理解して積極的に推進していく意思がある現地の人に協力してもらう必要があるか。(語学面でも、番組をより良いものにしていくという面でも、強力な助人となってくれることは間違いない。)

⑥ 教員養成学校におけるAPPの活動紹介と教材・資料の提供

現場の教員は多忙であり、日々の仕事に加えて新しいものを学んでいくためには時間と労力が必要である。したがって、近い将来教師になるために学ぶ学生達にAPPの知識や情報、資料を提供する方が、教育現場での波及効果をねらえるのではないかと考えた。このような考えから、小学校現場での活動と並行して、教員養成学校での活動計画・準備も行うこととなった。

教員養成学校で授業を行うにあたり、授業の内容や流れを準備していたが、実際にはそのように行うことは出来なかった。(※授業詳細資料省略)

その大きな理由は、2005年新年度が始まってからすぐに授業が開始されなかったこと(学校が入学試験の結果を紛失したため、学生が入学できなかったとのこと。)と、学生のストライキが決行されたこと(政府からの奨学金が未払いだったとのこと)があり、授業実施の十分な時間が確保できなかったためである。また、授業を行った時の学生の反応を見て授業の内容や方法を多少変えていくこととなった。

小学校でのAPPの実施については、あらかじめ授業案を現地教員に示すことにより、現地教員とともに授業を行うことができた。けれども、教員養成学校では私自身の語学力がないと授業が成立しない。授業の方法は、主に模擬授業形式で行ったものの、やはり語学力がないとその進行は難しい。したがって、毎回授業で言う

べきことをある程度まとめて授業に挑むこととなった。

語学力も十分でないのに、よく教員養成学校での授業に挑んだものだと自分でも思う。肩肘を張ることなく、何でも挑戦してみることができるのは、やはり何でも大きな心で受け止めてくれる人が多いニジェールという国であるからか。

⑦ 教員の研修会（CAPED）における APP の活動紹介と 教材・資料の提供

学校現場で APP の活動を紹介する時間を取り、改めて全職員に集まってもらうことは難しい。けれども勤務時間中に設定された研修会であれば、多くの教員が集まった中で活動を紹介することが可能である。マラディ市では、3～5校で1つのグループを作り、年に何回か教員の研修会を行っている。（各学校の校長や教育行政機関の指導主事も参加。）その機会を活用して、私が行ってきた活動をいくつか紹介させてもらった。

活動の紹介の仕方であるが、各学校や教員に対して APP の資料を配布するだけでは、その後、授業の実施につなげていくことは難しい。したがって、模擬授業のような形で具体的な活動モデルを教員に示し、それを見てもらった教員の学校に、その活動を説明した資料・授業案・教材等を提供する方法をとった。

ただ残念に思うのは、この研修会での活動紹介を始めたのが活動の終盤だったため、あまり多くを紹介することができなかったことである。後任の方については、ぜひこの機会を大いに生かしていただきたい。（※CAPED 詳細資料 省略）

⑧ “Échange Culturel Jeunes MARADI - JAPON à Maradi 2006” における APP の学習発表

このイベントは「青少年活動」の隊員が各隊員の任地で開催する、日本人ボランティアとニジェールの人々の文化交流を目的とした祭典である。任期の最後に、私が活動するマラディ市でも、この祭典を行うことになった。（イベントの計画・準備・運営は同僚の教員と行った。「青少年活動」隊員の隊員支援経費による。）

このイベントの中で、私が APP を実施した小学校の児童（École Centre - CM 2, Classe de non-voyant=盲学級）が APP の歌の発表を行った。また、EPS を実施した小学校の児童とは、イベントに向けて「よさこいソーラン」の踊りを練習し、本番では各任地から集まった隊員と一緒に踊ることができた。（「よさこいソーラン」の節は、ニジェールの伝統的な音楽の雰囲気と少し似ているところがあり、この曲が好きになった子どもも何人かいた。）子ども達にとっては、学習発表の大変良い機会であったし、心に残る経験となったようだ。また、マラディ市の人達に対しても JOCV のニジェールでの様々な活動を知ってもらう機会となったことが良かったように思う。

イベントの準備、当日の会の進行等については、様々な問題が起こった。計画した通りには決していかないのがニジェールであるし、とんでもないハプニングが起こるのもニジェールであることを、身をもって学んだ気がする。問題やハプニングが続出する中、最後まで何とか終わることが出来たのは、ひとえに各任地から集ま

ってくれた隊員がそれぞれの技術を駆使して支えてくれたからである。(事務所調整員やJICAの運転手まで協力して下さった)陰で表で支えて下さった方々に心から感謝したい。(※イベントの計画・運営の詳細省略)



写真9 ニジェール相撲

(2) E P Sに関する活動

任期中におけるE P Sに関する活動の概要は、以下の通りである。

- ① マラディ市内の教育現場の把握と授業実施校の選択
- ② 活動案・教材の作成
- ③ 授業の実施と活動案の改善(現地教員とともに実施)
- ④ 授業実施校へ資料と教材の引継ぎ

以下に、各活動の詳細とその教育効果、および改善すべき点を記述したい。

① マラディ市内の教育現場の把握と授業実施校の選択

学校によって多少差異はあるが、E P Sを実施するための十分な広さの校庭がない、校庭があってもたくさんの木が植えられている、教材・教具はほとんど無い、というところは多い。そのような条件や環境の中で、実施可能な活動を考えなければならなかった。

授業実施校については、新年度が始まってから3ヶ月間教職員組合のストライキが行われたため、E P Sの活動に関しても私立の学校からのスタートとなった。(私がE P Sを実施した学校は私立2校のみ。A P Pの活動に重きをおきたいと考えたため。)

ある私立学校ではE P Sを実施していたが、教師は鞭を片手に授業を行っていた。(E P Sの活動に限らず、教室の中でも鞭を使う教師は多い。)ニジェールの子ども達は、日本の学校の児童のように「まっすぐ順番に並ぶ」ことや「すばやくキビキビと動く」ことに慣れていない。(その大切さを指導されていないからか。) よって、児童が指示通りに動かない場合には、教師が鞭を飛ばして動かすことになる。その鞭に反応して児童は恐ろしくすばやく動くという感じだ。鞭をもってしか児童の秩序を保つことができないというのは悲しいことである。けれども、私自身、鞭を使うことに対して抵抗と違和感を覚えながらも、そこまで踏み込んで現地教員と話をすることができなかった。

② 活動案・教材の作成

A P Pと同じく教材・教具がほとんど無いに等しい状態である。校庭があっても、砂地なのでゲームを行うためのラインを引くことさえ難しい。このようなことを考慮して考えたのが、以下の活動である。(※活動の詳細資料省略)

● 跳ぶ運動～馬跳びなど	・ Sauter ・ Saute - Mouton
● ゲーム運動 ～ジャンケンを使った ゲーム	・ Pierre, Ciseaux, Papier～Match du plus fort ! ・ Pierre, Ciseaux, Papier～Train ! ・ Pierre, Ciseaux, Papier～Hadari Mutané !
● 走る運動～走る運動各種 リレーなど	・ la Course1～3
● ゲーム（ボール）運動 ～サッカー・ドッジボール	・ le Football～les Exercices ・ le Football Simple (sans limitation de terrain) ・ le Football (dans le terrain limité)
	・ le Ballon du Chasseur1～3 ・ le Ballon du Chasseur～les Explications

③ 授業の実施と活動案の改善

活動の方法を分かってもらえるように、活動の説明をフランス語と図で表したものを作成し、事前に現地教員に渡すようにしていた。その資料をもとにしながら、現地教員の協力を得て授業を実施した。活動案については、あらかじめ活動の全体をイメージして作成しても、実際に児童を前にして試みるとうまくいかないことが多い。「試みては修正」の作業をくり返して最終的な活動案を作成した。けれども、これらもあくまで案である。実施する学校の児童の実態や現地教員の指導力によって、内容を臨機応変に変えていく必要がある。

④ 授業実施校へ資料と教材の引継ぎ

E P Sを実施した学校に、これまでの活動をまとめた資料とバレーボールを提供することで引継ぎとした。（活動で使用したボールには、マーカーで「NIGER/JAPON」と書き、ニジュールと日本の国旗を描き加えた。ボールは、バレーボール隊員から、活動で使わなくなった物を譲り受けた。）

(3) ニジュールと日本の児童間の交流 に関する活動

交流に関する活動の概要は、以下の通りである。

- ① 「世界の笑顔のためにプログラム」における 日本の小学校への楽器収集と郵送の依頼・それら楽器の活用
- ② マガタカルダ小学校 と 南あわじ市立北阿万小学校児童間の交流
- ③ 岡山県米来小学校児童との交流

以下に、各活動の詳細と その教育効果を記述したい。

① 「世界の笑顔のためにプログラム」における 日本の小学校への楽器収集と郵送の依頼・それら楽器の活用

何度も記述しているが、APPで活用できる教材・教具ほとんど皆無に等しい。したがって、「世界の笑顔のためにプログラム」において、下記のような概要で楽器の収集・郵送を依頼した。

支援依頼校	南淡町立北阿万小学校
申請品目	「ソプラノリコーダー」 「鍵盤ハーモニカ」 「タンバリン」
受領対象	ニジェール・マラディ圏内の小学校
使用目的	マラディ圏内・小学校の巡回授業，APP（生産実習活動、特に音楽活動）において使用。
活用効果	音楽活動で利用できる楽器がほとんど無い状態である。これらの楽器を用いることで活動の幅が広がり、児童の情操教育に役立つことが期待される。

楽器は主に盲学級の児童の音楽活動で活用した。マラディ市の普通規模の小学校では、1学級 50人以上の学級がほとんどである。全く楽器を扱ったことのない児童 50人に演奏方法の指導をすることは大変難しい。現地教員の協力のもと、よほど工夫されたシステムによって指導しなければ大混乱することが予想される。（現地教員も、ほとんどその扱い方を知らない。）私自身、そのような条件で児童を指導する力量がないと判断したので、少人数の学級（盲学級）でそれらの学期を活用することに決めた。盲学校の児童は目が見えにくいというハンディキャップがあるが、初めての楽器に挑戦して演奏できたという経験が、少しでも各自の自信に変えることができたという願いもあった。



写真 10：日本から送られてきた楽器を手にした子ども達

ピアノには、「ド・ミ・ソ」の位置が分かるように、鍵盤上にボンドで点の印を付けて使用した。

私の任期最後の頃には、簡単な曲（♪Enchanté）が吹けるようになり、“Échange Culturel Jeunes MARADI - JAPON à Maradi 2006”（「青少年活動」隊員と現地教員等と協力して企画・運営した地域の文化交流イベント）では、マラディ市のたくさんの人達の前で発表するという経験を得ることができた。当日は、緊張のためかうまく吹くことができなかつた児童もいたが、イベントが終わってからも引き続き練習し、私の学校訪問最後の日に、もう一度その成果披露をしてくれた。私にとっては最高の贈り物であった。一生懸命に練習したことは、児童の心の中に頑張ったプラスの経験として残るに違いない。

② マガタカルダ小学校と南あわじ市立北阿万小学校児童間の交流

交流の発端は、マガタカルダ小学校の校長より、「ニジェールと日本の子ども達の間で交流をしたい。」との依頼を受けたことであった。交流を開始したのは、私の任期が残り1年足らずとなった頃であり、手紙や写真の交流については各校とも1回ずつ行ったのみであった。思うように交流が進まなかったが、たった一度の文通ではあっても、ニジェールの子ども達にとっては心に残る出来事となったようだ。また、北阿万小学校では、「ふれあい集会」でニジェールのことについて学んだ後、児童会で文房具を集め、マガタカルダ小学校の児童に郵送したくれた。(実際には、その贈り物はうまく現地に届かず、また日本に戻ってきてしまった。再度郵送してマガタカルダ小学校に届くのに1年以上かかっている。)(※交流計画の詳細省略)



写真 11：手紙を手にした児童

この交流を通して、問題点がいくつかあるように感じた。以下にまとめたい。

- ・ニジェールと日本の生活レベルや環境等に大きな差がある。
(例：ニジェール → 郵便料金が高い。そのためのお金も調達しにくい。郵便物は、私書箱を設置している人しか受け取れない。インターネットを使える環境が限られている。)
- ・ニジェールと日本の学校現場での教育活動への取り組み方に差がある。
(例：ニジェールの教育現場 → 年間の指導内容は決められているようであるが、いくらでも融通がきく。
日本の教育現場 → 各教科等の年間指導計画が綿密に立てられており、ほぼその通りに進められる。その中で、年度途中から交流の時間を捻出することは難しい。
→ それでも敢えて交流の機会を作るならば、総合学習の時間に「国際理解」をテーマとして、あるいは学級活動のひとつとして行うことが可能性か。)

③ 岡山市・米来小学校児童との交流。

交流のきっかけは、ニアメの郵便局で出会った現地教員から「日本の小学校から送られて来るはずの荷物がなかなか届かない。」と話を聞いたことが始まりであった。交流先は岡山の米来小学校。かつて、その現地教員の所属するNGOのメンバーの1人がJICAの研修で米来小学校を訪問したことから交流が始まったらしい。「手紙のやりとりをするにも、お互いに共通言語がないので交流することが難しい。仲介役になってもらえたらうれしいのだが・・・」との話を受けて、交流メンバーの一員となった次第である。

米来小学校の児童は、ニジェールの教員との交流をきっかけに、総合学習の時間

にニジュールのことにについて学習するようになったようだ。夏休みには、ニジュールの子ども達に何か贈り物をしようとチャリティーバザーを行い、その収益金を送るとい活動を行っていた。私自身は、その送り先の確認や収益金のより良い活用方法の相談、伝達事項をそれぞれに伝えるなどした。また、私がとらえたニジュールの姿ではあったが、米来小学校5・6年生の児童に「ニジュール通信」を送ったり、総合学習の時間に出された質問に答えたりした。(伝達手段は、自宅の電話回線によるインターネット。)そして、帰国後は実際に米来小学校に訪問し、5・6年の児童に通信では伝えきれなかったニジュールのことをお話する機会をいただいた。

不思議なめぐり合わせで、交流の中の一人に入れていただくことになった。縁あって出会えた人達である。帰国後の忙しい生活の中では、時に心の余裕を無くしてしまうこともあるが、出会えたたくさんの人達とのつながり忘れず大切にしていきたいと思っている。

5 今後の活動の課題と可能性

(1) 今後の活動の課題

私が考える範囲でのニジュールの教育現場における今後の活動の可能性を以下にまとめたい。

- ① 歴代隊員の優れた活動や実践をうまく活用する(横の連携)
- ② ICAの教育プロジェクトから発信される情報や資料をうまく活用する(縦の連携)
- ③ APPやEPSの学習内容を改善・補充し、さらに内容を再編成してCI(1年生)からCM2(6年生)まで縦につながるカリキュラムを作成する
- ④ 教員の研修会やラジオ放送を活用してAPPを普及、継続させていくための基盤作りをする
- ⑤ (可能であるならば)後任として、現場経験のある現職教員の派遣を依頼する
- ⑥ ニジュールの子ども達の教育について真剣に考える意欲と熱意のある人材を探し、自分の活動についての理解を得、ともに活動を展開していく

(2) 各課題の詳細説明

① 歴代隊員の優れた活動や実践をうまく活用する(横の連携)

現職隊員の活動期間は、新規に開始してその活動の成果を出すにはあまりにも短い期間である。私自身1年9ヶ月(現地語学後訓練、教職員のストライキ、学校の長期休業等の期間を除くと実質1年5ヶ月ほどか。)の活動期間、活動のテーマを探すところから始まり、授業案・教材等を作成し、現地教員とともに授業を実施し始めたところで任期が終了してしまった。

このようなことから、隊員は活動を全くのゼロから開始するのではなく、歴代隊員の良い実践をうまく活用しながら、自分なりの活動を作り上げていくことがベターではないかと考える。私が作成した活動案や資料・教材等についても改善すべき

点が多いが、これから赴任される方にはそれをたたき台として、その方自身の経験やユニークな発想を生かした活動を取り入れ、より良い形に変えていただきたいと思います。

取りくんだ活動や実践は自分だけのものとどめず、同任国（広くは、同じ言語圏）の教育現場に携わる隊員（APPについては、小学校教諭に限らず、その活動に関わる「果樹」・「植林」・「青少年活動」・「家政」等の隊員）と共有し、横とのつながりの中でさらに良いアイデアを探り、実践を深めていくことができるのではないかと。この横の連携をうまく生かした活動により、ニジェール全体の教育活動をより良い方向へ進めていくことができるのではないかと。

② JICAの教育プロジェクトから発信される情報や資料をうまく活用する（縦の連携）

ニジェールではJICAのプロジェクト“École pour tous”が活動を展開していたが、そこから発信される情報をうまく活用すべきではないかと。隊員のレベルでプロジェクトと同じ活動をめざすのは予算・環境・条件的に厳しいと言えるが、そこから得た情報は、これからの活動の中で有益なものになることは間違いない。ニジェールの国が目指すべきAPPの方向性や成功した具体的実践例を示してくれているので、その情報を積極的に取り入れて活用していくことが大切であると考えます。

短い期間で一隊員に出来ることは限られている。しかし短い時間であっても、縦横の連携をうまく取りながら活動していくことで、活動の幅や可能性を大きく広げることが出来るかと考える。

③ APPやEPSの学習内容を改善・補充し、さらに内容を再編成してCI（1年生）からCM2（6年生）まで縦につながるカリキュラムを作成する

私が作成した授業案や教材は、各学年で多少内容や方法を変えたものの同じ内容を実施するにとどまった。今後は、実施した内容をたたき台として改善・補充をくり返し、縦につながるカリキュラムを編成していく必要がある。

カリキュラムを作成するには、計画・試行・改善・再試行…を何年間かけてくり返し、より良いものに仕上げていく必要がある。時間を要する作業なので、一隊員がその全ての過程を成し遂げることは難しい。よって、達成できなかった部分は、



写真 12 JICAプロジェクトのマーク



写真 13 プロジェクト主催の研修会

問題点や改善すべき点をできるだけ明確にして後任に引き継ぐ必要があるように思う。その引継ぎがうまくできるかどうかによって、完成までの期間やより良い物が出来るかどうかが決まってくる。

④ 教員の研修会やラジオ放送を活用してAPPを普及、継続させていくための基盤作りをする

APPを実施、普及、継続させていくためには、その活動を支える人々（現地教員、児童の保護者、地域の人々等）に理解と協力を得る必要がある。

その基盤作りとして、以下の方法をあげたい。

1. 教員の研修やラジオ放送を通して、APP実施の有効性や重要性を教員や各家庭、地域の人々に呼びかける。
2. APP実施後の児童の良き変容を、教員や各家庭、地域の人々に知らせる。

成果が見えにくい地道な活動ではあるが、本当の意味でAPPの普及・継続を考えるならば、このような人々の精神的な下地を作る活動が不可欠であると考えている。

⑤ 後任として、現場経験のある現職教員の派遣を依頼する

後任を要請するにあたって、可能であるならば「小学校での実務経験が3年以上」あることを希望した。その理由は、授業案を数多く作成し行った経験、カリキュラムの作成に携わった経験等がある教員の方が、長期的な見通しを持って活動を計画し、内容を深め広げることができるのではないかと考えたからだ。また、多くの学年での指導経験がある方が、その発達段階にあった指導内容や方法を取り入れることが可能でないかと考える。

日本とニジェールの現場の状況は大きく異なるので、日本での現場経験がニジェールでも通用するとは限らない。けれども、日本の現場で児童と向き合い、試行錯誤しながら教育活動を行ったという経験と自信が、ニジェールでの活動の中での大きな支えとなるという事実は否定できない。

⑥ ニジェールの子どもの教育について真剣に考える意欲と熱意のある人材を探し、自分の活動についての理解を得、ともに活動を展開していく

APPやEPSを普及、継続させるためには、その活動について関心と意欲を持つ現地教員の協力が不可欠であることを強く感じる。私自身は、幸運にもそのような熱意ある教員に出会うことができた。彼らに理解と協力を得ることができたからこそ、活動を前に進めることができた。それらの教員のサポートなしに全期間の活動は成り立たなかったと言ってよい。

配属先の行政機関（私の場合、マラディ初等教育監督局）であっても、現場の小学校であっても、APPの活動に関わる他の場所であっても、まずは、その活動の場で核となる人（ニジェールの子どもの教育について真剣に考える意欲と熱意のある人材）を見つけることが大切であると考えている。幅広く多くの教員に対してAPPの授業を実施したり、資料を提供したりする方法が一般的であるが、その場合何よりも多くの予算が必要である。たとえ、予算が十分に整い多くの人達に情報や資

料を提供できたとしても、よほど教育に対して熱意があり、APPに興味・関心がある人でなければ、そこで得たものを今後に活かしていくことは難しいとも考える。したがって、各活動の場で核となる人を見定めて、その人達に積極的に働きかけていった方が、結果的にはしっかりとしたAPPの土壌を固めることができるのではないかと考える。

APPの活動を理解し、ともに活動してくれる人が少数であっても良い。核となる人が実践し成果を出した時、その事実を見たまわり人達は必ず良い刺激を受ける。少数であっても確かな人材がまわりに与える影響や波及効果は大きいのではないかと考える。



写真 13 教室で子ども達と

※引用・参考資料

- ・外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/niger/data.html>
- ・J IA Bulletin 2004 年 10 月号 海外レポート・ニジェール事情 (鈴木敏彦著/2004. 10)
- ・フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』



ニジェール共和国の 教育現場における活動



～ 人々の生活 現場の実態を知って 自らの活動を知る ～

ニジェール共和国 概要 1 位置・国土・気候



ニジェール共和国

<アフリカ大陸地図 / 外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/e/area/afri/afri01.htm>より>

- ・西アフリカ 内陸の国
- ・国土の 2/3 が砂漠
- ・北部は乾燥し、南部は雨季と乾季に分かれるサヘル地域。

ニジェール共和国 概要 2



- ・人口：1億832万人 / 日本 1億2733万人
- ・面積：126万7000 km² / 日本 37万7880km²
- ・人種：ハウサ族56%・サルマ族22%・トウアレグ族 など
- ・言語：フランス語(公用語)・ハウサ語・サルマ語 など
- ・宗教：イスラム教75% ほかにキリスト教・伝統宗教 など
- ・産業：農牧業・鉱業 など

ニジェール共和国 概要 3



- ・首都：ニアメ
- ・政体：共和制(元首 タンジャ・ママドゥ大統領)
- ・通貨：CFAフラン
- ・平均寿命：男子46.9歳 / 女子50.1歳
- ・15歳以上人口の成人非識字率：85.7%
(男子78.2% / 女子92.9% , 1997年)
- ・初等教育の就学率：34% (2000年)

人々の生活 1

- ・物質的、経済的に、豊かでない家庭が多い。
- ・生計を立てる為の仕事が少ない。
- ・乾燥した砂の大地。
農作物を育てるには過酷な環境。
- ・大家族。(女性1人あたり、平均8人出産。
イスラム教徒は一夫多妻制。)



人々の生活 2

- ・家族や親戚と 支え合いながら生活。
- ・仕事がなくとも慌てず、のんびりと生活。



配属先・要請内容

- ・配属省庁：基礎教育識字省
- ・勤務先：マラディ初等教育監督局
- ・要請内容：マラディ市内の小学校を巡回し、
、およびEPS(体育)の
授業を実施する。現地教諭に対しても指導法
等について、助言・指導することが期待される。

- ・APP (Activités Pratiques Productives)
＝ 生産実習活動
※ 日本の「総合学習」に近い学習



- ・EPS (Éducation Physique) = 体育

教育現場の実態

- ・設備は、砂地の校庭に校舎のみの学校が多い。
- ・指導案、教材、教具はほとんどない。
- ・教育活動のための予算も、現場で活用されないことが多い。
- ・全体的に、モチベーションの高い教員が少ない。
- ・教職員組合のストライキ等のために、児童の学習の機会が十分に確保されていない。
- ・児童も家庭の労働等のために、学校に出てこないことがある。



現場での活動のポイント

1. 少ない予算・設備・教材をもとに、EPS・APP
を実施・普及させる方法を考える。
2. (APPにおいて)ニジェルの子ども達にとって、
生活の基礎・基本となる学習内容を厳選する。
3. 理想と熱意を持って教職に就く現地教員を見
つけ、ともに活動を展開する。



EPS(体育)主な活動

- ① マラディ市内の教育現場の把握と授業実施
校の選択。
- ② 活動案・教材の作成。
- ③ 授業の実施と活動案の改善。
- ④ 授業実施校へ 資料と教材の引継ぎ。



EPS 教材作りと活動 1

- 跳ぶ運動(馬跳びetc.)
・Sauter ・Saute - Mouton
- ゲーム運動(ジャンケンを使っ たゲーム)
・Pierre, Ciseaux, Papier ~ Match du plus ort!
・Pierre, Ciseaux, Papier ~ Train!
・Pierre, Ciseaux, Papier ~ Hadari Mutané!
- 走る運動(走る運動各種・リレーetc.)
・la Course 1 ~ 3



EPS 教材作りと活動 2



APP(生産実習活動)主な活動

- ① 市内の教育現場の把握と授業実施校の選択
- ② 授業テーマの選択と授業案・教材等の作成
- ③ 授業の実施と授業案の改善
- ④ 授業案・教材(配布用)の準備と印刷
- ⑤ APPに関するラジオ番組の企画と実施
- ⑥ 教員養成学校におけるAPPの活動紹介と教材・資料の提供
- ⑦ 教員の研修会(CAPED)におけるAPPの活動紹介と教材・資料の提供
- ⑧ "Échange Culturel Jeunes MARADI – JAPON" におけるAPPの学習発表



APP 具体的な活動 1

・音楽を用いた衛生教育・環境教育・栄養教育などの指導案・教材等の作成。



APP 具体的な活動 2

・作成した指導案・教材を用いての現地教員との授業実施と改善。



●APP sur l'Hygiène (衛生教育)

- ・ Leçons d'Hygiène (衛生教育指導案(第1時~第8時))
- ・ Azizu et Naziru (Conte) / 「手洗い」の大切さに気づくための物語 (※印刷委員の資料を一部修正し作成)
- ・ Microbes ~ Kwayoyin Cuta (Explication + Images) / 「ばい菌」についての知識を得るための教材
- ・ Lavage des Mains (Explication + Images) / 「手洗い」の必要性と、その方法について学習する教材 (※ドゥワノ学校記録グループ作成の資料を参考に一部修正して作成)
- ・ Coupe des Ongles (Explication + Images) / 「爪切り」の必要性と、その方法について学習する教材
- ・ Lavage des Habits (Explication + Images) / 「衣服の洗濯」の必要性と、その方法について学習する教材
- ・ Pensées par les Images (Explication + Images) / 「衛生的な生活の大切さに気づくための教材
- ・ Changer mes Habits (Dessin) / 衛生教育の内容に結びつけた簡単な図工教材
- ・ Tamponner ~ Emlevez-vous les Microbes ! (Peinture et Travaux) (同上)
- ・ Tournoyer l'image ~ Lavez-vous les Mains ! (Peinture et Travaux) (同上)



♪Moyen de Lavage des Mains



●APP sur la Musique (音楽)

- ♪ Enchanté / 自己紹介の歌
 - ♪ Au revoir / 終わりの歌
 - ♪ Chantons le Chant / 授業はじめの歌
 - ♪ Wakar Iché / 低学年向けの歌(ハウサ語) (市田隊員作成の歌に「ダンス」を追加)
 - ♪ mes Amis de 10 personnes ! / ma Famille de 10 personnes ! / 低学年向けの歌の歌
 - ♪ Bissachen Ibrahim / 高学年向けの歌(ハウサ語) (市田隊員作成の歌に「歌の差別」を追加)
 - ♪ Multiplication / かけ算の歌
 - ♪ Lavez - vous les Mains ! / Ku wanke hannuwan ku / 手洗い習慣の歌 (衛生教育)
(市田隊員作成の歌に「ダンス」を追加)
 - ♪ Lavez - vous les Mains ! / Ku wanke hannuwan ku / ダンス指付けの説明
 - ♪ Moyen de Lavage des Mains / 手洗いの方法を見える歌 (衛生教育)
 - ♪ ma Ville Propre ! / 衛生的な生活環境作りを呼びかける歌 (環境教育)
 - ♪ Traverser la Route / 交通安全の歌
 - ♪ Tu connais APP ? / APP啓発のための歌
 - ♪ Chanson d'APP / APP 5つの領域の各活動を紹介する歌
 - ♪ 3 Groupes d'Aliments / 3色食品群の歌 (食・栄養教育)
- 上記の曲と歌を収録したカセット
- ・ l'Exercice ~ Jeux avec un petit Piano / ピアノの練習方法の説明

♪ la Multiplication

Nous allons chanter "les maths",
Chantons Chantons Oh!

Multiplication 2×1 (deux fois un),
 $2 \times 1, 2$ (deux fois un, deux)

2×2 (deux fois deux) 4 (quatre)

2×3 (deux fois trois) 6 (six)

2×4 (deux fois quatre) 8 (huit)

2×5 (deux fois cinq) 10 (dix)

2×6 (deux fois six) 12 (douze)

2×7 (deux fois sept) 14 (quatorze)

2×8 (deux fois huit) 16 (seize)

2×9 (deux fois neuf) 18 (dix-huit) Nous

pouvons chanter "les maths",

jusqu' à 2×9 (deux fois neuf) !

●APP sur le Pliage (折り紙)

- Explication sur le Pliage / 折り紙の紹介とその効用についての説明
- Activités de Pliage / 折り紙の作り方についての説明



●APP sur l'Environnement (環境教育)

- Leçons d'Environnement (環境教育)
- ゴミの適切な処理・再利用の必要性を学ぶための授業案



●APP sur la Nutrition (栄養教育)

- Leçons de 3 Groupes d'Aliments
- 3色食品群をバランスよく摂取することの大切さを学ぶための授業案



APP 具体的な活動 3

- ・教員養成学校や教員の研修会での活動紹介と教材・資料の提供。



APP 具体的な活動 4

- ・現地教員とAPP啓発のためのラジオ番組を企画・実施。



ニジェールと日本の児童間の交流に関する活動

- ① 「世界の笑顔のためにプログラム」において楽器の収集・郵送を日本の小学校に依頼。ニジェールの教育現場での活用。



- ② マガタカルダ小学校と南あわじ市立北阿万小学校児童間の交流。
- ③ 岡山県・米来小学校児童との交流。

今後の活動の課題と可能性



プログラム 3

帰国後の活動と協同

インターネットライブ授業の報告

清水大格 教諭 (平塚市立松原小学校)

(15-1, ベトナム, 小学校教諭)

帰国後、派遣活動を生かした教育活動事例報告

真子和哉 教諭 (佐渡市立佐和田中学校)

(16-1, コロンビア, 環境教育)

西尾直美 教諭 (守谷市立愛宕中学校)

(16-1, ドミニカ共和国, 小学校教諭)

ぼくら地球の未来っ子

清水 大格

(15-1, ベトナム, 小学校教諭, 神奈川県平塚市立松原小学校)

松原小学校区には、様々な国籍の人たちが居住されている。外国の事情に詳しい人に話を聞いたり、外国の人に話を聞いたりする中で、「同じこと・違うこと」に気づき、受容していく態度を育てたい。

年間活動計画	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
										お世話になった人たちへ	
	調べよう世界の国と人		深めよう聞いてみよう		ベトナムの小学生と交流しよう						

1 単元の目標

- (1) 異文化や異なる文化をもつ人々に興味を持ち、受容しさらに関係を深めようとする。
- (2) 考えや文化を交流し合う中で、自らの考えや意見を自ら発信し、具体的に行動しようとする。

2 単元の位置づけ

総合は3年生の時に日本の都道府県に関して学習を進めてきた。それぞれの土地の持つ違いや同じことに気づき、学習をさらに世界へ広げていこうという流れになった。学級には両親が外国籍の児童が数名おり、外国に対する興味がもともと深かったことや、担任が協力隊OVであることも少なからず関係している。

いずれにせよ、日常生活や日々の授業、外部講師による異文化に対する驚きや戸惑いがよい方向での学習への刺激となるようにしていく。同時に、受容する心やさらに関係を深めるために考え・意見を発信しようとする態度を育成する。

3 主題に迫るために

- (1) 体験的な活動の場を設ける

発達段階を考慮し、体験的に学習できる場を設ける。たとえば、実際にその国の料理を食べたり、衣装を着たり、イメージするその国の様子を絵にしたり、さらには同

世代の児童と交流したり、といったことである。

(2) 体験後のつながりを大切にする

関係を深めるために、一回だけの対面ではなく複数回を想定した場の設定をする。交流したときにふり返りをする。それを元に次回につなげるためにどうすればよいのかを検討する。よりよい次回をつくるためであるが、副次的に相手との関係の構築に繋がればと思う。

(3) 事前事後に練り合う

小レポートや小発表会を通して、その活動や体験を通してどう思ったのか、感じたのかをまとめ、考えや意見を交換するなど共同して学ぶ場を設ける。

4 本単元第4学年の年間活動計画（全60時間）

	学 習 活 動	手だて
1次	①調べよう、世界の国と人（8時間） <ul style="list-style-type: none"> ・ 世界にはどんな国があるのか調べる ・ 世界の国旗を調べる国の場所を地図で確認する ・ 調べたい国の事情を知る人、知る団体に手紙を書き、講師依頼を書く ・ 担当する人、機関を決め、全体の進行、調整をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童の個人的な知り合いや地域の団体を整理しておく。
2次	①深めよう聞いてみよう～外国の人のお話～（6時間） <ul style="list-style-type: none"> ・ インドネシアの話（アナックアグンさん・保護者） ・ ロシアの話（リュウダさん・地域の人） ②深めよう聞いてみよう～外国にくわしい人のお話～（8時間） （ベトナム協力隊員OBの担任の話も含む） <ul style="list-style-type: none"> ・ カナダの話（本庄さん・保護者） ・ ベトナムの話（清水大格 ベトナムOV） ・ ジンバブエの話（深山さん ジンバブエOV） ・ モンゴルの話（加藤さん モンゴルOV） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事前に来られる方の国を児童が調べておく。ある程度の知識と興味がある状態でお話を伺う ・ ふり返りで様々な感じ方があることを知る。
3次	①ベトナムの小学生と交流をしよう（6時間） <ul style="list-style-type: none"> ・ どんな交流にしたいか（手紙、電話、インターネット） ・ ベトナム語をどうする？文化は？（高橋さんの話 ベトナムOV） ・ 一緒に絵を描こう（巨大壁画の交換） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ できること、できないことを話し合う ・ その上でど

	<p>②ベトナムの小学生に伝えよう（8時間）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ わたしたちの平塚、どんなことを伝えよう（七夕祭り、湘南平、松原小、須賀港、海、そして私たち） ・ 似顔絵作成、風景画作成 ・ 漢字クイズ、七夕劇、ネットじゃんけん ・ ベトナムインターネットライブ交流1回目（高橋さんの協力） 	<p>ういう交流を したいか考 える。 ・ 自分たちの 思いを整理 し、伝えたい ことへとつな げる。 ・ 反省をふま え、よりよい 交流を考 える。</p>
	<p>③これから（4時間）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 思ったこと、気づいたこと ・ インターネットでできること、できないこと。次回へ向けて 	
4次	<p>①気づいたことを深めよう、ふくらまそう（8時間）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ニンソン小の絵で伝えたいこと（平塚のまち、松原小、私たちの作品） ・ ベトナムインターネットライブ交流2回目 ・ 振り返って 	<p>・ 前回の交流 をふまえ、発 展させてい く。 ・ 手紙の書き 方や発表の仕 方を国語と関 連させ学習す る。</p>
	<p>②お世話になった人たちへ（12時間、年間通しての活動）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ お礼の手紙 ・ 活動の報告 	

5 指導上の工夫とポイント

(1) 地域をいかした学習

松原小学校は明治15年（1882年）創立である。今年で124年目を迎えた、平塚でも最も古い学校の1つとあってよい。何世代にもわたってこの地に住んでいる家庭が多くおり、学校を大切にする気風が強い。学校、保護者、地域が一体となって子どもたちの健全育成にあたっている。また、隣には平塚市国際親善課があり、地域にも外国事情に詳しい方が何名か居住されている。

そうした実態を踏まえ、まず地域の方がゲストティーチャーを引き受けて下さるかどうかの打診をし、多く引き受けていただいた。学校の教育活動全体で、地域をいかした教育が継続して積み重ねられている。

(2) 既習内容との関連

平塚という自分たちの町の学習が進んでいたことも大きい。七夕祭りをはじめとする地域の行事や、湘南平や相模川など自然を活かした観光地を多くの児童が知っており、自分

たちの地域に対する誇りや地域愛も芽生えていた。伝えたい特色が明確にあったこと、またそうした特色が多くある地域であったこともベトナムライブ交流をはじめ、総合的な学習全体を深められた1つの理由になった。

(3) ベトナムや他国協力隊とのつながり

ベトナム側の現職教員である真田隊員、森脇隊員、さらに私の後任向山隊員や同期隊員とのつながりが本計画以前からあった。そのため、日常からベトナムの話がもたらされ、タイムリーな情報も自然と児童の耳に入っていた。大人を介した交流から、直接的な児童対児童の「ライブ交流」への発展は、自然な気持ちの高まりである。

また、モンゴルやジンバブエなどのOVも講師をして下さり、協力隊全体の活動やベトナム以外の国の様子なども学習することができた。

6 インターネットライブ授業、本時案 (11月8日・日本時間 10:00～11:00)

i) 役割

【日本側】

清水：連絡調整、児童指導、通訳

高梨：総括、児童指導

高橋：通訳、パソコン操作ボランティア

記録 (ビデオ・写真・webカメラ、マイク)

【ベトナム側】

真田：児童指導、ベトナム側連絡調整、総括

森脇：パソコン操作

割田：Webカメラ操作

齋藤：記録 (ビデオ)、通訳

村田、向山：記録 (写真)、児童指導、通訳

日本側の記録や機器操作はすべて児童が行った。当日は交流以外にもベトナムOVの高橋隊員によるベトナム語講座やノン笠づくりも行われ、ベトナムづくしの1日であった。

ii) 準備物

紹介に必要な児童作品、巨大壁画、ヤフーマessenger、スカイプ、webカメラ、webマイク、DVDビデオカメラ、デジカメ、グローバルIP取得用ケーブルモデム

iii) 当日案

めあて		
①海外に住む子どもたちとの交流を通じて、異文化理解を深める。		
②自分の意見や考えを発信しようとする態度を育てる		
③自分たちの学校・地域を見直すきっかけとする		
時間	子ども	指導上の留意点 (★は評価)
10	司会 2名 ◎はじめの言葉 順番：日本→ベトナム側 【日本側】（実行委員長） 【ベトナム側】（代表） ◎学校・故郷紹介 【日本側】 学校紹介（プール、行事、ようす、授業） ふるさと紹介（平塚・七夕紹介） 【ベトナム側】 学校紹介（建物、先生、私たち） ふるさと紹介（ニンソン村の風景、特徴）	音声が入らない場合はチャットにて交流を進める ○司会のやり方、進め方を国語単元で学習した上でそれを踏まえて進める ○ベトナムと日本の違いや同じことなどを気づいたら記録する。（気づきメモ） ※断線時※ 【日本側】 気づきメモの発表、意見交換 【ベトナム側】 日本の伝統的な遊び（剣玉、だるま落とし）を体験しよう。
30	◎ 松原・ニンソン巨大壁画 ～気づいたこと・ききたいこと～ 担当：実行委員	★相手にわかりやすく、発信・発表ができていたか。 ○相手の壁画に対する思いを聞き、相手の考えを知る ○自分たちの壁画に対する思いをつたえる ○相手の様子を見ながらゲームを進める。
15	◎ふかめよう 【日本側】 漢字クイズ・じゃんけんゲーム （ベトナムの児童と一緒に）など 【ベトナム側】 歌の発表	★自分の考えや感じたことをまとめることができたか
5	◎児童おわりの言葉 【日本側】（代表） 【ベトナム側】（代表）	★ベトナムの学校や文化について理解を深めることができたか

7 総合的学習の成果

- ・ 様々な国の文化に対する興味関心が深まっており、家に帰ってから自主的に情報を集めたり、紹介したりしている。
- ・ 自ら考え行動し、活動に積極的に関わろうとしている。次回活動をよりよいものにしようとする姿勢が見られる。

8 当日の様子と課題

内容：

- ① はじめの言葉
- ② 学校ふるさと紹介
- ③ 壁画の紹介
- ④ ゲーム（漢字クイズ、七夕紹介、じゃんけんゲーム、歌）
- ⑤ 終わりの言葉

交流時間は60分。上記で30分以内に終わるように見ていたが、実際に通信をしてみると思った以上に時間がかかった。最初の10分の遅れを差し引いても20分超過した。内容の精選が必要だと感じた。やりとりは生き物なので、盛り上がる場所、そうでない場所を見極めた進め方が必要。

場所：

交流場所はコンピュータールームを使った。2クラスの人数が集まるのが可能な場所、ネットワークが使える場所、という2条件をクリアした場所だった。

壁画：

日本側の壁画を送付後、ニンソン小で完成させることになっていた。そのため、松原小では50%の仕上げにした。同じようにニンソン小から50%の絵が送付されてきた。それを次回交流のときまでに完成させ、意見交換をする。全員で仕上げるという難しさを孕みながらも、みんなの意見を実行委員がうまくまとめてくれた。

画像：

画像は、教室前にあるプラズマTVと一斉送出での各個人PCを用いた。プラズマはプロジェクタと比べると明かりに強いのでよかった。また、各個人のPCもチャットの内容を確認できてよかった。ソフトはヤフーメッセンジャーを用いた。ただ、あまり長時間ディスプレイを見続けるのも児童には負担と感じた。そういった意味でも交流内容の精選は必要だろう。

音声：

PCをプラズマTVから出した。ソフトはスカイプ。しかし、ベトナム側の通信回路が54.6kbpsということもあり、断線することが多かった。「聞こえればラッキー」と思っておいたほうが良いが、聞こえたときのベトナム語のインパクトは非常に大きかった。

全体をふり返って：

- ・ 音声はほとんどつながらないと考えるとプランを立てたほうがよい。
- ・ 学校やふるさとの紹介も文字が中心になると伝わりにくい。絵や大きな写真が必要。
- ・ 交流時の説明や紹介文は短くするのが良い。訳が大変だし、やりとりが生まれにくい。結果、児童の集中が途切れやすい。
- ・ ベトナム側が出した壁画に関するクイズが盛り上がった。シンプルでよかった。また、画像の不鮮明さからくる誤解が日越双方の笑いを生んだ。
- ・ 不測の事態が起きることを前提に計画を立てるべきだった。今回、ベトナム側から日程変更希望が直前に出されたが、日本側はその週が非常にタイトなスケジュールになってしまっており、対応できなかった。また、当日も開始が遅れて気をもんだが、「そういうもの」と思っておいたほうが良い気がする。保護者やメディアに露出がある場合は、それも含んだ連絡が望ましい。
- ・ 市教委、市教育研究所、ケーブルネットワーク会社、それから筑波大学の協力があって実現させることができた。機器の無料貸与やそれに関わる交渉、人の繋がりがより良い方向へ動いた。

- ・ 現地の協力隊員が現地職場から絶大な信頼を受けていることが大きな成功要因となった。
- ・ 日本国内同士のライブ交流も面白いと思う。もし来年度可能な方いらしたら連絡ください。

9 児童の感想

今日はベトナムの子どもたちと交流をしましたが、どうでしたか？

- ・ 楽しかったです。その日に近づくたびにきんちょうしたけど、ベトナムのニンソン小学校と交流できて楽しかったです。次が楽しみです。
- ・ みんなおもしろい子で楽しかった。
- ・ じゃんけん大会とクイズが楽しかったです。ベトナムのニンソン小の人たちは絵がうまくてびっくりしました。漢字クイズはしっかりと何の漢字になるのかあてていたのですごかったです。
- ・ たまにしゃべるのが早くてパソコンが追いつかなかったり、声が聞こえなかつたりしたけど、いろいろと助け合い、いい交流ができたと思います。
- ・ ニンソン小と交流して、ベトナムにますます行きたくなりました。
- ・ 声がつながったのが良かった。
- ・ ベトナムの教室の子どもたちはけっこうにぎやかでおもしろい子たちだった。日本の先生たちにも先生の日を作ってあげたいです。
- ・ ベトナムの食べ物やベトナムの事が分かってうれしかったです。問題を出されて考えたけど、それもまた楽しかったです。とくににわとり遊びがケンケンだったのがびっくりしました。
- ・ ベトナムの人たちはちゃんとせい服を着ていたから、すごいなと思いました。ベトナムの絵はとても楽しかったです。私の思っていた服とちがうから、へえーと思いました。ベトナムの人たちのしー！。
- ・ ベトナムのことがいろいろ分かって、よかったです。インターネットで交流し、巨大へき画の説明を日本、ベトナムでしました。ベトナムのフー君がベトナムのいいところを教えてくださいました。学校の近くには、きれいな川が流れているそうです。
- ・ ベトナムの人たちと交流して、ベトナムの言葉が少しだけ分かりました。楽しかったです。また、ニンソン小の子たちと交流できたらいいなあと思います。
- ・ 日本と同じで、バラがあると思わなかったです。漢字クイズがすぐにわかっていたのでおどろきました。

次にベトナムの子どもたちと交流をするとき、どんなことをしてみたいですか？

- ・ 今度はベトナムじゃんけんのやり方を教えてほしいです。
- ・ もっと大きな声でゆっくりと話すと次回の交流がもっと良くなると思います。次はベトナムの人の遊びを教えてくださいたいと思います。
- ・ 今度は、自分の特技を見せ合いたいと思います。(得意なこと 絵をかくこと)
- ・ ベトナムのふるさとをもっともっとくわしく知りたいし、日本のふるさとを教えてくださいたいです。
- ・ 2月はベトナムの人ともっと遊びたいと思います。
- ・ できたらベトナムの人が松原小学校にきてほしいです。(むりかもしれないけど)
- ・ 交流して聞けなかったことがあるから、今度はもっと質問していろいろ聞きたいです。たとえば、食べ物は何をたべる？とか聞いてみたいです。
- ・ 勉強していることを教えてもらったり、ベトナムの遊びや、日本の遊びをいっしょにやりたいです。

- ベトナム語を教えてください。
- 次はノン（ノン笠）をみんなでかぶりながら交流したいです。（15-1 高橋道陽隊員の授業で画用紙ノンを作りました）



「ぼくら未来の地球っ子」

～インターネットライブ授業・ベトナム～



平塚市立松原小学校
15-1ベトナム
清水大格

単元目標

- 1.異文化や異なる文化をもつ人々に興味を持ち、受容しさらに関係を深めようとする
- 2.考えや文化を交流し合う中で、自らの考えや意見を自ら発信し、具体的に行動しようとする。



主題に迫るために

- ①体験的な活動の場を設ける
- ②体験後のつながりを大切にする
- ③事前事後に練り合う

年間活動計画～指導上の工夫～

- 地域のかかわり～平塚・国際親善課、保護者～
- 既習内容の関連～七夕祭り、平塚の特色、各教科～

年間活動計画～指導上の工夫～

- 協力隊のかかわり～ジンバブエ、モンゴル～



年間活動計画～指導上の工夫～

- 協力隊とのかかわり～ベトナムOV、現役隊員～



ベトナムについて(一応…)



- ・首都は北部にあるハノイ。
- ・日本から飛行機で約6時間。
- ・人口は約8000万人。
- ・都市部と農村では生活スタイルが大きく異なる。
- ・村の教員の給料は40ドルだった。
- ・北部人と南部人では考え方や生活が異なることが多い。
- ・今回の交流はハノイ郊外バクザン省のニンソン小4年生。

ベトナムの様子(一応…)



当日の様子と課題

めあて

- ①海外に住む子どもたちとの交流を通じて、異文化理解を深める。
- ②自分の意見や考えを発信しようとする態度を育てる
- ③自分たちの学校・地域を見直すきっかけとする

当日の様子と課題

行ったこと

- ①はじめの言葉
- ②学校・ふるさと紹介
- ③お互いの壁画紹介
- ④ゲーム
(漢字ゲーム、七夕紹介、じゃんけん)
- ⑤おわりの言葉

当日の様子と課題

壁画の様子



当日の様子と課題

画面の様子





サンタ・プロジェクト

真子 和哉

(16-1, コロンビア, 環境教育, 佐渡市立佐和田中学校)

1 はじめに

平成 18 年 12 月から、現在の勤務校である佐和田中学校でサンタ・プロジェクトを始めた。これは、(コロンビアでの経験を教育現場に還元したい) という、ささやかな試みである。現在プロジェクトは進行中で、最終的な成果を示すことはできないが、プロジェクトに込められた「願い」と生徒たちの活動の様子が少しでも伝われば幸いである。

2 プロジェクトの概要

コロンビアで活動する NGO ベルサージェス地域開発センター (以下センター) と佐和田中学校の 2 者間で行われるプロジェクト。日本から、センターが支援対象としているコロンビアの貧民層の子どもたちへ支援物資を送るという活動。

3 目的

コロンビアの貧しい地域に住む子どもたちの生活の状況を知り、どのような支援が必要かを考え実行する活動を通して、開発途上国の抱える貧困問題について理解を深め、国際協力に積極的に参加しようとする態度を育てる。

4 方法

コロンビアの子どもたちの状況を知るために、自分が隊員の時に収集した資料や写真等をパワーポイントにまとめ、講演会という形で全校生徒に発表した。その後プロジェクトの企画・運営を JRC 委員会 (各種ボランティア活動や募金活動等を行う委員会) が担当し、支援の必要性を全校生徒に訴えた。活動時期が 12 月だったこともあり、プロジェクト名は「サンタ・プロジェクト」とした。

JRC 委員会では、どんな支援物資を送るかについては生徒一人一人に任せることに決定した。何が必要であるかと考えることが、遠いコロンビアの子どもたちと心を通わせる第一歩だと考えたからである。支援物資の収集期間は 1 週間とし、その後梱包してメッセージを添えて国際宅配便でコロンビアに送る。センターでは到着した物資を一つ一つ袋詰めし、子どもたちに配る。最後に受け取った子どもたちのメッセージや写真を日本に送ってもらう。以上がプロジェクトの簡単な流れである。

5 協力隊員としての仕事

配属先は首都のボゴタの北部に位置するウニアグラリア農業大学で、この大学が立ち上げたプロジェクト「センブラル・パス（平和の種蒔き）」に参加した。このプロジェクトは卒業を控えた高校2年生（コロンビアでは小学校が5年制、中学校が4年制、高校が2年制）に職業訓練を施すことである。具体的には農業関連の企業家として必要な「経営学」「栄養学」「衛生学」「食品加工学」「畜産学」「建築学」などの知識・技術を伝えるというものである。

6 コロンビアの現状

以下、全校生徒にコロンビアに住む子どもたちの現状を説明する際に使用したデータをいくつか示してみる。

(1) エストラート

コロンビアの社会システム。住む地域によって公共料金や税金、商品の値段が違う。その基準がエストラートであり、6つの区分がある。エストラート1が最貧民層でエストラート6が最富裕層である。例えば、エストラート1の公共料金はエストラート6が払い、高等学校の授業料もエストラート1は全額免除となる。

(2) エストラート別の就学児童・生徒数

表1は首都ボゴタの教育委員会がホームページ上に公開している2004年の就学児童・生徒数のデータである。これを見ると貧民層の1・2・3の子どもたちが全体の約88%を占めていることがわかる。つまり、コロンビアは極端なピラミッド型の格差社会なのである。

表1 エストラート別の就学児童・生徒数

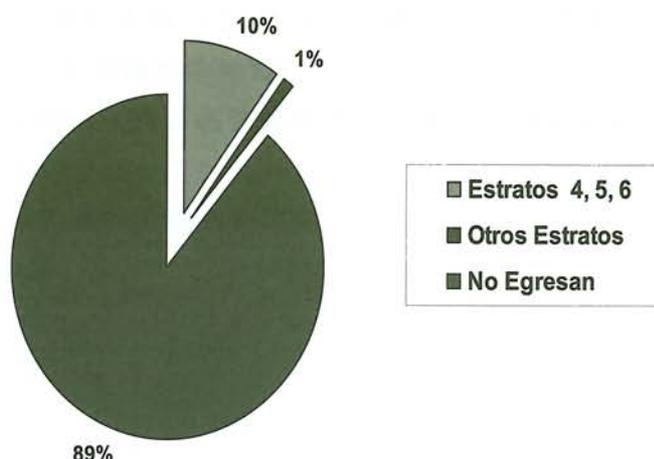
エストラート	人数	割合
1・2	745,526人	46.3%
3	660,734人	41.1%
4・5・6	201,341人	12.6%
計	1,572,925人	100.0%

(3) 大学の卒業状況

表2は2004年のボゴタ市の大学生の卒業状況を調べてみると、全体の89%の学生が中途退学者である。原因は、定かではないが、日本に比べて進級基準が厳しいことと、金銭的な問題が係しているように思われる。ボゴタ市の国立大で日本語を教える隊員は、通学に必要なバス代がないために退学していく学生もいると言っている。

表2 エストラート別大学卒業状況（ボゴタ市教育委員会）

さて、残りの11%を見てみると、そのうちの10%がエストラート4・5・6出身者で、残りのわずか1%がその他のエストラート、すなわち貧民層の出身者ということになる。このデータから開発途上国における教育格差という、もう1つの問題も見えてくる。



(4) 私の夢

活動期間の2年間で約25校を訪問した。貧しい地域に建つ学校に共通することは、幼稚園、小学校、中学校、高校のオール併設校であることと、児童・生徒数が異常に多いということである。1番規模の大きかったINEMという学校は午前の部と午後の部を合わせて12,000人の子どもたちが通っていた。

さて、そのINEMで高校2年生を対象に意識調査を行った。アンケートの項目は「大切なもの」、「尊敬する人」、「日本の印象」など10項目であった。ここでは、「私の夢」という質問に対する結果を見てみよう。調査人数は100名である。1位は「進学して、専門職に就くこと」で、大多数の93名の生徒がこう書いていた。これは、エストラート1・2出身の彼らが高校を卒業しても進学はおろか就職もままならないという社会の現状を反映していると思われる。先に示したとおり、2004年の大学卒業者に貧民層の学生はほぼ皆無なのである。

(5) 算数の授業

ボゴタで最も貧しいサン・クリストバルという地域のヌエバ・ローマという学校で、小学校3年生の算数の授業を参観した。足し算の授業だったと記憶する。まず教師が図書館から持ってきた教科書を配る。といっても1人1冊ではない。3人に1冊である。だから子どもたちは机を寄せ合ってグループの形で1冊の教科書を見合う。次に教師が支持を出す。「何ページから何ページに書いてある問題をノートに写しなさい」この作業が延々30分程度続く。それからノートに書いた問題とにらめっこが始まる。

まだ教科書があるのはいい方で、教科書が存在しない学校がほとんどである。コロンビアの貧しい地域に建つ学校での一般的な授業は、教師はホワイトボード用のマジックを一本持って教室に行くのである。

7 コロンビアの学校教育について

(1) TIMMS

1995年に実施された第3回国際数学・理科教育調査（TIMSS:Third

International Mathematics and Science Study, 1995) は世界 46 カ国・地域が参加した国際的に有名な調査である。この調査は第 8 学年(中学校 2 年生)について 1995 年、1999 年、2003 年の 3 年間の数値の比較をすることを目的に実施された。コロンビアは 1995 年の 1 度のみの参加であった。(1995 年の参加国数は 41 ヶ国)

(2) 世界水準から見たコロンビアの数学教育の現状

表 3 第 8 学年生の数学の得点平均

国名 (順位)	得点
シンガポール (1)	643
日本 (3)	605
アメリカ (28)	502
コロンビア (40)	385
(国際平均)	(513)

コロンビアは参加 41 カ国中 40 位。(最下位は南アの 354 点)

表 4 第 8 学年の数学の領域別平均正答率

国名	分数・数感覚	幾何	代数	資料表現・分析、確率	測定	比例
シンガポール	84	76	76	79	77	75
日本	75	75	72	78	67	61
アメリカ	59	48	51	65	40	42
コロンビア	31	29	28	37	25	23
(国際平均)	(58)	(56)	(52)	(62)	(51)	(45)

表 4 からコロンビアはどの領域においても国際平均の半分に近い成績であることがわかる。特に「測定」は日本の小学校程度の問題で、どれだけ作図をしたり、面積や角度の計算をしたりしたかという経験が正答・誤答を分けるポイントになる。

表 5 施設や設備が不足している生徒の割合 (%)

国名	教材	物品予算	校舎・グラウンド	冷暖房・照明	教室の広さ
シンガポール	10	5	32	17	31
日本	17	24	31	35	30
アメリカ	26	17	43	15	46
コロンビア	52	48	42	40	32
(国際平均)	(36)	(36)	(46)	(31)	(46)

表5でコロンビアは特に「教材」「物品予算」が不足している生徒が約半数にのぼることがわかる。つまり教科書不足、教具不足の実態がはっきりと表れている。

表6 数学に関する教具・教材が不足している生徒の割合(%)

国名	パソコン	パソコンソフト	計算機	数学図書教材	AV機器・ソフト
シンガポール	26	36	5	16	22
日本	23	47	14	17	26
アメリカ	68	67	32	49	50
コロンビア	76	80	60	70	79
(国際平均)	51	54	29	37	43

この表6で表5の「教材」「物品予算」の不足の内訳が詳しくわかる。コロンビアではほとんどの物品が不足している。

8 子どもたちの生活

子どもたちの生活を写した写真をお見せする。写真1は富裕層の住む地域で母親と共にゴミを拾う子どもの姿である。拾ったダンボールや紙などをまとめて業者に持って行き、わずかなお金と交換して、その日の生活費にする。



写真1

写真2、3、4、5は貧民地区を写したものである。この場所は標高3,400mを超える。ボゴタはもともと2,600mに位置するが、周辺農村部からゲリラに追われて逃げてきた避難民の彼らには高地しか住む場所がないのである。常春のボゴタと言っても日中10℃を越えるくらいである、彼らは、レンガを1つずつ積んで家を作る。写真からわかるように、水は汚れ、ガスは通っていないので薪を燃やして炊事をする。



写真2



写真3



写真 2



写真 3

9 プロジェクトの願い

センターが支援対象にしている約 1,500 人の子ども達はサンタがプレゼントを持って来たりはしないことを知っている。それは、へたな希望を抱いて失望しないよう、プレゼントを用意できない貧しい親がそう教えるからである。「クリスマスには期待してくれるな」と。このような子どもたちにある日遠い日本からプレゼントが届いたら……。もしかしたら（この世も捨てたものではない）と感じ、他人の愛情を信じられるようになるかもしれない。これがコロンビアの子どもたちへの願いである。ある童話作家はこう語っている。「子どもたちはサンタクロースが実在しないことをいつかは知る。しかし心の中でサンタクロースが占めていた空間は彼や彼女の中から消えることはない。サンタクロースが体現する人間の温かい愛情や思いやりを受け止め、今度は自分が与える側にまわること。そのためのゆとりを一人一人の子ども達の心の中に育むためにサンタクロースは存在する。」

平成 19 年 1 月 22 日現在、佐和田中学校の生徒が用意した支援物資（玩具、筆記用具、衣類等）は大きなダンボール箱 10 個に余ることを付け加えてこの報告書を終わりとする。





コロンビア基礎情報

- 公用語・・・スペイン語
- 宗教・・・カトリック
- 気候・・・常春(ボゴタ)
- 輸出品・・・エメラルド、石油、花
コーヒーなど

コロンビアと日本の比較



ビッグマック指数



を1個(250円)買うのに必要な
労働時間

東京・・・10分間。(世界最短)

ボゴタ・・・97分間。(世界最長)





文化祭



折り紙



まねき猫?



漢字ブーム

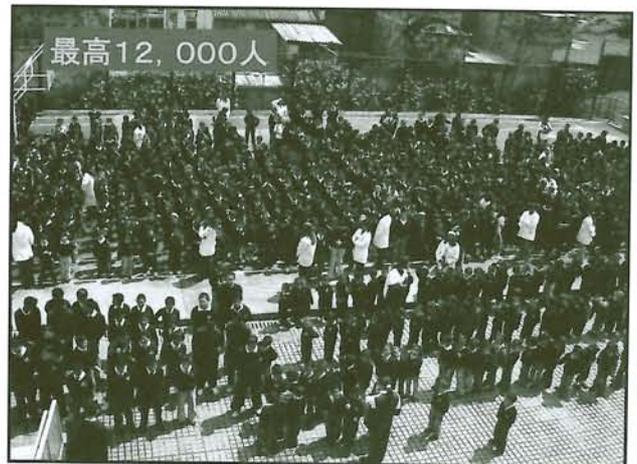


国旗を着る



ペットではありません







青年協力隊としての仕事

- ・ 職 種 ……環境教育
- ・ 配属先 ……ウニアグラ農業大学
- ・ 仕事内容…プロジェクト「センブラル・パス」への参加、環境授業の実施

A black and white photograph of a mountain range under a clear sky, serving as a background for the text.



コロンビアの抱える問題

国内避難民

- ・反政府ゲリラから逃れて来た農村部住民
- ・都市部人口の13.3%に当たる226,929人
- ・避難民の49%が17歳以下の未成年者

(2006年3月18日付 EL TIEMPOより)



貧困



治安



PERSONAS RESULTARON HERIDAS, UNA EN ESTADOS UNIDOS
Lleras, ileso en atentado



栄養不足

学校で毎日食事を

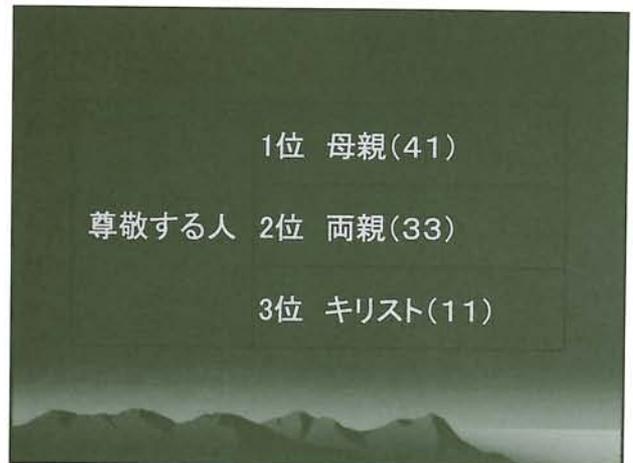
Cada día en Bogotá

Alimentamos a 402.724 niños y niñas en comedores comunitarios, jardines y colegios del Distrito.

Porque es tu derecho! それは君の権利です!



10時の栄養補給



- 大切なもの
- 1位 家族(59)
 - 2位 勉強を続けること(41)
 - 3位 ...

- 夢
- 1位 進学すること(93)
 - 2位 世界旅行(3)
 - 3位 ...

エストラート

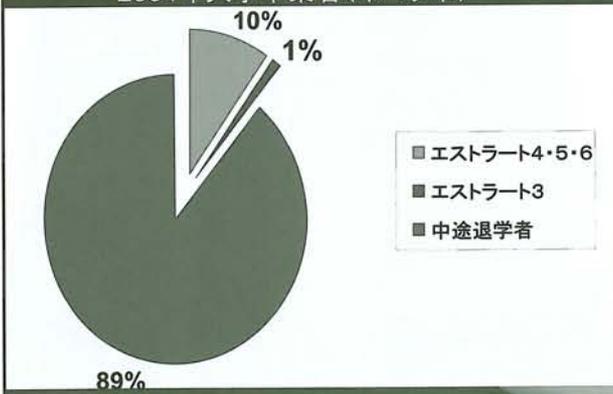
コロンビアの社会システム。住む地域によって公共料金や税金、商品の値段が違う。その基準がエストラートであり、6つの区分がある。

エストラート別の生徒数

エストラート	人数	割合
1・2	745,526	46,3%
3	660,734	41,1%
4・5・6	201,341	12,6%
計	1,572,925	100,0%

ボゴタ市教育委員会HPより

2004年大学卒業生(ボゴタ市)



(国際数学・理科教育調査 1995年)

中学2年生の数学の得点平均

国名(順位)	得点
シンガポール (1)	643
日本 (3)	605
アメリカ (28)	502
コロンビア (40)	385
(国際平均)	(513)

教材や設備が不足している生徒の割合(%)

国名	教材	物品予算	校舎・グラウンド	冷暖房・照明
シンガポール	10	5	32	17
日本	17	24	31	35
アメリカ	26	17	43	15
コロンビア	52	48	42	40
(国際平均)	(36)	(36)	(46)	(31)

数学の物品が不足している生徒の割合(%)

国名	パソコン	パソコンソフト	計算機	数学関連の図書教材	AV機器ソフト
シンガポール	26	36	5	16	22
日本	23	47	14	17	26
アメリカ	68	67	32	49	50
コロンビア	76	80	60	70	79
(国際平均)	(51)	(54)	(29)	(37)	(43)

サンタプロジェクト



プロジェクトの概要

- ・ 関係団体・・・佐渡市立佐和田中学校
ベルサージェス地域開発センター
- ・ 対象者・・・上記センターが支援の対象としている貧困層の子ども約1500名
- ・ 方法・・・佐和田中のJRC委員会が主体となり、コロンビアの子どもたちへの支援計画の立案・運営を行う









子ども達は知っている。
サンタがプレゼントを持って来たりはし
ないことを。
へたな希望を抱いて失望しないよう、
プレゼントを用意できない貧しい親が
そう教えるからだ。
「クリスマスには期待してくれるな」と。

サンタプロジェクトの願い

世界のどこかで自分たちに思いを
寄せてくれる仲間がいる
世界はそう捨てたものではない

そう気づいてくれたら・・・

子ども達はサンタクロースが実在しないことをいつかは知る。

しかし心の中でサンタクロースが占めていたスペースは彼や彼女の中から消えることはない。

サンタクロースが体現する人間の温かい愛情や思いやりを受け止め、今度は自分が与える側にまわること

そのためのゆとりを1人1人の子ども心の中に育むためにサンタクロースは存在する

(ある童話作家の言葉より)

Muchas Gracias



現職参加教員の帰国後の役割を探る

西尾 直美

(16-1, ドミニカ共和国, 小学校教諭, 茨城県守谷市立愛宕中学校)

はじめに

任国で常に私が思いを馳せていたこと…それは「日本の教育」である。協力隊員としての活動に没頭すればするほど、私は日本の教育を受けてきた者であって、日本の教師なのだと思感するのである。私はドミニカ共和国で小学校に赴任し、算数の授業の立て直し主な活動としてきた。日本の算数の検定用教科書が、こんなに緻密で精巧で、すべて計算され尽くした「作品」だと、ドミニカ共和国に赴任するまで教師を続けている間、ここまで感動したことはなかった。一方、日本の教育での問題点に対して、自分の中に赴任前とは違った視点が生まれた。日本の学校現場で日々時間に追われて仕事に没頭していたときは、そんなことを考える余裕はなく馬車馬のごとく体と神経をフル稼働させていただきただけだった。

これから現職参加制度を用いて協力隊に参加されようと考えている教職員の方々に、私は「プラスになることしか存在しない」と断言したい。帰国後、また出逢う日本の子ども達へ、職場の同僚へ、先生方と出会いすべての人々にとってもプラスであり、そして何より、協力隊員として活躍した先生方自身に一番プラスになっているからである。

この思いを込めて、私が帰国後に行ってきた活動を紹介し、今後の現職参加教員の役割について述べていくことにする。

1 日本の子ども達のための役割

(1) 学習する価値を見いだせない子ども達へ

日本の学校教育の中で、学習についていけず自らを落ちこぼれと認識している生徒に学習に対する意欲を高めさせることは至難の業である。落ちこぼれのレッテルを貼られ、そして最も不幸なのは生徒自ら自分に自信をもって生きることを放棄してしまっているのである。

そのようないわゆる「落ちこぼれ」生徒に対して私の接し方は変わった。日本国内、日本の学校教育の中だけではなく、同じ世代の地球人として彼らを見ると「すばらしい力と才能を秘めている」ことを実感できる人間に見えるのである。日本人として生まれてきて日本の教育を受けている生徒達は「みな、すごいのだ」と本心を述べると、落ちこぼれ達も「自分たちも、そんなに悪くないのかも」とはにかみながら、私との会話を終える。

協力隊派遣以前は、彼らとこのような会話はあり得なかった。関わっている日本の生徒感も私自身変わった。

(2) 国際理解教育

日本の学校教育で国際理解教育が盛んになりはじめて久しい時間が経つ。協力隊OBのその舞台で数々の貴重な経験を話すことも多いだろう。しかし、私が懸念しているのは、他国の生活の様子を学んでも、国際理解教育が求める本質には届かないのである。いろいろな国の事情を知ることではなく、最終的に「いろいろな国があって、いろいろな人がいるんだな」と子どもが感じることができることが大切であると考え。JICAが行っている出前出張講座は、できるだけ隊員OB複数で行うほうが、「いろいろある」という事実は伝えやすいだろう。

① 「途上国は、かわいそう」

私が国際理解教育を行う上での最大の目標は、生徒達にいか「途上国は、かわいそう」という固定概念を崩させるかである。私たち隊員OBは、途上国はかわいそうだけではないということ、身をもって経験してきた。むしろ、日本が今必要としているものを途上国ではひたむきに守って大切にしていたりする。先進国も途上国もない。お互い力を出し合って、しあわせになるために生きていきたいという姿勢を伝えていきたいと考えている。

② 援助は、相手が必要としているものを

途上国の話をすると、学校（教師や生徒、保護者も含めて）は何か自分たちにできることはないか、子ども達に何かさせたい＝ボランティア活動という順序をたどる。実際に大きな援助団体が募っているものを集めて寄付活動をするが、この場合、生徒達は実際に自分たちが寄付したものが実際にどこに送られ、誰の手に渡っているのか知ることはない。つまり、本当に役に立ったという実感が得られないのである。

私は、援助をした側とされた側がつながってはじめて、実際の援助と鳴戸思っている。その経験を生徒にして欲しかったので、勤務する中学校で集めた文房具を、この冬休みにドミニカ共和国で活動していた小学校の教師に届けに行った。そして、生徒達にその様子を伝える予定である。

寄付する文房具（鉛筆・消しゴムなど）を集めていたとき、もはや使い物にならない鉛筆を多数持ってきた生徒がいた。今後の国際理解教育での授業の大きなポイントとなる。

援助は、私たちの不要なものを捨てることではないのである。途上国の人々は、私たちが使い物にならないものでも、喜ぶと思っているのか？相手のことを考えた援助を私たちはしなければならないはずである。

③ 進路指導・キャリア教育

中学校教育の大きな柱として、進路指導・キャリア教育という分野がある。中学2年では、事業所の協力を得て職業体験学習も行われる。世の中にはどのような仕事があって、どのように人々は社会貢献をしているのかを学び、自分の進路の参考にする学習である。

私たち教職員はとても見識がせまく、どのような職業がありどのような流れでその職

に就くことができるのか、どのような資質が必要とされているのかなど、全く知らない。

そのような中、私は訓練時から派遣中もさまざまな職種で熟練した協力隊員の仲間たちというのは、この進路指導において生徒達にたくさんの可能性を示してくれる貴重な教材となっている。そして、今中学生がやるべきこととして「自分が自信をもってがんばれること、自分じゃないとできないことを一生懸命やっておくこと」をこの協力隊員が伝えていることを生徒に話すと、とても説得力がある中味の濃い授業を展開することができる。

2 地域社会へ

私は、茨城県守谷市の国際交流協会（MIFA）の一員として、開発教育ワーキンググループに所属している。これから多国籍の人々と生活を共にする社会に、自分たちの価値観や感覚を「共生」できるりょうに磨かなければならないと熱心に勉強している集団である。

あるグループの老人が「子ども達は学校で共生について勉強している。でも私たち大人は、勉強する場がない。だからここで、みんなで勉強しなくてはならない」と言った。

子ども達が学校で国際理解教育を勉強しても、子ども達をとりまく社会が共生できる社会として成立していなければ、学習したことは意味がなくなってしまう。彼らと勉強し合いながら、共生することができる社会を実現することも、協力隊OBとして、教育と地域を結びつける現職参加教員としての役目だと認識している。

3 日本の教育界へ

(1) プロモーション活動の積極化を

私が帰国してから、仕事仲間からの連絡が多くなった。現職参加制度に関する質問である。質問の内容は、職種の内容だったり、制度の中味だったりする。

一般募集を対象にした説明会等は、協力隊を育てる会などが中心となって各地で行われているが、現職参加のそれはほとんどない。私たちOBがもっと積極的にプロモーション活動をしてよいのではないかと思っている。私は、現職参加をさせてもらった教員は、さまざまな形で経験を還元しなければならないと考えている。それは、学校現場に限ったことではなく、現職参加制度を利用する後輩教師を多く輩出することに尽力することも、その還元の1つだと思う。

(2) 今後、学校現場には日本語を母語としない子ども達、あるいは保護者が増加することは明らかである。そのような状況に対応しやすいのは私たち現職参加OBだと思う。赴任していた国を言語が通じれば、その言語を必要としている子どもの学習効果も倍増するに違いない。協力隊派遣国は他国に渡っているため、多数の国の外国人児童のために力になれる可能性も大きいのではないだろうか。

(3) 本邦研修にくる研修生の手伝い

教育関係で日本に研修にくる派遣国の人を日本の学校現場での実習をしても面白いのではないかと思う。実際に、私のカウンターパートは春に私の勤務先の近く（つくば市）で

研修を受けていた。私はそのことを知らされずに彼らは帰国してしまったが、帰国後の現職参加OBをうまく利用して、日本の学校現場の実習場所としても利用することは可能だと思う。また、学校にも、国際理解教育の観点からもメリットは大きいであろう。

(4) 日本の教育について意見を発信する教師として（現職参加OB「チーム」として）日本の教師の中で、他の国の学校の現場を経験している教師は、はたしてどれだけ存在するであろうか。在外派遣教員（いわゆる日本人学校）は、外国での生活経験はあるけれども、外国での学校現場は知らない。日本の学校教育・日本の教育について他国の教育との違いを経験として比較できるのは、私たち現職参加OBだけではないだろうか。

その存在価値は、とても貴重なものだと私は考えている。なぜなら、私たちは、日本の教育のすばらしさ、日本の教育の問題点がこの貴重な経験で実感しているからである。さらに言えば、日本の教育が今日抱えている問題について、具体的に行えばよい策も提示できるアイデアを持っている。

私が帰国して驚いたことは、日本という国全体が、今の日本の教育に危機感を抱き教育に関して意見を述べる人々が増えたということである。しかし、依然として、学校現場で働く教師（管理職ではなく、実際に子ども達と接している教師）の声は、巷に届いていない。

私も含めて個人的に私見を述べても無意味なものなのである。しかし、現職参加OBが現場で日本の子ども達と接して働いている教師として、日本の教育のすばらしさ、問題点を周知させることができれば、私たちの経験が日本の教育に還元される大きな意味をなすはずである。そのような団体として現職参加OBが存在する日がくることが、今の私の夢である。

おわりに

援助はお金やモノではない、援助を必要としている人々へ、「人」が助けにいてあげることであると、私は実感した。そして援助活動は、人助けではない。自分が大きく成長させてもらうことだと。援助をしにいったはずの自分が、気が付いたら大切なことを学ばせてもらっていた。途上国で生活する人々から、日本にとっても大切なもの教えられた。教師も、常に何かを学び続けなければならない。そして、現職参加制度による青年海外協力隊は、日本では決して学ぶことはできないことを学ぶことができる貴重な機会だと思う。

最後に、私がドミニカ共和国の親友から常に言われ、今日本に教師としての座右の銘になっている言葉を記して締めくくりにする。

私たちは貧しいけれど、
日本にはない大切なものをもってる。
それは

たくさんの愛。

もっと純粹に、思いを込めて
子どもたちを愛してあげないといけません。
それが
日本に足りないものだと思います。



帰国後、派遣経験を生かした 教育活動事例報告

守谷市立愛宕中学校
教諭 西尾 直美
(ドミニカ共和国・小学校教諭)

帰国後の使命(日本教育への還元)

- I 子どもたちへ
 - ・ 学習する価値を見いだせない子へ
 - ・ 国際理解教育
 - ・ 進路指導(中学校)
- II 地域社会へ
 - ・ 守谷市国際交流協会(MIFA)
開発教育ワーキンググループ
- III 同僚たちへ・教育界全体へ(教育観)
 - ・ 今日の日本の教育が抱えている課題

子ども達へ ~学習する価値を見いだせない子へ~

▼「理数科は、『国境』を超える」

日本の教育レベルの高さ
「世界の中では、自分たちは悪くないかも」

▼「なぜ、勉強しなくちゃいけないの？」

“教育は、貧困脱出を
より保障する道の1つである”



子ども達へ ~国際理解教育~

▼「途上国は、かわいそう」



子ども達へ ~国際理解教育~

▼「途上国は、かわいそう」

▼ 国際援助...必要としている援助を



子ども達へ ~国際理解教育~

- ♪ 「途上国は、かわいそう？」
- ♪ 国際援助...必要としている援助を
ドミニカ共和国の小学校への寄付活動
- ♪ 日本(自国)を理解する
...外にばかりに目を向けすぎでは？

子ども達へ ~進路指導・キャリア教育~

- ♪ 協力隊の仲間達から学ぶ
多様な職種・専門的な技能



自信をもってできること、得意なことへ一生懸命になる

地域社会へ

- ❖ 守谷市国際交流協会(MIFA)
開発教育ワーキンググループ

ワークショップ:
~多文化共生について考えよう~

私たち、大人も
子どもが学校で
学んでいるように
学んで行かないと
行けないと思うんです。



同僚達へ・日本の教育へ(教育観)

- ❖ 元現職参加教員がチームを組んで
授業を展開する
(国際理解教育;「いろいろあって、おもしろい」)
- ❖ 外国人児童の日本語指導(54言語 H17.9現在 *1)
- ❖ 本邦研修でのお手伝い
(例)元現職参加教員のもとでの教育実習
- ❖ 日本の教育について発信する教師
(教育について語る人は増えたが、
現場の教師が語る場がない)

*1 文部科学省HP「帰国・外国人児童生徒情報」より



同僚達へ・日本の教育へ(教育観)

- ❖ 途上国から学ぶ=日本が失ってしまったもの



プログラム 4

派遣現職教員支援事業の紹介

筑波大学教育開発国際協力研究センター

磯田正美

派遣現職教員支援事業 —派遣現職教員支援と活躍の場の拡充—

磯田 正美

筑波大学教育開発国際協力研究センター

国際教育協カインシアティブ (1)我が国の国際教育協力の質の向上を目的とした活動 青年海外協力隊派遣現職教員のサポート

- ◆ 本活動は、JICA青年海外協力隊の「現職教員特別参加制度」により途上国に派遣される教員に対し、教育上の観点からサポートを実施するものです。現職教員の派遣実績が多い職種を対象に、教育制度面や現地での指導法に関する情報提供等のサポート等を行う、以下の一連の取組を実施します。
- ◆ 隊員派遣前 ・ 隊員の活動に役立つ教材、指導書等の教育モデル、その他資料等の作成・上記教材等の紹介・隊員の活動準備に対する教育上の助言等・隊員との連絡体制の構築
- ◆ 隊員派遣中 ・ 隊員の現地での活動に対する教育上の助言等・各実施者が作成した教材等の有効性の確認・改善（実施にあたっては、隊員の了解を得ることとする）
- ◆ 帰国後 ・ 帰国隊員が行う国際理解教育へのサポート（指導案の作成や教材準備等）
- ◆ 筑波大学教育開発国際協力研究センターが、全体調整を担当します。

青年海外協力隊派遣現職教員のサポート 関係者紹介

- ◆ 全体：筑波大学教育開発国際協力研究センター（代表：中田英雄）
- ◆ 数学・理科：広島大学（代表：池田秀雄）
- ◆ 体育：青年海外協力協会（代表：渡邊祐輔）
- ◆ 家庭科：日本女子大学（代表：佐々井 啓）
- ◆ 環境教育：宮城教育大学（代表：村松 隆）
- ◆ 幼児教育：お茶の水女子大学（代表：浜野 隆）
- ◆ 小学校：筑波大学（代表：田中統治）
- ◆ 障害児教育：筑波大学（代表：前川久男）

全体調整の目的

- ◆ 派遣前、派遣中、帰国後における派遣現職教員の活動への継続的な支援体制を築くとともに、支援に関わるリソースならびにモデル事例の開発を行うとともに、各採択課題による支援の実施を調整する。

派遣現職教員ならではの活動をいかに支援するか？
その活躍の意義をいかに伝え、広め、活かす場作りを応援するか？



派遣前研修

- ◆ 期日：平成18年4月4日、5日
- ◆ 会場：国際協力機構国際総合研修所・筑波大学東京キャンパス
- ◆ 内容：国際理解教育研修
開発教育研修、
帰国隊員による報告会、
拠点システム成果共有研修
ICT活用研修、など



国際教育協会
拠点システムアワード
ご賞状 最新データ 芳子

CHUYÊN BÓNG

ボール運び

1. Tên bài học: Chuyên bóng.
2. Chuẩn bị: Bóng.
3. Mục đích:
- Học các cung các l
- Trẻ có thể ném bóng.
4. Về bài học:
Trẻ nhận chứng
nhất. Thông qua lu
giống như trong bài.
5. Quy định:
- Thành lập đôi khi
- Khi bắt đầu thì đi
- Khi đã trao bóng
lưng giữa 2 chún
- Dạy nào chuyển đ
Khi đã quen Chơi

1. 教材名 ボール運び
2. 準備する物 ボール
3. 目標
○ 全員で協力してボールを運ぶ楽しさに気づく
○ 相手が受け取りやすいボールの渡し方に気づく

4. 教材について
ボールを早く、なおかつ相手が受け取りやすいようにパスをしてい
ーやバスケなどのボールを使った運動のように、協力して楽しむ
ドが無かったり、ボールの数が少なくてもできる運動である。

5. ルール
・ 10人～15人のチームをつくり、顔の上でボールを受け取る
・ 競技が始まったら足を動かしてはいけない。
・ 一番後ろまでボールが回ったら、こんどは後ろから足の間を通し
・ 一番速くボールを前に戻したチームが勝ち。

慣れてきたら・・・
・ 片手だけ、足だけ、でボールを渡す。

「国際理解教育」モデル事例

- ◆ 派遣現職教員であればこそ実現する「国際理解教育」モデルの提案
- ◆ インターネットを利用した国際交流授業を2カ国で実施
- ◆ 制約のあるインターネット環境に準じた指導計画や日本側と相手国側の協働を促す人的ネットワーク作りを経て、「国際教育」のモデル事例を開発

『インターネットライブ授業』
バヌアツ: サントイースト小学校(17次: 秋山喜代)
日本側横浜: 三ツ沢小学校(16次: 迫田陽子)
ベトナム: ニンソン小学校(17次: 真田昇)
日本側平塚: 松原小学校(16次: 清水大裕)

ネット交流授業

手紙のやり取り
市立松原小学校の
コンピュータ
ームであり、4
年生5人、5
年生5人が、
トアム・バナン
省のニンソン小
校の児童と、
インターネット
ームをとお
ネットを通
たライブ授業に
ながら、民間に
した経験がある
清水大裕教師ら
、国際大学の協
力を得た。

活躍を知らせるシンポジウムの開催

- ◆ 途上国授業研究会の実施(平成18年8月20日)
- ◆ 報告書の教育委員会等への配布、
- ◆ 文部科学省との共催で帰国報告会(国際教育協カシンポジウム)の実施(平成18年1月7日) 参加者171名。

皆様との共同/チームを作って

- ◆ アーカイブスのコンテンツの充実
- ◆ 拠点システム課題間との連携体制
- ◆ e-支援システムによるコミュニティ
- ◆ 帰国後の派遣経験を活かした活動事例の開発と共有



閉会挨拶

本日は連休中、文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム「開発途上国における派遣現職教員の活躍」にご参集頂き大変有難うございます。

国際教育協力の対象国はアジア、中南米、オセアニア、アフリカ諸国にわたって、その数は約 160 か国にもものぼります。そのなかで、学校教育の専門家である現職教員の貢献への期待と要請には非常に大きなものがあります。

日本の現職教員は青年海外協力隊事業にとって、また開発途上国の教育にとっても貴重なリソースです。また、現職教員の方々は帰国後に日本の教育の場において赴任国について、あるいは全般的な国際理解教育についての活動を行っているという意味でも貴重なリソースです。これは今日発表なさった派遣現職教員 OB/OG の方々の多様性に富んだ、かつ具体的な活動報告で十分理解できることと思います。

現職教員の方々が青年海外協力隊に参加することによって、開発途上国で新たな経験・知見を獲得し、かつ途上国の教員の方々との交流を構築して、それが国際的センスをもった人材育成など日本の教育現場に反映されていると言い換えることができると思います。

今後とも、現職教員の方々が国際教育協力に積極的に参画することを祈念致しまして、文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム「開発途上国における派遣現職教員の活躍」を閉会致します。

筑波大学教育開発国際協力研究センター
佐藤真理子



資 料

1. 「朝日新聞」記事（平成18年11月9日付）



ネットで交流授業

平塚市の松原小

ベトナムの小学校

平塚市天沼の市立松原小学校のコンピュータルームで9日、4年生33人が、ベトナム・バクザン省のニンソン小学校の児童とインターネットを使ったライブ授業に臨んだ。写真。松原小に青年海外協力隊としてベトナムで教員をした経験がある清水大格教諭がおり、筑波大学の協力で実現した。

ライブ授業は、4年生の総合学習の一環。授業では、同じく協力隊としてベトナムで活動をした高橋道陽さんがアシスタントとして

4年生同士、文化や習慣紹介

参加し、通訳をした。ニンソン小側では、現地にいる協力隊の真田昇教諭が窓口になり、4年生33人の発言を日本側に伝えた。

松原小の児童は、湘南ひらつか七夕まつりを写真や絵を使って紹介。ベトナムの子どもたちからは、「織姫とひこ星の再会は、日本人の宇宙旅行ですか」といった質問も飛び出した。

絵を使って生活習慣などを紹介すると、双方の児童から歓声も。授業に参加した鈴木亜純さん(9)は「バラがベトナムにもあると聞き、面白い授業だった」と言う。井出弘校長は「異文化や伝統をライブで理解する授業になり、児童の将来にとって有意義だったと思う」と話していた。

平塚市立松原小学校（同市天沼）の4年生53人が9日、ベトナム北部のベトイエン県ニンソン村のニンソン小学校の4年生33人と、インターネットを使った合同授業を行った。国際理解を深めようと計画されたもので、今後も続けていくという。両校の児童らは、ネットを通じて、お互いに学校を紹介し合うなど、目を輝かせて「ネット授業」に取り組んでいた。

この授業は、青年海外協力隊の派遣現職教員制度を利用してベトナムに行ったことのある松原小の清水大格教諭と、現在ニンソン小学校に派遣されている真田昇教諭が連絡を取り合って実現。ネット授業の普及に力を入れている筑波大学教育開発国際協力研究センターが全面協力した。松原小のコンピュータルームに集まった児童たちは、ニンソン小とネットがつながる前に、「私の名前は〇〇です」「あなたの名前は何ですか」などの簡単な言葉を、ベトナム語で言う練習をした。

平塚・松原小

ネットで合同授業

ベトナムの小学校



一時音声が途絶えることもあったが、正常につなが

ってからは、児童らが交代でカメラの前に立ち、学校や自分たちの故郷などを紹介し合った。松原小の児童は、自分たちの学校が100年を超える歴史

国際理解深め、児童「楽しい」

があることや、七夕まつりという祭りがあることなどを、あらかじめ教室内に張り出した絵などを使って説明。「サッカーの中田英寿を知っていますか」と質問すると、ニンソン小の児童は、「知っている」と答えていた。

一方、ニンソン小の児童らは、学校が日本の援助で建てられたことや、学校の近くには、美しい川があることなどを紹介した。その後、自分たちが描いた絵を見せ合ったり、漢字のクイズなどを楽しんでいた。

ニンソン小学校とのネット授業は、今後9時間行うことが予定されている。両校では、実際に、児童の絵画を交換することも検討している。

松原小の杉山大治君（10）は「ベトナムの子ともたちと話せるのは、とても楽しい」と目を輝かせ、井出弘校長はこの授業を通じて、児童たちの国際理解が深まると思う」と、児童たちのやりとりを温かく見守った。

ベトナムの児童たちとインターネットを通じた授業を楽しむ松原小の児童たち

3. 「神奈川新聞」 記事 (平成 18 年 11 月 9 日付)

平塚市立松原小学校(同市天沼、井出弘校長)は九日、ベトナム北部バクザン省のニンソン小学校とインターネット中継で結び、児童同士が交流する特別授業を行った。四年一、二組の五十三人が参加し、パソコン画面にニンソン小四年の教室が映し出されると、習い覚えたベトナム語で「シンチャオ！(こんにちは)」と、盛んに手を振った。(丸山 孝)

笑顔で「シンチャオ」

案内役は、青年海外協力隊として二〇〇三年七月から二年間、ベトナムに滞在した清水大格教諭。音声もつながら、清水教諭が互いの言葉を翻訳して、パソコン上に書き出した。

松原小の児童数人がカメラに向かい、平塚市や日本の小学校について紹介を始めた。「平塚の七夕まつりでは、屋台もたくさん出ます」

ベトナム側の様子を伝えるのは、やはり青年海外協力隊として赴任している真田昇教諭。「児童たちが描いた、ひこ星と織り姫の七夕の絵を見て(こちらでは、日本人が二人で宇宙旅行に行った話になっています)。たちまち大きな笑い声が響いた。」

インターネットを通してベトナムの小学生とライブで交流
 平塚市立松原小学校

平塚・松原小 児童ら特別授業 ベトナムの仲間と ネット中継で交流

漢字の読み方クイズなども行われ、楽しいひとときを過ごした後、ニンソン小の男子児童フー君が、語り掛けてきた。「ベトナムと日本がずっと仲良しであることを希望します」

授業は、海外の子供たちと交流を深めることで、自分たちの学校や地域を見直すきっかけにもなればと、本年度から進められてきた。清水教諭は「井出校長はこれを機会に、(児童たちが)異なる文化を認め合うようの中継授業は、筑波大学の技術支援を得て実現し話していた。」



4. 「日本教育新聞」記事（平成19年1月22日付）

生徒を見る目にゆとり

青年海外協力隊「現職教員特別参加制度」

シンボ ジウム 帰国隊員が成果を報告

青年海外協力隊員として発展途上国に派遣された現職教員がその体験を報告するシンポジウム（文部科学省、筑波大学主催、独立行政法人国際協力機構（JICA）共催）が7日、都内で開かれた。教員ら約200人が参加。派遣教員19人が活動の成果を報告し、外国で教育活動に従事する有効性を訴えた。

校で算数教育に携わった茨城県守谷市立愛宕中学校英語科の西尾直美教諭は、帰国後の教育活動について報告した。ドミニカ共和国では、九九を教えられない教員がいることや「教育は貧困脱出をより保障する道のひとつである」と教室の壁に書かれた言葉などを例に挙げながら、発展途上国の教育の現状が厳しいことを伝えた。「帰

述べ、国際理解教育の充実のために派遣教員を活用する体制整備を提案した。

◇

「現職教員特別参加制度」は公立学校の教員が青年海外協力隊に参加する制度。日本で培った現場経験を生かし、発展途上国の教育機関で国際協力活動に従事すると同時に、その体験を日本の教育現場に還元し、国の教育の質を高めようというもの。派遣期間は研修を含め2年間。平成14年度に始まり、これまでに354人が派遣された。JICAは毎年100人の現職教員の派遣を目指しているが、「参加率は低い」という。また、シンボジウムでは、多くの派遣教員が派遣制度は有効」と評価する一方、制度が教員の間知られていないことや、体験を生かす場が整っていないことが課題として挙げられた。

多くの現職教員隊員OB・OGが発表

「国際教育協力シンポジウム」開催

全国から教育関係者が出席

1月7日、JICA国際協力総合研修所(東京)において、文部科学省・筑波大学主催、JICA共催で、「国際教育協力シンポジウム」開発途上国における派遣現職教員の活躍——帰国隊員報告会——が開催されました。

このシンポジウムは、現職教員特別参加制度により協力隊員として派遣された現職教員の優れた活躍を紹介するとともに、開発途上国派遣の今後の展開の課題を探っていくことが目的で、今回で3回目。全国から訪れた約206名の教員や教育関係者で会場はほぼ満席となりました。

プログラム1「協力隊派遣の重要性」のなかで、文部科学省 渡辺

一雄大臣官房国際課長は、「皆さんの経験がこれからの日本の教育制度を考えていくうえでのヒントになればと考えている」と述べ、

JICA松岡和久理事は、現職教員に特に求められている3つの柱として、①教育へのアクセス・②教育の質の向上・③教育マネジメントを挙げました。

教育現場へのさまざまな還元事例

プログラム2「派遣現職教員の活躍」は、分科会形式で昨年帰国した16名のOB・OGが帰国報告を行いました。教員による世界各地の教育現場からの報告は多くの示唆を含んでおり、「すべての発表を聞きたかった」との声が各会場で聞かれました。

プログラム3「帰国後の活動と

協同」では、清水大格OB(16) / 1・ベトナム・小学校教諭)が帰国後、現在勤務している小学校と元配属先の小学校を結んで行った「インターネットライブ授業」について報告。年間授業計画での位置づけ、指導上の工夫とポイントなど具体的な説明は、関心を持つ参加者に好評でした。

続いて「帰国後、派遣経験を生かした教育活動事例報告」では、2名のOB・OGが発表。真子和OB(16) / 1・コロンビア・環境教育)は、羽田野香里隊員(16) / 1・コロンビア・青少年活動)の呼びかけで昨年行われた、貧困地域の子どもたちに、本当の親に代わってクリスマスプレゼントを贈る「サンタプロジェクト」に、勤務先の生徒が参加した事例を報告。「子どもたちが「世界は捨てたものではない」ということに気づいてくれたら」と感想を述べました。

西尾直美OG(16) / 1・ドミニカ共和国・小学校教諭)は、協力隊への参加を「日本の教育をあらためて考えた2年間」と振り返り、貧困地域の学校で教えた体験が、勉強する意味が見いだせない子どもたちへの対応に役立ったこと、帰国後、途上国の見方が変化し、国際理解教育担当者として「途上国はかわいそう」という既成概念をいかに打ち崩すかと考えるようになったこと、さまざまな職業や経歴を持つ隊員仲間と知りあえるメリットなどを述べました。

最後に、筑波大学教育開発国際協力研究センター磯田正美氏が、派遣現職教員支援事業の紹介と、派遣前・派遣中・派遣後の派遣現職教員を対象に行われている研修・情報提供・ネットワーク作りなどについて説明しました(詳細は<http://www.criced.tsukuba.ac.jp>参照)。

速報つくば



Staff Bulletin, University of Tsukuba

本号の内容

- ・ボイラ火入れ式
- ・国際教育協力シンポジウムを開催
- ・特別支援教育研究センター主催セミナーを開催
- ・科学技術振興機構賞を受賞
- ・関東地区教職員卓球大会で優勝

お知らせ…………… 3

2007
02



2007年02号(通巻1140号)
発行: 筑波大学
編集: 総務・企画部
発行日: 平成19年1月24日

国際教育協力シンポジウムを開催

教育開発国際協力研究センター(CRICED)は、文部科学省・筑波大学主催、国際協力機構(JICA)共催による国際教育協力シンポジウム「開発途上国における派遣現職教員の活躍」―帰国隊員報告会―を、1月7日、JICA国際協力総合研修所・国際会議場(市谷)で実施しました。CRICEDは、文部科学省拠点システム・国際協力イニシアチブ事業の一環として、青年海外協力隊に派遣される現職教員に対するサポートのとりまとめを行っています。その一環として、青年海外協力隊に派遣された現職教員の帰国報告会を中核とするシンポジウムを例年1月に実施しています。CRICEDによる派遣現職教員の支援活動も今年で4年目を迎え支援内容も年を重ねる毎に充実してきました。今回が第3回目となる帰国報告会では、派遣中・派遣後の活動を主題に19名の帰国隊員から活動報告が行われました。現職教員の場合、帰国後、教職に復帰します。派遣中の途上国における活躍は言うまでもないことです



挨拶する渡辺一雄文部科学省国際課長

が、特に今年度の報告会では、帰国後、派遣経験を活かした教育活動内容の展開において素晴らしい活躍ぶりが報告されました。シンポジウムには、全国から206名の参加者があり、その活動の意義が共有されました。筑波大学からは学生・附属学校教員を含む33名が参加しました。

7. 「つくばジャーナル」記事（平成19年1月10日付）



JAN
No. 243
1月10日 水曜日
2007年(平成19年)

1

発行所：筑波ジャーナル新聞会
〒300-3661 つくば市花園1-14-10 シティハイム東田A1-2
Tel/Fax: 029-864-2429 e-mail: tsukuba@tsukuba.or.jp
発行人：小室 博史
昭和50年12月5日 第三種郵便物認可
郵便振替：00350-9-38559 毎月1回10日発行

2面



派遣先の教育現場の様子や自身の取り組みについて報告する教員

派遣教員が帰国報告 途上国での体験語る

筑波大と文部科学省が主催する国際教育協力シンポジウム「開発途上国における派遣現職教員の活躍」が一月七日、JICA国際協力総合研修所（東京都新宿区）で開催された。文科省では、途上国への教育支援と日本の教育レベルの向上を目的として、現職教員の海外派遣を推進している。それに必要な研修プログラムもサポート活動の一環として行われたもので、派遣先や今後の派遣の在り方について話し合いなどが表も行われた。

当日は、昨年度末まで東南アジアやアフリカ、中米などの国々に派遣されていた教員十六人が、現地の教育現場の様子や課題、派遣期間中の取り組みなどを報告。そのほか、帰国後、現地での経験を生かした教育実践に取り組む教員らの発表も行われた。

ドミニカ共和国での活動経験を持つ守谷市立愛宕中学校の西尾直美教諭は、帰国後から同校で実施している国際理解教育や地域社会への取り組みなどを紹介しながら、日本の教育界が海外に比べて閉塞感が強いことに言及。「途上国から、日本の教育が本当に必要としていることを学ぶことができる」と、教育の在り方を見直しを訴えた。

会場では、参加した教育関係者らが実際の活動経験を基にした報告に熱心に耳を傾けていた。

平成18年度
文部科学省・筑波大学国際教育協カシンポジウム

「開発途上国における派遣現職教員の活躍」
—帰国隊員報告会—

日時：平成19年1月7日(日) 10:00~17:00
場所：国際協力機構国際協力総合研修所
主催：文部科学省、国立大学法人筑波大学
共催：独立行政法人国際協力機構(JICA)

プログラム

- 10:00 ■ 開会
- プログラム1 青年海外協力隊派遣の重要性
 - ・文部科学省
 - ・国際協力機構
- 10:50 ■ プログラム2 派遣現職教員の活躍
- ・派遣現職教員による任地での活動報告1
- 12:10 ■ 昼食
- 13:30 ■ プログラム2 派遣現職教員の活躍
- ・派遣現職教員による任地での活動報告2
- 15:00 ■ プログラム3 帰国後の活動と協同
- ・派遣経験を生かした教育活動事例報告
 - ・「インターネットライブ授業」の報告
- 16:40 ■ プログラム4 派遣現職教員支援活動の紹介
- ・筑波大学教育開発国際協力研究センター
- 17:00 ■ 閉会
- 17:10 ■ 懇親会 (会費 1,000円)



国際協力総合研修所
INSTITUTE FOR INTERNATIONAL COOPERATION
〒162-8433
東京都新宿区市谷本村町10-5
TEL: 03-3269-2911
FAX: 03-3269-2054
<http://www.jica.go.jp>

? JR中央線・総武線「市ヶ谷」……………徒歩10分
? 東京外口有楽町線「市ヶ谷」6番出口……………徒歩10分
? 東京外口南北線「市ヶ谷」6番出口……………徒歩10分
? 都営新宿線「市ヶ谷」A1-1番出口……………徒歩10分
? 都営新宿線「曙橋」A3番出口……………徒歩12分

【参加申し込み先】
〒305-8572 茨城県つくば市天王台1-1-1
筑波大学教育開発国際協力研究センター(CRICED)
文部科学省拠点システム・派遣現職教員支援担当

Tel: 029-853-6573 / Fax: 029-853-7288
E-mail: jocv@criced.tsukuba.ac.jp
URL: <http://www.criced.tsukuba.ac.jp/jocv/2007/>



文部科学省拠点システム構築委託事業実施報告書

平成18年度文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム

開発途上国における派遣現職教員の活躍

—帰国隊員報告会—

報告書

発行：平成19年2月

発行者：筑波大学教育開発国際協力研究センター（CRICED）

文部科学省 拠点システム構築事業

〒305-8572 茨城県つくば市天王台1-1-1

電話 029-853-7287 FAX 029-853-7288

E-mail: jocv@criced.tsukuba.ac.jp

<http://www.criced.tsukuba.ac.jp>

編集：磯田正美、吉井洋二（CRICED）

印刷：前田印刷株式会社 筑波支店